…TRAL REVIEW

明治三十二年[illegible]
大正六年六月廿九日印刷納本
大正六年七月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

七月號

第三十二年第七號　第三百四十五號


理解力と記憶力
不幸なる腦神經病者は此二つを欠けり。
唯「健腦丸」の常用者のみ理解力と記憶力を完全に増進せむ!!
島村醫學博士證明
TRADE MARK
健腦丸
KENNOGWAN
腦神經病特効藥
特長
健腦丸を少量宛常に持藥とせば便通をよくし逆上を引下げ怖るべき中風卒中を豫防し記憶力を増進する効あり
主効
腦膜炎、搐搦、便秘
腦貧血、眩暈、頭痛
神經痛、卒中、健忘
腦充血、中風、耳鳴
藥價 四分錢半錢四壹七錢二一卅十五
圓廿週十週十週圓錢週圓
本舗 大阪 東京 丹平商會藥房
到る處の信用藥店にあり

わからない。唯、その男にも弟があつて、やはり同じ主人に仕へると云ふ事だけ、その後かすかに風聞された。(六・四・二十)

「その上、その次郎さんと申しますのが、この子の親なのでございます。」

阿濃は、急に顔を赤らめて、かう云つた。

「それから、太郎さんと次郎さんとは、私の所へ來て、たつしやでゐろよと申しました。この子を見せましたら、次郎さんは、笑ひながら、頭を撫でてくれましたが、それでもまだ眼には涙が一ぱいたまつて居りましたつけ。私はもつとさうしてゐたかつたのでござりますが、二人とも、大へんに急いで、すぐに外へ出ますと、大方枇杷の木にでもつないで置いたのでございませう、馬へとびのつて、どこかへ行つてしまひました。馬は二匹ではございません。私が、この子を抱いて、窓から見て居りますと、一匹に二人で乘つて行くのが、月がございましたから、よく見えました。その後で、私は、主人の屍骸はその儘にして、そつと又床へはいりました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その屍骸も私には、怖くも何ともなかつたのでございます。」

檢非違使には、やつとこれ丈の事がわかつた。さうして、阿濃は、罪の無いのが明かになつたので、早速自由の身にされた。

それから、十年余り後、尼になつて、子供を養育してゐた阿濃は、丹後守何某の隨身に、驍勇の名の高い男の通るのを見て、あれが太郎だと人に敎へた事がある。成程その男も、うす痘痕で、しかも隻眼つぶれてゐた。

「次郎さんなら、私すぐにも驅けて行つて、逢ふのだけれど、あの人は恐いから……」

阿濃は、娘のやうなしなをして、かう云つた。が、それがほんとうに太郎かどうか、それは誰にも、

「生き顔より、死顔の方がよいやうぢやな。」

「どうやら、前よりも異人間らしい顔になつた。」

猪熊の爺の屍骸は、斑々たる血痕に染まりながら、かう云ふ語の中に、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く舁かれて行つた。

三

翌日、猪熊の或家で、虐たらしく殺された女の屍骸が發見された。年の若い、肥つた、うつくしい女で、創の容子では、余程はげしく抵抗したものらしい。證據ともなる可きものは、その屍骸が口にくはへてゐた、朽葉水色の干の袖ばかりである。

又、不思議な事には、その家の婢女をしてゐた阿濃と云ふ女は、同じ所にゐながら、薄手一つ負はなかつた。この女が、檢非違使廳で、調べられた所によると、大體こんな事があつたらしい。大體と云ふのは、阿濃が天性白痴に近い所から、それ以上要領を得る事が、むづかしかつたからである。——

その夜、阿濃は、夜更けて、ふと眼をさますと、太郎次郎と云ふ兄弟のものと、沙金とが、何か聲高かに爭つてゐる。どうしたのかと思つてゐる中に、次郎が、いきなり太刀をぬいて、沙金を斬つた。砂金は助けを呼びながら、逃げやうとすると、今度は太郎が、刃を加へたらしい。それからしばらくは、唯、二人の罵る聲と、沙金の苦しむ聲とがつゞいたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急に抱きあつて、長い間黙つて、泣いてゐた。阿濃は、これを遣り戸の隙間から、覗いてゐたが、主人を救はなかつたのは、完く抱いて寝てゐる子供に、怪我をさすまいと思つたからである。——

「咳がつまる音ぢや」

平六は、誰に云ふともなく、呟いた。――猪熊の爺は、暗に悸えて啼く赤子の聲の中に、かすかな苦悶をつゞけながら、消えかゝる松明の火のやうに、靜に息をひきとつたのである。…………

「爺も、とうとう死んだの。」

「さればさ。阿濃を手ごめにした主も、これで知れたと云ふものぢや。」

「屍骸は、あの藪中へ埋めずばなるまい。」

「鴉の餌食にするのも、氣の毒ぢやな。」

盗人たちは、口々にこんな事を、うす寒さうに、話し合つた。と、遠くで、かすかに、鶏の聲がする。何時か夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は？」と沙金が云つた。

「わしが、あり合せの衣をかけて、寝かせて來た。あの體ぢやて、大事はあるまい。」

平六の答も、日頃に似ずものやさしい。

その中に、盗人が二人三人、猪熊の爺の屍骸を、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。有明の月のうすい光に、蕭條とした籔が、かすかに梢をそよめかせて、凌霄花のにほひが、愈濃く、甘く漂つてゐる。時々かすかな音のするのは、竹の葉を辷る露であらう。

「生死事大。」

「無常迅速。」

けの眦に、涙が玉になりながら、たまつて來る。と思ふと、ふるへる唇のほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今迄にない無邪氣な表情が、何時か顏中の筋肉を柔げた。しかも、饒舌な彼が、さうなつた儘、口をきかない。一同は、「死」が遂に、この老人を捕へたのを知つた。しかし彼の微笑の意味は誰も知つてゐるものがない。

猪熊の爺は、寢た儘、徐に手をのべて、そつと赤ん坊の指に觸れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたやうに、忽ちいたいたしい泣き聲を上げる。平六は、彼を叱らうとして、さうして又、やめた。老人の顏が――血の氣を失つた、この酒肥りの老人の顏が、その時ばかりは、平生とちがつた、犯し難い嚴さに、かゞやいてゐるやうな氣がしたからである。その前には、砂金でさへ、恰も何物かを待ち受けるやうに、息を凝らしながら、養父の顏を、――さうして又情人の顏を、眼もはなさず見つめてゐる。が、彼はまだ、口を開かない。唯、彼の顏には、秘密な喜びが、折から吹き出した明け近い風のやうに、靜に、心地よく、溢れて來る。彼は、この時、暗い夜の向うに、――人間の眼のとゞかない、遠くの空に、さびしく、冷かに明けて行く、不滅な、黎明を見たのである。

「この子は――この子は、わしの子ぢや。」

彼は、はつきりかう云つて、それから、もう一度赤ん坊の指にふれると、その手が力なく、落ちさうになる。――それを、沙金が、傍からそつと支へた。十余人の盗人たちは、この語を聞かないやうに、いづれも唾をのんで、身動きもしない。と、沙金が頭を上げて、赤子を抱いた儘、立つてゐる交野の平六の顏を見て、頷いた。

云へ、女の部ぢや。瘤かと思ふて、側へ行くと、いや鱈くまい事か。魚の腸をぶちまけたやうなものが、うす暗い中で、啼いてゐるわ。手をやると、それがびくりと動いた。毛のない所を見れば、猫でもある、まい。ぢやてひつつかんで、月明りにかざして見ると、この通り生まれたばかりの赤子ぢや。見い。蚊に食はれたと見えて、胸も腹もゝ赤班らになつてゐるわ。阿濃も、これからはおふくろぢやよ。」

松明の火を前に立つた、平六のまはりを圍んで、十五六人の盜人は、立つものは立ち、臥すものは臥して、いづれも皆、首をのばしながら、別人のやうに、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、ぢつとしてゐない。手を動かす。足を動かす。しまひには、頭を後へそらせて、一しきり又、けたゝましく泣き立てた。と、歯のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻唄をうたつた男が、頓狂な聲で、かう云つた。それにつれて、一同が、創も忘れたやうに、どつと笑ふ。――その笑ひ聲の後を追ひかけるやうに、この時、突然、猪熊の爺が、どこにそれ丈の力が殘つてゐたかと思ふやうな聲で、險しく一同の後から、聲をかけた。

「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道。」

平六は、足で彼の頭をこづいた。さうして、嚇すやうな調子で、かう云つた。

「見たければ、見ろさ。極道とは、おぬしの事ぢや。」

猪熊の爺は、濁つた眼を大きく見開いて、平六が身をかゞめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ぢつと見た。見てゐる中に、顔の色が、次第に蠟の如く青ざめて、皺だら

何處からかそつと一同の鼻を襲つた。

「猫も化けるさうな。」

「阿濃の相手には、猫の化けた、老ぼれが相當ぢやよ。」

すると、沙金が、衣ずれの音をさせて、たしなめるやうに、から云つた。

「猫ぢやないよ。ちよつと誰か行つて、見て來ておくれ。」

聲に應じて、交野の平六が、太刀の鞘を、柱にぶつつけながら、立上つた。樓上に通ふ梯子は、二十幾つの段をきざんで、その柱の向うにかつてゐる。――一同は、理由のない不安に襲はれて、しばらくは誰も口をとざしてしまつた。その間を唯、凌霄花のにほひのする風が、又してもかすかに、通りぬけると、忽ち樓上で平六の、何か、わめく聲がした。さうして、程なく急いで梯子を下りて來る足音が、慌しく、重苦しい暗をかき亂した。――唯事ではない。

「どうぢや。阿濃めが、子を產み居をつたわ。」

平六は、梯子を下りると、古被布にくるんだ、圓々したものを、勢よくともし火の下へ出して見せた。女の臭のする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間と云ふよりは、寧ろ皮を剝いた蛙のやうに、大きな頭を重さうに動かしながら、醜い顏をしかめて、泣き立ててゐる。うすい產毛と云ひ、細い手の指と云ひ、何一つ、嫌惡と好奇心とを、同時に唆らないものはない。――平六は、左右を見まはしながら、抱いてゐる赤子を、ふり動かして、得意らしく、しやべり立てた。

「上へ上つて見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏しなり、死んだやうになつて、呻つてゐると、阿呆とは

熊猪の爺は、形のない、氣味の惡い「死」が、辛抱づよく、丹塗りの柱の向うに、ぢつと自分の息を窺つてゐるのを感じた。殘酷に、しかも又落着いて、自分の苦痛を眺めてゐるのを感じた。さうして、それが少しづつ居ざりながら、消えてゆく月の光のやうに、次第に枕下へすりよつて來るのを感じた。何にしても、自分は死にたくない。——

夜は誰とか寢む
常陸の介と寢む
寢たる肌もよし
男山の峯のもみぢ葉
さぞ名はたつや

又、鼻唄の聲が、油しめ木の音のやうな呻吟の聲と一つになつた。と誰か、猪熊の爺の枕もとで、唾をはきながら、かう云つたものがある。

「阿濃の阿呆が見えぬの」
「成程、さうぢや。」
「大方、この上に寢て居らう。」
「や、上で猫が啼くぞ」

皆、一時にひつそりとなつた。その中を、絶え絶えにつづく猪熊の爺の呻り聲と一つになつて、かすかに猫の聲が聞えて來る。と流れ風が、始めてなま溫く、柱の間を吹いて、うす甘い凌宵花のにほひが、

うな心もちがした。さうして、それと共に、何だか桃鱧のやうにとめどなく廻つてゐる物が、火花を飛ばしながら眼の前へ下りて來るやうな心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道。」

まはらない舌の先から、自らかう云ふ語が、とぎれとぎれに落ちて來る。――眞木島の十郎は、腿の創が痛まないやうに、そつとねがへりをうちながら、喉の渇いたやうな聲で、沙金に囁いた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

沙金は、眉を顰めながら、ちよいと猪熊の爺の方を見て、頷いた。すると鼻唄をうたつたのと同じ聲で、「太郎さんはどうした。」と訊ねたものがある。

「まづ助かるまいな。」

「死んだのを見たと云うたのは、誰ぢや。」

「わしは、五六人を相手に斬り合うてゐるのを見た。」

「やれやれ、頓生菩提。頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ」

「これも事によると、同じくぢや。」

太郎も死んだ。お婆も、もう生きてはゐない。自分も、すぐに死ぬであらう。死ぬ。死ぬとは、何だ。何にしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。蟲のやうに、何の造作もなく死んでしまふ。――こんな取りとめのない考へが、暗の中に鳴いてゐる藪蚊のやうに、四方八方から、意地惡く心を刺して來る。

期の仲間の者をその鉾の先で、止めを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すと云ふ、唯それ丈の興味から、或は自分の勇氣を人にも自分にも示さうとする、唯それ丈の目的から、進んでこの無殘な所業を敢てした。それが今は——

と、誰か、彼の苦しみも知らないやうに、灯の陰で一人、鼻唄をうたふ者がある。

いたち笛ふき
猿かなづ
いなごまろは拍子うつ
きりぎりす

ぴしやりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞える。中には「ほう、やれ」と拍子をとつたものもあつた。二三人が、肩を搖つたけはひで、息のつまつたやうな笑ひ聲を立てる。——猪熊の爺は、總身をわなわなふるはせながら、まだ生きてゐると云ふ事實を確めたい爲に、重い瞼を開いて、ぢつとともし火の光を見た。灯は、その焔のまはりに無數の輪をかけながら、執拗い夜に攻められて、心細い光を放つてゐる。と、小さな黄金蟲が一匹ぶうんと音を立てて、飛んで來て、その光の輪にはいつたかと思ふと忽ち羽根を燒かれて、下へ落ちた。青臭いにほひが、一しきり鼻を打つ。

あの蟲のやうに、自分も程なく死ななければならない。死ねば、どうせ蛆と蠅とに、血も肉も食ひつくされる體である。ああこの自分が死ぬ。それを、仲間のものは、唄をうたつたり笑つたりしながら、何事もないやうに騷いでゐる。さう思ふと、猪熊の爺は、名狀し難い怒と苦痛とに、骨髓を嚙まれるや

と、その幻と、現在門の下で起つてゐる出來事とが、彼にとつては、何時か全く同一な世界になつてしまふ。彼は、時と處とを別たない、昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越した或順序で、まざまざと再、生活した。

「やい、お婆、お婆はどうした。お婆」

彼は、暗から生まれて、暗へ消てゆく恐しい幻に脅されて、身を悶へながら、かう呻つた。すると、側から額の創を汗衫の袖で包んだ、交野の平六が顔を出して、

「お婆か。お婆はもう十萬億土へ行つてしまうた。大方蓮の上でな、おぬしの來るのを、待ち焦がれてゐる事ぢやらう。」

云ひすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑ひながら、向ふの隅に、眞木島の十郎の腿の怪我の手當をしてゐる、沙金の方をふり返つて、聲をかけた。

「お頭、お爺はちとむづかしいやうぢや。苦しめる丈、殺生ぢやて。わしが止めを刺してやらうかと思ふがな。」

沙金は、あでやかな聲で、笑つた。

「冗談ぢやないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」

「成程な、それもさうぢや。」

猪熊の爺は、この問答を聞くと、或豫期と恐怖とに襲はれて、體中が一時に凍るやうな心もちがした。さうして、又大きな聲で呻つた。平六と同じやうな理由で、敵には臆病な彼も、今迄に何度、致死

感じた。母の膝を離れてから、何年にも感じた事のない、静な、しかも力强い安息である。——

「兄さん」

馬上にある事も忘れたやうに、次郎はその時、しかと兄を抱くと、うれしさうに微笑しながら、頰を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙を落したのである。

半時の後、人通りのない朱雀の大路を、二人は靜に馬を進めて行つた。兄も默つてゐれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、唯馬蹄の響に谺をかへして、二人の上の空には凉しい天の河がかゝつてゐる。

二

羅生門の夜は、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた甍や、丹塗りの剝げた欄干に、傾きかゝつた月の光が、いざよひながら、殘つてゐる。が、その門の下は、斜につき出した高い檐に、月も風も遮られて、むし暑い暗がりが、絶え間なく藪蚊に刺されながら、酸えたやうによどんでゐる。藤判官の屋敷から、引き揚げて來た偸盜の一群は、その暗の中にかすかな松明の火をめぐりながら、三々五々、或は立ち或は臥し、或は圓杜の根がたに蹲つて、さつきから、それぞれ怪我の手當に忙しい。

中でも、一番重手を負つたのは、猪熊の爺である。彼は、沙金の古い袿を敷いた上に、仰向けに横はつて、半ば眼をつぶりながら、時々ものに悸えるやうに、しはがれた聲で、うめいてゐる。一時の間、此處にかうしてゐるのか、それとも一年も前から同じやうに寐てゐるのか、彼の困憊した心には、それさへ時々はわからない。眼の前には、さまざまな幻が、瀕死の彼を嘲るやうに、ひつきりなく徂徠する

去つた兄とさへ、縺つてゐる。險しくせまつた眉に、緊く、下唇を嚙んだ齒に、さうして又、怪しく熱してゐる隻眼に、次郎は、殆ど憎惡に近い愛が、——今まで知らなかつた、不思議な愛が燃え立つてゐるのを見たのである。

「早く乘れ。次郎。」

太郎は、群る犬の中に、隕石のやうな勢で、馬を乘り入れると、小路を斜に輪乘りをしながら、叱咤するやうな聲で、かう云つた。元より躊躇に、時を移すべき場合ではない。次郎は、矢庭に持つてゐた太刀を、出來る丈遠くへ拋り投げると、その後を追つて、頭をめぐらす野犬の隙を窺つて、身輕く馬の平首へおどりついた。太郎も亦その刹那に猿臂をのばし、弟の襟上をつかみながら、必死になつて引ずり上げる。——馬の頭が、鬣に月の光を拂つて、三度向きを變へた時、次郎は既に馬背にあつて、ひしと兄の胸を抱いてゐた。

と、忽ち一頭、血みどろの口をした黑犬が、すさまじく唸りながら、砂を捲いて鞍壺へ飛びあがつた。尖つた牙が、危く次郎の膝へかゝる。その途端に、太郎は、足をあげて、したゝか栗毛の腹を蹴つた。馬は、一聲嘶きながら、早くも尾を宙に振ふ。——その尾の先をかすめながら、犬は、空しく次郎の脛布を食ひちぎつて、うづまく獸の波の中へ、まつさかさまに落ちて行つた。

が、次郎は、それをうつくしい夢のやうに、うつとりした眼でながめてゐた。彼の眼には、天も見えなければ、地も見えない。唯、彼を抱いてゐる兄の顏が、——半面に月の光をあびて、ぢつと行く手を見つめてゐる兄の顏が、やさしく、嚴に映つてゐる。彼は、限りない安息が、徐に心を滿して來るのを

相違が何であらう。もし弟と自分と位置を換へたにしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違ひない。「走れ。羅生門は遠くはない。」太郎は、隻眼に熱を病んだやうな光を帶びて、半無意識に、馬の腹を蹴つた。馬は、尾と鬣とを、長く風になびかせながら、蹄に火花を散らして、まつしぐらに狂奔する。一町二町月明りの小路は、太郎の足の下で、急湍のやうに後へ流れた。

すると忽ち又、彼の唇を衝いて、なつかしい語が、溢れて來た。「弟」である。肉身の、忘れる事の出來ない「弟」である。太郎は、緊く手綱を握つた儘、血相を變へて歯噛みをした。この語の前には、一切の分別が眼底を掃つて、消えてしまふ。弟か沙金かの、選擇を强ひられた譯ではない。直下にこの語が電光の如く彼の心を打つたのである。彼は空も見なかつた。路も見なかつた。月は猶更眼にはいらなかつた。唯見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂氣の如く、弟の名を口外に投げると、身をのけざまに飜して、片手の手綱を、ぐいと引いた。見る見る、馬の頭が、向きを變へる。と、又雪のやうな泡が、栗毛の口に溢れて、蹄は、碎けよとばかり、大地を打つた。――一瞬の後、太郎は、慘として暗くなつた顏に、隻眼を火の如くかゞやかせながら、再、元來た方へまつしぐらに汗馬を跳らせてゐたのである。

「次郎。」

近づく儘に、彼はかう叫んだ。心の中に吹き荒ぶ感情の嵐が、この語を機會として、一時に外へ溢れたのであらう。その聲は、白燃鐵を打つやうな響を帶びて、鋭く次郎の耳を貫いた。

次郎は、屹と馬上の兄を見た。それは日頃見る兄ではない。いや、今し方馬を飛ばせて、一散に走り

血をぬぐつた。

そのぬぐつた太刀を、丁と鞘におさめた時である。折から辻を曲つた彼は、行く手の月の中に、二十と云はず三十と云はず、群る犬の數を盡して、びやうびやうと吠え立てる聲を聞いた。しかも、その中に唯一人、太刀をかざした人の姿が、くづれかゝつた築土を背負つて、朧げながら黑く見える。と思ふ間に、馬は、高く嘶きながら、長い鬣をさつと振ふと、四つの蹄に砂煙をまき上げて、瞬く暇に太郎をそこへ疾風のやうに持つて行つた。

「次郎か」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、險しく眉を顰めて、弟を見た。次郎も片手に太刀をかざしながら、頂を反らせて、兄を見た。さうして刹那に二人とも、相手の瞳の奧にひそんでゐる、恐しいものを感じ合つた。が、それは、文字通り刹那である。馬は、吠え吼る犬の群に、脅されたせいであらう、首を空ざまにつとあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりも速に、空へ跳つた。後には、唯、濛々とした埃が、夜空に白く、一しきり柱になつて、舞上る。次郎は、依然として、野犬の群の中に、創を蒙つた儘、立ちすくんだ。……

太郎は――一時に、色を失つた太郎の顏には、もうさつきの微笑の影はない。彼の心の中では、何ものかが、「走れ、走れ」と囁いてゐる。唯、一時、唯、半時、走りさへすれば、それで萬事が休してしまふ。彼のする事を、何時かしなくてはならない事を、犬が代つてしてくれるのである。「走れ、何故走らない？」囁きは、耳を離れない。さうだ。どうせ何時かしなくてはならない事である。遲いと早いとの

ぐ人々の群を、誇らかに眺めやつた。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪はうと、緊く心に決したのである。さうして、その決心通り、葛巻(つづらまき)の太刀を揮ひ揮ひ、手に立つ侍を斬拂つて、單身門の中に踏みこむと、苦もなく厩の戸を蹴破つて、この馬の覊綱(はづな)を切るより早く、背に飛びのる間も惜しいやうに、遮るものを蹄にかけて、一散に宙を飛ばした。その爲に受けた創も、元より數へる暇はない。水干の袖はちぎれ、烏帽子は空しく紐を止めて、寸々に裂かれた袴も、腥い血潮に染まつてゐる。が、それも、太刀と鉾との林の中から、一人に遇へば一人を斬り、二人に遇へば二人を斬つて、出て來た時の事を思へば、嬉しくこそあれ、惜しくはない。——彼は、後を見返り見返り、晴々した微笑を、口角に漂はせながら、昂然として、馬を驅つた。

彼の念頭には、沙金がある。と同時に又、次郎もある。彼は、自ら欺く弱さを叱りながら、しかも猶沙金の心が再彼に傾く日を、夢のやうに胸に描いた。自分でなかつたなら、誰がこの馬をこの場合、奪ふ事が出來るだらう。向うには、人の和があつた。しかも地の利さへ占めてゐる。もし次郎だつたとしたならば——彼の想像には、一瞬の間、侍たちの太刀の下に、斬り伏せられてゐる弟の姿が、浮んだ。これは、勿論、彼にとつて、少しも不快な想像ではない。いや寧彼の中にある或物は、その事實である事を、祈りさへした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事が出來るなら、それは獨り彼の良心を苦しめずにすむばかりではない。結果から云へば、沙金がその爲に、自分を憎む惧もなくなつてしまふ。さう思ひながらも、彼は、流石に自分の卑怯を恥ぢた。さうして口に啣へた太刀を、左手(ゆんで)にとつて、徐に

らびた唇を、二三度無理に動かして、自分の夫を呼びかけた。が、誰もこれに答へるものはない。

「お爺さん。お爺さん。」と、かすかに、しかもなつかしさうに、自分の夫を呼びかけた。が、誰もこれに答へるものはない。猪熊の爺は、老女の救を得ると共に、打物も何も投げすてゝ、こけつまろびつ、血に辷りながら、逸早くどこかへ逃げてしまつた。その後にも勿論、何人かの盗人たちは、小路の其處此處に、得物を揮つて、必死の戰をつゞけてゐる。が、それらは皆、この垂死の老婆にとつて、相手の侍と同じやうな、行路の人に過ぎないのであらう。——猪熊の婆は、次第に細つて行く聲で、何度となく、夫の名を呼んだ。さうして、その度に、答へられないさびしさを、負うてゐる創の痛みよりも、より鋭く味はされた。しかも、刻々衰へて行く視力には、次第に周圍の光景が、ぼんやりと霞んで來る。唯、自分の上にひろがつてゐる大きな夜の空と、その中にかゝつてゐる小さな白い月と、それより外のものは、何一つはつきりとわからない。

「お爺さん」

老婆は、血の交つた唾を、口の中にためながら、囁くやうにかう云ふと、それなり恍惚とした、失神の底に、——恐らくは、さめる時のない眠りの底に、昏々として沈んで行つた。……

その時である。太郎は、そこを栗毛の裸馬に跨つて、血にまみれた太刀を、口に啣へながら、兩の手に手綱をとつて、嵐のやうに通りすぎた。馬は云ふまでもなく、沙金が目をつけた、陸奥出の三才駒であらう。既に、盜人たちがちりぢりに、死人を殘して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたやうにうす白い。彼は、亂れた髮を微風に吹かせながら、馬上に頭をめぐらして、後に罵り騷

がけに浴せかける。猪熊の爺は、尻居に仆れて、とび出しさうに大きく眼を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪へられなくなつたのであらう、慌てゝ、高這ひに這ひのきながら、聲をふるはせて、わめき立てた。

「欺し討ぢや。欺し討を、食はせ居つた。助けてくれ。欺し討ぢや。」

赤痣の侍は、その後から又、のび上つて、血に染んだ太刀をふりかざした。その時もし、どこからか猿のやうなものが、走つて來て、帷子の裾を月にひるがへしながら、彼等の中へとびこまなかつたとしたならば、猪熊の爺は、既に、あへない最期を遂げてゐたのに相違ない。が、その猿のやうなものは、彼と相手との間を押しへだてると、突嗟に小刀を閃かして、相手の乳の下へ刺し通した。さうして、それと共に、相手の横に拂つた太刀をあびて、恐しい叫び聲を出しながら、燒け火箸でも踏んだやうに、勢よくとび上ると、その儘、向ふの顏へしがみついて、二人一しよにどうと仆れた。

それから、二人の間には、殆人間とは思はれない、猛烈な摑み合ひが、始まつた。打つ。嚙む。髮をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかつたが、やがて、猿のやうなものが、上になると、再小刀がきらりと光つて、組みしかれた男の顏は、痣だけ元のやうに赤く殘しながら、見てゐる中に、色が變つた。すると、相手もその儘、力が拔けたのか、侍の上へ折り重なつて、仰向けにぐたりとなる──その時、始めて月の光にぬれながら、息も絶え絶えに喘いでゐる、皺だらけの、蟇に似た、猪熊の婆の顏が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の屍體の上に横たはつて、まだ相手の髻をとらへた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しさうな呻吟の聲をつづけてゐたが、やがて白い眼を、ぎよろりと一つ動かすと、干か

猪熊の爺は、苦しまぎれに慌しくかう叫んだ。

「嘘をつけ。――おのれにたばかれるやうな阿呆と思ふか。――往生際の悪い老爺ぢや。」

侍たちは、口々に罵りながら、早くも太刀を打ちかけようとする。もうかうなつては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人のやうな色になつた。

「何が嘘ぢや。何が嘘ぢやよ。」

彼は、眼を大きくして、あたりを頻に見廻しながら、逃げ場はないかと氣をあせつた。額には、つめたい汗が涌いて來る。手もふるへが止まらない。が、周圍は、何處を見ても、虐たらしい生死の爭ひが、盗人と侍との間に戰はれてゐるばかり、靜な月の下ではあるが、烈しい太刀音と叫喚の聲とが、一塊になつた敵味方の中から、ひつきりなしにあがつて來る。――所詮逃げられないと覺つた彼は、眼を相手の上に据ゑると、忽別人のやうに、兇惡な氣色になつて、上下の齒をむき出しながら、すばやく鉾をかまへて、威丈高に罵つた。

「嘘をついたがどうしたのぢや。阿呆。外道。畜生。さあ來い。」

かう云ふ語と共に、鉾の先からは、火花が飛んだ。中でも屈竟な、赤痣のある侍が一人、衆に先んじて傍から、無二無三に斬つてかゝつたのである。が、元より年をとつた彼が、この侍の相手になる譯はない。まだ十合と刃を合せない中に、見る見る、鉾先がしどろになつて、次第に後へ下つて行く。それがやがて小路のまん中まで、斬り立てられて來たかと思ふと、相手は、大きな聲を出して、彼が持つてゐた鉾の柄を、見事に半ばから、切り折つた。と、又一太刀、今度は、右の肩先から胸へかけて、袈裟

はない。)そこでは、一切の惡が、眼底を拂つて、消えてしまふ。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしてゐる月の光のやうに、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしく殿に殘つてゐる。……

なよや、末の松山
浪も越えなむや
浪も越えなむ

唄の聲は、ともし火の光のやうに、次第に細りながら消えて行つた。さうして、それと共に、力のない呻吟の聲が、暗を誘ふ如く、かすかに洩れ始めた。阿濃は、唄の半ばで、突然下腹に、鋭い疼痛を感じ出したのである。

相手の用意に裏を搔かれた盜人の群は、裏門を襲つた一隊も、防ぎ矢に射しらまされたのを始めとして、中門を打つて出た侍たちに、やはり手痛い逆撃を食はせられた。高が青侍の腕だてと思ひ侮つてゐた先手の何人かも、算を亂しながら、背(そびら)を見せる——中でも、臆病な猪熊の爺(おぢ)は、誰よりも先に逃げかゝつたが、どうした拍子か、方角を誤つて、太刀をぬきつれた侍たちの唯中へ、はいるともなく、はいつてしまつた。酒肥りのした體格と云ひ、物々しく鋒を提げた容子と云ひ、一かど手なみのすぐれたものと、思はれでもしたのであらう。侍たちは、彼を見ると、互に目くばせを交しながら、二人三人、鋒を揃へた儘、ぢりぢり前後から、つめよせて來た。

「逃るまいぞ。わしはこの殿の家人ぢや。」

なよや　末の松山
波ゝ越えなむや
波も越えなむ

うろ覺えに覺えた唄の聲は、灯のゆれるのに從つて、ふるへふるへ、しんとした樓の中に斷續した。唄は、次郎が好んでうたふ唄である。醉ふと、彼は必、扇で拍子をとりながら、眼をねむつて、何度もこの唄をうたふ。沙金はよく、その節廻しが可笑しいと云つて、手を打つて笑つた。――その唄を、腹の中の兒が、喜ばないと云ふ筈はない。

しかし、その兒が、實際次郎の胤かどうか、それは、誰も知つてゐるものがない。阿濃自身も、この事だけは、完く口をつぐんでゐる。たとへ盜人たちが、意地惡く兒の親を問ひつめても、彼女は兩手を胸に組んだ儘、恥しさうに眼を伏せて、愈執拗く默つてしまふ。さう云ふ時は、必垢じみた彼女の顏に女らしい血の色がさして、何時か睫毛にも、涙がたまつて來る。盜人たちは、それを見ると、益々何かと囃し立てゝ、腹の兒の親さへ知らない、阿呆〃彼女を嘲笑つた。が、阿濃は胎兒が次郎の子だと云ふ事を、緊く心の中で信じてゐる。さうして、自分の戀してゐる次郎の子が、自分の腹にやどるのは、當然な事だと信じてゐる。この樓の上で、獨りさびしく寢る毎に、必夢に見るあの次郎が、親でなかつたとしたならば、誰がこの兒の親であらう。――阿濃は、この時、唄をうたひながら、遠い所を見るやうな眼をして、蚊に刺されるのも知らずに、現ながらの夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかも又人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である。（涙を知らないものゝ見る事が出來る夢で

門の下へ身を投げて、死んでしまつてゐた事であらう。

煤のやうなものが、ひらひらと月にひるがへつて、甍の下から、窓の外をうす青い空へ上がつた。云ふまでもなく蝙蝠である。阿濃は、その空へ眼をやつて、疎な星に、うつとりと眺め入つた。——すると又一しきり、腹の兒が、身動きをする。彼女は急に耳をすますやうにして、その身動きに氣をつけた。彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくやうに、腹の兒は又、人間の苦しみを嘗めに來ようとして、もがいてゐる。が、阿濃は、そんな事は考へない。唯、母になると云ふ喜びだけが、さうして、又、自分も母になれると云ふ喜びだけが、この凌霄花のにほひのやうに、さつきから彼女の心を一ぱいにしてゐるからである。

その中に、彼女はふと、胎兒が動くのは、眠れないからではないかと思ひ出した。事によると、眠られない餘りに、小さな手や足を動かして、泣いてでもゐるのかも知れない。「坊やはいい兒だね。おとなしく、ねんねしてお出で、今にぢき夜が明けるよ。」——彼女は、かう胎兒に囁いた。が、腹の中の身動きは、止みさうで、容易に止まない。その中に痛みさへ、どうやら少しづつ加はつて來る。阿濃は、窓を離れて、その下に蹲りながら、結び燈臺のうす暗い灯にそむいて、腹の中の兒を慰めようと、細い聲で唄をうたつた。

君をおきて
あだし心を
われ持たばや

と蔓をのばしたその花が、今では古びた門の柱にまとひついて、ずり落ちさうになつた瓦の上や、蜘蛛の巣をかけた椽(たるき)の間へ、はひ上つたのがあるからであらう。……

　窓によりかかつた阿濃は、鼻の穴を大きくして、思入れ凌霄花のにほひを吸ひながら、なつかしい次郎の事を、さうして、早く日の目を見ようとして、動いてゐる胎兒の事を、それからそれへと、とめどなく思ひつづけた。――彼女は双親を覺えてゐない。生れた所の容子さへ、もう完く忘れてゐる。何でも幼い時に一度、この羅生門のやうな、大きな丹塗の門の下を、誰かに抱くか、負はれかして、通つたと云ふ記憶がある。が、これも勿論、どの位ほんとうだか、確な事はわからない。唯、どうにかかうにか、覺えてゐるのは、物心がついてから後の事ばかりである。さうして、それが又、覺えてゐない方がよかつたと思ふやうな事ばかりである。或時は、町の子供にいぢめられて、五條の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。或時は、饑にせまつてした盗みの咎で、裸の儘、地藏堂の梁(うつばり)へつり上げられた。それがふと沙金に助けられて、自然とこの盗人の群にはいつたが、それでも苦しい目にあふ事は、以前と少しも變りがない。白痴に近い天性を持つて生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃は猪熊の婆の氣に逆つては、よくむごたらしく打擲された。猪熊の爺(ぢぢ)には、醉つた勢で、よく無理難題を云ひかけられた。ふだんは何かと劬つてくれる沙金でさへ、癇に障ると、彼女の髮の毛をつかんで、ずるずる引きずりまはす事がある。まして、外の盗人たちは、打つにも叩くにも、用捨はない。阿濃は、その度に何時もこの羅生門の上へ逃げて來ては、獨りでしくしく泣いてゐた。もし次郎が來なかつたら、さうして時々、やさしい語をかけてくれなかつたら、恐らくとうにこの

次郎は、絶望の眼をあげて、天上の小さな月を一瞥しながら、太刀を兩手にかまへた儘、兄の事や沙金の事を、一度に石火の如く、思ひ浮べた。兄を殺さうとした自分が、反つて犬に食はれて死ぬ。これより至極な天罰はない。——さう思ふと、彼の眼には、自ら涙が浮んだ。が、犬はその間も、用捨はしない。さつきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾をふるつたかと思ふと、次郎は忽左の太腿に、鋭い牙の立つたのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた兩京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の聲を壓して遙に戞々たる馬蹄の音が、風のやうに空へあがり始めた。……

しかしその間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮べながら、羅生門の樓上に佇んで、遠くの月の出を眺めてゐる。東山の上が、うす明く靑んだ中に、旱に痩せた月は、徐にさみしく、中天に上つて行く。それにつれて、加茂川にかかつてゐる橋が、その白々とした水光りの上に、何時か暗く浮上つて來た。

獨り加茂川ばかりではない。さつきまでは、眼の下に黑く死人のにほひを藏してゐた京の町も、僅の間に、つめたい光の鍍金をかけられて、今では、越の國の人が見ると云ふ蜃氣樓のやうに、塔の九輪や伽藍の屋根を、おぼつかなく光らせながら、ほのかな明るみと影との中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつつんでゐる。町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返してゐるのであらう、自ら頂を朧げな月明りにぼかしながら、どの峯も、ぢつと物を思つてでもゐるやうに、うすい靄の上から、靜に荒廢した町を見下してゐる——と、その中で、かすかに凌霄花のにほひがした。門の左右を埋める藪の所々から、簇々

く彼を驅けぬけた狩犬の一頭が、友を集めるやうに高く吠えると、そこに狂つてゐた犬の群は、悉相呼び相答へて、一度に猖々の聲をあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、獰い毛皮の渦巻きの中へ捲きこんだ。深夜、この小路に、かうまで犬の集まつてゐたのは、元より何時もある事ではない。次郎は、この廢都を我物顔に、十二十と頭を揃へて、血の臭ひに餓えて歩く、獰猛な野犬の群が、ここに捨ててあつた疫病（えやみ）の女を、宵の中から餌食にして、互に牙を嚙みながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪合つてゐる所へ、來たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬の暇もなく、嵐に吹かれて飛ぶ稻穗のやうに、八方から次郎へ飛びかかつた。たくましい黑犬が、太刀の上を躍り越えると、尾のない狐に似た犬が、後から來て、肩をかすめる。血に濡れた口髭が、ひやりと頰にさはつたかと思ふと、砂だらけな足の毛が、斜に眉の間を撫でた。斬らうにも突かうにも、どれと相手を定める事が出來ない。前を見ても、後を見ても、唯、靑くかがやいてゐる眼と、絶えず喘いでゐる口とがあるばかり、しかもその眼とその口が、數限りもなく、路を埋めて、ひしひしと足下に迫つて來る。――次郎は、太刀を輪はしながら、急に、猪熊の婆の話を思ひ出した。「どうせ死ぬのなら一思ひに死んだ方がいい。」彼は、さう心に叫んで、潔く眼をつぶつたが、喉を嚙まうとする犬の息が、暖く顏へかかると、思はず又、眼を開いて、横なぐりに太刀をふるつた。何度それを繰返したか、わからない。しかし、その中に、腕の力が、次第に衰へて來たのであらう、打つ太刀が、一太刀毎に重くなつた。今では踏む足さへ危くなつた。そこへ、斬つた犬の數よりも、遙に多い野犬の群が、或は芒原の向うから、或は築土の崩れをぬけて、續々として、つどつて來る。――

て、前に廻らず彼の足下へ、左右から襲ひかゝつた。一頭の頤を蹴返すと、一頭が肩先へ躍りかゝる。それと同時に、一頭の牙が、すんでに太刀を持つた手を、噛まうとした。と又、三頭とも巴のやうに、彼の前後に輪を畫いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにほひを嗅ぐやうに、頤を前足へすりつけて、ぴようぴようと吠え立てる。――相手を殺したのに、氣のゆるんだ次郎は、前よりも一層、この狩犬の執拗い働きに惱まされた。

しかも、いら立てば立つ程、彼の打つ太刀は皆空を斬つて、やゝともすれば、足場を失はせようとする。犬は、その隙に乘じて、熱い臭を吐きながら、愈休みなく肉薄した。もうかうなつては、唯、窮餘の一策しか殘つてゐない。そこで、彼は、事によつたら、犬が追ひあぐんで、どこかに逃げ場が出來るかも知れないと云ふ、一縷の望にたよりながら、打ち外した太刀を引いて、折から足を狙つた犬の背を危く向ふへとび越えると、月の光を便りにして、ひた走りに走り出した。が、元よりこの企ても、所詮は溺れようとするものが、藁でもつかむのと變りはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、齊しくきりりと尾を捲いて、後足に砂を蹴上げながら眞一文字に追ひすがつた。

が、彼のこの企ては、單に失敗したと云ふだけの事ではない。實はそれが爲に、反て虎口にはいるやうな事が出來たのである。――次郎は立本寺の辻をきはどく西へ切れて、ものゝ二町と走るか走らない中に、忽行く手の夜を破つて、今自身を追つてゐる犬の聲より、より多く犬の聲が、耳を貫いて起るのを聞いた。それから、月に白らんだ小路をふさいで、黒雲に足のはへたやうな犬の群が、右往左往に入り亂れて、餌食を爭つてゐる樣が見えた。最後に――それは殆ど寸刻の暇もなかつた位である。すばや

或名狀し難い心の疲勞に、襲はれた。もし周圍が周圍だつたら、彼は必そこに身を投げ出して、飽くまで休息を貪つた事であらう。しかし、彼が相手の顔をふみつけて、血のしたゝる太刀を向ふの胸から引きぬいてゐる中に、もう何人かの侍は、四方から彼をとり圍んだ。いや、既に後から、忍びよつた男の鉾は、危く鉾を、彼の背に擬してゐる。が、その男は、不意に前へよろめくと、鉾の先に次郎の水干の袖を裂いて、うつむけにがくりと仆れた。たからすべの矢が一筋、颯然と風を切りながら、一ゆりゆつて後頭部へ、ぐさと箆深く立つたからである、

それから後の事は、次郎にも、まるで夢のやうにしか思はれない。彼は唯、前後左右から落ちて來る太刀の中に、獸のやうな唸り聲を出して、相手を選まず渡り合つた。周圍に沸き返つてゐる、聲とも音ともつかない物の響と、その中に出沒する、血と汗とにまみれた人の顔と――その外のものは、何も眼にはいらない。唯、流石に、後にのこして來た沙金の事が、太刀から迸る火花のやうに、時々心に閃いた。が、閃いたと思ふ中に、刻々迫つて來る生死の危急が、忽ちそれを掻消してしまふ。さうして、その後には又、太刀音と矢叫びとが、天を掩ふ蝗の羽音のやうに、築土にせかれた小路の中で、とめどもなく湧き返つた。――次郎は、かう云ふ勢に促されて、何時か二人の侍と三頭の犬とに追はれながら、小路を南へ少しづゝ斬り立てられて來たのである。

が、相手の一人を殺し、一人を追拂つた後で、犬だけなら、恐れる事もないと思つたのは、結局次郎の空だのみにすぎなかつた。犬は三頭が三頭ながら、大きさも毛なみも一對な茶まだらの逸物で、犢もこれにくらべれば、大きい事はあつても、小さい事はない。それが皆、口のまはりを人間の血に濡らし

「仕方がないわね。ぢや、私たちだけ歸りましよう。」

さう云ふ話のまだ完らない中に、さうして、次郎がそれを聞かないもの丶やうに、再指を口に含んで相圖を吹かうとした時に、盗人たちの何人かゞ、むらむらと備へを亂して、左右へ分れた中から、人と犬とが一つになつて、二人の近くへ迫つて來た。――と思ふと、沙金の手に弓返りの音がして、まつさきに進んだ白犬が一頭、たかうすべの矢に腹を縫はれて、苦鳴と共に、横に仆れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々として砂に垂れた。が、犬に續いた一人の男は、それにも怖ぢず、太刀をふりかざして、横あひから次郎に斬つてかゝる。その太刀が、殆ど無意識に受けとめた、次郎の太刀の刄を打つて、鏘然とした響きと共に、瞬く間、火花を散らした。――次郎はその時、月あかりに、汗にぬれた赤鬚と切り裂かれた襤褸の直垂とを、相手の男に認めたのである。

彼は直下に、立本寺の門前を、ありありと眼に浮べた。さうして、それと共に、恐しい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙金はこの男と腹を合せて、兄のみならず、自分をも殺さうとするのではあるまいか。一髪の間にかう云ふ疑ひを抱いた次郎は、眼の前が暗くなるやうな怒りを感じて、相手の太刀の下を、脱兎の如く、くゞりぬけると、兩手に緊く握つた太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。さうして、一たまりもなく仆れる相手の男の顔を、したゝか藁沓でふみにじつた。

彼は、相手の血が、生暖く彼の手にかゝつたのを感じた。太刀の先が肋の骨に觸れて、強い抵抗を受けたのを感じた。さうして又、斷末魔の相手が、ふみつけた彼の藁沓に、下から何度も噛みついたのを感じた。それらが、彼の復讐心に、快い刺戟を與へたのは、勿論である。が、それにつれて、彼は又、

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ來ると、息を切らし切らし、かう云つた。

「何しろ肝腎の太郎さんが、門の中で、奴等に圍まれてしまつたと云ふ騷ぎでしてな。」

沙金と次郎とは、うす暗い築土の影の中で、思はず眼と眼を見合せた、

「圍まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、――まあそれもあの人の事だから、萬々大丈夫だらうとは思ひますがな。」

次郎は、顏をそむけながら、沙金の側を離れた。が、小盜人は勿論そんな事は、氣にとめない。

「それにお爺やお婆まで、手を負つたやうでした。あの分ぢや殺された奴も、四五人はありませう。」

沙金は頷いた。さうして次郎の後から追ひかけるやうに、險のある聲で、

「ぢや、私たちもひき上げましよう。次郎さん、口笛を吹いて頂戴」と云つた。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固またやうな顏をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二聲、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間にだけ知られてゐる、引揚げの時の合圖である。が、盜人たちは、この口笛を聞いても、踵をめぐらす容子がない。(實は、人と犬とにとりかこまれてめぐらす丈の餘裕がなかつたせいであらう。)口笛の音は、蒸暑い夜の空氣を破つて、空しく小路の向うに消えた。さうしてその後には、人の叫ぶ聲と、犬の吠える聲と、それから太刀の打ち合ふ音とが、遙な空の星を動かして、一層騷然と、立ちのぼつた。

沙金は、月を仰ぎながら、稻妻の如く眉を動かした。

た。

次郎は、この語に皮肉な侮蔑を感じて、唇を嚙みながら、鋭く平六の顔を見返した。――すると、丁度その途端である。十郎を救はうとして、ばらばらと走り寄つた、盗人たちの機先を制して、耳をつんざく一聲の角を合圖に、紛々として亂れる矢の中を、門の内から耳の尖つた、牙の鋭い、狩犬が六七頭すさまじい唸り聲を立てながら、夜目にも白く埃を卷いて、まつしぐらに衝いて出た。續いてその後から十人十五人、手に手に打物を取つた侍が、先を爭つて屋敷の外へ、ひしめきながら溢れて來る。味方も勿論、見てはゐない。斧をふりかざした平六を先に立てゝ、太刀や鉾が林のやうに、きらめきながら並んだ中から、人とも獸ともつかない聲を、誰とも知らずわつと上げると、始めのひるんだ氣色にも似ず一度に備へを立て直して、猛然として殺到する。沙金も、今は弓にたかうすべの矢を番へて、まだ微笑を絶たない顏に、一脈の殺氣を浮べながら、すばやく路ばたの築土の壞れを小楯にとつて、身がまへた。――

やがて敵と味方は、見る見る中に一つになつて、氣の違つたやうにわめきながら、十郎の倒れてゐる前後をめぐつて、無二無三に打合ひ始めた。その中に又、狩犬がけたたましく、血に餓えた聲を響かせて、戰はいづれが勝つとも、暫くの間はわからない。そこへ一人、裏へまはつた仲間の一人が、汗と埃とにまみれながら、二三ヶ所薄手を負うた容子で、血に染まつた儘かけつけた。肩にかついだ太刀の刄のこぼれでは、この方の戰も、やはり存外手痛かつたらしい。

「あつちは皆ひき上げますぜ。」

宿の内外から、思ひもかけず射出した矢に、先膽を破られた。まつさきに進んだ眞木島の十郎が、太腿を篦深く射られて、ころやうにどうと倒れる。それを始めとして、瞬く間に二三人、或は顏を破り、或は臂を傷けて、慌しく後を見せた。射手の數は、勿論何人だかわからない。が、染羽白羽の尖り矢は、中には物々しい鏑の音さへ交へて、又一しきり飛んで來る。後に下つてゐた沙金でさへ、遂には黑い水干の袖を斜に、流れ矢に射透された。

「御頭に怪我をさすな。射ろ。射ろ。味方の矢にも、鏃があるぞ。」

交野の平六が、斧の柄をたゝいて、かう罵ると、「おう」と云ふ答へがあつて、忽盜人の中からも、亦矢叫びの聲が上り始める。太刀の柄に手をかけて、やはり後に下つてゐた次郎は、平六のこの語に、一種の苛責を感じながら、見ないやうにして沙金の顏を横からそつと覗いて見た。沙金は、この騷ぎの中にも冷然と佇みながら、殊更月の光にそむきゐて、弓杖をついた儘、口角の微笑もかくさず、ぢつと矢の飛び交ふのを、眺めてゐる。——すると、平六が、又いら立たしい聲を上げて、横あひから、かう叫んだ。

「何故十郎を捨てゝ置くのぢや。おぬしたちは矢玉が恐しうて、仲間を見殺しにする氣かよ。」

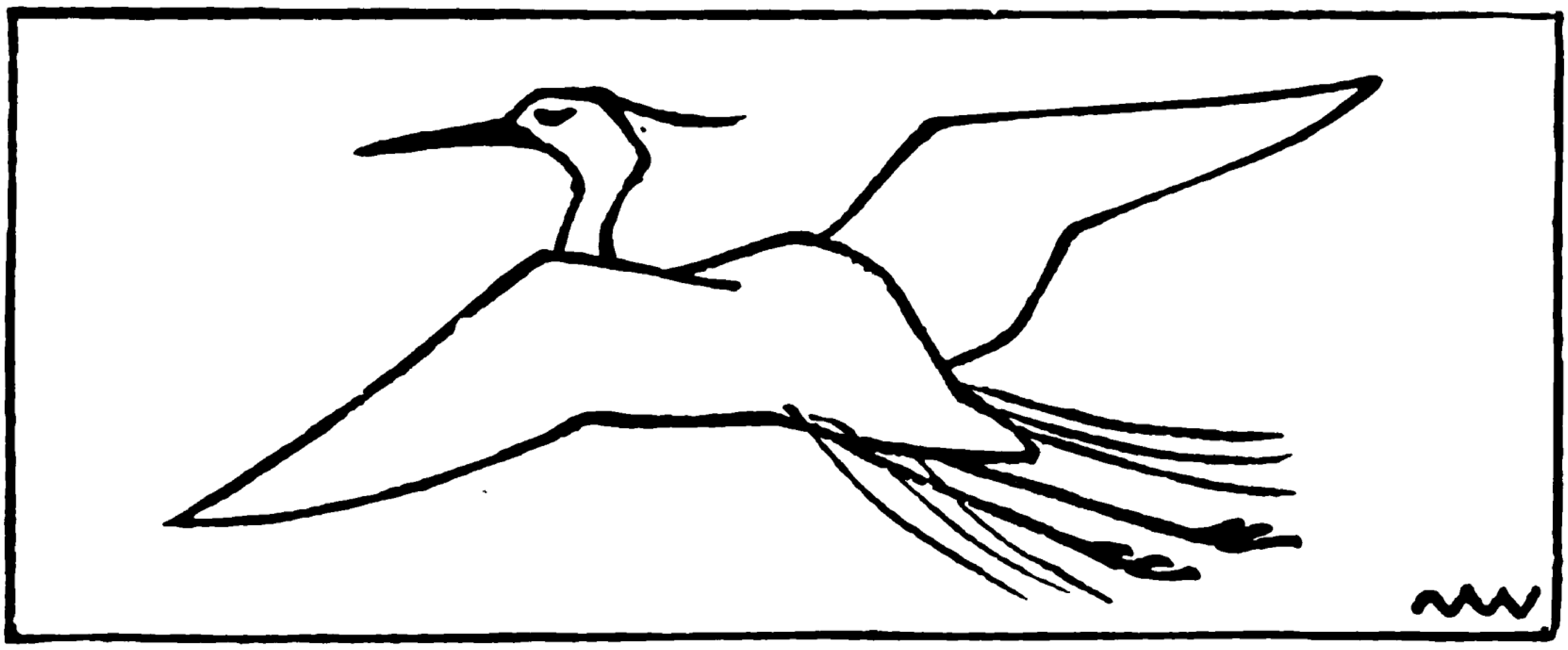
太腿を縫はれた十郎は、立ちたくも立てないのであらう、太刀を杖にして居ざりながら、丁度羽根をぬかれた鴉のやうに、矢を避け避け、もがいてゐる。次郎は、それを見ると、異樣な戰慄を覺えて、思はず腰の太刀をぬき拂つた。が、平六はそれを知ると、流し眄にぢろりと彼の顏を見て、

「おぬしは、お頭に附添うてゐればよい。十郎の始末は、小盜人で澤山ぢや。」と、嘲るやうに云ひ放つ

增して來た。相手の太刀を受止めて、それを向ふへ斬返しながら、足もとを襲はうとする犬を、突嗟に横へ躱してしまふ。——彼は、この働きを殆同時にした。そればかりではない。どうかするとその拍子に斬返した太刀を、逆にまはして、後から來る犬の牙を、防がなければならない事さへある。それでも流石に何時か疵をうけたのであらう。月明りにすかして見ると、赤黑いものが一すぢ、汗ににじんで、左の小鬢から流れてゐる。が、死に身になつた次郞には、その痛みも氣にならない。彼は、唯、色を失つた額に、秀でた眉を一文字に躨めながら、恰も太刀に使はれる人のやうに、烏帽子も落ち、水干も破れた儘、縱橫に刄を交へてゐるのである。

それがどの位續いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後へそらせて、けたゝましい悲鳴をあげたと思ふと、次郞の太刀は、早くもその男の脾腹を斜に、腰のつがひまで斬りこんだのであらう。骨を切る音が鈍く響いて、橫に薙いだ太刀の光が、うす暗をやぶつてきらりとする。——と、その太刀が宙におどつて、もう一人の侍の太刀を、丁と下から拂つたと見る間に、相手は肘をしたゝか斬られて、矢庭に元來た方へ、敗走した。それを次郞が追ひすがりざまに、斬らうとしたのと、狩犬の一頭が鞠のやうに身をはづませて、彼の手下へかぶりついたのとが、殆、同時の働きである。彼は、一足後へとびのきながら、ふりかむつた血刀の下に、全身の筋肉が一時に弛むやうな氣落ちを感じて、月に黑く逃げてゆく相手の後姿を見送つた。さうしてそれと共に、惡夢から覺めた人のやうな心もちで、今自分のゐる所が、外ならない立本寺の門前だと云ふ事に氣がついた——

これから半刻ばかり以前の事である。藤判官の屋敷を、表から襲つた偸盜の一群は、中門の右左、車



續偸盜

芥川龍之介

一

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀を揮ひながら、小路を南へ二三町、下るともなく下つて來た。今は沙金の安否を氣づかつてゐる餘裕もない。侍は衆をたのんで、隙間もなく斬りかける。犬も毛の逆立つた背を聳やかして、前後を嫌はず、飛びかゝつた。折からの月の光に、往來は、ほのかながら、打つ太刀をたがはせない程に、明くなつてゐる。――次郎は、その中で、人と犬とに四方を圍まれながら、必死になつて、斬りむすんだ。

相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる路はない。彼の心には、かう云ふ覺悟と共に、殆常軌を逸した、兇猛な勇氣が、刻々に力を

離れて行かうとする靈魂の、斷末魔の聲であつた。それが終ると、次第に病人は息を引き取つた。

「なんだなあ、病人と云ふ者はよく死ぬ時にシャックリをするけれど、此の子はちつともしなかつたなあ。芝居なんぞでもシャックリをして見せるもんだが……」

父は不審さうに臨終の樣子を眺めて云つた。死んだ體はまだ微かに動いて居た。もくもくと肩の筋肉を強直させて、唇の間から、薬牡丹のやうに色の褪めた舌を垂らした。

不意に、母親がだらしのない、大きな聲でわいわいと泣きかけたが、父親に激しくたしなめれて袂を口に咬へながら、屍骸の傍に打ち俯してしまつた。

それから二た月程過ぎて、章三郎は或る短篇の創作を文壇に發表した。彼の書く物は、常時世間に流行して居る自然主義の小說とは、全く傾向を異にして居た。それは彼の頭に醱酵する怪しい惡夢を材料にした、甘美にて芳烈なる藝術であつた。

ないか。己だつて今日は胸騒ぎがしたのだ。……」
兄は心で斯う云つて、熟柿臭い酒の匂を、重い溜息と一緒に洩らした。
「ねえお父つあん、もう一遍芳川さんに注射して貰ひませうか。」
と、母が云つた。
「さうよなあ、して貰ふなら貰つてもいゝが、どうせ同じ事ぢやねえか。章三郎も歸つて來たし、みんな揃つて居るんだから心殘りはありやあしめえ。無理な事をして生かして置くだけ、却つて當人が可哀さうだ。」
かう云つた父の口元には、ひッつりのやうな笑ひが見えた。
遣る瀬ない、呼吸の詰まるやうな苦しい時が、無言の儘二時間ばかり過ぎて行つた。突然、病人の唇は蛞蝓の蠢くやうな緩やかな蠕動を起した。
「かあちやん、……あたい糞こがしたいんだけれど、此のまゝしてもいゝかい。」
「あゝいゝともいゝとも、その儘おしよ。」
母は我が子の最後の我が儘を、快く聽き入れてやつた。
暫くの間、病人はハッキリ意識を回復して、左右の人々にぽつりぽつりと言葉をかけた。
「あゝあ、あたいはほんとに詰まらないな。十五や十六で死んでしまふなんて、……だけど私は苦しくも何ともない。死ぬなんてこんなに樂な事なのか知ら……」
一座は哲人の敎へを聽かされて居るやうに、堅唾を呑んで耳を澄ました。その言葉こそ、今肉體から

「さうだ、此れから淺草へ行かう。淺草へ行つて活動寫眞を見て歸らう。面白いな。……」
と、彼は大きな聲で獨り語を云つた。

その晩、章三郎が八丁堀の家の前へ戻つて來たのは、九時頃であつた。格子を明けると、
「章三郎かい、早くおいで、早くおいでよう！」
と、母の潤んだ聲が云つた。
狹い六疊の部屋の中に、兩親を始め日本橋の親戚の男や女がギツシリと詰まつて、脂汗の湧く蒸し暑さを堪へながら、病人の枕許を取り卷いて居た。
「お富ちやんや、お富ちやんや、兄さんが歸つて來ましたよ。」
嫁入前の、花やかな高島田に結つた娘のお葉が、病人の耳元へ口をつけて云つた。
「しかし不思議なもんだねえ。いつも歸りが遲いのに、今夜に限つて章三郎が早く歸つて來るなんて、……」
斯う云ひながら、母は眞赤な眼の縁を擦つた。
病人には其れ等の話がよく聞き取れるらしかつた。が、もう唇が硬張つたのか一と言も物を云ふ事は出來なかつた。彼女は唯、賢い犬のやうに瞳を上げて、ぢつと章三郎の顏を見入つた。
「お富、お富、なんでお前は己をそんなに睨めるのだ。此の間己がお前を叱つたのは、ほんの一時の腹立ち紛れに過ぎないのだ。どうぞそんなに睨まないで、もう好い加減に免してくれ。己はお前の兄ぢや

前の日の夕方から蠣殻町の待合に泊つて居た章三郎は、どこかの鳴る時分に眼を覚ますと相手の女はもう座敷には見えなかつた。

「はてな、事に依ると今夜あたり妹が死ぬのぢやないか知らん。」

ふと、こんな考へが彼の胸に浮かんだ。さうして不思議にも、その考へは長く長く彼の心に蟠まつて、蛔の群がるやうにもやもやと擴がつて行つた。「虫が知らせる、」とか「胸騒ぎがする、」とか、俗に世間で云ふ言葉は、斯かる場合の心持ちを形容するのではあるまいかと彼は思つた。遂には妹の今夜死ぬ事が、もう豫め知れ渡つた、疑ふべからざる事實のやうにさへ感ぜられた。

彼は妹の病氣に就いて、一度も兄らしい心配をした事もないのに、やはり血筋の緣があつて「虫が知らせる」のかと思ふと、何だか苦々しい心地がした。自分と彼女との肉身の關係を、それ程根柢の深いものとは、どうしても信じたくなかつたのである。

午後の一時頃に、勘定を濟ませて待合の門口を出た章三郎は、まだ懷に殘つて居る二圓の金を、何とかして其の日のうちに使つてしまはねば氣が濟まなかつた。

「酒だ、酒だ、酒さへ飮めば胸騒ぎが鎭まつてしまふんだ。」——彼はふらふらと人形町のビーヤホールの暖簾を潜つた。ウヰスキイだの正宗だのを立て續けに煽りつけて、舌の爛れるやうな熱い洋食を三皿ばかり平げて、陶然として表へ出ると、日中の太陽が酔ひどれの娼婦の吐息の如くぢりぢりと彼の項を照り付けた。彼は危く眩暈を感じて倒れさうになつたが、しかし好い鹽梅に、もう胸騒ぎはしなくなつて居た。

つて、やつとこさと母親が奥の間へ拉して行く迄、彼は根氣よく項を伸べて棒立ちに立つて居た。連夜の毒々しい刺戟の爲めに痺れた頭を、眼の眩む程グワングワンと揺す振られるのが、彼には寧ろ小氣味のよい、一種痛烈な快感を覺えさせた。

六月の末の、降り續いた霖雨が珍しく晴れ渡つた或る日であつた。四五日前から特に容態が險惡になつた妹は、朝の七時に勤め先へ出て行かうとする父親を呼び止めて、

「お父ちやん、何だか私、今日は淋しくつて仕樣がないから何處へも行かず居ておくんな。ねえお父ちやん。」

と、例になく悲しい聲で甘へるやうに云つた。章三郎に罵られる程生意氣であつた病人は、その頃めつきり氣力が衰へて、七つ八つの子供時代の愚かさに復つて居た。晩になると、獨りで寐るのが嫌だと云つて、父親の痩せた腕に抱かれて眠つた。彼女は父親に抱かれてさへ居れば、よもや死ぬ事はあるまいと信じて居るやうであつた。

「お父つさん、お富が淋しいつて云ふんだから、今日は休んでおやんなさいよ。」

と、母も娘の尾に附いて、眼くばせをしながら父に云つた。

「それぢやあお父つあんは店を休んで、一日内に居て上げよう。」

父は優しく云ふ事を聽いて、締めかけた前掛の紐を解いた。

Delirium の谷に墜した。

三日も四日も家を明けて、いつも深夜の一時か二時に八丁堀へ歸つて來る章三郎は、四肢の疲れと惡酒の酔で綿のやうに蕩けた體を、どたんどたんと雨戸に打つけながら、寐て居る兩親を呼び起した。

「何だつて今時分歸つて來やがるんだ。そんなに亂暴に戸を叩いたら、お富がびつくりするぢやねえか。……手前のやうな人間は親でもねえし子でもねえから、何處へでも勝手に出て行け。二度と再び歸つて來るにや及ばねえ。」

家の中から父親の怒鳴るのが聞えると、章三郎は猶更けたゝましく戸を叩いた。結局父親が業を煮やして明けに來るまで、何分間でもどたんどたんと板戸を蹴つた。

「この野郎！　勝手に何處かへ行けと云つたらなぜ行かねえんだ。なぜ行かねえんだつてばよう！」

戸を明けるや否や、父親はいきなり章三郎の胸ぐらをこづいて、蟀谷の邊を力まかせにぽかッと擲りつけるのが、殆んど一つの慣例になつて居た。

「お父つさん、お父つあんてばさ、まあ隣近所があるんだから、好い加減にしたらいゝぢやないか。……章三郎や！　お前が默つて立つて居るから惡いんだよ。何でもいゝから早く詫つておしまひつてば！」

母は二人の間に這入つて、おろおろしながら斯う叫んだ。

「やい畜生！　まだそんな所に衝つ立つて居やあがるか。」

禿げ上がつた頭を亂打する親父の顔には、時とすると涙が光つて、聲が怪しくふるへて居た。

それでも章三郎は、詫まらうとも出て行かうともしなかつた。猛り狂ふ父親の腕を無理やりに引つ張

哀さうだから默つて居てやりやあ、いゝ氣になつて何處まで增長しやがるんだ。手前の指圖なんぞ受ける必要はないんだから、大人しくして引込んで居ろ。どうせ手前のやうな病人はな、……」

から云ひかけた章三郎は、次ぎに云はうとする言葉の、餘りな慘酷さに自ら愕然として、後の語句を曖昧に濁らせた。

「……他人の世話を燒くよりも、自分が世話を燒かれないやうに用心さへして居りやあ、それで手前の役目は濟むんだ。馬鹿！」

病人は再び何とも云はなかつた。蒸し暑い、森閑とした夜更けの室内に、依然として表情のない彼女の瞳は、いつ迄もいつ迄も氷の如く冷やかに章三郎を視詰めて居た。

「兄さんの云はうとして躊躇した言葉の意味は、私にもよく分つて居ます。どうせ私は、もう直き死んでしまふんです。」

彼女の瞳は、斯う語つて居るやうに見えた。

五

その頃、Masochist の章三郎は、何でも彼の要求を聽いてくれる一人の娼婦を見つけ出した。その女に會ひたさに、彼はあらゆる手段を講じて遊蕩費を調達しては、三日にあげず蠣殼町の曖昧宿を訪れた。授業料だの、教科書の代だのと云ふ名目で、日本橋の親戚から引き出して來る學費の凡べては無論の事、折角友情を恢復した友達仲間に、彼は再び不義理を重ね、揚句の果ては借りた本まで賣り飛ばして、水天宮の裏通りの其の女の許に通つた。激しい恐怖と激しい歡樂とが、交る交る彼を囚へて、前後不覺の

こんな惨めな親たちに、なぜ反感を持つのであらう。… さう考へると、章三郎は胸が一杯になつた。

「世の中に己のやうな惡人は又とあるまい。己こそ本當の背德漢だ。天にも神にも見放された人間なんだ。…お父さんお母さん、どうぞ私を勘忍して下さい。」

彼は覺えず兩手を合はせた。

「兄さん、又酒しぼを飮みに來たんぢやないの。」

寐て居ると思つた病人のお富は、いつの間にか眼を覺まして、水晶の如く冴えた眦を、ぢつと章三郎に据ゑて云つた。

「ちやんと隱してしまつたんだから、そんな所を捜したつてありやしなくつてよ。飮むなど云ふのになぜ兄さんはさうなんだらう。…ほんとに内の臺所にやあ、毎晩のやうに頭の黑い大きな鼠が出るんだから、うつかり何かを置いとけやしない。」

病人は、微かな、力のない聲で皮肉を云つて、やゝともすると痰のからまる咽喉の奧をぜいぜいと鳴らした。

長い間、章三郎は怯えたやうに立ち竦んで、殆んど何等の表情もない、透き徹るやうな病人の瞳の中を睨んで居たが、此の間から我慢して居た憎惡の情が其の時一度に爆發した。

「あまつちよめ、生意氣な事を云やあがるな！」

と、それでも彼は氣味惡さうに二の足を蹈みつゝ、低い調子でひそひそと云つた。

「なんだ手前は？　足腰も立たない病人の癖に、口先ばかりツベコベと勝手な事を拔かしやあがる。可

かう呟いて彼はぼんやりと部屋の中央に突つ立つた儘、三人の寝姿を見下ろして居た。例の如く父は凄じい鼾を掻き、母はぽかんと口を開いて、すやすやと寝て居る様子が、道端に倒れた行路病者のやうに傷ましかつた。章三郎は此の二三年來、兩親の顏をまざまざと眺めた事がないやうな心地がして、暫く彼等を見守つて居た。垢だらけな、ぼろぼろになつた銘仙の掻卷の裾から、骨張つた二本の毛脛を露出して、萎えた花瓣のやうな足の甲を天井に向けながら、無心に眠つて居る父親の頬は、眼窩と齒列びとが見え透く程に落ち窪んで居る。生きた男の寝姿と云ふよりも、餓え死にをした人間の骸に近い恰好である。母は體が丈夫なせゐか、割り合ひに貧乏窶れのしない、肉附きのいゝ色白の肌を胸まで出して、兩手をいぎたなく左右へ伸ばしたまゝ、片膝を立てゝ寝込んで居る。彼等の眠りが深ければ深い程、章三郎は餘計彼等が哀れであるやうに感ぜられた。終日の勞動と心配とに疲れ果てゝ、敗殘の餘生を娩か夜間の熟睡に托して居る老夫婦の、靜かな唇と眼瞼の裡には、晝間章三郎を叱り飛ばす時のやうな、瞋恚の瞳も輝かず罵詈の言葉も響かなかつた。彼等はさながら、章三郎の足下に身を横へて、我が子の情と救ひとを求むるかの如くであつた。

「章三郎や、どうぞ私たちを助けておくれ。お前は私の子ではないか。廣い世間にお前より外、私たちを救つてくれる人は居ない。どうぞ私たちを可哀さうだと思つておくれ。どうぞ心を入れ換へて、私たちに孝行をしておくれ。」――

せち辛い世の苦しみに喘いで居るやうな、ときれ〳〵の寝息の音が、彼には何となく斯う云ふ文句に聞えるのであつた。自分はなぜ、こんな悲しい人たちを邪慳にしたり、忌み嫌つたりするのであらう。

「どうも酒しほがあんまり早くなくなるから、變だ變だと思つて居たら、大方夜中に章三郎が飲むんですよ。さうだよあなた、さうに違ひないよ。」

と、母は或る時父に云つた。

「だつてお前、あの酒しほ﹅﹅が飲めるもんぢやねえが、彼奴が飲むんだとすると、どうも呆れた野郎だな、構はねえから今夜默つて何處かへ隱してしまひねえ。あんな物を飲みやがつて、今に體を惡くするから。」

と、父は半信半疑で云つた。

その晩、章三郎はいつものやうに臺所を漁りに來たが、酒しほは容易に見付からなかつた。さてはと心付いて、障紙の破れ目から居間を覗くと、一本の德利が親父の枕許に、烟草盆と並んで立つて居た。父と母とは病人のお富の床を挾んで、正體もなく鼾をかいたり口を開いたりして眠つて居た。苦勞性の親父も、泣き蟲のお袋も、おかしな事には昔から馬鹿に寐つきのいゝ人々であつた。章三郎は晝も夜も大理石の臥像のやうに仰向いて居る妹の寐息を窺ひながら、首尾よく枕許の德利を浚つた。さうして便所の中へ隱れて、不快な臭氣に顏をしかめながら、ぐびりぐびりと喉を鳴らした。

それから五六日過ぎた、或る眞夜中の事であつた。家族の寐鎭まつた刻限を狙つて、みしりみしりと梯子段を降りて來た章三郎は、薄暗いランプの明りの漂うて居る居間の四方を見廻したが、もう其の德利は父親の枕許に置いてなかつた。

「あ、また氣が附いて何處かへ隱してしまつた。」

甘んじて堪へ忍ぶ事は出來なかつた。彼は何とかして、海嘯のやうに襲ひ來る死の恐怖を拂ひ除けつゝ、生きられるだけ生きたかつた。たとへ彼の境遇は哀れであつても、彼の生れて來た世の中には、惡魔が教へる歡樂の數々が、充ち溢れて居るやうに見えた。彼は是非とも生き長らへて、いつか一度は己れの肉體を、己れの官能を、その歡樂の毒酒の海に浸らせたかつた。上戶が杯中の一滴をも吝しむやうに、美酒のしたゝりを少しでも多く吝しみ味はひつゝ生きて行きたかつた。

　彼は己れの疾病を、根本的に治癒する道を斷念して、一時なりとも其の咒はしい苦しみを忘れる事にのみ努めた。たま／＼恐怖の發作を感ずると、夜中でも晝間でも往來のまん中でも電車の室內でも、彼は蒼惶として酒を呷つた。どんなに恐ろしい刹那でも、即座に醉つてさへしまへば忽ち神經が鎭靜して、五體の戰きが止まるのであつた。姑息な手段は却つて病勢を募らせると知りながら、彼は目前の慰安の爲めに將來を顧慮する暇がなかつた。

　酒さへ飲めば恐いことも何もない。――章三郎は次第々々に斯う云ふ迷信に囚はれるやうになつた。その日その日の彼の命を安らけく支へて行く爲めに、酒は飯よりも必要であつた。殊に每晚、寐しなに一定の量を飲まなければ、彼はどうしても寐られなかつた。金があると、彼はウヰスキイの小罎を買つて、外出の際に必ず其れを懷ろに入れて步いた。金がなくなると苦し紛れに、アルコオル分を含んでさへ居るものなら何でも構はず貪り飲んだ。そつと兩親の眼を掠めて、火鉢の抽出しから十錢銀貨を盜み出して、泡盛を買つて來る事もあつた。果ては深夜に臺所の板の間を漁つて、酒しほの德利を喇叭飲みに飲み干したりした。

破る程に烱眼な人であつたなら、定めし冷やかな微笑を浮べて、

「はゝあ、此の病氣はなか〳〵重いが、とても醫者には直せない。君は子供の時分から、あんまり不自然な肉慾に耽つて、靈魂を虐げ過ぎた爲めに、今その報いを受けて居るのだ。僕は君がどんな人間だかよく知つて居る。君は生れつき精神に缺陷があるんだ。君は醫者からも神樣からも見放されたのだ。お氣の毒だが、私の力で君の命を助けてやる譯には行かない。」

と、迷惑さうな顔つきをして宣告を與へるであらう。

しかし、誰よりも明かに自己の病源を自覺して居る章三郎は、わざ〳〵宣告を受ける爲めに醫者の診察を乞ひに行く氣は起らなかつた。彼は自分の病氣に對して、たゞ失望と懊惱とを繰り返すばかりであつた。

「お前の苦しみは天の罰だ。天に逆つて生きて行かうとする人間の、誰でも受けなければならない罰だ。お前のやうな人間が、生意氣にも天に逆つて生きようとすれば、結局狂人になつてしまふのだ。お前はそれでもお前の生活を改めようとしないのか。」

彼は斯う云ふ良心の囁きを聞いた。さうして彼は、此の囁きに向つて答へた。――

「誰が己を、天に逆つて生きなければならないやうな人間に生んだのだ。善に對して眞劍になれず、美しき惡業に對してのみ眞劍になれるやうな、奇態な性癖を己に生みつけたのは誰なのだ。己は己の背德について、天罰を受ける覺えはない！」

彼はいかにもして此の不當なる天罰に反抗しなければならなかつた。神が打ちおろす懲らしめの笞を

「己はいつ死ぬか分らない。いつ何時、頓死するか分らない。」

さう考へると章三郎は、立つても居ても溜らないほど恐ろしくなる折があつた。死に對する恐怖から彼はあらゆる急激な病氣に對して過敏になつた。腦充血、腦溢血、心臓麻痺、……それ等の禍が、今にも自分の身に振りかゝつて、一瞬間に五體が痺れてしまひさうな心地のする事が、日に五六度も彼に起つた。往來を歩いて居ると不意に胸が痛くなつて、夢中で五六町駈け出したり、電車の中でカッと頭が上氣して、あたふたと表へ飛び降りたり、夜中に布團を撥ね返して、梯子段を轉げるやうに馳せ降りて、水道の水を顔にぶつかけたり、恐怖は殆んど章三郎を發狂させねば置かない程に昂奮させた。彼は眞青になつて頭と胸とを抱へながら、一と晩中ぶるぶる顫へて居ることがあつた。さうして朝の日光を見てから、始めて安心したやうに晝近くまでぐつすりと睡つた。

彼はこの辛辣な病魔の毒手を、誰に訴へて如何なる方法で驅逐す可きかを知らなかつた。少くとも彼の病氣は、世に有りふれた醫藥の力で治癒しさうには思はれなかつた。

「どうか先生助けて下さい。僕は恐ろしくつて仕様がないんです。僕は今にも死にさうなんです。」

かう云づて、絶望の叫びを擧げたところで、醫者には多分手のつけやうがないであらう。

「何がそんなに恐ろしいんだ。君の體は何處も惡くはないやうだぜ。死にはしないから大丈夫だよ。まあ〳〵安心して居給へ。」

と、彼は空しく手を束ねて、口の先で章三郎を慰撫するぐらゐが關の山であらう。

若し又その醫者が非常に炯眼な、――單に肉體の疾病ばかりでなく、肉體の奥に潜む魂の疾病迄も見

の才能を研かうとはせず、暇さへあれば安逸を貪り、猜疑と饒舌と飲酒と漁色とに耽つて居た。彼は母よりも一層懶惰で、虚榮家で、父よりも亦無氣力な、薄志弱行な男であつた。此の儘ぐづぐづして居れば、彼も兩親と同じやうな、慘澹たる運命に陥る事は必然であつた。必然どころか、彼は現在その運命に刻一刻と陥りつゝあるやうに感ぜられた。えらくなるなら、今のうちにえらくなつてしまはなければならない。

「己は今のうちにどうかしなければならない。」

章三郎は愕然として、心を焦立てる折があつた。俄かに元氣を振ひ起して、上野や大學の圖書館へ籠居したり、机の上に原稿用紙を擴げたまゝ、ペンを握つて二日も三日も考へ込んだりした。しかし、不幸にも彼の頭は長い間の放埒に狎れて、石ころのやうに鈍く懶くなつて居た。本を讀んでも原稿を書いても、彼の心は物の五分と一つ所に凝集されて居なかつた。たつた今、机に向つて何かやり始めたかと思ふと、いつしか彼は茫然として、女の事や美酒の匂や、恐ろしく病的な、荒唐無稽な歡樂の數々を、取り止めもなく胸に描いて居た。彼は覺めながら夢を見て居るも同然であつた。寐て居る時と起きて居る時との區別なく、奇怪極まる妖女の舞踏や、血だらけな犯罪の光景や、不思議な魔術師の舞臺などが、阿片やハシイシュを飲む迄もなく、彼の眼の前に始終變幻出沒した。

彼の心の働きが弛むと同時に、彼の神經衰弱はます〳〵募るばかりであつた。度忘れや獨語や癇癪や意地つ張りや、そんな徴候が一日のうちに、交々起つて彼を惱ました。鈴木が死んで以來、彼の腦髓に巣を喰つた强迫觀念は、日を經るに隨つてだん〳〵猛烈に彼の神經を脅かした。

うとは思つて居なかつたんだから。」

と、口を尖らせて横を向いてしまふ。

父親はよんどころなしに、夕方勤め先から歸つて來ると、自ら襷がけになつて勝手口で米を研いだ。朝は母親を初め伜や娘の寢て居る刻限に床を離れて、へつついの前で火吹き竹を吹きながら、火を焚きつけた。さうして彼が釜の飯をお鉢に移して、味噌汁を沸き立たせた時分に、やうやう母は大儀らしく蒲團を這ひ出して來るのであつた。此れだけの勞役を濟ませてから、父は急いで朝飯を喰つて、どうかすると辨當箱まで自分で詰めて、あたふたと主人の店まで出かけて行つた。店と云ふのは越前堀の運送屋で四五年以來彼は其處の通ひ番頭を務めて居るのである。

かうして親父もお袋も、ひたすら目前の無事を願ひつゝ、苦しく情けなく一生を終らうとするやうであつた。夫は妻を制御する力がなく、妻は夫を激勵する決心がなく、互ひに現在の境遇から逃れ出る道を講じなかつた。彼等は毎日己れの不運をかこちながら、猶且醜い生を續けて、奮發しようとも自殺しようともしなかつた。

「生活難と云ふものは此れ程凄じいものだらうか。食ふに困らずに生きて行くと云ふには、斯くまでむづかしいものだらうか。自分も今に世の中へ出て、此の兩親と同じ苦患を受けなければならないのか。」

一家の樣子を目擊するにつけても、章三郎は自分の將來が案ぜられた。彼は平生、母の我が儘と父の無氣力を卑しんで居るにも拘らず、自分もやつぱり此の兩親の息子と生れて、立派に彼等の弱點を受け繼いで居る事を、否む譯には行かなかつた。「自分には優秀な才能がある。」さう信じながら、彼は一向そ

うだから、默つて辛抱して居るけれど、臺所から病人の世話まで私一人に預けられちや、ほんとにほんとにやり切れやしない。何かと云ふと貧乏だから仕方がないつて、人に苦勞をさせる事ばかり考へて居る。」――と、面を膨らせて、例の口癖の嫌味を並べるのを、父は大人しく腕組みをしたまゝ、唯徒らに溜息をついて聞き流した。彼はもう、いつ迄立つても昔のやうな了見で居る母親の、我が儘と贅澤とに愛憎を盡かして居るらしかつた。

「あんなに夫婦喧嘩をするなら、一層今迄に離縁をしちまへばよかつたのだ。あのお袋にあの父親では此れから益々貧乏して行くばかりである。」

と、傍で見て居る章三郎は、滑稽なやうな不憫なやうな心地がした。公平な彼の眼で觀察すれば、必ずしも父親の無能ばかりが母を今日の窮境に導いたのではない。父親の身になつたら、母に向つて「お前が惡いから己まで貧乏してしまつた。」と、嘸かし不平を云ひたいであらう。それを堪へて居るだけに父親の方が實際はいくらか母より賢いのかも分らない。

「臺所から病人の世話まで、私一人でやつて居る。」と、母は頻りに愚痴をこぼすが、其の實彼女は横着で怠け者で、一家の主婦たる資格もなければ覺悟もなかつた。まだお富が達者で居る時分から、彼女は一遍でも自分で朝飯を焚いた事がない。焚かないと云ふよりは焚き方を知らないのである。

「一家の女房が、飯を焚かないで濟むと思ふのか。」

親父にかう云はれると、彼女は必ず不服らしい顏つきをして、

「どうせ私にやあー、器用な眞似は出來やしないさ。こんな貧乏な境涯に落ちてお飯焚きまでさせられよ

母親の跡に附いて降りようとした父親は、章三郎の横着な姿が眼に這入ると、默つて其處を通る譯には行かなかつた。

「可哀さうな親父だ。女房には攻められるし、伜には馬鹿にされるし、娘には死なれてしまふ。何と云ふ不仕合はせな年寄りであらう。」

さう思つて空寢をして居た章三郎は、いつものやうに臀つぺたを蹴られる途端に、忽ち何處かへ同情心をなくしてしまつた。寐て居る伜と蹴つて居る父親とは、暫く根競べをして爭つて居たが、たま〳〵父親の生暖かい足の蹠が、拍子で章三郎の股の肉へ粘り着くと、その肌觸りが何とも云へず薄氣味の惡い、ぞつとするやうな心持ちを起させるので、とうとう伜は溜らなくなつて首を擡げた。

「午寢をするんぢやねえつて云ふのに、なぜ手前はさうなんだらう。ほんたうにづうづうしい野郎だ。」

父親は息の切れさうな聲で罵りながら、執念深く睨み付けたが、まだそれだけでは腹が癒えないのか、

「午寐をして居る隙があるなら、芳川さんへ行つてお富の藥を貰つて來ねえ。夕方飲むのがねえんだから、此れから直ぐに取りに行きねえ。手前なんざあ、妹が病氣で寐て居るのに、何一つ手傳ひもしやがらねえ。」

「自分だつて父親の癖に一文だつて、伜の學費を助けた事がありはしねえ。……」

章三郎は心の中で親父の句調を眞似ながら、交ぜつ返すやうに云つた。

父と母とは其の明くる日も二階へ上つて、前の日と同じやうな爭論に泣いたり怒つたり叱つたりした。病院へ入れる事が出來ないなら、看護婦か女中なりとも雇つて欲しいと母が云つた。「お富が可哀さ

説き諭した。

「芳川さんなら小いさな時分からお富の體を見て居るんだから、生じの醫者にかゝるよりいくら確かだか知れやしねえ。たとへどんな博士に見せたつて、とても助かりつこはねえつて、あの人が斷言してるんだから、よく〳〵お富に運がねえんだ。そりや、贅澤を云つた日にやあ、大學病院へ入れるとか、青山さんに見て貰ふとか際限のねえ話だけれど、さうしたところがつまりはまあ、助からねえと知りながら氣休めの爲めに金を使つて見るだけの事で、貧乏人が無理算段をして迄も、眞似をするにや及ばねえ事なんだ。」

その時階下の病室で、「かあちやん、かあちやん」と呼び立てるお富の聲が聞えると、母は據ん所なく談判を切り上げて、

「あいよ、あいよ、今かあちやんは下に行くよ。」

と云ひながら、あはてゝ眼の縁の涙を拭いた。

「それ、それ、又己たちが二階に居るとお富が氣にするから、早く下へ行つてやりねえつて事よ。泣きツ面なんぞしなさんなよ見つともねえ!」

「かあちやん、かあちやんてば! みんな二階へ行つちまつちやあ、あたいが淋しいぢやないの。」

「あいよ、あいよ、今行きますよ。」

梯子段を降りて行く母は、まだシクシクと鼻を鳴らして居た。

「やい章三郎、また午寐なんぞして居やがる! 起きねえか此れ、起きねえかつたら。」

から荒々しく云ひかけた父親は、急に、或る忌まはしい、不祥な事件を目前に見るやうな陰鬱な眼を光らせて、一段と聲をひそめた。

「それにお前、助かるものなら其りや借金をして迄も入院させるてぇ法もあるが、どの路助からねぇと極まつたものを、それ程迄にしたところで結局無駄な話だあな。何しろ彼の容態ぢやあ入梅明けまで持つかどうだか分らねぇつて、醫者がさう云つて居る位なんだから、可哀さうでも今更仕様がありやあしねえ。……まあ／＼其れも此れも、みんな彼の子の壽命だと思つてあきらめるのよ。」

やさしい調子で宥め賺されると、母はだゞつ子のやうに冠を振つた。

「助からないにしたところが、せめて病院へでも入れてやつて、いゝお醫者に見せてやらなけりや私やあきらめが附きやしない。……河村の照ちやんが死ぬ時だつて、ちやんと日本橋へ話をして、順天堂へ入れて貰つたぢやありませんか。助からないから放つて置くなんて、あなたのやうなそんな、不人情な親が何處の國にあるもんぢやない。……」

「誰が放つて置くと云つたい？放つて置きやあしねぇぢやねぇか。毎日／＼芳川さんに見て貰つて、出來るだけの手當ては盡してあるんだ。」

「芳川の藪醫者なんぞに何が分るもんか。……」

「馬鹿な事を云へ！あれだつて立派な醫學士で、此の近所ぢやあ相當に信用のあるお醫者なんだ！手前見たいに分らねぇ奴はありやしねえ。」

父親はかつとなつて怒鳴り付けたが、それでも母親が哀れになつたのか、直ぐ又句調を柔げて諄々と

四

降りつゞいた入梅の空が、夕方から綺麗に晴れて、二階の部屋には西日がきら〳〵とさし込んで居た。例の如く大の字なりに倒れたまゝ、體中にびつしより汗を掻いて、午睡を貪ぼつて居た章三郎は、ふと、梯子段にみし〳〵と云ふ足音が聞えたので眼を覺ました。

「そりや己だつて、病院へ入れてやりてえ事はやりてえけれど、金がねえものは仕様がねえやな。」

皺嗄れた聲で、囁くやうに云ひながら、章三郎の臥て居る部屋へ這入つて來たのは父親である。その後から母親が、正體もなく涙にくれて、おい〳〵としやくり上げつゝ上つて來た。

「はゝあ、又何かお袋が親父を口說いて居るのだな。」

と、章三郎は寢惚けながらぼんやりと考へついた。いつも病人に聞かせられない相談があると、父と母とはこつそり二階へやつて來て、ひそ〳〵耳打ちを交すのである。

「だから日本橋へ話をして、賴んで見たらいゝぢやないか。人間一人が助かるか助からないの境だものを、入院ぐらゐさせてやらなけりや、あんまり親が無慈悲だつて云はれたつて仕方がありやしない。」

母は十七八の娘のやうな、甘つたるい鼻聲を出して、いぢらしさうに袂を嚙みつゝ消え入る如く忍び音に泣いた。たつた一人の娘を失ふ悲しさに、彼の女の頭は混亂して後先の分別もなくなつて居た。

「おきにお前はそんな事を云ふ。無慈悲な事が何處にあるんだ。己たちだつてお富の爲めには出來るだけの事をしてやつて居るんぢやねえか。」

着するのであつた。

明くる日の午前十時に、鈴木の遺骸は灰になつて、小いさな、人間の骨が這入り切るとは思はれない程小いさな瓶に詰められて、上野のステエシヨンから郷里へ運ばれた。見送りの學生が五十人近くも集まつて、プラットフオオムの列車の窓の前に立つた。

「生前は悴がいろ〳〵と御世話樣になりまして有り難うございます。今日は又遠方の所をわざ〳〵御見送り下さいまして、何とも甚だ恐縮に存じます。」

鈴木の父は田舍風の、律義な辯舌で一々學生に禮を云つて歩いた。美しいと云はれた故人の妹も、父の後ろに從つてしとやかに頭を下げた。

章三郎も外の學生と同じやうに、父と妹から丁重な挨拶を受けた。「悴が生前御世話樣になりまして……」かう云はれた時、彼は普通に、「どう致しまして」と、答へただけでは濟まないやうな心地がした。「……いゝ私こそ」と附け加へて、彼はちらりと例の小いさな瓶の方を、きまりが惡さうに流眄に見た。

五十人の學生の中には、往來で會つたら胸ぐらを取られるかと案じて居た程、章三郎が不義理を重ねた人々も交つて居た。しかし孰れも故人の靈に敬意を表して、彼の面皮を剝いでやらうとする者はなかつた。彼は俄かに晴天白日の身になつたかと感ぜられた。故人は死んだ後までも、章三郎に惠みを垂れて居るらしかつた。

博愛とか、孝行とか、友情とか云ふ道德的のセンチイメントを全然缺いて居るのみならず、さう云ふ情操を感じ得る他人の心理をも解する事が出來なかつた。

けれども彼は、必ずしも世間の所謂「人間嫌ひ」――"Misanthropist" ではない。彼は人間を馬鹿にしながらも、彼等と一緒に酒を飮んだり、女を買つたり、冗談を云つたりする事は好きであつた。十日も二十日も友達の顏を見ずに居ると、淋しくて淋しくて溜らなかつた。彼の胸の中には、閑寂な孤獨生活に憧れる冥想的な心持ちと、花やかな饗宴の灯を戀ひ慕ふ幇間的な根性とが、常に交互に起つて居た。友達の金を借り倒して、世間へ顏向けが出來なくなると、彼は暫く韜晦して八丁堀の二階に屏息したり、漂浪の旅に上つたりする。さう云ふ時に彼は自分を非常に偉大な人物であるかの如く己惚れる。やがて借金が時効にかゝつて、いつとはなしに不評判のほとぼりがさめてしまふと、急にNだのOだのに會ひたくなつて、のこのこと彼等の下宿へ遊びに出掛け、耻も外聞もなく牛鍋の御馳走をせびつたり、藝者買ひの招伴にあづかつたりする。斯くて友人から「瓢輕者」と呼ばれ、「呑氣な男」「警句屋」などゝ歌はれて、酒宴の席にはなくてならない藝人のやうに重寶がられるのが、彼には愉快で溜らないのである。それ故彼と友人との間柄は、結局「酒飮み友達」の程度に止まつて居た。たまたま章三郎の人格を買ひ被つて、向うから親交を求めて來る友人があると、却つて章三郎は迷惑をした。彼の友達に對する註文を露骨に表白してしまへば、「どうせ自分は利己主義な、不信用極まる性格なのだから、それを嫌だと思ふ人は寧ろ附き合つてくれぬがいゝ。しかしずぼらな代りには、話が上手でなかなか可愛氣があるのだから、それを面白いと思ふ人は、不信用を承知の上で附き合つて貰ひたい。」――斯う云ふ事に歸

何か眞劍な或る物が潜んで居るには違ひない。けれども其れは、將來彼の天才が成熟した時に、詩とか小說とか繪畫とか云ふ藝術の形式に依て、發表される場合があるかも知れないが、到底箇々の人間に舌の先でしやべり聽かす可き物ではなかつた。彼は自分の胸底に燃えて居る藝術上の欲求を、常におぼろげに意識しながら、さて友達の顏を見ると、卑しい下らない惡ふざけの冗談より外話をする氣にならなかつた。一と度び他人に接すると、彼の頭の深い所に渦卷いて居る貴い物が光を失つて、極く上つ面の、輕薄な、嘘つきな、穢しい方面ばかりが活動した。其の時になると、彼は自分でも自分を劣等な人間であると思ひ込み、男子としての自尊心や廉恥心までなくしてしまふのであつた。

「友達に限らず、自分以外の人間と云ふ者は、自分に對してそんなに强い影響や感化を及ぼし得るものではない。自分と彼等とは何處迄行つても、たゞ表面の、いゝ加減な接觸を續けるだけに過ぎないのだ。自分は彼等の幸福を祈らうとも思はなければ、彼等に依つて自分をえらくしようとも考へない。彼等の社會から畏敬されたり、信頼されたりする事が、どれだけ己の眞價に關係するだらう。どれだけ己の藝術的天分を裨益するだらう。」

章三郎は世の中の人間――友達に對して、此れ以上の親しみを抱く譯に行かなかつた。人間と人間との間に成り立つ關係のうちで、彼に唯一の重要なものは戀愛だけであつた。其の戀愛も或る美しい女の肉體を喝仰するので、美衣を纏ひ美食を喰ふのと同樣な官能の快樂に過ぎないのであるから、決して相手の人格、相手の精神を愛の標的とするのではない。たとへ彼が戀愛に溺れて命を捨てる事があつても、それは恐らく、戀人のためよりも自己の歡樂の爲めに獻身的になるのであらう。隨つて彼は親切とか、

「そら始まつた、飯の催促が。――どうせ己たちも飯前だから、默つて居ても喰はせてやるよ。そんな哀れつぽい顔をしないでもいゝぢやないか。」

「喰はせてくれたつて、下宿屋の飯ぢや有り難くないよ。是非共牛肉を奢つておくれよ。二三日肉を喰はないんで、馬鹿に牛肉が喰ひたいんだ。ついでにビールを飮ませると尙いゝんだがなあ。」

「あはゝゝゝ、贊成々々、己もビールが飮みたくなつた。おいN、あんなに間室が飮みたがつて居るんだから、半ダアスばかり奮發し給へ。」

あまり章三郎の口のきゝやうがおかしいので、SもOも腹を立てるよりは吹き出してしまつた。彼等はだんだん章三郎を侮蔑しつゝ、憎惡する事を忘れて來るやうに見えた。「附き合つて見ると間室の奴も氣のいゝ男だ。なあに彼奴だつて腹からの惡人ではなし、唯もう呑氣でずべらな爲めに信用をなくして居るのだから、考へると可哀さうな人間なんだ。あゝ云ふ男には、此方が始めから金を貸さないやうに用心さへして居れば、面白く附き合つて行けるのだ。」――彼等は章三郎に對して、こんな考へを持たうとして居るやうであつた。

章三郎の方でも亦、彼等から其れ以上の交際をして貰はうとは望んで居なかつた。彼は一體、交友と云ふ事に其れ程大した價値を認めない人間であつた。自分の性格が我が儘で不道德で、頗る非社交的に出來て居る事を知つて居る彼は、生涯自分と意氣相投ずる友人を作らうなどゝは夢にも思はなかつた。彼は第一如何なる他人に對しても、赤誠を吐露して、眞劍に物を云はうとする氣分が起らなかつた。もつと適切に云へば、彼は友達に對して眞劍に交際する必要を感じなかつた。――勿論彼の心の奧にも、

「鈴木の妹を妻君にして間室の妹を妾に持つか。何しろ兄貴が兄貴だから、間室の妹も藝者になつたら定めし辣腕を振ふだらうなあ。あはゝゝゝ。」

と云つて、Sが晴れ晴れしく笑つた。その笑ひ方がひどく無邪氣に響いたので、多少皮肉な言葉だとは感じながら、間室を初めNもOもどつと賑やかに笑ひ崩れた。

「己を揶揄ると云つた彼の憤慨屋のSまでが、己に向つて笑顔を見せるやうになればもう大丈夫だ。死んでしまつた鈴木の噂と、死にかゝつて居る妹の噂と、二つの死靈生靈のお蔭で、好い梅鹽にOもSも己に對する恨みを忘れてしまつたらしい。もう斯うなればしめたものだ。やつぱり人間と云ふ者は、そんなにいつ迄も一つ人を恨んで居る譯には行かないと見える。」

章三郎は三人の友達を計略にかけて、うまうまと丸めてしまつたやうな淡い喜びに唆られた。さうして此の機を外さずに、宴席に侍つた幇間の如く俗惡な駄洒落や身振りを亂發して、散々三人の友達に腹を抱へさせた。

「あはゝゝゝ、久し振りで會つて見ると、相變らず間室は面白い事を云ふなあ。」

お客が藝人を褒める時の口吻で、Sがつくづく感嘆の叫びを發すると、章三郎は忽ち藝人の根性になつて、

「時に僕はまだ晝飯をたべないんだが、ちよいと牛肉でも御馳走しないか。ねえ君、實は先から腹がペコペコになつて居るんだが。……」

かう云つて、恐る恐るNの眼つきを窺ひながら、一種不可思議な、心細さうな聲を出した。

顔に上眼を使ひながら、ガッカリした調子で云つた。

「何だい病氣は？」

と、Oが始めて、打ち解けた聲で章三郎に口をきいた。

「肺病なんだよ。」

かう答へた彼の顔には、一度に重荷を卸したやうな喜びの色が光つて居た。

「いやに君は友達の妹を氣に懸ける癖があるね。」

Nが横間から口を挾んで冷やかし始めた。

「…何しろ間室の妹と云ふのは、兄貴に似合はぬ美人ださうだぜ。肺病なんぞになる女は、大概昔から美人に極まつて居るもんだから、見ないでも樣子は判つて居るさ。年が十六で、生粋の江戸つ子で、おまけになかなか悧巧な娘らしいから、事に依つたら鈴木の妹よりいゝかも知れない。どうだい一つ、お得意の交際術を發揮して間室の所へ見舞ひに行つたら。」

「いくら美人でも肺病は御免蒙むるよ。病氣が直つたら交際術を用ゐるがね。」

「病氣が直れば、僕は妹を藝者にするから、さうしたらOに可愛がつて貰はうか。實際そりやあ好い女だよ。妹の器量を褒めるのもおかしいが、あんな顔だちはちよいと珍しいね。」

章三郎は直ぐと圖に乘つて、こんな出鱈目をしやべり立てた。骨と皮ばかりに痩せ衰へて居る妹を、彼は今迄一遍も「珍しい器量」だとか「藝者にする」とか考へた覺えはない筈である。彼は此の際、何でも一座の興がるやうな話を持ち掛けて、自分に對する友達の反感を早く忘れさせてしまひたかつた。

いつも女の話になると恐ろしく元氣附いて、誰より先にべらべらとしやべり出さずには居られない章三郎は、さすがに競爭の仲間に加はる資格がないと考へたのか、口をむづむづやらせながら、默つて三人の話を聞いて居た。單に人格が下劣なばかりでなく、境遇から云つても、章三郎は到底鈴木の妹などと結婚の出來る身分ではない。乞食にも等しい裏店の娘でなければ、彼の所へ嫁に來る女は居さうもない。さう思ふと、彼は三人の富裕な身の上が羨ましかつた。冗談にもせよ、鈴木のやうな田舍の豪家の令嬢を妻に持つて、樂しい家庭を作らうなどゝ云ふ、甘い空想に耽つて居られる友達の地位が妬ましかつた。自分だつて、OやNやSのやうに相應な財産のある家へ生れ、何不自由なく學問を修めて行くことが出來たなら、こんな卑しい品性にはならなかつたらう。自分だつて素封家の息子であつたなら、恐らく友達から忌憚され輕蔑されるやうな人間にはならなかつたらう。彼等に對して自分が持つて居る弱點の原因は、悉く金の問題に歸着するのである。金さへあれば、學識の廣さでも頭腦の鋭さでも、自分は決して彼等に劣つて居るのではない。況んや自分には、彼等の到底企及し難い藝術上の天才がある。

「今に見ろ、己は貴樣たちに擯斥されながら、えらい仕事をして見せるから。」――

いつの間にか章三郎はむッつりと鬱ぎ込んでしまつたが、其の様子を氣の毒だと看て取つたのか、Nが俄かに話頭を轉じて、慰めるやうに云つた。

「妹と云へば君の妹も長い間煩つて居るさうぢやないか。どうだい、ちつとはいゝ方なのかい。」

「いや駄目だ。とても助からないんだ。もう長い事はあるまい。」

妹の話で漸う息を吹き返した章三郎は、わざと心配らしい表情を浮べて、憐れみを乞ふが如く三人の

「まあ待てよ、己ゃ事に依つたら田舍まで行かうか知ら。」

Oが突然据わり直して、何事か思ひ付いたやうに云つた。

「君が田舍へ行くと云ふのは、外に野心があるんだらう。今朝も火葬場で鈴木の妹を掴まへて、いやにお世辭を云つてたからな。あゝ云ふところは君もなか〳〵交際家だよ。」

Nに斯う云はれると、Oはにこにこ笑ひながら、

「……しかしあの妹はいゝ器量だなあ。鈴木が生きて居る時分に、妹の噂は聞いて居たけれど、あんな綺麗な女だとは思はなかつたよ。あの女が白絽の紋附きを着て、眼を泣き腫らしがなら葬式に列なるところを、實はちよいと見たいんだがね。」

「そんなに好ければ、鈴木の生きて居る時分に話を持ち込んで、君の妻君に貰ふところだつたな。君なら鈴木の兩親だつて、きつと嫌だとは云はなかつたぜ。」

「ほんとに惜しい事をしたなあ。」

Oは半分本氣になつて、少し殘念さうに云つた。

「だが今からでも遲くはないさ。死んだ兄貴の親友だつて云へば、向うの內でも我れ我れを信用するからな。……さうなると己ゃ田舍へ出掛けて、大いに君と競爭するぜ。」

「さうするさ、さうするさ、鈴木の妹を取りつこする氣で、二人とも一緒に田舍へ行くさ。たつた一人で總代にやられた日には、汽車の中が退屈で仕樣がないよ。」

Sが斯う云つて、機嫌よく笑つた。

嘗て章三郎を揶ると稱した法科のSが、熱心な、眞面目な句調で云つた。

「……どうせ行く積りで居たのだから、總代になるならなつていゝが、然し君たちも行つたらいゝぢやないか。東京から一人でも多く行つた方が、鈴木の内だつてきつと喜ぶだらうと思ふ。さうし給へ。其の方がいゝよ。」

こんな話をして居る所へ、二た月以來一同に姿を見せなかつた章三郎が、尤もらしい表情を浮べて遠慮がちに這入つて來た。痼癖の强いSは、ちよいと不快な面色をして瞳を外らせた。

「やあ失敬、どうも暫く……」

かう云つて、學生仲間の作法としては聊か鄭寧過ぎる程度に頭をさげながら、妙に萎(しな)れた顔つきで章三郎が挨拶をすると、臥ころんで居た人々は不承無精に起き返つて、默つて會釋した。「どうも暫く……」と云ふ彼の一言のうちには、單に久濶を詫びるばかりでなく、此の間からの不正な行爲を謝罪する意味も含まれて居た。少くとも章三郎は、其れを含ませて居る積りであつた。さうして一同が、いやいやながらも自分に禮を返した事から、彼は其の罪が暗々のうちに許されたものと解したかつた。

「きのふ君の所へ電報を打つたつけが、屆いたらうね。」

と、しらけた一坐を取りなすやうにNが云つた。

「あゝ有り難う。今日は君の所へ樣子を聞きに來たんだが、葬式はいつになつたんだい。」

「葬式は田舍でやるんだから、Sが總代で行く事にして、僕等は停車場まで骨を見送りに行かうと思ふんだ。明日の午前十時だから、それまでに上野のステエションへやつて來るさ。」

共の約束を履行して、Nから電報を打つて寄越したのである。

「とうたう死んでしまつたのか、己の友達で且債権者であつた一人が、とうたう死んでしまつたのか。」

さう思ふ事が不人情であると知りつゝ、彼は内々胸の奥で私語する事を禁じ得なかつた。亡友に對する哀悼よりも、寢覺めの惡い自己の幸運を、不思議がる心が先に立つた。

三

本郷森川町の下宿屋の、Nの部屋には大學の制服を着けた四五人の友達が集まつて居た。彼等は昨日死んだ鈴木の遺骸を、國元から上京した故人の家族の人々と一緒に、今朝日暮里の火葬場まで送り届けて、ちやうど日中の暑い盛りに空き腹を堪へながら歸つて來たところであつた。いづれも連日の氣苦勞に窶れて、直ぐには飯を喰ふ元氣もなささうにぐつたりと倒れて居た。

「あゝ、くたびれた、くたびれた。かう暑くつちや己も死にさうだ。……」

と、制服の上着を脱いで、顏にハンケチを蓋せたまゝ仰向きに臥ころんで居る工科のOが、睡たげな聲で云つた。

「明日の朝は何時の汽車だつけなあ。事に依つたら、停車場だけで僕は御免を蒙むるぜ。此の同勢が揃つて田舍まで押し掛けた日には、向うだつて迷惑だらうから、誰か總代になつたらどうだい。」

Nが兩肌を袒いで、脇の下の汗を拭きながら云つた。

「己は田舍まで行く積りだ。」

たものとして、俄かに病人を九天の高さに押し上げ、さながら彼を非凡な人格者、神と人との仲立ちになる不思議な智慧者の如くに尊敬する。――此の荘嚴な、息の詰まるやうな恐ろしい光景が、ありありと章三郎の胸に描かれた。彼はまた、熱に浮かされて呻吟して居る病人の、頭の中を想像して見た。生死の境を往復する朦朧とした意識の面に、泡の如く消えては結ぶ幻像のきれ〴〵には、果してどんな物が現はれるであらう。未だに病人は、借り倒された金の恨みを忘れずに居るであらうか。「間室は憎い奴だ。とうたう己を欺しやあがつた。己は死んでも彼奴から金を取返してやる。」などゝ譫言を吐きはしないか。――さう考へると章三郎は竦然とした。若し病人にそんな譫言を云はれるくらゐなら、自分は金を返して置けばよかつたと思つた。

自分勝手な章三郎は、古い諺にある「人の將に死なんとする時、その言や善し。」と云ふ格言を覺えて居た。まして平生寛宏の君子を以て通つて居た鈴木が、臨終の間際まで、章三郎の背信を根に持つて居る筈はなからう。鈴木はきつと、些々たる友人の罪の行爲を淨く潔く許してくれる事であらう。

「間室と云ふ男も哀れなものだ。あれが彼奴の病氣なのだから仕方がない。」

かう云つて、憫笑しながら死んでくれるだらう。――兎に角章三郎は、病人が聖者のやうな廓落たる心境に到達して、氣高く美しく死んでくれる事を、病人の爲めにも自分の爲めにも祈らずには居れなかつた。

「見舞ひに行くのは嫌だけれど、若しも鈴木が死んだら敎へてくれ給へ。僕も葬ひには顔を出すから。」

と、かね〴〵彼はNに賴んで置いた。

も自然と消滅する譯だ。なんとお前は仕合はせぢやないか。」

意地の惡い運命の神が、斯う云つて自分を揶揄して居るやうに彼は感じた。

「友達の金ぐらゐ借倒したつて、どうにかうまく解決がつくだらう。」

と、章三郎がたかを括つて居た通り、いかにもうまく解決がついてしまつたのである。彼の爲めには餘りにうま過ぎて、相手の爲めには餘りに氣の毒な解決ではあるけれど、しかし鈴木が生きて居て、章三郎が容易に債務を果たさないで四方八方から攻撃されるより、どんなに增しだか分らない。鈴木が可哀さうであると同時に、章三郎は何と云つても幸運であつた。

彼は八丁堀の二階に臥そべつて、初夏の空を仰ぎながら、今病院で死にかゝつて居る病人のことを、時々ぼんやりと考へて見た。自分が見舞ひに行かないでも、目擊して來たNの話で大概想像する事が出來た。——生き生きとした赭ら顏の、ところどころに皰の出來て居た丈夫らしい鈴木の容貌が、傷々しく痩せ虐げられて、眼が淺ましく落ち窪んで、靜かに默々と寢臺の上に仰向ひて居る。青白い額と、微かに生きて居る心臟の上とに、重苦しさうな氷囊が載せられて、熱に渴いた唇の端へ絕えず看護婦が葡萄酒の液をしたゝらせる。室內には怪しい藥の臭氣が充ちて、病人を圍繞する近親の人々は、刻々に迫る不祥な事件の豫感に脅やかされたやうに、床を覗詰めて口を噤んで、たまたま部屋を出るにもそつと爪先を立てゝ步く。其處に來合はせて居る凡べての見舞客は、病人の父でも母でも、兄弟でも友人でも、誰云ふとなく、今更のやうに病人が偉い人物であつた事を想ひ出す。われわれ凡夫には容易に窺ふことの出來ない、靈魂や「死」の秘密が、今や此處に居る病人にのみ開かれ

遍見舞ひに行つたらいゝぢやないか。」

　章三郎はNに會ふ毎に斯う云はれた。

「行きたいけれど、移ると恐いから僕は止すよ。僕も心臟が弱いんだから。」

　彼もほんたうに心臟が弱かつた。それでなくてもチブスの流行を神經に病んで、いつ何時取憑かれるかも分らないと云ふ强迫觀念が、惡夢のやうに彼を惱まして居る折柄であつた。

「僕なんぞも、あんまり度び度び見舞ひに行つたんで、感染してるかも知れないと思ふよ。あの鹽梅ぢや鈴木はとても助からない。先づ死ぬだらう。」

「そんな事を云ふもんぢやない。若し云ひ中てると氣味が惡い。……」

　章三郎は妙に昂奮して、急いでNの言葉を打ち消した。

「あの鈴木が、此の間まで我れ我れ同樣に達者であつた青年の鈴木が、もう直き此の世から居なくならうとして居る。」——

　さう考へると、不斷は無意味に發音して居た「死」と云ふ名詞が、俄かに千鈞の重みを以て、暗く物凄く心の上に蓋さつて來るやうであつた。「先づ死ぬだらう。」と、何の氣なしに口走つたNの言葉が一種異樣な響きを含んで、「死」其の物のやうな黑い陰を章三郎の胸に投げた。

　Nはそれきり五圓の催促を云ひ出さなかつた。二人とも其れを覺えて居ながら、口へ出さずに濟まして居るのが、何となく章三郎には滑稽で、間が惡かつた。

「いつ迄立つてもお前が債務を果たさないから、鈴木がとうたう死ぬ事になつた。此れでお前の不信用

らしたが、四五日後には再びのことNの家へやつて行つた。

「實は君、少し都合が惡くつてまだ鈴木には返さないだんが、ちよいと遊びに來たんだよ。」

章三郎は云はれない先に頭を掻いて、あはてゝこんな辯解をした。普通の人なら耻かしいと感ずる事を、平氣でしやべつて笑つて居られるづうづうしさに、彼は我ながら愛憎が盡きた。自分の心には確かに犯罪者の素質があつて、場合に依れば、如何なる惡事をも敢行する可能性があるやうに思はれた。

「大方そんな事だらうと思つて居た。外の人ならいゝけれど、鈴木はあの通り正直な人間で、全くあてにしてるんだから返してやらないぢや氣の毒だぜ。」

「あゝ大丈夫、今度こそ二三日うちにきつと返す。」

「また君の「二三日うち」か！返さなけりやあSをけしかけて擲らせるぜほんたうに！」

章三郎が平氣な顔で言ひ譯をすると、Nも平氣で叱言を浴びせた。二人は常に同じ文句を云ひ合ひながら、その後幾度ゝ往復したが、五圓の金はなか〳〵鈴木の手へ戻らなかつた。

すると、五月の月はなに惡性の腸チブスが流行して、鈴木はとうたう共れに感染してしまつた。彼は平生から非常に衛生を重んずる方で、健康らしい體格を持つて居たけれど、不運な事には心臓の弱い質であつた。

「何しろ熱が高いから、心臓へ來なければいゝがなあ。」

鈴木がいよ〳〵病院へ送り込まれる時、見舞ひに行つた友達は、皆斯う云つて眉を顰らせた。

「おい、鈴木がます〳〵惡いやうだぜ。もう絲のやうに痩せちまつて見る影もなくなつて居る。君も一

Nは章三郎に向つて、こんな苦言を平氣で語り得る程の仲であつた。

「あゝ、二三日うちに返しに行くよ。」明後日か明後々日キット返しに行くからつて、鈴木に會つたらさう云つて置いてくれ給へ。何も初めッから返さない積りぢやないんだから…‥」

不意を打たれて章三郎はドギマギしながら、憫れみを乞ふやうな卑しい表情を顏に浮べた。

「返す積りなら何とか返事をやつて置くがいゝぢやないか。何度手紙を出したつて、うんともすんとも云つて來ないつて、鈴木が大分怒つて居たぜ。君は近頃ほんとに惡い癖が附いたね。Sなんぞはひどく憤慨して、是非とも一遍君を擲る氣で居るさうだから、用心しないと大變だよ。擲られた方が君の爲めには却つて藥になるかも知れないが…‥」

「もう分つたよ、分つたよ。自分でも惡いと思つて居るのに、あんまり云はれると厭アな氣持ちがして來るから、もう其の話は止してくれ給へ、明後日返すと云つてるのだからいゝぢやないか。」

「ほんとに明後日返すのかい。君の云ふ事はあてにならないから、鈴木の方へは何とも云はずに置くとしよう。だから明後日返せなくなつても、僕の所へは遠慮をせずに遊びに來たまへ。時々君の顏を見ないと僕も何だか淋しいからね。」

「なあに返すよ、きつと返すよ。」

と、章三郎は珍しく本氣になつて云ひ張つた。彼は必ず、明後日までに五圓の金を調達しようと、心に誓つた。

しかし明後日の當日が來ると、彼はいつしか心の誓ひをケロリと忘れて、終日二階で講釋本を讀み暮

なつて附き合つて居るがね。恐らく間室が平氣な顏で遊びに來られるのは、僕の所ぐらゐなもんだらう。人間と云ふ者は、あんまり懇意になり過ぎると善人だか惡人だか分らなくなるよ。」

と、Nが辯解するやうに云つた。

「僕は五圓の金なんぞ惜しくはないけれど、こんな事であの人と絶交するのは氣持ちが惡いから、いつでも都合のいゝ時に返してくれるやうに、會つたらさう云つてくれ給へな。」

みんなの話を聞き終つてから、鈴木はNに斯う話した。

章三郎は一と月ばかり蹈晦して居たが、其の後さつぱり督促の端書が來ないので、大概鈴木もあきらめたらうと見當を付けた。或る日政治料のNの處へ、彼はひよつこりと姿を現はして、お得意の警句交りの冗談を何喰はぬ顏でしやべり始めた。Nも別段、樣子の變つて居るらしい風はなかつた。いつものやうに章三郎を歡迎して、晩飯に牛鍋と酒を奢つて、夜の更けるまで雜談に興を催した。てつきりNは鈴木の一件を知らないで居るのだ。と、章三郎は內々安堵の胸を撫でて、足もとがよろける程に醉つ拂つた。

Nも同じやうに泥醉して、友達の人物評やら文學上の議論やらを夢中になつて戰はせたが、やがて章三郎が暇を告げて歸らうとすると、玄關口まで送つて來て突然たしなめるやうに云つた。

「さう云へば君、此の間から鈴木が大さう氣を揉んで居るんだぜ。何だか君は、是非とも鈴木に返さなければならない物があるんだつて云ふぢやないか。大した金でもないんだから、何とか都合して早く持つて行つてやり給へな。君はいつでも其の傳をやるから困つちまふなあ。」

内と云ふのは恐ろしく困つて居るんだから。僕も尋ねた事はないけれど、八丁堀の裏長屋だつて話ぢやないか。とてもそんな哀れな所へ、押しかけて行かれたもんぢやないよ。」

かう云つて、Nは不愉快さうに眉を顰めた。尤も彼だけは、章三郎の癇疾を知りつゝ、其れを大目に見逃して此の頃も附き合つて居た。

「いや、實を云ふと僕はあんまり口惜しいから、一遍押しかけて行つたことがあるんだよ。」

と、Oは耻かしさうに云つて、頭を掻いた。

「ちやうど去年の冬だつたがね。……僕は東京をあんまりよく知らないけれども、あんな下町のごたごたした所へ始めて行つたよ。何だか細い路次を幾つも曲つた、ひどく分りにくい裏の奥だつたが、此の長屋で大學へ行く者は間室さんの子息より外にない。」と云つて、近所の人が教へてくれたのでやつと見付かつたのさ。行つて見ると君の云ふ通り、そりやむさくろしい汚い内でね、貧民窟に毛の生へたやうな住居だから、談判する勇氣も起りやしない。おまけに當人が十日ばかり内を明けて居て、年を取つた親父さんがあべこべに子息の居所を僕に尋ねるつて始末なんだから、此方が却つて氣の毒になつて、這ふ／＼の體で逃げて來ちやつた。あれで間室は、自分が年中藝者買ひをして居るやうな事ばかり云つてるが、よくそんな眞似が出來たもんだなあ。」

「勿論うそに極まつて居るさ。藝者買ひどころか、きつと其の日の小遣ひにも困つて居るんだよ。……間室も馬鹿な男ぢやないんだから、あれだけは止めてくれるといゝんだけれど、實際奇妙な男だなあ。時々遠廻しに忠告してやるんだが、會ふと話が面白くつて、いつも呑氣で居るもんだから、つい哀れに

けれども、事實は彼の望むやうには展開しなかつた。豫期した金が屆かないので、ひどく狼狽させられた鈴木は、章三郞をよく知つて居る二三の人に內々事情を訴へて、それとなく間接の催促を依賴した。一高の寄宿舍時代に章三郞と同室であつた法科のSや、工科のOや、政治科のNや、その話を聽かされた人々は、皆一樣に章三郞を卑しみ憎んだ。

「ふうむ、彼奴は君にまでそんな迷惑を掛けて居たのかい。道理で此の頃さつぱり顏を見せないと思つたが、奴さん又そんな事をやつて居たのか。」

と、政治科のNが呆れて云つた。

「僕ん所なんざあ、もう去年から來やしないぜ。――一時は每日のやうにやつて來て、州崎だの吉原だのつて散々僕を引つ張り廻したが、勘定なんか一遍だつて拂つたことはありやしない。殘らず人になすりつけて、おまけに明日返すからつて僕から十五圓借りて行つたきり、幽靈のやうに消えてしまつたんだからなあ。實際間室にやあ馬鹿を見たよ。」

と、工科のOが己れの頓馬を嘲けるやうに、少し滑稽めかせて云つた。

「だが君たちもおかしいぢやないか。間室にそんな事をされて、默つて居るには及ばないぢやないか。此方から彼奴の內へ押しかけて行つて、嚴重に談判したらよささうなもんだ。君たちが行きにくいなら、己が代りに行つてやるぜ。」

と、法科のSは腹に据えかねたやうであつた。

「まあ止した方がいゝだらう。もと〳〵金があるくらゐなら、人を欺しもしないんだが、何でも彼奴の

好い事をした。」と、彼は私かに腹の中で呟いた。

「己は友達をペテンに懸けて、云はゞ他人を瞞着した金で遊んで居るのに、どうしてこんなに面白いんだらう。來週の金曜になれば自分の詐僞が曝露するのに、どうして其れが心配にならないんだらう。恐らく世の中に、自分程道德に對して無神經な人間はあるまい。自分は全體意志が薄弱なばかりでなく、生れつき道德性の麻痺して居る、一種の狂人に違ひあるまい。」

彼は我ながら、己れの精神の病的なのを訝しんで、自分はたしかに氣違ひであると信ぜざるを得なかつた。

約束の金曜日が來る迄に彼は一二度鈴木の下宿へ遊びに行つたが、水曜日からふつつりと姿を消した。金曜日になると彼は一日八丁堀の二階へ蟄居して、小いさくなつて居た。もう其の日から當分の間、學校は勿論本鄕の往來をさへぶらつく譯に行かなかつた。「例の物何卒御願ひ申上候」と云ふ端書が二三度來たけれど、彼は返辭もやらずに居た。返さうと云ふ誠意もなければ能力もない彼は、別段言ひ譯の仕樣もないから、やがて先方が愛憎を盡かすか、あきらめてしまふか、自然とどうやら片の附くまで放つて置いた。

彼は自分を背德狂だとあきらめながら、相手の鈴木の道德を非常に深く信頼して居た。「あの男はそんなにいつ迄も己を恨んで居るやうな、了見の狭い人間ではなからう。欺されたのを憤慨して、己の不信義を友達の間へ云ひふらすやうな、淺はかな根性は持つて居ないだらう。」——彼は鈴木の人格を、自分の都合のいゝやうに解決して、自分の惡事が曖昧に葬られる事を祈つて居た。

「とうたう五圓借り出してしまつた。來週の金曜までに己は此の金を返せるのか知らん。又あの男と、絶交するやうな不愉快な事にならなければいゝが。……己には何と云ふ惡い癖があるのだらう。」

借りると直ぐに章三郎はさう思つた。自分はなぜ、一旦の虚榮心に驅られて金のある風を裝つたり、看す看す返濟のあてのない物を人から借りたりするのであらう。なぜあの時に、鈴木に向つて金を貸せなどと云つたのであらう。なぜあの時に、ぢつと我慢してしまはなかつたらう。――彼は自分の行爲に就いて後悔するよりも、寧ろ自分の性質に固着して居る缺陷を恨みたかつた。

後悔と云へば常に改悛が伴ふ筈である。然るに彼は自分の行爲を批難しつゝも、其れを改めようと云ふ決心にはなれなかつた。改めたいと願つても、到底自分は改められない性分である事を知り拔いて居た。若しも自分が此の間からの出來事に、もう一遍遭遇したなら、自分は必ず同じやうに伊豫紋の會を主張したり、鈴木の金を欺して取つたりするに違ひない。自分の後悔が眞實であるなら、此の際借りた金を使はずに置いて、伊豫紋の會を缺席して、明くる日鈴木に返してしまへば濟むものを、章三郎にはどうしてもさう云ふ了見が起らない。

「鈴木の事は來週の金曜日まで間があるのだ。それまでのうちにはどうにかなるし、ならない所で一と月か二た月きまりの惡い思ひをするだけだ。どうせうやむやに濟んでしまふんだ。――最もまづく行つたとしても、絶交されるだけの話だ。」

斯うあきらめると、彼は忽ち膽が据わつて、少しも氣苦勞が殘らなかつた。それから直ぐに伊豫紋へ驅け付けて、醉つ拂つて藝者を揚げて居るうちに、だんだん面白くて溜らなくなつた。「五圓借りて來て

ちやうど二人共、三丁目の電車の方へ歩いて行くところであつた。彼等は期せずして鋪道の上を並びながら、何か頻りに話し合つて行つた。章三郎は胸の中にある事を云ひ出さうとして、暫く躊躇して居たが、やがて十字路へ來て鈴木が別れを告げようとする時、

「鈴木君、君濟まないが五圓あつたら僕に貸してくれないか。」

と、彼は顔を赤くして云つた。鈴木と自分との、從來の極めて疎遠な關係に想到すると、彼はさすがに鐵面皮な、突飛な自分の行動を耻ぢない譯に行かなかつた。

「さうさねえ、丁度こゝに五圓ある事はあんるだが、……」

人の好い鈴木は、多少相手の氣心(きごころ)を計りかねて、澁面を作りながら云つた。章三郎は「しめた」と思つた。

「貸して上げてもいゝけれど、來週の金曜までに是非共返して貰はないと困る金なんだ。」

「大丈夫だよ君、金曜までにはキット返すよ。」

「それぢや君、間違ひなく返してくれるだらうなあ。若しか返して貰へないと全く困つてしまふんだから。」

鈴木はくれ〴〵も念を押して、五圓の札を章三郎の手に渡した。

「有り難う。來週になれば必ず都合して持つて來るよ。何しろ今日は急だもんだから、奔走して居る隙がなくつてね。——それぢや君、失敬。」

と云つて、彼は上野の廣小路の方へ威勢よく歩み去つた。

連中が寄つてたかつて、章三郎をおだて上げた。

「さうだとも君、一圓や二圓の會ぢやあ、會らしい會は出來やしない。五圓の會費が出せないと云ふなら、出せる者だけが集まつて、七八人で有志の懇親會をやらうぢやないか。會場は君に一任するから、龜淸でも深川亭でも、好きな所を擇んでくれ給へ。」

と、彼等は面白半分に云つた。章三郎の發議に贊成する者も反對する者も、章三郎が五圓の金にも困るやうな貧書生だとは知らなかつた。

「そんなら下谷の伊豫紋にしよう。柳橋はどうも一向不案内だが、下谷となると我れ我れ大學生の繩張りの內だからね。」

章三郎はさもさも道樂者らしい口吻を弄して、會員たちを煙に捲いた。さうしてばたばたと相談を纏めてしまつた。

纏めた事は纏めたものゝ、肝腎の章三郎に五圓の會費が拂へないのは初めから分り切つて居た。立派な口をきゝながら、彼は其の實伊豫紋などへまだ一遍も上つた事はないのである。若し開會の當日までに會費の工面がつけばよし、着かなかつたなら假病を使つて休む迄だと、彼は度胸を極めて居た。すると其の日の夕方に、本鄕の大通りで彼は運よく鈴木に出會（でつくは）した。

「間室君、やあ暫く。」

と、いつもキチンとした制服に制帽を戴いて、今しも大學の正門を出て來た鈴木は、何の氣なしに章三郎と顏を見合はせてにつこり笑つた。考へて見ると、あの時分から鈴木は既に影が薄かつた。

「……人が物を尋ねるのにロクに返辭もしやがらねえ。」

と、相變らずの文句を口の内でぶつぶつ云ひながら、不承無精に梯子段を下りて行つた。

「スヾキ、ケサ九ジ、シンダ」

と云ふ電報を手に持つた儘、章三郎は暫くぼんやりと考へに沈んで居た。鈴木の死は、彼に取つてそんなに意外な報告でもなく、そんなに悲しい事實でもない。彼は唯、自分が鈴木と云ふ學生と懇意になつた事情を想ひ出して、彼の死と云ふ事に一種奇妙な運命の徒(いたづら)を發見する迄であつた。

鈴木は茨木縣の豪農の息子で、當今の學生に珍しい、品行方正の、友情に篤い、頭腦の明晰な男であつた。友人の間に彼ほど德望のある、彼ほど尊敬され愛慕される青年はなかつた。文科に籍を置く章三郎は、高等學校時分に法科の鈴木と深く交はる機會がなかつたが、大學へ這入つた秋の末に、或る日章三郎が五圓の金に困り拔いて居る折であつた。彼は其の晩の午後六時迄に、下谷の伊豫紋で開かれる中學校の同窓會へ、どうしても五圓の會費を調達して出席しなければならなかつた。一體中學の同窓會に伊豫紋は贅澤過ぎるのだけれど、當番幹事にあてられた章三郎が、頻りにそれを首唱して、衆議を排して擇んだのであつた。

「いつも一圓ぐらゐな會費で、鮨や辨當を喰つて居るなんて不景氣ぢやないか。今度は一つ藝者でも上げて盛んに騷ぐとしたらどうだい。なあに君、會費の五圓も奮發すりやあ澤山なんだから。」

こんな意見を彼は得々として述べた。多くの人は迷惑らしい顏つきをしたが、會員の中でもそろそろ道樂の味を覺えかけた金持ちの息子や、少しは幅の利くやうになつた商店の手代や、七八人の生意氣な

振る舞つてやつた。

「起きろつてば起きねえか、こん畜生！」

遂に父親は我慢がし切れなくなつて、邪慳に章三郎の手頸を摑んで、腕が拔ける程引張り上げた。さうして懷から一通の電報を出して、其れを忰の鼻先へ突き付けた。

「……おい、しつかりしねえか、何處からだか知れねえが、お前に電報が來て居るんだ。誰かお前の友達が死んだやうだぜ。」

「ふん」

と、章三郎はそつけない返辭をして、父親の手から電報を受け取つた。彼は友達の死に驚くよりも、先づ第一に自分へ宛てた電報を、勝手に開封した父親の無法が癪に觸つた。尤も其れは今日始めての事ではなく、此の頃彼の所へ來る手紙は、大概父親に封を切られて中味を檢査されるのである。

「一體此りやどんな人なんだ。電報を寄越すくらゐぢやあ、お前餘程懇意にでもして居たのか。」

「そんなに懇意にもしてやしない。」

章三郎はまだぷりぷりと機嫌を惡くして、ぶつきら棒な挨拶をする。

「懇意にしねえ者が、死んだつて電報を寄越す筈はねえぢやあねえか。え、おい、どう云ふ譯なんだ。」

「どう云ふ譯だか知りませんよ。」

「知らねえと云ふ奴があるか。何だ其の言ひ草は？」

父親は譯もなく腹を立てゝ、直ぐに又啗みつくやうな調子になつたが、

た家を嫌ふる盲目的な本能が、常に心の何處か知らに潜んで居て、漂泊の門出に勇む血氣を怯ませた。

「己は生涯、もう此の家へ歸つて來ることが出來ないのだぞ。何處の野の末、山の奥で朽ち果てようとも、己を看病してくれる者はないのだぞ。己はもう、死ぬまで親父の顏を見る事が出來ないのだぞ。子供の時分に己を抱いて寢て、己にお乳を飲ませてくれたお袋にも、もう會ふ時はないのだぞ。」

こゝまで考へを押し詰めて來ると、彼はそゞろに漂浪の心細さを感ずるのであつた。さうして再び、父親といがみ合ふ爲めに八丁堀の陋屋へ舞ひ戻つた。

かほどまでに自分の心を拘束して居る親と云ふものゝ、因縁の深さを知れば知るだけ、彼れは尙更其の因縁を呪ひ且恐れた。頻りに親を疎んじながら、遂に親の手を離れられない自分の意志の弱さを怒つた。

「おい、章三郎、起きねえか、起きねえか。」

父親は猶も連呼しながら、續けざまに彼の臀部を足で蹴飛ばした。

「また晝寐なんぞして居やがる。……それにまあ何だ此の態は！蓄音機でも何でも出せば出しッ放しにして、片附けもしやがらねえで、……使つたら使つたで、ちやんと元の通りにして置かねえか！」

章三郎はどろんとした眼を天井へ向けて、憎げな欠伸をして見せながら、まだ睡さうに打倒れて居た。其の癖意識はとうにハッキリして居るのだが、こんな場合に素直に起きるのが嫌さに、わざと意地惡く

「涙を浮べるくらゐなら、なぜもう少し暖かい言葉をかけてくれなかつたのだらう。さうして己も、なぜもう少し、優しい態度になれなかつたのだらう。」

　さう思ふと章三郎は、別な悲しみがひしひしと胸に迫るのを覚えた。いつそ父親が飽く迄强硬な態度を通してくれた方が、却つて此方も氣が樂であつた。

　しかし、其の悲しみはほんの一日か半日の間で、明くる日の朝父親に寐込みを呼び醒まされると、直ぐに再び前日と同じやうな考が彼の頭を支配する。さうして相變らず、面當てがましく正午近くまで寐坊をしたり三日も四日も家を明けたりする。

「そんなに父親が嫌ならば、なぜ己は此の家を飛び出してしまはないんだらう。一番父親と大喧嘩をして、きれいさつぱり勘當されて、永遠に關係を絶つてしまはないんだらう。こんな薄穢い長屋に居るより、愉快なところは世間に澤山あるぢやないか。たとへ放浪生活をして、どんな境涯に落魄しても、まだ今よりは幸福ぢやないか。」

　彼は斯う云ふ決心を定めて、既に幾度も出奔を企てゝ居た。古本を賣り拂つたり、友達から金を借りたり、僅かの旅費を都合して、ふらりと家を拔け出したまゝ十日も二十日も諸々方々をうろつき廻る事があつた。けれども十日なり二十日なりの後、結局彼は東京へ歸つて來ずには居られなかつた。

「自分の體なんぞどうにでもなるがいゝ。己には親も友達もないんだ。」

　さう思つては見るものゝ、彼にはやつぱり自分を生んだ親の家が、よしやどれ程むさくろしくとも、どれ程不愉快に充ち充ちて居ても、最後の落ち着き場所であつた。自分の生れた土を慕ひ、自分の育つ

三郎も胸中に漲る反抗心を、出來るだけ明瞭に表情と態度に依つて誇示しようとする。例へば恐ろしい佛頂面をして眼を瞋らせるとか、相手が夢中で怒鳴つて居る最中に殊更仰山なあくびをして見せるとかした。

「ちよッ」

と父親は舌打ちをして、

「まあ何て云ふ奴だらう。親に意見をされながら、あくびをする奴があるか。第一手前の其の面は何だ。何でそんなに膨れッ面をして居るんだ。」

斯う云はれると章三郎は始めていくらか胸がせいせいする。つまり自分の表情と態度の意味が、父親の神經にまで屆いた事を發見して、やつと反抗の目的を達したやうに、溜飮を下げるのである。

「ほんとに其れぢやあ呆れ返つて話にもなりやしねえ。先から口を酸つぱくして聞いてるのに、默つてばかり居やあがて、剛情なのか馬鹿なのか譯が分らねえ。……此れから何だぞ、うんと性根を入れ換へて、ちつとしつかりしなきやあ駄目だぞ。今迄見たいに寐坊をしないで、朝は六時か七時に起きて、每日必ず學校へ出掛けて行きねえ。それにもう、今迄のやうに矢鱈に餘所へ泊つて來ちやあならねえぞ。出て行つたつきり、三日も四日も何處かへ泊つて來るなんて法があるもんぢやねえ。此れからきつと改めないと承知しねえから……」

結局父親は我を折つて、多少哀願的な調子になつて、捨て台辭を云つた揚句に章三郎を放免する。此の時になると、さすがに父の眼底には、いつも淚が光つて見えた。

ても打ち解ける事が出來なかつた。たま〳〵父の前へ出れば、無闇に反抗心が勃興して、不平や癇癪がムラムラと込み上げて來る。ところが父親の瘦せ衰へた顔の中には、何となく陰鬱な、人に憐愍を起させるやうな傷々しい俤があつて、その爲めに章三郎は口を利くことも、身動きをすることも出來なくなる。此の老人の血液の中から、自分と云ふ者が生れたのかと考へると、何だか溜らない氣持ちがして、體が一時に硬張つてしまふ。

「二十五六にもなつて、毎日學校を怠けてばかり居やあがつて、一體手前はどうする氣なんだ。……どうする氣なんだつてばよ！」

折々彼は、否應なしに父親の傍へ呼び付けられて、ねちねちと詰問されて、意見を聽かされる時がある。そんな場合に章三郎は、面と向つて据わつたまゝ、いつ迄立つても返辭をしなかつた。

「手前だつてまさか子供ぢやあねえんだから、ちッたあ考へがあるんだらう。え、おい、全體どう云ふ了見で、毎日ぶらぶら遊んで居るんだ。考へがあるなら其れを云つて見ろ。」

かう云ふ調子で、父親はぢりぢりと膝を詰め寄せるが、二時間でも三時間でも章三郎は默つて控へて居る。

「考へがある事はあるけれど、説明したつて分りやしませんよ。」

と、彼は腹の中で呟くばかりで、決して口へ出さうとしない。さうかと云つて、一時の氣休めに出鱈目な文句を列べ、父親を安心させようと云ふ氣も起らない。そんな氣を起す餘裕がない程、彼の心は慘濟たる感情に充たされるのである。しまひに父親が焦立つて來て、いよ〳〵亂暴な言葉を用ゐると、章

た。

「父を無教育だと罵る前に、教育のある己れから、先づ第一に態度を改めてかゝるがよい。さうすれば父も段々素直になつて、必ず感情が融和するに違ひない。」――

彼には此の理窟がよく分つて居た。蟲を殺して、父親に優しくしてさへ居れば、自分の良心も少しは休まる暇があらうと、思はないではなかつた。さう知りながら、一旦父親の顏を見ると、――若しくは一と言叱言を云はれると、不思議にも忽ち意地が突つ張つて來て、到底大人しく服從する譯に行かなくなつた。

父を輕蔑すると云つても、勿論積極的に惡罵を浴びせたり、腕を捲くつたりするのではない。それが出來るくらゐなら、彼は恐らく父に對して、此れ程の不愉快を抱かないでも濟んだであらう。父を全然他人のやうに感じ、他人のやうに遇する事が出來たなら、彼はもう少し仕合はせになり得る筈であつた。自分を罵る者が他人であつたなら、彼は容赦なく罵り返してやるだらう。誤解する者が他人であつたなら、彼は直ちに辯解を試みるであらう。憐れな者、卑しむべき者、貧しき者が他人であつたなら、彼は其の人を慰め、敬遠し、惠む事が出來たであらう。場合に依つては其の人と絕交する事も出來たであらう。たゞ〳〵其の人が彼の肉身の父である爲めに、殆んど此れに施す可き術がないのである。

章三郎が、父に對して術を施し得ないのは、必ずしも彼に道德があるからではない。道德と云ふ一定の固まつた言葉では、とても說明することの出來ない、或る不思議な、胸のつかへるやうな、頭を壓さへつけられるやうな、暗い悲しい腹立たしい感情が、常に父親と彼との間に介在して居て、彼はどうし

「小さんはうまいもんだなあ。」

と、例の獨り言が口を衝いて出た。

二

蓄音機の道具を散らかしたまゝ、彼は日の暮れまでうとうとと睡つた。

「おい、章三郎、起きねえか、起きねえか。」

かう呼ばれたので眼を覺ますと、父親が險相な顏をして枕もとに立ちながら、足の先で彼の臀つぺたを搖す振つて居る。

「いくら親父だつて、自分の倅を起すのに足蹴にしないでもよささうなものだ、何と云ふ無教育な人間なんだらう。」

章三郎はむッとしたが、考へて見ると父親を此れ程荒つぽい、野蠻な人間にさせてしまつたのは、みんな彼自身の罪であつた。彼の父は決して昔からこんな亂暴な、子供に對して冷酷な人間ではなかつた筈である。今でも妹のお富を初め、母親や其の他の者に摑まると、寧ろ輕蔑されるくらゐの好人物に見えるのだが、たゞ總領の章三郎に對してのみ、猛獸のやうに威張りたがつた。畢竟其れは章三郎が、あまりに親の權力と云ふものを無視して懸つて、此れ迄に散々父の根性を僻めてしまつた結果なのである。せめて表面だけでも、父の顏が立つやうに仕向けてやればよかつたものを、彼にはたつた其れだけの我慢が出來ず、けんもほろゝに取り扱ふので、父親の方でも、「何糞！」と云ふ了見になるのであつ

といろ／＼の音譜を取り換へ引き換へ鳴らして見たけれど、例の畢條の騷ぎ以來、何だか心に蟠りがあつて、いつものやうに感興が乘つて來ない。そりそり惚れ惚れするやうな節廻しが耳について、ちよいとの間忘我の境に彷徨しかけると、

「なんだお前の其の態は？ 親や妹を相手にして、喧嘩つ面で引つたくつた蓄音機が、そんなにお前には樂しみなのか。そんな事より外に、お前は世の中に樂しみがないのか。」

かう云ふ囁きが胸の奥から湧いて來て、結局自分のさもしい了見に、愛憎を盡かすやうな氣持ちになつた。

それでも彼は家族に對する面あての爲めに、面白くないのを我慢しながら、暫く續けて居なければならなかつた。さうなると猶更自分のして居る事が無意味に思はれて、無闇に癇癪が起つて來た。有るだけの音譜を片端から鳴らしてしまつて、最後に殘つた「千早振る」と云ふ小さんの落語を掛けて見ると、其れが又度外れに滑稽な、ふざけ散らしたものであつた。

「……まあ金さん此方へお這入り、それぢやあ何かい、お前さんは業平の歌が分らねえと云ふのかい。たしかお歌は、千早ふる神代も聞かず龍田川……」

突然、聞き覺えのある小さんの聲が喇叭の先から飛び出して來て、こんな話をぺらぺらしやべり始めたのが、あまり頓興を極めて居るので、章三郎はつい「うふゝゝ」と腹の底から笑ひ上げた。笑つてから急にしかめツ面をして、何となく裏切られたやうな心地で、直ぐ機械の運轉を止めた。

がつかりして、彼は部屋のまん中へ大の字なりに臥そべつてしまつた。その瞬間に、

「自分で疎忽をしちまやがつて、壞れて居たもねえもんだ。此の間までちやあんとうまく動いたんだ。ほんとに困つちまふぢやねえか。日本橋へ返しに行くのに言ひ譯のしようがありやしねえ。……」

段々威勢のない、萎れた聲を出し始めたが、やがてお富に何か注意をされたと見えて、

「章三郎、お前ぜんまいを捲かないんぢやねえのかい。事に依ると彈條が弛み過ぎて居るやうだから、もつと一杯に捲いて見ろつて、お富が云つてるぜ。え、おい、彈條を捲かずに居るんぢやねえのかよう。」

「ぜんまいなんか充分に捲いてあるんだつてば。」

斯う云ひながら章三郎は、どうせ機械を壞した積りで、ぐいぐいと滅茶苦茶にねぢを捲き上げると、不思議や次第に圓盤がする／＼する／＼廻轉し始めて、再び生き生きとした小しづの美音が、四隣へ凜々と鳴り渡つた。

「それ見ねえな。壞れたんでも何でもありやしねえ。やつぱり彈條が緩かつたんだらう。」

父はやつと安心したやうな句調で云つた。

「だから早く私に聞けばいゝんぢやないか。なんて剛情ッ張りなんだか分かりやしない。」

得意の鼻を蠢めかして、いよいよ圖に乘つて居るらしい妹の言葉が耳に這入ると、章三郎は無念で無念で溜らなかつた。あのあまつちよに溜飮を下げさせるくらゐなら、寧ろ機械がほんたうに壞れてくれた方がいゝとさへ思つた。

折角機械が動き出したのに、生憎胸の中がもしやくしやして、彼は一向面白くならなかつたが、音譜の方はますます朗らかな響きを立てゝ、無遠慮に滑らかに歌ひ續けた。清元から常盤津、義太夫、長唄

「見て貰はないでもよござんすよ。具合が惡いのは械械が古い爲めなんだから、……」

負け惜しみを云ひながら、章三郎は焼けを起して、機械をがたんがたんと亂暴に搖り動かした。その物音を聞き附けたら、きつと父親が騷ぎ出すだらうと豫期して居ると、案の定今度は一層けたたましく、

「おいおい、全體何をしてるんだ。何だつてそんなにがたんがたんやつてるんだ。――お前と來た日にや、借り物だらうが何だらうがお構ひなしにぞんざいな眞似をするんだから、仕樣がありやしねえ。分らなけりあ、もう好い加減に止さねえかい。」

其の時更に激しい音がドシンと二階から響いて來て、章三郎が急に心細い聲を出した。

「此の機械は初めつから壞れてるんだ。方々が痛んで居るから、いくらやつたつて動く筈はありやしないんだ。」

とうとう己は打つ壞してしまつた! 何と辯解したところで、己のした事に違ひないんだ。定めしお袋が眞靑な顏をして、壞れた道具を後生大事に日本橋へ擔ぎ込んで、「お葉ちやん、まことに申譯がないけれど、お前さんがあれ程大切にして居た物を、内の章三郎の奴が此れ此れでねえ、……」とか何とか、平身低頭して詫るであらう。さうしたら、あのお葉のしみつたれが何と云ふだらう。己に對してどんな考を持つだらう。――そんな事まで想像すると、章三郎は今更寐覺めが惡くなつて、他人のけちんぼを嘲るよりも、人の借り物を内證で使はうとした自分の根性の卑しさが、ありありと見え透くやうな心地がした。「初めつから壞れてなんぞ居るもんかい!」

と、父親はまだ梯子段の下に喰着いて居て、怒鳴り返した。

めた。「霞のころも衣紋坂、衣紋つくらふ初買ひや」……なまめかしい、濃艶な女の肉聲が、途方もない甲高な音を立てゝ、嶽ばしげに威勢よく歌ひ出すと、章三郎は腕組みをしたまゝうつとりとなつた。母親と妹も聲をひそめて、俄かに靜肅になつてしまつた。

「そらどうだ。蓄音機ぐらゐ誰にだつて掛けられるんだ。態あ見やがれ。」

章三郎は會心の笑みを洩らして、ぐつと溜飲を下げた。何だか近頃にない痛快な出來事のやうに感じながら、歌の調子に乘せられて、首を振つたり手を動かしたり、頻りに興を催して居ると、「……柳櫻の仲の町、いつしか花もチリテツトン……」と云ふ所へ來て、だんだん響きが惡くなつて、出し拔けに圓盤が止まつてしまつた。共れは彈條が極度に弛んで居たせゐであるが、章三郎には一向原因が分らなかつた。試めしに彈條を五六回ばかり、恐る恐る捲いて見ると、音譜は牛の呻るやうな奇聲を發して、少し動いて直ぐに又止まつてしまふ。

「章三郎、お前機械を壞しちまつたんだらう。變な音が出るぢやないか。え、おい！」

いつの間にか父親が歸つて來たと見えて、二階へ向つて下から大聲に干渉し初めた。

「お前やり方を知りもしねえで、好い加減な眞似をして機械を壞しちまつたんぢやねえか。え、おい、章三郎！それそれ、何だか變な音ばかりして、ちつとも動きやしねえぢやねえか。やるならやるで、機械を下へ持つて來て、ちよいとお富に見て貰ひねえよ！え、おい！」

かう云つて、さもさも氣懸りでならないやうに梯子段の根元へ附きつ切りに衝つ立つて、咽喉を嗄らせて執拗く叫んだ。

て來て、お富にやり方を聞いたらいゝぢやないか。よう章三郎、さうおしつてばよう！」

章三郎はかあッとなつて、遮二無二機械を廻さうと焦り出したが、何か組み立てを誤まつたものか、どうしても針が具合よく音譜の上を走らなかつた。ほつと暑苦しい溜息をついて、額の汗を手の甲で擦りながら、恨めしさうに機械を眺めて居るうちに、彼は溜らなく悲しくなつて涙が一杯に眼に浮かんだ。

「馬鹿！こんな事件で泣く奴があるか。」

彼は腹の中で自分を叱咤した。母や妹のやうな、哀れな人間と意地くらべをして泣くと云ふ事が、彼には口惜しくてならなかつた。自分以下の人間に對して、彼はいつでも心の冷靜を保つて居たかつた。

「お父つさんやおつかさんが何を云つたつて、てんで兄さんは馬鹿にしてるから駄目なのさ。もつとシッカリした人間から、ミッチリ意見でもしてやらなけりやあ、なかなかあれぢやあ眼が覺めやしない。……」

下の病室から、又しても妹が生意氣な口ぶりで叱言を呟いて居る。それを聞くと章三郎は、胸がむかむかするやうな不愉快と憤怒を覺えて、忽ち今の悲しみを忘れてしまつた。

「彼のあまッちよめ、ふざけた事を拔かしやあがる。——誰が何てつたつて貴樣に蓄音機のやり方なんぞ敎はつて溜るもんか。そのくらゐなら、此の機械を一層滅茶々々に叩っ壞すから覺えてやがれ！」

彼は再び猛然として、一旦持てあました機械の組み立てに取りかゝつた。すると今度はどう云ふ彈みか、好い鹽梅に針が滑りさうなので、「淸元北洲、新橋藝妓小しづ」と書いてある音譜を掛けて鳴らし始

方だ。此れんばかりの道具を貸すのに、やれ瑕を附けるなとか、彈條を強く捲くなとか、世界に一つしかない貴重品でもあるかのやうに、勿體振らずともよささうなもんだ。どうせ使へば、少しぐらゐ傷むのは當り前だ。それが嫌ならこんな物を買はないがいゝんだ。――斯う腹が立つて來ると、章三郎は邪が非でも其の機械を持ち出して、思ふさま使ひ減らしてやらなければ胸が治まらなかつた。

「かあちやん、かあちやん、駄目よ兄さんは！其の風呂敷をこんな所でおつ擴げちやあ、埃だらけになるぢやないの。」

「構はないから、ほつたらかして勝手にさせてお置きよ。後でお父つさんがお歸んなすつたら云つけてやるから、その積りで居るがいゝ。なんだほんとに！毎日學校へ行きもしないで、内にごろごろして居やがつて、遊ぶことばかり考へて居やがる。何處の國にそんな大學生があるもんか。」

母と妹とが交る交る毒づくのを尻眼にかけながら、章三郎は悠々として箱を二階へ運び去つた。例の窓際に机を据ゑて、其の上へ機械を組み立てようとしたが、正直を云ふと、彼は母親にうまく圖星を刺された通り、今迄蓄音機と云ふ物を扱つたことがないのである。大概分るだらうとたかを括つて居たものゝ、さて實際にあたつて見ると、案外面倒なものらしく、なかなか思ふやうに機械が動いてくれなかつた。細かい器具を彼方此方へ拔いたり嵌めたりして、暫くの間散々に挺摺つて居ると、下では母と妹とが盛んに氣を揉み始めた。

「章三郎、お前何をして居るんだい？それ御覽な！自分で出來るつて云つて置きながら、出來もしない癖に無理な事をすると壞しちまふよ。だから私が云はない事ちやありやしないんだ。やるなら下へ持つ

觀を呈して、肝腎な娘は機械を取り扱ふ技師に過ぎない場合があつた。二十枚ばかりのレコオドを毎晩飽きずに繰り返して、始終娘が針を附けるのを見て居ながら、親父もお袋も一向に其の技術を覺えようとはせず、初手から危がつて手にだに觸れなかつた。傷々しく痩せ干涸らびた病人の少女が、重さうなどてらを被いで蓐の上に起き直つて、靜かに圓盤を廻して居ると、其の傍に父と母とが頭を垂れて謹聽して居る光景は、どう考へても一種の奇觀であつた。その時の娘の顏は、恰も不思議な妖術を行ふ巫女のやうに物凄く、親達は又、その魔法に魅せられた男女の如く愚かに見えた。さうして蓄音機と云ふ物が、凡人の與り知られぬ靈妙神祕な機械の如く扱はれて居た。

だん／＼お富の病勢が募つて、自由に體を動かす事が出來ないやうになつてから、代りの技師が居ない爲めに機械は到頭風呂敷に包まれて、簞笥の上へ片附けられた。其れを疎忽つかしやの章三郎が、無造作に持ち出さうとしたのだから、母も妹もびつくりしたのである。

「お止しと云つたらお止しよ章三郎！第一眞つ晝間から蓄音機を鳴らす内があるもんぢやない！それにお前は、機械をいぢつた事なんぞありやしないんだらう。」

「蓄音機ぐらゐ掛けられない奴が何處の國にあるもんか。大丈夫だからちよいと二階へ借りて行きます。」

章三郎はこんな簡單な機械に對して、大騷ぎをする母や妹のけち臭い態度が、癪にさはつて溜らなかつた。なんだ馬鹿々々しい！今時蓄音機なんぞ珍しくもないのに、まるで腫れ物へ觸るやうにおつかながつて居る。そんなに心配ずるくらゐなら、借りて來なけりやいゝぢやないか。それに又貸す方も貸す

に母親の勝利に歸したが、勝つた母親も快哉を叫ぶやうな氣持ちになれよう筈がない。勝てば勝つ程、父親が萎れれば萎れる程、自分が一層立る瀨なくなつて、果ては子供のやうにだらしなくしやくり上げながら、めそめそと愚痴をいふのである。

蓄音機に關する爭論も、結局お定まりの經路を辿つて、父親は面目なげに眉をしかめ、母はいま〱しさうに涙を拭つた。

「大丈夫よお父つあん、あたしは先にお葉ちやんの所で、度び度び蓄音機をいぢつた事があるけれど、一遍だつて瑕なんか附けやしなかつたわ。あたしがやれば大丈夫だから、外の者にやらせないやうにして頂戴よ。」

臥てゐるお富が斯う云つて、兩親の仲裁に這入つた。その頃の彼女の容態は、今ほど重くなかつたので、寢床の上に据わりながら機械をいぢるくらゐの事は出來たのである。小いさな、剝げかゝつた一閑張の机の上に機械を載せて時々母に彈條を捲かせつゝ、彼女は自ら針の附け換へに任じたり、音譜を圓盤に篏めたりした。

「ふん、そりやあ呂昇の壺坂だな。……お富や、もう一遍今の奴を掛けて見ねえ。やつぱり義太夫と云ふ物も、斯うして聞くといゝもんだなあ。」

四五日立つと、父も喧嘩を忘れたやうにうつとりと音譜の聲に耳を澄ませて、一合の晩酌を傾けながら好い氣持ちになつたりした。母は長唄が好きだと云つて、伊十郎や音藏の音譜を箱の中から捜し出しては、其れをお富に掛けて貰つた。病人の爲めに借りて來た物が、却つて親達の慰みに使はれるやうな

肩を出して鼻をかんだ。意氣地のない亭主を恨むと云ふよりも、斯う云ふ泣き言を屢々繰り返す境涯に落ちた自分の身の上を悲しむやうに見えた。實際、此の家の中で毎晩のやうに起る夫婦喧嘩の結末は、いつも母親の泣き言を以て幕が下りるのである。怒りつぽい父が、蟀谷へ太い青筋を立てゝガミガミと叱り付けて居る最中でも、母親に一と言極まり文句を浴びせられると、急に萎れ返つて口を噤むのが掟になつて居る。

「親子の者がこんな長屋住居をするやうになつたのは誰のお蔭だ!」

母親から斯う云はれると、父は全く一言もなかつた。父も母も、息子の章三郎も娘のお富も、生れ落ちてからの貧乏人ではないのである。父が間室家へ養子に來た時分には、相應な親讓りの財產があつて、今の母親は何不足のない、仕合はせな家附きの娘であつた。それが二十年このかたぢり〳〵と落魄して、果ては其の日の暮らしにまで差支へる有樣となつた。此れと云ふのも、偏へに父親が働きのない結果であると母は信じて居る。投機事業に手を出したり、放蕩に耽つたりして、一擧に身代を擦つたのではなく、眞面目に父祖の業を受け繼ぎ、養子の分際を守つて居るうちに、知らず識らず時勢おくれの引込み思案になり、段々怠け癖が附いて、少しづゝ削るやうに身上を減らしたのであるから、つまり責任は父の無能と不見識とに歸着するにも拘らず、父は未だ自分の弱點を充分に認めては居ないらしかつた。律義で頑固で小心な彼は、消極的な道德をさへ守つて居れば、人間としての本分は完うされたので、其れ以上の幸不幸は凡べて運命の仕業であるとして、觀念して居るやうであつた。たゞ母親に眞正面から攻擊されると、さすがに良心が咎めると見え、申し譯のないと云ふ顏つきをして項垂れてしまふ。斯くて喧嘩は常

と、お葉は擱んどころなく承知したが、それでも一番大切にして居る小三郎の綱館や、林中の乗合船のレコオドなどは、わざと隠して渡さなかつた。さうして針の附け方だの彈條の捲き方だのを、事々しく説明してやつとの事で貸し與へた。

「そんなに大事にしてる物を借りて來なさんなつて云つてるのに、ほんとに止したらいゝぢやねえか。壞しでもしたら仕樣がねえから、明日でも早速返してしまひねえ。」

氣の狹い父親は、夕方勤め先から歸つて來ると、いきなり斯う云つて母親を叱つた。

「だつてお富が聽きたいつて云ふんだから借りて來たつていゝぢやないか。何もお前さん、斷る物を無理やりにでも借りて來たんぢやあるまいしさ。」

母もなかなか負けては居なかつた。

「あたり前よ。借せと云やあ向うだつて斷る譯にや行きやあしねえ。だから此方で好い加減にして置くがいゝんだ。それでなくつたつて散々世話になつてるのに、嫌がる物まで借りて來なくつても濟む事たらうが……」

「世話になるつて、何もあたしが酔興で世話になる譯ぢやありやしない。其れが惡けりや世話にならないでも濟むやうにしてくれるがいゝ。自分がほんとに、人の世話にでもならなけりやあ追付かないやうにして置きながら、何かと云ふと此方の所爲にばかりして居る。困らないやうにさへしてくれゝば、何も好き好んで肩身の狹い思ひなんぞしたかないんだから、……」

母は例の極まり文句を並べて、ぼろぼろと口惜し涙をこぼしながら、袂の中から皺くちやになつた紙

「あれ、かあちやん、兄さんが蓄音機を持ち出したのよ。」

兄が平氣で簞笥の上から包みを下して、機械をいぢくり始めると、病人は癇を昂らせて母を呼んだ。

「章三郎、お前お富が止せと云ふんだから止したらいゝぢやないか。」

勝手口で洗濯をして居た母は、兩手にシャボンの泡を着けて襷を掛けたまゝ出て來て云つた。

「……その蓄音機はお葉ちやんが大事にして居て、瑕を付けられると困るからつて、貸すのを嫌がつて居たんだけれど、お富が聽きたがるもんだから私が漸く借りて來てやつたんぢやないか。ほんたうにお前のやうな亂暴者が、針の附け方も知らない癖に無理な眞似をして壞しでもしたらどうする氣だい？內ぢやあお富より外に、お父つあんだつて私だつて、その機械に手もつけた事はありやしないんだよ。」

お葉と云ふのは、章三郎の叔父にあたる親戚の家の娘であつた。章三郎の一族が日に增し悲境に沈んで行くのと反對に、叔父の方は十年も前からだんだん身上を太らせて、今では日本橋の大通りに立派な雜貨商の店を開いて居た。文科大學へ通つて居る章三郎に、四五年前から學費を貢いでくれるのも、去年の春以來病み通しのお富の爲めに醫藥を供してくれるのも、みんな日本橋の叔父のお蔭であつて、八丁堀の一族は悉く彼の庇護を仰ぎながら、辛くも糊口を凌いで居た。其處の娘が持つて居た筈の蓄音機を、お富の母が病人から賴まれて借りに行つたのは、もう半年も前の事である。

「ねえお葉ちやん、濟まないけれどもお前さんの蓄音機を四五日貸しておくれでないか。お富が每日淋しいもんだから、借りて來ておくれつて云ふんだけれど……」

「えゝよござんす。持つて居らつしやい。」

へて居るより爲方がなかつた。

病人は、誰も相手にしてくれないので、しやべる張り合ひが拔けたものか、程なく息切れがしたやうにぶつりと聲を途絶えさせた。さうしてぱちぱちと相變らず眼を光らせて、枕許を通り過ぎようとする兄の後ろ姿を見送つて居た。兄は彼女の視線を避けながら、一旦梯子段の上り口まで行きかけたが、また戻つて來て、恐る恐る病人の寢床の傍の押し入れを明けた。

「兄さん、其處を明けて何を出すのよ。」

と、妹は突慳貪に嘴を入れた。

「此の間おつかさんが日本橋から借りて來た蓄音器があつたらう。あれはもう返してしまつたのかい。」

章三郎は眞暗な、黴臭い戸棚に首を挿し込んだまゝ、出來るだけ優しい調子で尋ねた。

「返しやしないけれど、其れをどうするつて云ふの。――そんな所を搜したつてありやしなくつてよ。」

「あれをちよいと、二階へ借りて行かうと思ふんだけれど、何處にしまつてあるんだい。」

兄は押し入れから顏を出して部屋の中を見廻した。向う側の壁に着いて居る簞笥の上に、棒縞の風呂敷を被せた四角な品物の載つて居るのが、蓄音機らしい恰好をして居た。

「兄さん、勝手にそんな物を引き擦り出しちやいけなくつてよ。その蓄音機はお葉ちやんが私に貸してくれたんぢやないの。亂暴な眞似をして音譜に瑕をつけたりすると、あたしが怒られるから止して頂戴よ。」

「いゝぢやないか、ちよいとぐらゐ借りて行つたつて。瑕なんか付けやしないから大丈夫だよ。」

を、母は尙更不憫に覺えて快く許して居るのであつた。

しかし兄の章三郎には、瀕死の妹の生意氣な口のきゝやうが、小面憎くてならなかつた。「瀕死」と云ふ薄氣味の惡い武器を提げて、親兄弟に惡體(あくたい)をつく彼女の態度に接すると、折角起りかけた同情も忽ち反感に變つてしまつた。

「馬鹿！子供の癖に餘計な事を云ふな。可哀さうだから默つて居れば、好い氣になつて增長しやあがる。病人なら病人らしく、蒲團でも引被(ひつかぶ)つて小いさくなつて居ろ。もう直き死ぬ人間でも生意氣な奴は大嫌ひだ！」

彼は思ひ切つて怒鳴り散らしてやりたい事が度び度びあつた。彼女が死ぬ前に是非一遍、頭ごなしに打ち懲らしてやらなければ、腹が癒えないとさへ考へて居た。ところへ丁度便所の叱言を聞かされたので、章三郎はむかむかとしながら猛惡な眼つきで病人の顏を睨みつけたが、例の物凄い、不思議に落ち着いた、西洋の魔女の持つて居さうな冷靜な瞳に睨み返されると、やつぱり氣後(きおく)れがして默つてしまつた。今妹と喧嘩をすると、あの怪しげな、ぢつと自分を視詰めて居る瞳が、やがて彼女の死んだ後まで長く此の部屋に殘つて居て、夜な夜な彼を睨み付けるに極まつて居る。外(ほか)の人なら知らぬこと、臆病で病的な神經を持つ章三郎に取つて、其れは確かに有り得べき事實、あまりに明かな事實である。少女の癖に母や兄を嘲けり罵るのは不道德な行爲に違ひない。死にかゝつて居る病人であつても、惡事は惡事だから叱責するのが當然であるのに、此の病人はなぜか奇妙な强味を持つて居て、叱つた者が却つて良心の苛責に惱まされる。――それを知つて居る章三郎は、いまいましいとは思ひながら、結局蟲をこら

「かあちやん、兄さんはまだ憚りに居るのかい？」

と、部屋から妹の話し聲が聞えた時分に、漸く章三郎は便所の中から痺れた足を引き擦つて出た。緣側の手洗鉢の前で手を拭いて居ると、彼女はまだぶつぶつと口やかましく呟いて居る。

「まあなんて長い便所なんだらう。兄さんが二三度も便所に行くと、大抵日が暮れてしまふぢやないの。ほんとに江戸つ兒にも似合はない。もう少し早く出來ないもんかねえ。……ねえかあちやん、かあちやんてば！」

終日天井を仰いだ儘、身動きもせずに横はつて居る妹は、暗い淋しい家の中で母を唯一の相手と頼み、母との會話に依つて纔かに無聊を慰めて居る。自分の死期が、つい一二箇月の後に迫つて來たらしい豫感に脅かされて、何となく悲しかつたり、心細くて溜らなかつたりする時には、不意に甘へるやうな聲を出して、「かあちやん、かあちやん」と話し掛ける。けれども其れは臺所に働いて居る母の耳まで屆かない場合が多いので、彼女は折々焦れついて益々性急に「かあちやん、かあちやん」と呼び立てる。

「あいよ、あいよ、」

母がおどおどしながら障子越しに答へると、彼女は「ちよッ」と舌打ちをして、

「かあちやんたらほんとに聾だねえ。さつきから呼んで居るのに、いくら用をして居たつて聞えさうなもんぢやないか。」

斯う口穢く罵つて叱り付けたりする。もともと十五六の小娘にしては恐ろしい程にませた怜悧な子であつたのが、不治の病に陷つてから一層神經過敏になつて、頑是ない子供のやうな我が儘を云ひ募るの

日の朝から此の新聞紙が一つ所に捨てゝあつたので、彼は今日までに幾度となく、毎回其の記事へ眼を落しては同じやうな想像の手數を繰り返しつゝ、とうたう最後に白樂天まで引つ張つて來られたものと見える。

此の事實から推定すると、彼の頭の働きは、一昨日も昨日も今日も一つ所に停滯して動かずに居たものらしい。心が常に一定の刺戟に對して、一定の妄想を育むやうな狀態にばかり止まつて居たらしい。少くとも章三郎に取つて、ベルグソンの說いて居る「不斷の意識の流れ」などが、渉りなく流れて居さうには考へられない。

「…さうだ、一體純粹持續とか云ふやうな事は、あれは眞理なのか知らん。……」

それから又五六分間、彼の聯想は心理學の問題に移つて、いつぞや讀んだ事のあるベルグソンの「時と自由意志」の論旨を、ところ〴〵胸に浮べて見たが、大概跡かたもなく忘れ果てゝ、細かい理窟は何一つ覺えて居なかつた。にも拘らず、彼は自分が折に觸れて、斯う云ふ高尚な問題にまで考へを及ぼし得る智力がある事を、非常に嬉しく感じ始めた。何と云つたつて此の裏長屋に、幾百人と云ふ住民の居る此の八丁堀の町内に、ベルグソンの哲學なんかを知つて居る者は己を除いてありはしない。若しも人間の思想と云ふものが、行爲と同じく外から觀る事が出來るものなら、此の近所の人々はどんなに己の頭の中の學問にびつくりするだらう。

「己は今こんな立派な、こんな複雜な事を考へて居るのだぞ。」

かう云つて章三郎は、誰かに自慢してやりたいくらゐであつた。

うに、いつ迄もいつ迄も取り止めのない獸想に耽つて居る場合が多い。

其の日も彼は大便所へ蹲踞まつたまゝ、例の如くいろいろの愚にも付かない思想の斷片を、次ぎから次へと頭の中に描いては消し、消しては描き續けたが、そのうちに彼はいつの間にか支那の白樂天の事を考へて居た。

「待てよ、己は昨日も便所の中で白樂天の事を考へて居たやうな覺えがある。」

彼はふと氣が付いて斯う思つた。……

「さうだ、たしかに昨日も考へて居た。きのふばかりか、一昨日も今時分便所の中で白樂天を思ひ出して居た。どうして己は便所へ這入ると、白樂天を想ふのだらう。こゝの便所と白樂天とどんな關係があるのか知らん。」

だんだん聯想の流を溯つて探求するうちに、彼は程なく關係を見付け出す事が出來た。ちやうど便所の床板の上に、二三日前の新聞紙の切れが落ちて居て、其の中の箱根の温泉に關する記事が、自然と章三郎の眼につくやうに擴がつて居る。原因と云ふのは恐らく此處にあるらしかつた。溫泉の記事を讀むともなく讀んで居るうちに、彼の魂は知らず識らず曾遊の地たる箱根の翠嵐にさ迷うて、凉しい谿谷の小川の滸に設けられた、とある旅館の浴室の光景を想ひ出して居た。淸冽な、透き徹るやうな湯水が、絕え間なく溢れ漲る湯槽の底に身を浸す時の、さながら五體の解れるやうな肌觸りを追懷すると、今度は入浴の快感を歌うた有名な唐詩の文句、「溫泉水滑洗凝脂。」と云ふ長恨歌の一節が、古い古い記憶の底から呼び醒された。さうして長恨歌から必然的に、白樂天の聯想が彼の頭に現れ來たのである。多分一昨

か狂人の素質がある事を、悟らずには居られなかつた。たゞ仕合はせにも彼の狂氣は發作の時間が短くて、直ちに本心を取り戻す事が出來る爲めに、此れ迄他人の注意を惹かずに濟んで居たゞけの話である。

今しがた章三郎は、獨り語を云つてしまつてから「しまつた」と云ふやうな顏つきをして、暫く陰鬱に考へ込んで居たが、やがて重苦しい溜息をついて、のそりのそりと急な梯子段を降りて行つた。玄關の二疊の次ぎに日あたりの惡い六疊の居間があつて、そこに肺病の妹のお富が、夜着の襟から青白い額を見せつゝ靜かに仰向きに枕に就いて居る。

章三郎が這入つて來ると、病人は凹んだ眼窩の奧に光つて居る悽慘な瞳を、ごろりと一方へ廻轉させてぢろぢろと兄の樣子を視据ゑた。「とても助からない病人である。もう一と月か二た月の内には息が絕えるに極まつて居る。」さう知つて居るせゐか、章三郎は此の妹の、奇妙に冴えた神秘な眼の色で睨まれるのが恐ろしくて、便所へ行くのに是非とも其處を通らねばならないのを、此の間から何となく氣詰まりに感じて居た。彼は成る可く視線を合はせないやうに、横を向いて急ぎ足に緣側へ通り拔けると、厠の戶を明けて中へ隱れたきり容易に出て來さうもなかつた。

「腦が惡かつたら便秘を氣を付けないといけない。」

先日醫科の友達にこんな忠告を受けてから、彼は每日湯水を飮んで、出來るだけ多く通じをつけるやうに努めて居た。それで此の頃は、少くも日に二三回便所へ通つて、十五分ぐらゐづゝしやがんで居るのが習慣になつたのである。動ともすると、しやがんで居ながら彼は何しに此處へ來たのかを忘れたや

馬鹿々々しいだけに、彼は此の獨り語を常に最も腹立たしく感じて居た。若しも誰かの居る前で、此の言葉がうつかり口からすべつたら、どんなに其の人はびつくりするだらう。彼自身もどれ程きまり惡く、氣味惡く感ずるであらう。往來のまん中などで口走つた際に、通りかゝりの刑事巡査の耳へでも這入つたら、それこそ彼は警察へ引つ張られて、罪人か狂人扱ひを受けるに違ひない。

「いゝえ、僕は斷じて氣違ひではありません！」

其の時になつて彼がいか程絶叫したつて、誰が眞に受ける者があらう。恐らく精神病院へ連れて行かれて專門の醫者の診察を受けても、やつぱり狂人の宣告を受けるにきまつて居るだらう。

それから楠木正成と源義經とに至つては、實に實に不思議千萬である。こゝになると彼は全く何處から此の名が浮かんで來るのやら、更に見當が分らない。彼は幼少の頃歴史譚が大好きで、太平記や平家物語を度び度び熟讀した事があつた。どの子供にもあるやうに、彼も一時は正成や義經を崇拜した時代があつた。しかし其の後漸く西洋の思潮や文學を愛するやうになつてから、日本歴史に對する趣味は次第に忘れられてしまつて居た。義經や正成などゝ云ふ遠い昔の英雄の事蹟なんか、目下の彼の生活に毫末の感化をも及ぼしては居ない。第一「楠正成を討ち、源義經を平げ……」と云ふ文句からして、殆んど意味を成して居ない。彼は此の言葉を口走ると、いつでも顏を眞赤にして穴へでも這入りたいやうな耻かしさを、獨り私かに忍ぶのである。

「己にはなぜこんな滑稽な癖があるだらう。激しい神經衰弱に犯されて居る證據なのか知らん。」

彼は自分でも、自分の行爲を正氣の沙汰だと認める譯には行かなかつた。どうしても自分にいくら

遊んだ機會もないくらゐである。ただ此の二人は、あの時分級中切つての美少年であつて、章三郎は一と頃彼等の容色に心を惹かれた事があつた。何でも夜な夜な二人の姿が幻に立つて、青春時代の彼を悩ましたものであつた。久しい間、半年か一年ばかり彼の頭は毎日二人の妄想に依つて苦しめられたが、其の癖實地の交際は遂に最後まで淡い疎い關係で終つてしまつた。美少年の方でも彼に親しまず、彼の方でも彼等にちか寄る勇氣などはなかつたのである。やがて中學を卒業すると、村井は郷里の田舎へ歸つて農業に從事し、原田は九州の高等學校の三部へ這入つたと云ふ噂を聞いた。無論章三郎は其れきり彼等に會ひもしなければ、手紙のやり取りをしたのでもない。彼の頭に刻み附けられた美少年の記憶はだんだん年を追うて薄らぎ、もはや彼等の存在をさへ想ひ出さなくなつた時分だのに、近頃突如として二人の追憶が流星の如く頭の中を掠め飛び、おやと思ふ間に直ぐ又何處かへ消え失せてしまふ。その消え失せる瞬間に彼は極まつて例の獨り語を云ふ。

「村井を殺し、原田を殺し……」

名前を呼ぶのはいゝとして、「殺す」と云ふのが抑も何の爲めであるか、彼自身にもさつぱり原因が分らない。云ふ迄もなく、彼は此の二人に何等の恩怨を抱いて居る筈はないのであるから、彼等を殺す意志などは微塵も有り得ない。たとへ怨みがあつたにせよ、彼はなか〳〵人殺しの出來さうな人間ではないのである。或は將來、何かの機縁で自分が此の二人を殺すやうな事件の起る前兆ではあるまいか、彼の二人と自分との間に其のやうな恐ろしい宿業があるといふ知らせではなからうか、――さうも考へて見たけれど、あまりに馬鹿々々しい想像であるとしか思はれなかつた。

と、女の名前を三度呼ぶのが一つ。

「村井を殺し、原田を殺し……」

と云ふのが一つ。凡そ此の三つが、どう云ふ譯か最も頻々と彼の獨り語に上るのであつて、此の中のどれか一つを、一日の内に云はないことはないくらゐである。いづれも短い文句であるが、此れ等の言葉を此處に記した文字通りにしやべつてしまつてから、章三郎は始めてはつと我に復る。たとへば第一の文句で、「……源義經を平げ……」と云ふところまで來なければ、彼は自分の獨り語に氣が付かない。其處までは夢中で口走つて、「……平げ……」へ來ると必ず驚いて口を噤む。第二の文句でも、「お濱ちやん」の名をきつと三度だけ繰り返す。第三の文句なら「……原田を殺し……」を云ひ終るや否や、竦然として身ぶるひをする。調子は常に中音で早口で、普通の人の寢言の通りである。

此れ等の獨り語に繰り返される名前のうちで、多少なりとも彼の思想に交渉があるかと察せられるのは「お濱ちやん」と云ふ名前である。それは章三郎の初戀の女の名であつた。薄情な彼は、二三年前に其の女と別れてしまつたきり、今頃彼女が何處に何をして生きて居るやら、とんと氣にかけても居ないのであるから、斯く迄頻繁に彼女の名前を口走るのは我ながら意外ではあるが、しかし外の名前にくらべればまだいくらかの因緣があるやうに感ぜられる。自分では忘れた積りでも、「初戀の女」の印象がさすがに深く意識の底に潜んで居て、何かのはづみに時々唇へ出て來るのかも分らない。奇怪なのは村田と原田と云ふ名前である。此の二つは彼が中學時代の同窓生の名であつて、彼は此れ等の友人と別段特殊な交際を結んだ覺えは少しもない。二人共單に年級を同じうしたと云ふだけの話で、ろくろく一緒に

を得んとしつゝある有爲の青年である。自分は蚤々として蟲けらの如く生きて行く貧民の間に伍して、何等の自覺もなく其の日其の日を過して居られる人間とは譯が違ふ。自分には偉大なる天才があり、非凡なる素質がある。たま〳〵その天才と素質とが、物質的の成功致富の道に拙くて、藝術的の方面にのみ秀いでゝ居る爲めに、いつまでも斯うやつて逆境を拔け出る事が出來ないのである。

「ふん、馬鹿にして居やがる。……」

と、章三郎は我知らず大聲で口走つたが、後からハッと心付いてびつくりして氣を引き締めた。此の頃彼は、屢々頓興な聲で獨り語を云ふ癖が附いたのである。それが頭の中に長い間續いて居た思想と聯絡のある言葉ならまだしも、どうかすると全く何の關係もない、云はゞ突然に浮かび上つて右から左へ腦髓を通り過ぎて行く"passing whim"が、あなやと思ふ隙もなくひよいと口から出てしまつて、立派な獨り語になる事がある。幸ひにして彼がそんな眞似をする時は、周圍に誰も居ない場合が多かつたけれど、萬一、人に聞かれたらば隨分耻かしい事だの物凄い事だのをうつかり口走る折があつた。さうして其れ等の耻かしい言葉や物凄い言葉は、いつも大概種類が極まつて居て、殆んど狂人の譫語としか思はれない突飛な文句ばかりであつた。彼が最近に一番繁く口走るのは、先づ下に記す三通りの文句である。——

「楠木正成を討ち、源義經を平げ……」

と云ふのが一つ。

「お濱ちやん、お濱ちやん、お濱ちやん。」

けれども章三郎は、いかに人間の世が穢くつても、自分が兎に角足を著けて生きて居る大地から全く飛び離れて、お伽噺の子供のやうに架空的な天國へ昇つてしまつたり、夢幻的な樂園へ救はれて行つたりしようとは望まなかつた。土から生えた植物が、何處までも土に根をひろげて生を享樂して行くやうに、彼も亦現實の世に執着しつゝどうにかして樂みを求め出したかつた。さうして其れが、彼には必ずしも不可能の事とは思はれなかつた。自分が今住んで居る陋巷のあばら屋の周圍にこそ、あらゆる醜惡や陰鬱や悲運が附き纏はつて居るものゝ、人間の世の凡べてが此れ程に暗く冷たい物であらうとは信ぜられない。寧ろ反對に、思ふ存分の富と健康とを獲得して、王侯に等しい豪奢な生活を營み得る身分になれたなら、此の世は遙かに天國や夢幻の境より樂しく美しく感ぜられるに違ひない。今逆境に沈んで居る彼が、そんな身分に轉じようとするのは、まるで妄想に等しい僥倖を願ふ者かも知れないが、それでも天國や華胥の國に生れ變らうとするよりはずつと可能なことである。——斯う思ふばかりに彼は世の中や生命を失望する氣にはなれなかつた。たとへ王侯の地位までには登れないでも、少しづゝなりと現在の窮境から上層の社會へ浮び出るやうになつて欲しい。一尺登れば一尺登つたゞけの樂しみがある。たゞ其の一尺の進歩さへが、彼にはちよいと到達し得る道がないのが腹立たしかつた。

同じ人間でありながら、自分はなぜこんな貧民に生れて、世間のどん底を出發點としなければならなかつたのか、自分はどうして運命の神からハンディキャップを附けられて居るのか、思へば思ふほど章三郎は業が煮えてたまらなかつた。それも自分が陋巷に生れて陋巷に死するにふさはしい、頭腦の低い、趣味の乏しい無價値な人間ならば知らぬこと、かりにも最高の學府に教育を受けて、將に文學士の稱號

ン玉を壞してしまつたやうな取り留めのない悲しみを覺えながら、一旦虛空へ飛び散つた幻の姿を取り回すべく、彼はあはてゝもう一遍眼を潰つて見たが、美女も白鳥も遂に再び彼を訪れて來さうもなかつた。

彼はものうげに身を起して、窓際に頰杖をつきつゝ、夢の中に現れた幻の正體かと想はるゝ五月の空の雲のきれぎれを仰ぎ視た。夏らしく晴れ渡つた蒼穹には勇ましい南風が充ち充ちて、ところ〴〵に浮游する雲の塊を忙しさうに北へ北へと押し流して居る。

「夢だの空だのはあれ程美觀に富んで居るのに、どうして己の住んで居る世の中は、こんなに穢いのであらう。」

さう考へると章三郎は、いよいよ今見た幻の世界が戀ひしくなつて、遣る瀨なさが胸に溢れた。

彼の住んで居る家——日本橋の八丁堀の、せゝこましい路次の裏長屋にある此の二階の一室には、西の窓から望まれるあの壯快な空を除いて、外に何一つ美感を起させる物はないのである。四疊半の疊と云ひ、押し入れの襖と云ひ、牢獄の檻房に似た壁と云ひ、四方を仕切つて居る凡べての平面が、駄菓子を貪るいたづらッ子の頰つぺたのやうに垢でよごれて、天井の低い、息苦しい室内に一年中鬱積して居る濕つぽい惡臭は、其處に起居する人間の骨の髓まで腐らせさうに蒸し暑く匂つて居る。若し此の部屋にたつた一つしかない彼の窓から、僅かにもせよ蒼穹の一部分が見えなかつたら、章三郎はとうに氣が狂つて死にはしなかつたかと危ぶまれる。どう考へても、此れが萬物の靈長を以て誇つて居る高尚な生物の棲息する所とは信ぜられなかつた。

さう思ひながら、美しい白鳥の幻をぼんやり眺めて居ることが、不思議な喜びと快さを彼の魂に味はせた。

窓からさし込む初夏の眞晝の明りが、仰向きに臥て居る自分の眼瞼の上に輝いて、それが此のやうな白鳥の夢となつて居る。あのばたばたと鳴る羽ばたきの音は大方風が吹くのであらう。――さうまではつきりと感じて居ながら、猶且夢を見て居られるのが、彼には非常に珍しい、特殊な經驗のやうに考へられて、自分のやうな病的な神經を持つ人間でなければ、容易に到達する事の出來ない貴い境地であるかの如く樂しまれた。ひよつとしたら、彼は自分の自由意志で、思ふがまゝに好きな錯覺を作り出す能力がありはしないかと疑はれて、現在眼の前に浮かんで居る鳥の姿を更に妖艶な女の幻と擦り換へるやうに、次第次第に想念を凝らし始めた。すると暗黑な背景の奥へ鳥の形がだんだん薄く吸ひ込まれて、ちやうど子供がおもちやに弄ぶシャボン玉のやうな、五彩の虹を湛へた麗しい泡が無數にちらちらと湧き上つて來たが、その中で一番大きな泡の面に、奇怪極まる裸形の美姫がいつしかまざまざと映り出して、風に揉まるゝ烟の如く飄々と舞ひながらさまざまな痴態を演じて居るのを、彼はたしかに見ることが出來た。

「有り難い、有り難い、己の腦髓は明かに神祕な作用を備へて居るのだ。自分で勝手な夢を織り出す能力を持つて居るのだ。己は夢の中で自分の戀人に會ふ事が出來るかも知れない。成らうことなら、己はいつまでも斯うやつて眠つたまゝで生きて居たい。……」

しかし章三郎は、さう思つた瞬間にぱつちり眼をあいてしまつた。恰も子供が息を吹き過ぎてシャボ

すれば、二人の靈は此の小說を讀んで、「浮世に居た時分には、こんな事もあつたつけなあ。」と微笑してくれるだらう。なぜと云ふのに、予は、彼等の死後の生命が、生前の其れよりも辛いものであらうとは信ぜられないからである。二人は地獄へ墮ちるやうな人間ではなかつた。彼等はたしかに善人であつた。

終りに臨んで、此の原稿の發表に先だち繁雜なる公務の餘暇にわざ〳〵檢閱の勞を取られ、加ふるに精細なる評論までも書き添へて下すつた永田警保局長の好意を、予は深く深く感謝するものである。

（大正六、六月記）

一

午睡をして居る章三郎は、自分が今、夢を見て居る事を明かに知つて居た。白い鳥が繻子のやうに光る翼をひろげて、彼の顏の上でばたばたと羽ばたきをして居る。どうかすると、其の羽ばたきが息苦しい程鼻先へ近寄つて、溶けかゝつた春の淡雪のやうに、淨く軟かい羽毛が折々彼の睫毛のあたりを爽やかに掠めて居る。――「己は夢を見て居るのだな。」と、彼は幾度か夢の中で考へて居た。彼の意識は見る見るうちに痺れかゝつて、甘い芳しい熟睡の底へうつらうつらと誘はれて行きさうになるが、少し心を引き緊めると直ぐに又蘇生つて、腦髓の中を朦朧と照らすやうであつた。云はゞ彼は、睡りと目覺めとの中間の世界にさまよひながら、暫くの間覺め切らうとも眠り込まうとも欲しないで、成る可く現在の半意識の狀態に搖られて居たかつた。「自分は今、夢から覺めようとすれば覺めることも出來るのだ。」

今こそ、予はよき記念として、此の一篇を公けにしようと思ふ。藝術家を我が子に持ちたる母親に、彼の女が生前の想ひ出の種として、此の物語を捧げようと思ふ。此の小説は、我等親子が不幸の絶頂に沈淪して居た七八年前の一時期を材料にしたものである。あの時分は、父も母も予自身も、人生に對して殆んど絶望的な心を抱いて居た。予は昨年、此の小説を書きながら、母親の悲嘆を描寫する一段になると、慘憺たる當時の有樣を追懷して、覺えず暗涙を催したが、近頃母の喪に服しつゝ再び舊稿を取り出して見ると、更に感慨の新なるを禁じ得ない。思へば今年の今月は、此の小説の中に現れて居る妹の死後七年目の祥月である。さうして、此れが中央公論に發表される日――即ち來る七月一日は、恰も母の四十九日に當つて居る。去年の夏に脫稿した物が、今迄公けにされずに居たと云ふ事も、予に取つては何となく偶然でないやうな心地がする。

予は此の物語の中で、亡くなつた母や妹の事を、決してえらい人間のやうには書いて居ない。彼等はえらい人間でなかつたが故に、骨肉の予が胸には、その死が一層悼ましく悲しく感ぜられる。彼等は定めし、えらい人間として早世するよりも、えらくない人間として、どんなに憂い目つらい目に遇つても、もつと長生きをしたかつたであらう。死は Nothing である。生は、兎に角 Something である。たとへいか程苦しくとも、Nothing より Something の方がいゝに違ひない。

予は、予の藝術の中に、生前の有りの儘を傳へて、彼等を Something として生かして置きたい。「母よ、妹よ、あなた方はまだ此處に生きて居ます!」と、天に復つた二人の靈に叫んでやりたい。けれども若し、靈魂と云ふものが不滅であるなら、死は Nothing でないかも知れない。さうだと

ぐり合ひ、捨てられた世の中から再び拾ひ上げられて、親戚故舊の同情によりつゝ相當な商賣を營むことが出來るやうになつた。同時に予も向島に一家を構へ、予が妻は兩親の爲めに一人の初孫を生み落した。

予の家が向島から小石川へ移轉してからも、父と母とは日曜ごとに日本橋の家から遊びに來て、初孫を膝に抱へ、庭園の花を賞し、一日を樂しく遊んで歸つた。温順なる予が妻も、ひどく彼等の氣に入つて居た。親不孝の予は、せめて予が妻と娘とに、予の代理として、出來るだけ孝行をして貰ひたかつた。それで、此の小說に描かれて居るやうな、嶮しい親子の葛藤は、その頃全く消え失せてしまつたので、予は安んじて書き上げる氣になつたのである。

すると、今年の四月下旬、予が覺えてから煩つたことのない頑健な母は、不幸にして丹毒に冒されたが、一週間ほどで快方に向ひ、醫者は勿論、誰も彼も近々に全癒する事を疑はなかつた。五月上旬になつて、予は某雜誌社との執筆の約を果たす爲めに、伊香保へ二十日ばかり籠居する積りで出掛けて行つた。その留守中の十四日に、母は卒然心臟痲痺で死んだのである。同日の朝、危篤と云ふ電報を千明仁泉亭で受け取つた予は、即座に山を下つて、六時間を絶え間なく電車と汽車とに搖られて、夕刻日本橋の父の家へ着いた。しかし、母はもう、午後の一時から死んで居た。予が、旅裝を解く隙もなく冷めたい骸に近づいて、面を掩うた手拭を排つて見ると、あの醜い丹毒の跡は名殘なく取れて、その昔、刷り物に出た娘番附の大關に數へられ、生前屢々、予が姉ではないかと人に訝しまれた美しい母親の顏は、白蠟の如く晴れ晴れとして淨らかであつた。

文句の末に拘泥する當局者の標準を以てすると、或は此のまゝでは低級の讀者に害ありと認められて、禁止の厄に遇ふかも知れない。何はともあれ、ちやうど警保局長の更迭のあつた際であるから、今暫く時機を待つて、出來得べくんば當局者の禁止に對する方針を聽いた上で、訂正する箇所は充分に訂正した後に發表したい、と云ふ事であつた。爾來此の原稿は一年に近く、校正刷りのまゝで空しく篋底に埋められて居た譯である。

予は從來、或る實在の人物をモデルにして、物語を書いた事は殆んどなかつた。故人は兎に角、現在生きて居る人間の經歷を書けば、書かれた人に取つて、迷惑する場合が多からうと思つて居た。況んや自分自身の事を忌憚なく曝露するのは、餘りに忍びない心地がした。多くの讀者から、予自身の生ひ立ちを書いた物だと信ぜられて居る「神童」や「鬼の面」なども、その實予の境遇に多少似よりの一靑年に假托して、予が胸中の傀儡を述べたに過ぎない。然るに此の「異端者の悲しみ」だけは、稍趣を異にして居る。周圍の人物は別として、少くとも此の中に出て來る四人の親子だけは、その當時の予が心に事實として映じた事を、出來得る限り、差支へのない限り、正直に忌憚なく描寫した物なのである。此の意味に於いて、此の一篇は予が唯一の告白書である。

予は此の一篇を、四五年前から是非一度書きたいと思つて居ながら、當時辛酸な日を送つて居た兩親に對し氣の毒に感ぜられて、長い間筆を執る氣になれなかつた。ところが一昨年、予の結婚の前後から、予の兩親は二十餘年の艱難の後に、善良な人間に適はしい報いを受けて、漸く順潮にめ

異端者の悲しみ

――亡き母の靈にさゝぐ――

谷崎潤一郎

はしがき

此の一篇は昨年の九月の中央公論定期增刊號に載せる積りで、その夏の八月に脫稿した。さうして旣に校正刷まで出來上つた時分に、突然、編輯局の一部から發賣禁止の惧れがあると云ふ意見が出た爲めに、當分掲載を控へる事になつたのである。

その意見によると、此の小說の根底には、予が筆に成る物として、珍しくも顯著なる道德的の情操が流れて居る。しかし、篇中の到る所に、親子の衝突が極めて露骨に無遠慮に描かれて居て、父と忰とが聞くに堪へない罵詈を云ひ交はす光景などは、やゝ深刻に過ぎるかと感ぜられる程に舒述してある。それ故、大體から云へば寧ろ世道人心を裨益する作品であるが、一行一行の

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

諸君見逃すべからざる

古文學の新研究出でたり

早稻田文學

古文學の新研究

■古事記論……三井甲之
■萬葉集の感味……窪田空穗
■西鶴小論……田山花袋
■芭蕉といふ人……沼波瓊音
■近松より得たる印象……五十嵐力

■メレジユコフスキイの二つの世界……吉田絃二郎
■大愚良寛——附録——相馬御風
■ワイルド追憶記……本間久雄譯

▽童馬漫吟　齊藤茂吉
▽初夏雜詠　島木赤彥
▽印度の指環賣　兒玉花外
▽道程　今井秀一

■戯曲 捕虜の家……秋田雨雀
■小説 白痴の子……鈴木悅
■小説 煙管の脂……福永挽歌
■小説 血達磨……榎本獨境
■小説 まなけ者……畑耕一

「最近思潮欄」

▼本誌の特色にして且つ興味ある—

■コンラットの新作
■アメリカの神秘畫家
■大革命後のゴリキイ
■ダヌンチオと米國の對獨宣戰
■ロシヤ樂壇近事
■出征美術家の保護
■岡田文相の訓示について
■裸體畫取締問題
■最近の劇書
■六月の評壇と創作界

『名殘星月夜』合評

●『名殘星月夜』に就て……楠山正雄
●『名殘星月夜』の行爲……島村民藏
●こゝろ覺へ……坪内士行

(中付二の四)

七月號　本號に限り　五十六錢　郵税三錢

東京神田表神保町
發行所 東京堂
振替東京二七〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

■洪大なる氣宇・無限の富力とを有せる米國の新研究此の一書に集中す■

著者は最近米國を視察して深く我日本の社會制度及教育の方法等大に革新せざるべからざるを感じ、米國の政治、教育、交通運輸、商工業の發達につき研究を遂げ本書を大成せられたり。其内容の斬新にして經世に益する實に大なるべし。

東京府立職工學校長
東京府技師
秋保安治先生著

最近之米國

總クロース函入菊判五百余頁
定價金二圓 送料十六錢

見本進呈

速に米國を學び國民の威力を養へ

日本國民の覺醒すべき時は來れり。戰後の世界は古き軍國主義を去つて經濟主義に移動すべきは云ふ迄もなし。偏狹固陋の舊思想を捨てゝ雄大なる新知見に據り輸贏を決すべきの時也。米國が諸種の施設に於て如何に大規模を以て企てつゝあるか、其國民が如何に大抱負を以て事に當りつゝあるかを知悉するは戰後に處する我國民の一大準備たるべし。『百萬』といふ語は米國人の凡てに對する單位なり。其の實力の洪大なるに想到せば誰か我國民の大奮勵大努力の急なるを感ぜざるものあらん。本書は米國の産業、貿易、政治教育は勿論日本と國情を異にせる美點長所等を説述特に國民的大活動の促進に努めたる如き眞に異彩とする處なり。一字一句之を精讀せば血湧き肉躍りて獨り志氣を興奮するのみならず數百の挿畫と相俟つて眼前米國活動の狀態紙上に躍如たり。眞に國民必讀の名著作よ。

發兌 東京市小石川表町一〇九番 日本學術普究會 振替東京二八一一六 電話小石川一〇四〇

の頭骨頭を誤つて居るかも知れぬ。然しながら彼は藩閥全盛の時代に於て、其の性格を鍛へ上げたものである。彼の隨從者、彼の喇叭卒が、如何に太く彼を吹き立てても、彼の生來に如何なるものが潜んで在つたにせよ、彼の立身出世が、個性其物の發揮に不便であつただけは、動かざること盤石の如き事實である。彼は、畢竟、一個の官僚家。官僚家の弱點に直に彼の弱點である。彼は國利民福の政策に關して、一言半句を公開的に發表した經歴が無い。彼は日本國民に對して、其の甚だ信頼すべき人格である事を印象するの機會を捉へずに居る。彼は今や頻りに狙つて居る。頻りに捉へんとして狙つて居る。而も彼の捉へんとして狙つて居るものは、其の眞に大政治家である事を有效に印象するの機會であらう乎、或は單に例の油揚に止まるであらう乎。

中央公論社の「電話番號變更」

本社所在地たる本郷西片町の電話は從來下谷局の所屬なりしも、七月一日より今回新たに設置せられたる小石川局に所屬替となりたる結果、本社電話番號は下谷九一九より

小石川一四四番

に變更せり。　右謹告す

の襲を行くものであつた。彼は其の反對者の戰慄であつた。而して遂に其の戰慄の高價なる犧牲となつたものが、彼の今日までの運命である。所謂海軍事件は、果して彼が直接の責任に歸すべきであらう乎。否、之を以て彼を政界より葬ることは、果して日本人の政治的常識であらう乎。時間は能く判斷する。大隈內閣の成績を以て、之を山本內閣の成績に比較せよ。其の長短得失は、最も鮮明では無い乎。而して公平なる歷史家の想像は、恐くは彼をして此の歐洲戰爭に臨ましめたならばと云ふの一事に及ぶであらう。然も、我等は山本伯の功過を論せんとするのでは無い。我等の主題は、伊藤子である。我等は單に伊東子の對照として彼を傭ひ來つただけである。

四

其の衆議院に於ける無勢力に於て、其の無勢力の結果として必ず衆議院の勢力と結ばざるを得ざるに於て、伊東子の地位は、其儘に、失脚前の山本伯の地位である。而も伊東子は、山本伯の後より來るだけに、後より來る者に適有の利便を有して居る。即ち伊東子は、衆議院外の勢力として、當時の山本伯よりも、其の同類間の競爭者を減じて居る。且つ其の衆議院の勢力と結ぶべき方法の如何に關しても、更に多くの實例に鑒むるの機會を有して居る。然しながら衆議院の勢力は果して其の注文通り、伊東子と結ぶを肯んずるであらう乎。單に伊東子の野心の爲に、伊東子に結ぶことは、果して衆議院の勢力として、採用すべき、採用せざるを得ざる、最善若くは次善の方策であらう乎。最後の問題は此の一點である。而して此の一點は現在政局の最難問である。

マグナ・カルタよりロイド・ジヨオジへの一足飛びを以て、必ずしも政治の理想と爲さゞるも、衆議院の勢力は其の駸々として登るに於て朝日の勢力であり、衆議院以外の勢力は、其の漸く沈むに於て、寧ろ夕日の勢力である。元老、貴族等諸君の勢力は、如何に今日に於て强大なるにせよ、元來固定せる勢力である。其の勢力の作用は、他の固定せる一切の勢力と同樣に、豫め之を測定するを得る。然も衆議院の勢力は、其の本質に於て、變動的、變動的であるだけ、それだけ多くの危險性が含まれて居る。衆議院は人氣に支配される。而して人氣は、政治上の潜在意識である。此の潜在意識たる人氣、此の人氣と衆議院の勢力、此の勢力と伊東子。其の間には、今や何等の關係が無い。是れ明に伊東子の弱點である。否、伊東子の政治的野心の弱點である。山本伯は其の出盧前に在りても、猶ほ睡れる獅子の如き面影があつた。少くとも日本海軍の隱然たる中心として、而して性格の人、强き性格の人として普く承認されてあつた。伊東子は今日まで殆ど表面の大立物となつた實例が無い。彼は此の點に於て、原氏よりも、犬養氏よりも、若くは加藤氏よりも實際的責任の輕き地位に立つた人である。一般の人氣に映ずる伊東子の面影は、怜悧な人、仕事の出來る人、細工の出來る人、立ち廻りの巧妙な人日先きの見える人と云ふ丈けである。社會は決して彼を經綸ある政治家とも、見識ある國士とも、德望ある人格とも思つて居ない。それ或は彼

▽伊東子の可能性

若宮卯之助

一

元老、貴族、及び衆議院。此の三權は、各々孤立した勢力である。一人にして此の三權を調和した實例は、今日まで只だの一回もない。元老に信用あり、貴族院に勢力あるものは、必ずしも衆議院の權威で無く、而して衆議院の權威は往々にして、元老及び貴族院の正面の敵である事がある。

今日までの日本の內閣は、其の形式の如何に拘らす、實質に於て、悉く一種の聯合內閣であつた。衆議院の權力と他の權力との聯合は、如何なる內閣に對しても、其の內閣の成立及び維持に對する第一の條件であつた。

此の條件は、當局政治家に取りても不便なる條件であり、國民多數に於ても不滿なる條件である。如何なる政治家も此の條件を除かんと努めざるは無く、努めざるまでも、希はざるは無く。如何なる輿論、如何なる輿論らしき議論も、此の條件の撤廢を要せざるは無い。

然も、事實は事實である。依然たる事實である。日本は、其の依然たる三權分立の事實に於て、地球上、唯一の國家である。

桂公は、此の三權を、一身に調和せんとして失敗した政治家であつた。西園寺侯も、其の結果に於て、桂公と同一の運命を追うた政治家である。

二

此の三權分立の事實の爲に、日本には眞に總理大臣の資格を具へて居ると看做さるべき政治家は一人も無い。山縣公は官僚閥の羅馬法王である。此の法王の勢力を以てしても、衆議院は遂に其の根場で無い。而して其の山縣公の衆議院に於ける無勢力は、他の一切の官僚政治家の、總理大臣としての不具の證據である。

三

伊東子は曾て自由黨の黨師であつた。而も其の性格に於て、經歷に於て、勢力に於て、彼は、到底、一個の官僚家である。彼は外交調査會の官僚的奇手に依つて、既に其の政治的野心の强かなるを廣告した。彼の手段は流石に練れて居る。彼の政治的出現、其の出現の觸れ出しは、山本權兵衛伯のそれよりも遙に巧妙である。然も、彼と山本伯とは、自然は好個の對照を成すやうである。

其の個性より云へば、山本伯は、今日まで、日本の生産した最大なる總理大臣の一人である。其の不自然なる、露骨なる手段の延長だけが、斯人に於ける斯病であつた。之を外にしては、彼は實に政治家らしき政治家であつた。其の宣言した所は必ず之を實行するに於て、實に男らしき政治家であつた。彼は政治の凡俗的一面を解せざるに於て、正に大隈侯

今や政黨界のパーネル黨たる犬養氏と、官界のパーネル黨にして政黨の略武者たる伊東子、後藤男と握手せり。永田町邊、初夏の柳葉靑き所、一團の鬼火漂ふの感あり、彼等果して如何に政界を打開し來らんとするか。

伊東子と犬養氏とは智慧道樂者なり、後藤男亦た計畫好きにして誇大妄想的性質を加味す。政界は是より物騷と相成るべく、見物は面白からん。

伊東子は手八丁口八丁の才人なれども、孰れかと申せば寧ろ批評家なる批評家として最も功蹟あるべし。然れば子は單獨にて事を爲し得ざる人物にはあらざるも、實行者の後ろに在りて參謀的役目を行ふを以て最も得意とせん。犬養氏亦た此の類の人物なり。唯だ後藤男に實行的素質ありと雖も立役者としては未だ貫目に乏し。彼等の目論見が智慧倒れに終らずんば幸なり。

世上頻りに巳代治內閣說あり。小生の考ふる所にては巳代治は勢に乘じて飛び出す程に好人物ならず。講和大使などは今度は名大にして勞少なき役廻りらしければ、或は喜んで之を受けんも、大使より歸りて更に步を進め、寺內々閣の後を窺ふが如き事は子の爲さざる所なるべく、勝つて兜の緒を締め直したる後、徐ろに後圖を策するの方針を取らんか。

後藤男は勢に乘じて長驅する豪傑なり。或は野心勃々たるものあるべしと雖も、犬養氏は自重するならんか。

或人は伊東子を許して憲法發布以後の第一人者となし、伊藤の明識と陸奧の機略と白根(專一)の膽勇と兼備したる大人物なりと爲せり。是れは過賞ならんも、兎も角子は一代の鬼才なり。

然れども小生の眼より見れば彼等の智や小智、彼等の略や小略、彼等の勇や小勇のみ。伊東子は年旣に六十一、犬養氏は六十四、所謂耳順の境涯にあらざるべからず。耳順とは何ぞや、天地の一切を自我に包攝して敵もなく味方もなき一視同仁の境涯なり。非我に對しての智、非我に對しての略、非我に對しての勇、此等抑も何かあらんや。智なくして智あり、略なくして略あり、勇なくして勇あり、無しと觀れば無し、有りと觀れば有る、是れ大智なり、大略なり、大勇なり。

心の欲する所に從つて矩を踰へざるの境涯は、是れ天地一切の大調和人格の大組織にして、唯我獨尊、渾然として融通無碍の大悟に徹底したる理想的大人格なり。孔子は七十にして此の境涯に達すと說きたれども强ち年齡を限定したるにはあらず、單に人格向上の階段を示したるのみ。小生は彼等に今數段の人格修養を勸め候。

瀧田老兄、以上は一夜のなぐり書きにて、伊東、犬養、後藤三氏に對し、禮を失するの言も之れ無きを保せず、玆に妄評の罪を謝するの意を表し置き候。

係に因る。

實に子は伊藤公に對して隨分我儘を働きたり。而かも伊藤公は能く子を用ゐたり。蓋し人間の寛大になる度合ひは地位の懸隔と正比例す。伊藤公は大天狗の大先生にして、子とは親子程に年齢も違へり。斯の如き間柄に於ては後進の我儘は即ちアマエルと云ふ事になるものなり。後進が我儘であればある程、却て先進は之を可愛い者に思ふものなり。世人多くは人の立身を見て、先進に阿附したるものゝ如く思ふと雖も、是れ皮相の觀察のみ。先進の引立てに依りて立身したる者の多くは、却つて先進と爭ひたる者なり。阿附して立身したる者を寧ろ例外とせん。

四

明治官界に於て薩長の間に介在し、主動的地歩を占んと試みて失脚したる者の重なる者を板垣、後藤、大隈の三雄となす。而して彼等は等しく退いて政黨に據り、以て薩長と對峙したり。即ち彼等は明治官界に於ける第三黨なりき。

第三黨たる伊東氏も亦た機を見て政黨に據らんとするの野心ありき。明治廿五年伊藤公の政黨を組織せんと企つるや、子は其の謀に與かりて東京日日新聞を井上侯の手より譲受け、以て新政黨の機關たらしめんとしたるなり。

此の企は明治天皇の御親翰に依りて沙汰止みとなりたるも、子は特別の思召を以て官吏の身分ながら新聞經營を許されたり。是れ子が樞密顧問官の地位に在りながら、新聞社長として濶歩し得たる所以とす。

日清戰爭後、子は辭表を提出したる事前に述べたる通りなるも、偶々遼東還附問題に國論沸騰するや、國を憂ふる者の安居する時に非らずとして自ら辭表を願ひ下げ、伊藤公と自由黨との間に斡旋して伊藤公をして其の宿論たる超然主義を放棄せしめ、自由黨と提携して以て戰後經營に大過無からしめたり。

是より子は自由黨の黨師として之を指導し、伊藤公を大節に政黨界に導き入れたり。井上侯は之を以て子が政黨に據りて野心を遂げんとする者となし、巳代治が増長すると言つて子を憎みたり。恰も桂公が政黨を組織するの際、後藤新平男が官僚の一部より惡聲を放たれたると相似たるものありき。

後藤男も亦た官界の第三黨なり。伊東子は其の覇氣を抑へ、薩長の下風に甘んじさへすれば官界に地歩を占むべき餘地は多かりしも、後藤男は兒玉伯の死後、心細さに堪へざりしなるべし。是に於て男は桂公の眼の黒き内に政黨を組織せしめ、其の遺産を貰ひ受けて以て政界に地歩を占めんとせるなり。

而して兩人共早く政黨に斷念せり。伊東子は伊藤公の政友會組織前、早くも政黨統御の困難にして功少なきを看破し、樞密院に據りて徐ろに實權を收めんと企てぬ。後藤男の同志會を去るや、伊東子の忠告が與つて力ありし事推測に難からず。伊東子は表面政黨に入らざりしも、是れ亦た實は後藤男と同じく政黨の落武者にあらずんばあらず。

其の代り、大隈周圍の豪傑多しと雖も、侯の面を侵して忠言し得る者は犬養氏一人なりと聞く、伊藤公に遠慮なく忠言したるは伊東子一人にはあらざりしも、子は其の中の最も激かりし一人なり。

曾て子は伊藤、山縣兩公の面前にて大隈侯を賞揚したる事あり。井上侯爵子側に在りて其の理由を問ふ。子答へて曰く『長州の先輩は女道樂はすれど男道樂を爲す能はず、大隈を見よ、早稻田に數千の子弟を養ふて、大々的に男道樂を爲しつゝあるにあらずや、是れ長州の諸先生の企て及ばざる所なり』と。兩公之を聞いて苦笑したりと申す。是れ一場の戯言に過ぎずと雖も以て子の風貌を察すべきなり。

日露戰爭中、伊藤首相は渡邊藏相を罷めて松方侯をして之に代はらしめんとし、松方侯に降し賜はるべき詔書の起草を子に命ぜり。子は憮然として伊藤に謂て曰く『渡邊は是より延びんとする若き男なり、若芽を摘むが如き無殘の事に關しては不肖筆を執るに忍びず、而かも職務上是非共起草の任に當らざる可からずんば、不肖は今日限り辭職せんのみ』と、如何に諭すも頑として應ぜず。伊藤公は去つて陸奥伯の門を叩き、告ぐるに此事を以てせしに、有繋は陸奥伯なり『巳代治は憎き生意氣小僧なれど、此事許りは彼の言ふ所に道理あり』と答へたり。

是に於て伊藤公は急遽自ら伊東子を訪ひ、我誤てりと子に詫びたり。子欣然として曰く『然らば不肖策を獻ぜん、遞相黑田は老朽用を爲さず、彼を罷めて渡邊を其の後任とし、以て松方を大藏に迎ふべきなり』と、有繋の伊藤公も此の妙言には呆れたり。其れも其の筈、當時の黑田伯は薩州の代表者にして、伊藤公と拮抗する者唯だ此の人のみなりしをや。而かも子は伊藤公を承諾せしめ、自ら使者として黑田伯に說く所あり、伯をして喜んで樞密院議長に轉ぜしめたり。蓋し子が事情を悉く打ち開けて、老人から段々と隱居して貰ひたしと述べたる率直の言は、却つて無邪氣なる薩南の豪傑を喜ばしめたるなり。

第三次伊藤內閣は子の周旋に依りて自由黨の援助を得、其の報酬として板垣伯を入閣せしむるの約あり。然るに井上侯の反對に依りて此の約を破るや、子は自由黨に面目なしとて決然農商務大臣の職を辭し、伊藤公が拜まん許りに引留むるをも顧みざりき。當時伊藤公は奥田義人氏を招致し『巳代治は餘り一徹者だから困る、書記官長時代にも、何かと云ふと直ぐに辭表を持ち出して散々吾輩を苦しめたものだが、モット氣を廣く持たなければ世の中は渡れね。吾輩も大久保と木戸の間に挾まつて隨分苦勞をしたものだ、君が巳代治に會つたら充分に忠告して貰ひたい』と語りたりとは、奥田氏が其の記錄を開いて小生の面前に讀みたる所に候。

瀧田老兄、小生が伊東子の爲めに特に茲に一言し置きたき事は、當時子の辭職が一二の新聞紙にて攻擊されたる取引所問題とは何等の關係なき事なり。尤も子自身は此の風說を立てられたるに憤慨して、自ら府よくすべく寧ろ身を引きて公平の批判を待たんと伊藤公まで申出でたる事實あるらしけれども、其は伊藤公の取り上ぐる所とならず、又た內閣にても何等の問題とならざりしは事實なり。子の辭職は實に自由黨との關

艦を予と共に沈むるは遺憾なり。予は一商船にて足れり、唯だ願くば陸海軍より一人宛隨行を乞ひ、文官の死樣を見屆けて貰ひたし」と言ひ、五月六日未明、陸軍將校一人海軍將校二人を伴ひ、横濱丸に乘じて旅順を發しぬ。

予が芝罘に入港したるは五月七日の朝、三國の軍艦は港狹しと詰め寄せ、盛んに石炭を燃きて西海艦隊を持受け居りしが、日本全權大使が商船にて入港したりと聞くに及んで、先づ腰を折られたる姿なりき。

予は午後二時に上陸して支那の全權伍廷芳と會見し、同九時を以て批准交換を行ふべく約したるが、同時刻に至り伍廷芳は本國政府の訓令なりとて、三日間の延期を申込みたり。然れども予は斷じて之に應ぜず、批准交換期限たる明八日午後十二時迄に交換を了せざるに於ては、直ちに引上げ歸國すべしと答へ、八日午後に至るや予は早くも荷物を船に運びて伍延芳の返事を待てり。

其處に日本政府より批准交換を二週間延期し、一旦旅順に引上げよとの訓電來れり。予は結局三國の要求に應ずるとしても、批准交換たけは期限内に了せざるべからずとて、種々の手段を用ゐ、最善の努力を盡しつゝありし時に、政府より延期の訓電を受け取り、匙を投げながらも尙ほ素知らぬ顔にて最後の時刻を待ちしに、十二時に先だつ事數分、伍延芳より會見を申込み、意外も意外、尋常に批准交換を了せり。

蓋し日本政府は延期の訓電を發したる後、急に三國の要求に應ずる事となり、支那政府は之を聞知したるが爲めに批准交換を行ひたるなり。日本政府も隨分泡を食ひたるものに候。是に於て予は陸奥外相に報復するの機會を得たり。予が歸朝するや其の鼻息窩るべからず、散々陸奥伯を罵倒して、辭表を伊藤公に送り、サッサと京都を引上げて東京に歸りぬ。

子が其の周圍に對する行動の無遠慮なりし事は、例を擧ぐれば尙ほ小生の知る所多しと雖も、紙面の都合も候事なれば、右にて一般を御推測有之度候。

三

世人多くは伊東子を以て巧言令色以て伊藤公の寵を得たりと思ふと雖も、是れ全く誤解に候。开は副島種臣伯が子を咏じたる一詩能く之を證す。曰く『慨慷倚雄劍、意氣跨長江、志遠靑雲表、身居白日中、論交肝短褐、爭議抗明公、憲法頒敷處、不言起草功』と、爭議抗明公と云ひ、不言起草功と云ふ、是れ寔に伯の御世辭にはあらざるなり。

子は藩閥諸豪の間に介在して、之を壓し去らんとする慨ありしと共に其の親分たる伊藤公に對してすら容易に許さゞる所ありき。子は自ら語つて曰く『予は一度も老爺(伊藤公)より金を借りたる事なし』と此の言甚だ意味深く候。

犬養氏も亦た『大隈より金を借らぬ』と云ふことを處世の掟の一つに加へたと云ふ。之れは大隈侯は吝嗇なりとの理由に因るとか聞けど、要するに弱點を作らざる用意なるべし。

も斷犬双方に種々の誤解を生じ、日露戰爭の宣戰詔勅を草するに及んで兩者の關係遂に破裂したり。而してポーツマス條約の樞密院に諮詢せらるゝや、子は三日間に亘りて痛烈なる駁論を試み、伊藤公をも手古摺らしたりき。詳しくは拙著『政界物語』を御覽下されたく候。

井上梧陰子と子とは喧嘩を以て始終したり。但し是は喧嘩と云ふ程のものにあらずして憲法上の議論なれば、私交に別條なかりしも、多少は感情の疎隔も生ぜざりしにあらず。畏くも明治天皇は兩人が爭論に日を送ることを聞し召され、兩人を仲直りさせよとて、伊藤公に酒肴料を下し賜はりたる事もありしとかや。而かも梧陰子の病に臥すや、彼に子爵を賜ふべく伊藤公に說きたるは子なりき。

陸奧福堂伯と子との間は格別に惡しかりき。日清戰爭當時は子は全く陸奧伯に排斥せられて氣の毒な位の待遇を受けたり。子は此の恨みを骨に刻みぬ。偶々三國干涉の來るあり。是に於て大評定は廣島の大本營に於て開かれ、子も內閣書記官長の身を以て席末に列したりしが、外相陸奧伯は病みて須磨に靜養せり。

何しろ一國の運命に關する重大問題なるが故に、誰れあつて口を開く者なく、滿座寂として胸の鼓動も聞ゆる許り、悽たる光景想像に餘り候、時に席末より大聲發言を要求する者あり。顧みれば是れ三十七八歲無髯の好丈夫伊東巳代治其の人なりき。

子は卓励風發の快辯を振ひて、事玆に至れば今將た何をか迷はん、直に三國の要求に應ずべしと述べ、具さに其の理由を論ぜり。蓋し是れ諸公の言はんと欲して言ひ能はざりし所、是に於て漸く口を開く者あり、海軍側にては此の上三國を相手に戰ふの成算なしと言ひ、議は大體伊東說に決せり。

然れども一應陸奧外相の意見を聽かざるべからずとて、須磨に打電して之を徵したるに、陸奧外相は兎も角三國に對して再考を求むべしと返電せり。之に對し子は『若し三國に再考を求めて聽かれざる時は如何にするぞ。再考を求むるは我に和戰兩樣の準備定まりたる後ならざるべからず。而かも既に戰ふの準備なくして尙且つ再考を求むる如きは、是れ國辱の上塗りを爲すのみ』と反對したりしも、結局再考を求むることに決したり。

果して三國の返答來らず、三國は戰鬪準備に忙はしき有樣、今は躊躇する暇なく、子は全權辨理大臣として軍艦八重山に坐乘し、一旦旅順に行きてそれより西海艦隊を率ゐ、芝罘に乘り込みて批准交換を爲さんとせり。

讀者老兄！　餘りにクダ〳〵しけれども、批准交換の光景を述べさせて貰ひたし。何故なれば伊東子は今や歐洲大亂の終局に際し、講和大使として派遣せらるべく世上に豫想せられつゝあればなり。

扨て子が旅順に着きたるは廿八年五月五日、實は其處より西海艦隊を率ゐて芝罘に乘り込む豫定なりしも、當時既に芝罘には三國の軍艦集まり、イザと言はゞ西海艦隊を包圍せんとの氣勢なりしを以て、子は『假令老朽せりとは云へ、一隻たりとも粗末にならぬ今日の場合、アタラ軍

子は藩閥の後援なくして藩閥諸豪の間に介在し、浮氣なる伊藤公の周圍を繞りて其の立身の地歩を開拓せんとせり。即ち子は官界の第三黨に候。パーネル黨に候。少數黨を以て多數黨を壓せんとする、是れ機略縱横の策士にあらずんば成功する能はず。瀧田老兄！犬養氏に酷だ似たる點あるを見給はずや。

二

瀧田老兄！第三黨が主動的地歩を占めんとするの野心なく、唯だ他の勢力に附隨して少しの分け前に甘んずるならば、智慧さいかくは要らず候。例へば芳川伯の如き、田中伯の如き、彼等も亦た藩閥外の出身なれども、彼等は常に藩閥の勢力ある者に附隨して、少しづゝ得たる分け前を丹念に貯蓄し、以て今日の身分となりたる者なり。

伊東子は藩閥の餘瀝に甘んずべく、餘りに氣慨あり餘りに野心ありき。犬養氏が少數なる第三黨を提げて、常に主動的地歩を占めんと苦心焦慮したる如く、子は渺たる閥外の身を以て、藩閥内の諸豪を壓せんと欲せり。子は明治十三四年より三十二三年に至る迄の間、影の形に添ふが如く伊藤公に附いて廻はり、梟の如く暗所に眼を光らし、蝙蝠の如く暮夜に飛びつゝ、凡そ政界の機密と云ふ機密には悉く參畫したり。既に其の立身の經路が、局長次官より順次に成り上りたる屬僚と撰を異にせり。子が秘書官、樞密院書記官長、内閣書記官長等に歴任したるは、單に伊藤公の側に居る便宜の爲めの役目たるに過ぎず、實際の仕事は常に伊藤公の顧問なりき。

子が内閣書記官長時代の如き、伊藤公は總理大臣の仕事の大部分を子に一任し、内閣諸大臣は子に呼び付けられて唯々として命を聽き、或は教を乞ひたりき。功名の野心燃ゆるが如く、智慧道樂の癖ある子が、此の間に於て如何なる感情を其の周圍に與へたるべきや推測するに難からざるなり。

保安條令發布當時の如き、子は警視廳に怒鳴り込み、藩閥の豪傑三島總監を捕へて其の不法を詰り、大聲叱咜、彼に辭職を勸告したる爲め、政府部内に大悶着を生じたる事もありき。

井上侯の條約改正の際の如きも、子は伊藤公の命を受けて、内閣會議の席上、完膚なきまで改約案をケナシ付け、爲めに井上侯の深刻なる恨を買ひたり。

爾來井上侯と子との間は漸次に疎隔し、日露戰爭中、子の所有せし東京日日新聞に井上、松方兩侯に對する一寸した惡評を書きたりとて、兩侯は年甲斐もなく連名にて子に絶交狀を送れり。是より先き子は該新聞を加藤高明子に讓り渡すべく、契約既に整ひたりしが、是に於て子は加藤子に交渉して引渡しの期限を延期し、新聞の全力を擧げて兩侯と喧嘩せんと決心し、加藤子も之を諾したるが、其處に時の首相桂公が仲裁に出でゝ僅かに和解するを得たり。

而かも最初兩侯を煽動したるは桂公なりしが如し。第一次桂内閣成立に際しては、子の應援少からず、桂公は子を顧問と仰ぎたる有樣なりし

實は小生も伊東子と面會せざりし以前は、老兄と同じく多分好い心地はせざるべしと思ひたりき。伊東子は最近十年間、絕對的に新聞記者を引見せず、世人の印象に殘るものは、曾て子が內閣書記官長時代に振ひたる剃刀の如き手腕のみなるが故に、敢て老兄のみならず、世人の多くが子を狹隘にして陰險なる例の官僚式人物と想像しつゝあるが如し、之れ强ち無理ならぬ事に候。

併し乍ら、何人と雖も彼と一度び面會せんか、意外の感に打たれざる者なかるべし。其平民的にして腰の低き事、其御世辭のよくして人をそらさぬ事、其談論の野人的にして勿體ぶらざる事、小生が曾て面會したる多くの老政治家中彼れの如きは殆んど稀なり。

去ればとて、彼は親しみ易き人にても無之候。應對の如何にも快活にして人をそらさぬ處あるに拘はらず、何となく打ち解けにくき心地致し候。何故にと問ひ給ふとも、小生は之れに答ふる能はず。强ひて說明すれば、才氣言に溢れて、此方の頭髮まで數へつくさるゝかの感あればなり。實に一分の隙も見せぬ人に候。

此人にして盆栽を弄び、書畫刀劍の道樂を有すとは意外に候はずや。子の書齋盎雨莊を訪へば、數千鉢の怪幹奇梢庭に滿ち、書畫刀劍は處狹き迄座側に積み重ねられ、主人は箱書若くは盆栽の札書きに忙がはしきを見るべし。而も一度び膝を交へて談ぜんが、才鋒そゞろに人を襲ひ、何處に盆栽を弄ぶの餘裕あるかを疑はしむ。

瀧田大兄、前號に掲げられたる小生の穴探評を御覽ありしや、小生は

犬養氏の趣味を以て美的趣味に非ずして智的趣味なりと申したり。此の評論は其のまゝ伊藤氏に適用し得べく候。實に彼の盆栽、書畫、刀劍の道樂は、之を研究し批評するの趣味に候。

彼が政治的生活にも亦た犬養氏と同じく、智的趣味の多きを發見すべく、智を弄して獨り衒かに喜ぶの風有之候。智慧自慢、智慧道樂、弄智趣味とも申すべきか。子は智者なり、其の智を國家の必要に應じて使用すれば、實に國家有用の材なりと雖も、動もすれば弄智趣味の魔道に陷りて、必要以上の智を出し、爲めに思ひも寄らざる敵を作る事あり。

子は冗談も理詰めの冗談が好きなり。嚥飮にも機鋒を示さずんば止まざるなり。犬養氏と酷だ相似たらずや。犬養氏を官界に置かば子の如くなりしなるべく、子を政黨に置かば犬養氏の如くなりしなるべしと思はるゝ點頗る多し。唯だ犬養氏は感情に强けれども子は徹頭徹尾冷靜に、犬養氏は陰氣嗅けれども、子は快活陽氣なるを異れりせん。

子が伊藤周圍の殆んど凡てと仲が惡かりしこと、恰かも犬養氏が大隈周圍の殆んど凡てと仲が惡かりしと相似たり。子は井上世外侯と惡しく井上稻陵子と惡しく、陸奧福堂伯とは殆んど仇敵の觀ありき。而して子が彼等を憎みたりと言はんよりは、寧ろ先づ彼等が子を憎みたるが如し。憎みたるもの是か憎まれたる者非か、小生は寧ろ憎みたる者の狹量を嗤ふ者に候へども、憎まれたる者にも亦た罪なしと謂ふ可からず。子の智慧道樂は其の豫期せざる敵を作りたるなり。瀧田老兄！犬養氏に酷だ似たる點あるを發見し給はずや。

である。

◎尤も今度の講和談判は日淸日露の際の談判とは事が違ふ。李鴻章に對しては伊藤公や陸奥伯は高を括つて應待した。然し小村伯のウイッテに對するや多少彼に飜弄された傾がある。何にせ歐米の政治家は、第一人間として比較的完全なる修養を積んで居る。况んや今度の講和會議には英吉利ならばロイド・ジョーヂとか、バルフォーアとか、佛蘭西ならばブリアンとかデルカッセとか、兎も角も第一流の人物がやつて來る。之に比較すると我伊東子の如きは、どんなに日本の小天地で威張つて居つても、人物としての大小は素より比較にならぬやうに思ふ。東洋流の禪的修養を應用して、空元氣で會座の茶を濁すやうな考で今度の談判に臨まんとするのは大なる誤りであらう。どんなに決死の覺悟をしても無い智慧は絞れぬ。明治廿八年に帝國の使命を辱しめなかつた伊東子爵に、果して大正六七年の今日、生れて初めて踏む歐米の大舞臺に出て、立派に日本帝國を代表し果ふせるの自信ありや否や。

◎彼の史務に長ぜる事は天下の公論である。然し彼は未だ經國濟民の大抱負を示した事け無い。彼が樞密院によつて隱然たる一大勢力を有つて居る事も人の知る處であるが、併し彼は德を以て萬民の仰望を博した事は無い。彼は奇策縱横の才を發揮して、常に官僚政治家の顧問の格を有つて居るけれども、併し彼の策たるや多くは國家民人の利害休戚に關する實質問題に觸れずして、唯政黨諸勢力の利用按配の末に奔るといふではないか。彼は長く政界の表面に立たないけれども、然し常に黑幕の中にあつて何等か畫策して居る人である。造次顚沛も唯は居らぬと人は云ふ。併しながら彼は今日まで實質的に國家を進歩せしめ、人民全體の利益になるやうな何物を殘したか。日本憲法の起草以來百世に亘つて其恩を感ずべき何等の事業計畫が彼の頭腦から湧き出ない。彼は聰明である。而して此聰明をどれ丈け國家の爲めに利用して居るかは一つの問題である。予輩は彼の人物の輪廓がいろいろの點に於て大政治家たるの素質に富むを見るも、唯一つ重大なる缺點の掩ふべからざるものあるを遺憾とする。現代式の政治家として見るに、龍を畫いて睛を點せざるの憾がある。彼にとつては非常に惜しむべきである。予自身としては此種の政治家は大嫌ひだ。

▽伊東子と犬養氏

前田蓮山

一

瀧田老兄、先夜は失禮致し候。其折老兄は伊藤巳代治子より初對面に於て受くべき印象は何んなものなるべきか、一口に言へば惡感を催ほす可きか、快感を催す可きかと云ふ事を質問せられたりき。而して大兄は窃に惡感を催ほす可く豫期し居らるゝが如き口吻の相見えたり。これに對し小生は『感じが好過ぎます』と答へ置き候。

〱の斷案を下し、斯くして今日の憲法が出來上つた。故に今日此頃憲法問題に關して起る所の各種の異說、今更らしく唱へらるる所のいろいろの說の如きは、已に三十餘年前に彼の頭腦に解決し盡したるものである。尤も所謂彼の斷案なるものが正鵠を得て居るや否やは別問題である。又三十餘年以前に解決して了つたと誇り、昨今新たなる時勢に應じて起る所のいろ〳〵の問題を、新たなる意味の上に觀察研究するを怠るならば、彼の爲めに取らざる所なれども、要するに彼が偉大にして綿密なる頭腦を有する事は疑ないやうである。加之彼は又實際の仕事も出來る。大體に於て大局を見るの明がある。所謂純然たる刀筆の吏ではない。政治家としての素質にも富むのであらう。斯く考へて見れば彼は又當世に於て得易からざる人才であるけれども、然し畢竟彼の才能はインテレクトの以外に出でない。今迄の成績によつて之を斷ずるに、彼を循吏の好典型として見るは人多く異議なからう。未だ大政治家を以て許す事は出來ないやうである。若し當世に於て彼の類を求むれば、吏才に長ずる點に於て、又吏人として普通のレベル以上に傑出して居る點に於て、原敬がやゝ之に似て居る。但し原には伊東ほどの學問があるまい。仲小路の如きは恐らく伊東を學んで遙かに及ばざるものであらう。大人に缺くべからざるゆつたりとした襟度を缺く點はどれもこれも同一である。

◎伊東子爵の人となりを論ずるもの、動もすれば日清戰爭講和條約批准交換の爲め芝罘に使した時の始末を擧ぐる。露・佛・獨の軍艦が儼然として我々威壓して居る中へ飛び込んで、日本國の面目を辱かしめなかつたといふ事で彼の人物を讃へるが、然しこんな事は彼が普通の人間よりも少し修養を積んで居つたといふ事を證明するに止まつて、政治家たる彼の價値を幾何も加ふるものでは無い。此位の事は決死の覺悟さへあれば誰でも出來る。使命を辱かしめなかつたと云へばエラさうに聞えるけれども、辱かしめなかつたからとて日本國民の幸福が增すでもなし、使命を辱かしめたからとて國民の幸福が減ずるでもない。單に既定の事實を體裁よく始末したといふ丈けの話で、多少の軍人的勇氣があれば誰でも出來る。と云つたからとて敢て伊東子爵を貶す意味ではない。こんな事を以て伊東子の政治家たる所以を讃めるものがあるから、其態度を非とするのである。例へば今度の戰爭の講和談判の際でも、誰を使節として派遣するかといふ問題に、伊東ならば歐洲各國の大政治家と比肩して使命を辱しめないだらうなどゝいふ。伊東子が此役目に適するや否やは自ら別問題であるけれども、若し大政治家の仲間に行つてピク〳〵せないとか、度膽を拔かれないとかいふ丈けで彼を適任者なりとするならば、國民の考が間違つて居る。もつと實質的の經世的眼光と、又國民の利害休戚に關する實質的經綸のある人物でなければならない。講和會議に於て何を主張すべきやの實質的政見の如何を問はずして、唯講和會議に於て如何に日本の立場を代表するやの形式の方面丈けを見て、使節の何人たらしむべきかを定めんとするが如き態度を非とするものである。伊東子に此實質的政見が無いといふのでは無い。唯世間が彼の形式的方面に長ずるの故を以て伊東の名を喧傳するが故に、一言其蒙を啓かんとするの

や泥土に委されたる憲政の神の御神體は、恐らく永久に再び祭らるゝ機會來らざるべく、十五年目に漸く表面の立役者として、舞臺上に其大手腕を揮はんとの大野心家は、忽ち觀客一同から『引ッ込め』の嘲笑を浴びせられて、再び元の黒幕内に最後の役目を承るに至るべきは、今より殆んど豫想に難からぬ處である。

△機會だにあらば消えて亡せんと、之れをのみ狙ひ居る者、能う迄無理に引出して躍らしめんと焦慮する者、此暗闘は觀客としては實に興味ある大歌舞伎劇であるが。斯く各人自己本位の權謀術數に餘念なき醜態を繼續しつゝある間に、世界の政局は時々刻々回轉し行くことを思ふと、國策樹立は愚か『臨機啓沃』の詔勅に對して、實に畏れ多い話と云はねばならぬ。

▽伊東はエライ、然し嫌ひだ

一政論家

◎今度の外交調査會は伊東子爵の仕事だといはれて居る。去年の夏の三浦邸に於ける三黨首會合の筋書の作者も伊東子爵だといふものがある。彼は樞密院の幕の陰に隱れて、平素後藤や田などを操縦して居るといはれて居つたが、前の話から見ると三浦將軍も或は彼の下働きかも知れない。何れにしても彼は一代の傑物たるを失はぬが、外交調査會設置以來再び政界の表面に乘り出して、操觚家の筆の尖に弄ばれ出した。

◎然し予輩はどう考へても、伊東子爵を現代の政治家とは思へない。況んや將來の政治家としてをや。彼の全盛時代は故伊藤公の下に内閣書記官長をして居つた頃であらう。官長の地位に在つて、他の諸大臣を睥睨した所から見れば、何處かエライ所があるに相違ない。それにも拘はらず其後長く表向きの政治家になり得ずして、黒幕の陰でどんなことをして居つたか知れぬが、畢竟過去の人として終つた所を見れば、又政治家として何處か缺くる所あつた人に相違無い。

◎何處が彼のエライ所かは、彼に逢つた事も無い、又特に彼について知る所無き予輩は全く之れを知らぬ。唯密かに聞く所によれば、彼は要するにインテレクトの人である。中にも吏人としての才能を極度まで發達せる人であらうかと思はるゝ。彼は第一頭腦がいゝ。一を聞いて十を知るの明がある。我日本憲法の如きは伊藤公の作つたものとなつて居るけれども、要するに大綱は彼の頭腦から出た。日本憲法の起草には故井上毅、金子堅太郎等の關係者もあるけれども、金子子爵の如きは附屬法規たる選擧法位に關係し、憲法其物の大綱は殆んど全部伊東の頭腦から出たと聞いて居る。井上毅氏は唯伊東の頭腦に出來たものを立派な文字に書き表はしたに過ぎない。彼は伊藤公に隨行して、憲法事項調査の爲め歐米に漫遊した際、彼地碩學の講說を聞き、即座に筆記した英文のノートの如きは實に立派なものであるといふ事である。歸朝後憲法制定の問題に携り、そして將來に起り得べき凡ゆる問題を豫想して、之れにそれ

は、如上の兩氏と全然其立場を異にして居る。平田子は單に寺内首相に義理立ての參加承諾者。原氏は先づ兎も角入つて置こう、併し肝腎の場合は斷じて責任を負ふことは御免であるとの底意堅く。牧野男は曾て外務大臣の印綬を帶びたることある經驗者、外交の事が多人數で協議して何が出來るか位は、先刻承知の玄人である。只加藤子參加拒絶の結果、一名不足との事に、無理の勸說拒絶も出來ぬ爲め參加したと云ふ迄の事、初めより其成果に何等重きを置いて居ないのは明白な事實。

△又閣員中にも、寺内首相は効果があれば之れに越したることなく、兎も角對支問題にては散々の失敗せる今日、其結末なりと曲なりにもつけ得れば結構である。如上の當て事總て外れるとしても、差當り政黨操縱の上には此上もなき好都合、何れにしても内閣としては利益である。此爲めには多少の不面目位、又忍ぶも致方なしとの極めて御都合主義より此計劃を贊したるものなるべく。陸海兩相は實はどうでも好いが、併し員に備はる位は損にもあるまじと、極めて氣のなき心底想像に難からぬ。只後藤内相のみは、將來伊東子、犬養氏と聯絡を取り、政界馳驅に便せんとの野心を包藏するの人、閣内にありて飽迄寺内首相に重要機關扱ひを力說する役廻りである。本野外相は師たる伊東子の熱心と、一方外交失敗の直接責任者たる關係上、之れ又熱心派の一人たるは當然である。されど顧みて自身の不面目問題に想到すると、直接責任の衝に當り居る丈けに、内心甚だ忸怩慚愧に堪へぬことは、外間からも想定し得らるゝのである。

（四）

△斯く各人各樣の思惑ありて、到底根本的に統一融和不可能なる大立物のみを一堂に集む。幾度會合し、幾回凝議するも、結局小田原評定に終るべきは、識者を俟つて後知るべきことでない。現に政友會の幹部連中、異口同音に公言して曰く『伊東や犬養に道伴れされて堪るものか、我黨には歷史あり地盤あり、政界の際物師や魔術師に操られて、我黨亡ぶの時、地下の先輩知友に對して、果して何の面目あつて政治生涯を續けられやうか』

△即ち伊東子、犬養氏は、之れを機會に深く結んで政治界に强固なる大勢力を築き上げんとし、政友會は今より相警めて、其道具に使用されぬ用心又堅固である。原氏は成るべく此調査會を有名無實のものたらしめんと逃げ廻るに腐心し、伊東子、犬養氏は、何處迄も實權を其掌中に收めんと努力して居る。平田子、牧野男は、別に原氏の如き底意あつてにあらねも、調査會其物本來の性質として、實際權力を握ること到底不可能なるを自覺し、傾向は自然原氏の方に同ぜんとの形勢がある。

△如上の内容解剖より來る結論は、一言にして盡く、曰く『何等成果を得るに至らず』之れである。犬養氏の伊東子に依りて、政界の一方に新生面を開かんとの希望も、終局は畫餅に歸する外なく、又伊東氏の歐洲戰後の媾和全權特使も、十中八九先づ駄目と踏むのが順當であらう。然ひには責任回避に腐心努力しつゝある原氏が、最後の勝利者となり、今

即ち政治家として是も尊ぶべき德望の一點に至ると、遺憾ながら之を認容するものは極めて稀少であらう。極言すれば恐らく絶無と稱しても、餘り甚しい反對はあるまい。好く譎逆の言葉に『不德』といふ文字を使用するが、若し伊東子が此文字を使用する場合ありとせば、譎逆にあらずして、世間は之を自白の意味に取るであらう。

△要するに百能餘りありて、只一點を缺くの傑物と稱するが至當なるべく、或る人が之を不正直な石田三成と評して居るが、洵に以て至言と云ふべしである。即ち子は飽迄も黒幕内の偉才達人で、決して表面大舞臺に乘り出すべき適任者ではない。伊藤公の帷幕に參してこそ、有能有爲將さに正宗の銘刀に價したが、愈々寶をつけて舞臺に現はるれば、觀客が皆馬鹿に見へて、終ひ自らも脱線する俳優である。曾ては政友會の黨師たり、今は本野外相の顧問役たることが、子の最も適才適所で、彼の日清戰役後の媾和使節として、其手腕を振ひ得たる如きは、畢竟するに伊藤公、而して陸奥伯、此兩大政治家を上に頂き、思ふ存分其才能を發揮し得た爲めである。自ら總帥として責任の衝に當り、尚且つ此大芝居が打てると自信するが如きあらば、夫れは智者にも似合はぬ自惚の骨頂である。

(三)

△併しながら今や黒頭巾を脱し、愈々本舞臺の俳優として乘り出したのである。臨時外交調査委員！、而も『側近』の文字あり又『應機啓沃』の有り難き上諭を添へて公布されたる官制の下に、親任官待遇の重任を辱うした今日に在りては、最早帷幕内の傑物では相濟まぬ。黒幕内の後見役では居られぬのである。抑々此内閣以外に別に外交内閣を創造すべく萬事法制上の智慧を藉したのは伊東子である。漠然たる意味に於ての發案者は三浦子であらうが、之を組織立つた官制に作り上げたのは、何人も疑はぬ伊東子である。要するに三浦子の發案、犬養氏の協同運動で、最後の具體的成案は、伊東子の手に作られたのである。之れを寺内首相に勸め、山縣公以下元老連、其他重立者間に勸説之れ力めたのは、云ふ迄もなく三浦子であるが、玆にも伊東子が帷幕内の謀士役は、遺憾なく發揮されて居るぢやないか。

△扨愈々本舞臺に乘り出した今後はどうか。第一加藤子を逸したのは、國論統一、國策樹立の大看板丈けに、最初から出來損ひの批評は甘受せざるを得ない。出發點に於て既に半其目的は外れて了つた。併し夫れでも委員十名、成るべく意見を統一して互讓謙抑、只管其實果を收むるに誠意誠心あり、調査會其物を眞面目に利用有效ならしむる、各自の一致觀念だにあらば、例令出來損ひの跡があつても、亦一面からは國家の爲め有利有效との辯疏も立つが、委員各自の間に、既に根本意見の大間隔がある。

△伊東子、犬養氏は、全く外交内閣たる實權を其掌中に收め、内閣に命令して議決結果を實現せしめんとの底意である。否な、元々其計劃方針から此調査會を設置したのである。然るに他の委員、即ち閣員以外の三氏

△其外に參謀本部の對支外交、軍令部の對支外交、後藤一派の學者閥を顧問とする對支外交、寺內首相直系組の對支外交。而して所謂支那浪人組は、其各派に分屬して、互に暗中飛躍を試みつゝあることは、天下周知の事實で、色々內情を詮索立てすると、實に百鬼夜行の圖其儘と云はねばならぬ。日支親善の、對支根本方針確立のと、表面の理屈は洵に結構だが、事實は斯樣に支離滅裂、之れで前內閣の對支外交失敗呼ばゝりは實に片腹痛いとも何とも云ひ樣がない。單に片腹痛い丈けなら、冷笑しても濟む話だが、其國民を愚にし、國家に禍するに至りては、全く冷笑や嘲言で濟まされぬ大問題である。

(二)

△話は少し橫道に外れたが、伊東子は現代政治界に於て、實に大先輩である。故伊藤公の智慧袋又補佐役として、其帷幕內に謀を獻じ策を樹て世に巳代治大臣と稱されて、事實大臣以上の權力を振つたことは、今更ら云はずと知れた政治界の消息。爾も愈々表面上に乘り出して、閣臣の位置に据つたのは、第三次伊藤內閣の明治三十一年一月、農商務大臣の印綬を帶びた時が夫れである。

△當時の閣僚の顏觸如何と見るに、外務西德二郎、內務芳川顯正、大藏井上馨、陸軍桂太郎、海軍西鄕從道、司法曾禰荒助、文部西園寺公望、遞信末松謙澄で、井上、芳川、西鄕の三老は兎も角、他の桂、西、曾禰、西園寺諸氏とは、全く同一位置の閣僚であつた。而して當時內閣の施設政策、多くは伊東子の方寸より出でしやの內情にあつたことも、亦疑ひの餘地のない程であつた。

△伊東巳代治大臣、愈々眞物となつて僅かに四閱月、其權力隆々たる際に於て、止むなく失脚せねばならぬ不祥事件が起つた。吾人は是れ以上に記すことを好まぬ、單なる政治的意味の失脚ならば、公々然之を抉剔して毫も差支ないが、苟くも問題が個人の私德に立ち入ることになれば之を遠慮するが筆持つ者の德義である。兎に角問題に引いて、伊藤內閣の信用如何に關係する事件となつたのである。依りて子は其職を去り、之を金子堅太郎子に讓つた。

△其後西園寺侯、桂公屢々總理大臣として內閣を組織せしに拘らず、有能有爲自他共に許す伊東子が、蟄居十有五年、僅かに樞密院の一角に其勢力を振ふ外、殆んど現代の政治圈外に葬り去られたる觀ありしは、要するに此農相在職當時の祟りと見るが至當であらう。時に宮內大臣たらんとする野心ありとか、隱忍以て他日首相の位置を狙ふとか、世間に忘れらるゝ時分には、チョイ〳〵世評の噂に上ることあるも、當時の事情に通する老政客並に貴族院の間には、斷じて斯る重責に任ずべからずとの、全く感情好惡觀念を離れ、誠意熱心の餘に出でたる、濃厚の反對空氣が彌漫して居ることは事實である。

△手腕、技倆、才能、頭腦、如何なる方面から見ても、現代政治界の大立物たることは、世間に恐らく異論はあるまい。否な當代の官民各階級の政治家中、子の右に出づるものは殆んどあるまいが、肝腎の人格問題

の囑目してゐた巳代治君が、永い間の雌伏から突然雄飛して、其の重要なる一員として調査會に泛まれると云ふ事は、寔に我意を得た事である。世間では調査會は伊東君の對策と云ふが、さうかも知れない。君を寺内内閣の後援者に擬するものもあるが、之れ又可能的である。伊東君は餘り早熟すぎたので、中途大器晩成と悟つて今日まで假りに世を捨てゝ居たのかも知れない。我輩よりも半年早く官界を引退した伊東君が、今日再び若返つて世に出たのを見ると、我輩にも亦再び花の咲く時節が到來するかも知れないと思つて、大いに人意を強くしてゐる。

▽黒頭巾を脱いだ伊東子

川尻東馬

（一）

△舊劇の舞臺には、變な黒頭巾を被つた、俗に黒ン坊といふ奴が附物である。觀客から云ふと甚だ眼障りだが、無識なる彼等歌舞伎俳優は、此黒ン坊なしでは到底芝居が出來ぬ。各自渡された書拔きを暗んずることは、彼等に取りて迚も出來兼ぬる相談を持ち込まれたと同樣である。即ち舊劇には、必ずなくてならぬのは此黒ン坊で、舞臺に現はれた俳優から見ると、全く盲人の杖、老人の眼鏡である。

△現外務大臣本野一郎子は、東洋問題殊に支那問題に就ては、殆も如上の歌舞伎役者である。否な歌舞伎役者は、演藝に就て確かに技術熟達を有して居るが、本野外相に至りては、此技術熟達さへも缺いて居る。切言すれば新派俳優の而も大部屋格で、未來永劫一枚看板には昇進出來ぬ代物である。是に於てか黒ン坊の必要は、益々之を感ずる譯ではあるが、伊東巳代治子は、外相就任當時から、霞ヶ關主人の黒ン坊役を承つたのである。伊東子は智謀もあり、手腕もあり、事務的才幹もあれば、頭腦も極めて明晰、別けて機略縦横、論理明晰、當代政治界第一の才物として、自ら許すは勿論、世間も亦多く之れを首肯し認識して居る。

△併し如何な才物でも亦達人でも、自ら其智識の範圍がある、見聞に局限がある。當代第一流の政治家でも、學術問題に於ては、一介の書生にも及ばざるが如く、伊東子如何に智能あり手腕あり、又頭腦明晰、才氣煥發とはいへ、不知案内の事は又如何ともすることが出來ぬ。況して支那問題の如き、常識の判斷不可能なるは云はずもがな、實際其内情に通ずると、自らも信じ世間も之れを許す、所謂支那通でさへ、前途を豫測するは危險であり、又斷言するは愚かなりと迄極言する。見越不可能の問題に對しては、其人怜悧なればなる程、危險を感じ不安を思ふ程度の高いのが當然であらねばならぬ。斯て伊東子は黒頭巾の又黒頭巾役として、南滿地方駐劄の某領事を手に入れて居たのである。現に其職にあるから、其姓名丈けは遠慮するが、要するに霞ヶ關の對支外交なるものは斯の如き不可思議な順序と手數をかけて、發案もすれば行動もして來たのは事實である。

むを挾まずに、實際日本全國の人を代表するに足る人物を物色して、之れに全權を與へなければならぬ。所が現在の日本の有様はどうだ。成程貴婦人の機嫌を取る事の上手な、舞踏の巧い、服裝やお化粧に秘術を盡くす所謂霞ヶ關流の外交家はあるが、列强の使臣と樽爼の間に折衝して能く使命を辱かしめない底の人物は、此二人者を除いては一人も無い。斯う信じたから失脚者と唄はれ隱遁者と呼ばれる此二人を敢て推薦した次第であつた。山本權兵衞は姑く措いて、伊東君程の男が世の中をどう拗ねたか、金の溜るのを樂しみに盆栽に浮世の事を忘れて何も爲ずに居るのは、人物經濟の上から云つても不經濟の事だと思つて居た。所が今度外交調査會が設置されて伊東君が其有力なる委員となり、而かも該會の設立は主として伊東君の斡旋によると云ふ世間の噂を聞いては、我輩は之れある哉と思はざるを得ない。どうもあの儘埋れ木になり切れる男でもないし、ならせてはそれこそ不經濟だ。

世間では伊東君を大變老年のやうに思つてゐるが、之れは伊東君が餘り早く立身出世をしたからである。年から云つても六十は越してゐるが後藤内相より一つ位上で、松室致よりも遙かに若い。松室が三十面を下げて、未だブツタを片手に大學で勉強中には、伊東君は既に伊藤總理大臣の秘書官として時めいて居た。世間から老人のやうに思はれるのも、畢竟此人が早川と同じやうに早く世に出過ぎて、三十一二で勅任官になり四十一二で農商務大臣になつたりしたから、然う思はれるのである。第一次桂内閣の時、桂が伊東君を内務大臣に擧げて智慧を借り、後難ながら總理大臣の任務を全うしやうとしたが、伊東君はどう拗ねたか眞平御免と拒ねつけで、以來政界を去つた。桂の内相をしてゐたら、爵位も侯爵位にはなれてゐたらうし、内閣も一度や二度位は引受けて居たらう。あの時拗ねてから、それ以來永く埋れ木の生活を送つて來たから、石井菊次郎や内田康哉と同じやうに大臣子爵になつて居る。然し子爵は同じ子爵でも、又同じく前の大臣は大臣であつても、神樣の眼から見れば、石井前の大臣や内田君などは伊東君の比較になるものではないと思ふ。

伊東君は正則に學校　踏んで來た人では無い。少給の官吏から叩上りに出世した人である。然かも大學出の　學士と比較したら、法律の素養でも英佛語の造詣でも遙かに深い。然し此人の天才は何と云つても外交である。大政官權大書記官以來外交の事務に與つてゐて、條約改正には關係こそしてゐないが、伊藤公を助けて隨分力となつたものである。明治二十八年芝罘換約の時には特派全權大使として出掛けて、例の露・獨・佛三國の强迫的行動に聽せず使命を果して來た。子飼ひから養成された外交家などの企て及ばぬ處がある。大發明をする人、大學理を創說する人は必ずしも大學を卒業した人ではない。エヂソンの如きは電信の技手から出て、世界の文明に貢獻する程の大發明をした。エヂソンは渺たる技手で、大學を出て學位を取つた人ではない。即ち天才である。伊東君も能く之れに似て居る。然う云へば伊東君も電信の技手であつた時代もあるさうな。

外交調査會は兎も角も最も機宜に適つた機關である。而して多年我輩

すが良いのだ、若し婚嫁するとしても、公卿や大名の馬鹿殿様に添ふが良いのだ、活きた世の中に活きた働らきをする有爲の人物の所へ、御殿女中が來ても、周圍の事情が之に釣り合はない如く、伊東子が内閣總理大臣となるのは、周圍の空氣に釣り合はない、今は二十世紀の新らしい活動的の世界で有る、樞密院の時勢遲くれの老爺と茶を飲んで居た伊東子は、如何にエラくても其の一種の臭氣が國民の鼻に快よい感覺を現はさない。

彼れが外交調査會の一員となつたのは、其の半身を國民の前に現はした樣な者である、犬養毅君と馬車に合乘りをした圖は、犬養君が其の半身を雲中へ隱し、伊東子が其の半身を雲中から現はした所だ、或る皮肉な男が、此の事件を評して『狐と狸の合乘りだ』と言つたさうだが、狐と狸と合乘りをして、種々の相談をして、更らに國民を騙(たぶら)かさんとしても、なかなか其の手は喰ふまいと考へる、我輩は伊東子の爲めにも我が憲政の爲めにも、彼れが今其の胸中に描ける非望を中止せんことを望む者で、國民は閥族の正系たる寺内内閣に向て、反對の突貫を試むると同時に、其の次ぎに來らんとする狐狸聯合内閣に對しても、豫じめ之を防ぐの道を講じなくてはなるまいと考へる。

▽返り咲せる伊東巳代治子

早川鐵治

伊東巳代治君の御名前も久しく承らない、何うして御座るやら、未だ世の中を韜晦して、あの儘埋れ木になつて終ふ年齢でもない、盆栽に浮身を窶し、貯金の殖えるのを樂しみにして居ては、伊東君としても神様に對して濟まなからうと、實は我輩も平生から思つてゐた。確か一昨年だつたらう「中央公論」で今度の戰爭の平和會議に我國を代表して列席せしむべき適任者は誰れであるかと云ふ問題を出された時、多くの政治家、學者、新聞記者邊りは、若手の大臣や外交官を物色したが、我輩は世間から忘れられてゐる二人の名を擧げた。一人は山本權兵衞で、一人は申す迄もなく伊東巳代治君であつた。前者はシーメンス事件に醜關係を結んで、最近政界を追放された失脚者、後者は健忘症の世間ではもう其名さへ忘れ掛けてゐる隱遁者。その二人を選りに選つて探し出して來る貴下も、餘つ程變り物だと其時お出での記者に笑はれた。然し我輩はさうは思はなかつた。講和會議は重大な問題である。當時の首相外相であられた大隈侯や加藤君が輕々しく我國を戰亂の渦中に引入れたが、後の仕末は何うつける了簡か、下手な事を仕出かしては後に國家百年の禍を貽す重大なる結果を來すだらうにと、我輩は衷心私かに憂慮して居つた。故に講和會議の際には、從來の行き掛りや感情を捨てゝ、公平に私

ない。

政治上の問題に對して、議論を上下して彼れに敵し得る者は、恐らくは加藤高明子の外には有るまい、其の加藤子さへも外務大臣の時に樞密院に於て隨分彼れの舌鋒に苦しめられた事が有ると云ふことだ。

子分を養成せり

彼れは昔から天下に志を有して居たので、其の幕下に人材を集めて居た、奥田義人氏の如きは其の最も顯著なる者で有る、其の分量は多くは無いが、其の質は良い人物が居る、後藤新平男が其の帷幕の中に、各種の人材を有するが如く、彼れは貴族院、衆議院、實業界を通じて、彼れが命令を一下すると、萬事を抛擲して、彼れの爲めに奔走する有力なる人物を、少からず持て居る、宮廷に羽翼を伸ばして居る蝙蝠も、其の所眼は必ずしも宮廷ばかりを見ては居なかつた、東京日々新聞を加藤高明子に讓り、自由黨との關係を絕ちて、專心に宮廷に於ける勢力扶殖に從事して居た彼れも、人の知らざる間に、諸方面の人材へ連絡を取て、他日自分が社會の表面に立つ時の準備をして居た。

狐狸聯合內閣は反對

然かしながら我輩は彼れの爲めにも國家の爲めにも、彼れの表面に出現することを好ましき事と思はざる一人で有る、犬養君及び國民黨は其の窮境から免れる爲めに、伊東子を擔いで、一仕事をしようと畫策した樣だが、餘まり良い方策とは思はれない。

山本內閣が暗礁に乘り上げて、次の內閣が德川公から淸浦子へ廻はり、遂に大隈侯へ落ちて往つた時、犬養君が入閣を辭したのは、薩派との關係上入るに入られない義理の有つた爲めでも有るが、然かし又一には大隈內閣の不成立を見越し、若し成立するも兎ても永くは保つまいと思ふたからで有る、而して彼れは此時早くも高島鞆之助子へ渡りを附けて、薩派の高島內閣へ割り込む相談をして居たと云ふのだから、閥族打破が彼れの本心に無い事は、苟くも彼れを知る者の悉く知る所だ、薩閥の高島內閣に割り込む相談をした位だから、長閥の寺內內閣を助けたり、三十年閥族の大番頭たりし伊東子を戴いて、其の閣僚の一人となる位は、敢て恥かしいとも思はぬで有らうが、然しながら日本國民の大多數が、若し此伊東內閣を戴いて恥ぢぬ樣になれば、國民道德の低級なることを世界に廣告すると同じ事だ、勿論犬養君を憲政の神に祭り上ぐるほどの愚かなる國民だから、今後如何なる現象が來るやら分らないけれど、如何に愚かなる國民でも、未だ當島事件は忘れては居るまい、若し忘れて居ても、伊東內閣が出來れば必ず想ひ出すで有らう、而して山本伯がヒドい目に逢ふたる如く、伊東子も氣の毒なる運命を取らぬとも言へない。

閥族の中に育ち、宮廷の雲霧の薄暗い所に三十年も住み馴れた男は、矢張り一生金ピカの衣裳を着けて、勳章をヒケラかして、樞密院のお守りをして居るが良いのだ、世には然るべき活動家にして御殿女中の古手を女房に貰らうて、後悔して居る者も多い、御殿女中は一生御殿女中で通

してそれを口實に辭任したので有る。

宮中から惡戯を試む

之れから暫時の間彼れは伊藤公と遠くなつて居たが、伊藤内閣は憲政黨の成立を見て、内閣を大隈侯と板垣伯に明け渡す事になり、山縣公は之に反對した爲めに、伊藤公と山縣公との仲が惡るくなつた、此の長閥の兩元勳の仲を割いた者は、或は伊東子の細工で有つたかも知れぬが、兎に角其の頃から彼れは山縣系に接近し、忽ち身を轉じて樞密院にモグリ込んだ。

閥族の間に於て、伊東子の如き智者は居らない、特に樞密院は頑冥不靈の老耄漢が多く、表面は至尊の諮詢機關で有るけれど、實は政治上の實際問題に觸して、至尊の御諮詢案に對して、適當なる答案を作り得る能力ある人物は、極めて乏しかつた、彼れは此の實際を知れるが故に、樞密院にモグリ込んで、其の實權を掌中に收むる事となつた、爾來殆んど二十年、此の古狸は九重雲深き所に巣を構え、決して國民の前に來られなかつたが、然かしながら絶えず政界の大立者と連絡を取て、其の得意の惡戯を逞うして居た。

第一次大隈内閣を打ち倒す爲めに、尾崎行雄君の共和演説へ火を放つたのは、彼れの東京日々新聞で有つた、大隈内閣が倒れて、伊藤公が支那から歸て來らない内に、山縣内閣を作つたのも、彼れと桂公との惡戯で有る、桂内閣の出來た時、彼れは其の總顧問を以て任じて居た、爾來政變の起る毎に、大小の問題に付て、彼れが黑幕の中に於て、多少の惡戯を試みない事はなかつた。

特に最近の大隈内閣に對しては、彼れは猛烈なる反對を試みたる一人で有る、大隈内閣を宮中に於て苦しめたるは、山縣、大山、松方の三老、衆議院に於て突貫したるは犬養、原の兩黨、貴族院に於て攻擊したるは後藤、田、仲小路、有松の諸氏、而して樞密院方面に於ける反對軍の中堅は、伊東子其人で、之に副たりしは清浦子で有つた。

多藝多能の人物

彼れの品性は決して良質とは思はれないが、其の多藝多才なるは、何人も之を認めざるを得ない。通譯から出身した程有て、英語は達者に出來る、文才が有て、和漢洋の學に通じ、特に憲法は其の得意とする所で有る、日本の憲法は伊藤公の名に依て大成して居るが、其の實は此の伊東子の努力に侍つ所が多かつた、井上毅子と伊東子の合作と稱しても宜しい位の者で有る、それから帝室制度調査會の事業も、大半彼れの力に依て成立した者で有る、漢詩なども然るべき詩人の鑑定に依ると、彼れの作は頗る良いと云ふことだ、「末松青萍、金子溪水、皆詩が出來るが、晨亭の作が一番優れて居る」と或る詩人が評したのは、多くの人が首肯する樣で有る、其の書畫骨董の鑑識に於ては、杉子や井上侯に匹敵し、刀劍通としては犬養君と匹敵し、盆栽通としては大隈侯に匹敵し、談論風生じて、其の前に立つ所の人を魅する力に至ては、桂公のニコポンに讓ら

題に依て叩き落されたるが如く、伊東子は堂島事件に依て叩かれた。・彼れが内閣書記官長たる時代、日清戦争に關する重要なる電報は、之を内閣總理大臣に報告し、更に之を上奏するの前に、先づ相場師の間に漏らしたと云ふ風説は、國民の間に流傳して居た、大阪の磯野小右エ門東京の濱野茂は彼れが連絡を取つた相場師として世に知られて居たが、其の他にも尚彼れと連絡した相場師が有つたと云ふ風説が、深く國民の頭腦に染み込んで居た、而して堂島事件と云ふのも、彼れが農商務大臣として、或る機密を其の寵商に漏らしたと云ふのだ、我輩は此等の風説を聞いた時に、彼れほどの智者が、折角國務大臣となつて其の政治上の地位を築かんとする時に、ソンな愚かな事はすまい、自ら輕んずる行動は取るまいと信じた一人で有つたが、一たび此の風説に火が點ぜられると、平生彼れの事を疑ぐつて居た國民は、未だ十分に其の實否を糺さずして、直ぐにそれを事實と認めて、攻擊の火の手を高めた、流石の狸も此の意外の火焰に包まれて、狼狽せざるを得なかつた、然かしながら彼れは狸は狸に相違ないけれど、狸の中の智惠の有る狸で有つた、堂島事件の爲めに退任したと有つては、其の一身に疵が附くと見たから、忽ち採用の出來ない一案を内閣に提議して辭任の口實を作つた、それは此の内閣へ自由黨の分子を入れる事で有つた。

松隈内閣が倒れて、伊藤公が第三次伊藤内閣を作る時、公は板垣伯に向て『今回内閣組織の大命を拜したるに付ては、其の閣員の銓衡は、一に首相たる自分の意に依て之を行ふ可し、而して如何なる人を閣僚とするも、君は自由黨を率ゐて、我が内閣を助けらるべきや』と問ふた、板垣伯は此の相談を受けたる時、其の心中に於て、自分は必ず其の一員に加へ、其他の人選に付て、伊藤公の任意を要求する者と理解し『勿論大命は君に降下したる者なれば、其の閣僚の選任は、君の御隨意で有る、自分は誓て自由黨を率ゐて、君の内閣を助く可し』と言つた、然るに伊藤公の陛下に上奏したる閣僚は、井上侯を大藏大臣とし、桂陸軍、西郷海軍、芳川内務、曾禰司法、末松遞信、伊東農商務、西園寺文部、西外務の顔觸れで、板垣伯は其の選に漏れて居た、是に於て板垣伯を初め自由黨が不平を起し、窃かに大隈侯及び進歩黨と款を通じて、民黨聯合を起すの氣運も生ぜんとしたから、伊東子は閣議に於て、突然内閣を改造して自由黨の分子を包容すべしとの議を提し、其の容れられざるを口實として辭表を提出した、偶ま西園寺侯も教育勅語改訂の件に付て、芳川内相と意見を異にして、辭表を提出したので、伊東、西園寺兩相は免官となり、伊東子の後任に金子堅太郎子、西園寺侯の後任に外山正一氏が任ぜられたから、伊東子は官僚の記録に於ては、内閣を改造して、自由黨員を閣中に收む可しとの議を提し、其の容れられざるが故に辭任したとなつて居るけれど、それは表面上の虛僞の記録で有て、其の實は民間の輿論が堂島事件で彼れを攻擊した結果で有つたのだ、若しも彼れがアンなに酷烈に攻擊されなかつたならば、決して成立しない動議を提出して其の任を辭する樣な愚かな男ではない、自分が民間から攻擊されて、罷めなくてはならぬ破目に陷つて居たから、自由黨に恩を賣る樣な提議を

の太閤樣と言はれた伊藤公ほどの勢力は無いので、從て書記官長の光も薄弱なるワケで有るかも知れぬが、伊東子が書記官長時代の切れた勢力は、決して今日の如き者ではない。

芝罘へ全權大使となつて、講和條約の交換に出かけたるが如きは、兎ても外の書記官長の任じ得る限りでは無い、彼れの眼中には國務大臣もなければ外務省もなく、『重大なる使命で有りますから、私が參ります』と切り出して、伊藤公がウンと云へば、總理大臣の蔭に居るべき書記官長が、忽ち全權大使となつて出かけ、それで誰れも苦情を言ひ得ないほどの勢力の有つた者で有る、世間で彼れを『明治の石田三成』と評したのも、決して偶然ではない、恐らくは其の實際に於ては、三成以上の活動を爲し得たで有らうと思ふ。

大臣となりて失脚

明治三十年の松隈内閣に對する反對運動の原動力として、最も有力なる人物は、桂公と伊東子で有つた、桂公は成るべく其の身を隱くし、蔭の方から此の内閣の破壞運動をやつて居たが、伊東子は隨分猛烈に運動してゐた、勿論官僚の畑の男だから、國民の前に來て、公けに運動する樣の事は無かつたが、然かし彼れの所有の東京日々新聞紙上に於て、極力之を攻撃し、尙自ら自由黨と國民協會の内閣攻撃を煽動し、貴族院方面に對しても、盛に遊說を試みた者で有る、而して松方内閣が壇の浦に沒落したる論功行賞として、桂公と彼れとは第三次伊藤内閣に入閣し、彼れはいよ〳〵表面の役者として、農商務大臣の地位に就いたので有る。

然かしながら彼れは表面の役者となるには、餘りに瑕瑾の多い男で有つた、彼れは伊藤公の勢力を笠に着て、世間に憚る所もなく、不埒なる事を働いて居た、彼れが果して如何なる罪惡を犯かしたる乎は、彼れを捕縛して其の罪迹を調査するに非るよりは、何人も之を的確に知ることは出來ない、然かしながら彼れの邸宅に出入して、彼れの生活の實際を知る者は、何人も彼れが決して正しき人物に非ることを、直覺的に感知せざるを得なかつた。

彼れは一介の貧書生に身を起したる者が、定まれる官吏の俸給を以て企て及ぶ可らざる豪奢の生活をして居る、宏大なる邸宅に住し、本妻の外に四五人の妾を蓄えて居る、本宅の外に妾宅をも持つて居る、書畫骨董の多くを有するのみならず、刀劍を有し、盆栽を有し、貴族富豪と雖も、未だ有せざるほどの珍品を所藏して居る、而して此の富は果して何れから得た者で有る乎、彼れが決して正しい男でないと云ふ事は、直覺的に何人の頭腦にも來らざるを得まい。

山本權兵衞伯は多年國民の間に疑はれて居たけれど、其の身を海軍の軍港に繋いで居た間は、安全に其の身を保つことが出來たが、一たび内閣總理大臣となつて、國民の表面に立つや、忽ち怒濤狂瀾に會して、顚覆の不幸を見たる如く、伊東子も伊藤公の巨大なる影に隱くれて居た間は、多くの人に疑はれながらも、其の身を保つことが出來たが、一たび農商務大臣となるや、忽ち非[illegible]攻撃の的となつた、山本伯が海軍收賄問

はつて以來、彼れは急に世間の注意を惹く所の一人物となつた、或は歐洲戰局の終りに於て、彼れは全權大使に任ぜられて、平和會議に我が帝國を代表す可しとの說も有り、或は又寺内内閣の次には、伊東内閣を見る可しとの噂も有る、何れにしても國民の全く意外とする所で、國民の大多數は、此等の流傳を聞て、今更らに『伊東子とは如何なる人ぞ』と問ふ者が多い樣で有る。

秘書官から出身

伊東子は安政四年の生れで、本年六十一歲で有る、原敬君は六十二歲、犬養毅君は六十三歲、三人が一年づゝの差で有るが、何れも老翁の部に入る可き連中で有る、然かし何しろ八十歲の山縣公や大隈侯が、尙實際の勢力を有し、盛に活動をして居るので、伊東子や原君や犬養君の如き老翁も、それほど年を取て居る樣に思はれず、當人等も未だなか〳〵元氣で有る。

彼れは伊藤博文公の秘書官から、身を起した者で有る、近來國務大臣の秘書官は、餘り世間の注意を惹かない樣だが、三十年ばかり前には、秘書官に俊秀が居た、加藤高明子は大隈侯が外務大臣として條約改正を企て、遂に其の隻脚を失ふた時代の秘書官で有つた、原敬君は陸奥宗光伯が農商務大臣の時代の秘書官で有つた、而して加藤子が大隈侯に依て立身し、原君が陸奥伯に依て出世したるが如く、伊東子も亦伊藤公の知遇に依て、今日の地位を得るに至つたので有る。

最も得意の時代

彼れの最も得意で有つた時代は、第二次伊藤内閣の書記官長たりし時代で有る、今日迄多くの内閣が相承けて來たが、書記官長として大臣以上の勢力を揮ひ得た者は、彼れの外には無い樣で有る、彼れは事實に於て内閣の中堅で有つた、總理大臣たる伊藤公と彼れとが、實際の國務を執て居たので有る。

陸奥宗光伯が米國公使から轉じて、山縣内閣の農商務大臣となり、それから松方内閣に至る迄農相の地位に居たが、當時伊藤公に接近して、諸種の畫策をなさんとするに、常に之を妨げた者は伊東子で有つた、それ故に陸奥伯が第二次伊藤内閣の外務大臣となるや、何事も先づ伊東子と協議し、其の同意を得たる後に、閣議へ持ち出したと云ふ事だ、伊藤公の親友にして、閣僚中第一の有力者たる陸奥伯すらも、尙此の如く彼れに重きを置いて居たのだ、況んや其他の大臣に於てをや、皆唯彼れの鼻息を窺ふに過ぎなかつたので有る。

今の兒玉書記官長は朝鮮に於ては實際の朝鮮總督で有つた、其の勢力は外間の想像にも及ばぬ程偉大なる者で有つたが、然かしながら寺内内閣の書記官長として、果して朝鮮總督府の總務局長の如く、萬事を切り廻はし得るや否やは、未だ分らない、今日でも相當の勢力を有し、歷代の書記官長よりも切れて居るには相違ないが、然かし何分にも其の本尊の寺内伯の勢力が、内地に於ては朝鮮の半分にも及ばない、見ても明治

後で主人と對座した時、私は或る議會に關係した問題について話すと、『即ち其事だ。今もそれについて話して居つたのだ。某省の遣方が實に怪しからんから、大臣を呼びつけて叱つて居つたのだ。』と、言はれたことがあつた。實際自分の職分は書記官長でありながら、時めく大臣を呼びつけて、恰も屬官などに對するやうな偉い勢を以て叱責するといふことは、子が如何に官界に於て勢力を振つて居つたかといふことを示して餘りあるものと思ふ。又子が如何なる點に於て恐ろしがられて居るかといふことをも語つて居るものと思ふ。まア子の斯ういふ事を數へ上れば際限なくなるが、それは他の人に任すことにして置かう。

而して次ぎに、此人の道樂について話して見よう。子の道樂は私が知て以來、四種を數へる事ができる。一體子は精力絶倫で、何事に對しても熱心で、一度遣り出したら其處を極めねば止まぬといふ風がある。それで、最初の道樂は寫眞であつた。其當時書記官邸の一室を、恰かも寫眞師の家と同じやうにして、多忙中にも拘らず、寫眞機を擔いで方々を飛び歩いて居られた。此術も餘程進歩して、上手な寫眞師に成られたらしかつた。然し之はほんの一時的の道樂であつたらしい。次ぎの道樂は盆栽である。之は餘程熱心に集められたものと見えて、今では日本で一といふても二と下らないやうである。其數の多い事と其逸品の集つて居ることに於て有名である。之は今日も猶熱心に愛玩して居られるやうである。其次ぎには、刀劔の道樂に移つたやうである。之も熱心なる子のことであるから、師をまで選んで、晝夜熱心に研究愛玩して居られる。此頃は最早素人刀劔鑑識家の中へ加へらるゝ迄に進歩せる樣子である。こゝ四五年間ではあるが、其集つた物は多大であるやうである。次ぎに最近の道樂を言ふと、それは支那書畫の趣味である。子は元來能筆であるが故に、特に書に趣味を有つて居られる。而かも此書は日本人の物ではない。支那人の物を愛玩せられ、餘程高いところを狙つて、ぼつ〳〵集めて居られたが、近頃長崎の或る多藏家が有つて居つた絶品を多く得られて以來、非常に豐富になつた。此中には、元、明、淸は勿論の事、古いところでは、唐、宋の名家の作品もあるらしい。此道樂も之よりいよ〳〵進んで行くことゝ思ふ。今後子は如何なる方面に向て道樂を初めるであらふか、今日までは先づ以上述べた如くである。

而して斯く四回轉せられた此間に於て、終始一貫して居る一つの道樂がある。終始一貫の道樂は、玆に言ひ殘して置く方が、却つて面白からうと思ふ。それは何んであらうか。抹茶であらうか。圍碁であらうか。將た音曲であらうか。それは其の人の推定に任して置た方が興味があるであらう。

▽閥族の大番頭伊東子

石川半山

外交調査會が成立して、其の一員に閥族の大番頭の伊東巳代治子が加

るか何らかは別として、兎に角今度の復活は子に一つの目論見があるかに想像される。自ら出るべき機會を作つたか、若くは引出されたか知らぬが、臨時調査會では重なる役割を勤める一人である。人間にネバリがあり、なかく議論も立ち、官界の表裏に通じ、特に手腕精力があるから、内閣組織者としても、講和會議の大使としても、必ず相當の働をして退けるだらうと思ふ。日清戰爭の時、講和談判に臨んだことがあり、又た全權辨理大臣として講和條約批准交換の爲めに芝罘に使ひした時、支那の全權大使が突然交換の延期を要求し、外國の軍艦が時に示威運動をするが如き面倒が起つたに拘らず、首尾よく豫定の日に交換を仕了せて敏活なる外交振りを示したことがある。次の總理大臣は疑問としても、少くも講和會議に一花咲かせたい腹がありはせぬか。

▽伊東子爵の道樂

岡崎邦輔

伊東子爵の批評をせよとのことであるが、それは隨分困る。私は極めて無精で、人の處を滅多に訪問しない。することがあつても、話は簡單で、五分か十分で用事は濟むといふ流儀である。然し伊藤子の處へはよく行く。此人の處程多く訪問した處はない。又此人を訪問した時程長時間を費すことはない。なかく主人が話上手なものだから、つい長座をして、兎角邪魔をするであろ。斯様に親密にして居るものだから、御註文の如き意味に適せねであらう。とかく人物批評といふものは、其人の美點よりも缺點を上げなければよろこばぬのである。然し折角遠方の處をわざくのお訪であるから、無言でかへす譯にも行まい。

伊東子に對する話題は隨分と澤山ある。が、其中でも内閣書記官長時代には『百官を凌ぐといふ偉い勢で、總ての官吏に非常に恐れられて居つた』とは、世間の人のよく言ふことであるが、私は恰度此噂が如何にも事實であるといふ事實を見受けたことがあつた。今日はどうなつて居るか知らぬが、其時分の書記官長の官舍は、眞に粗末な物であつた。怪しげな西洋室が二つ、一つは主人の書齋兼事務室で、一つは控室、奥の方は日本造りで住ひになつて居られたやうである。私が或日訪問したところ、玄關前に馬車が一臺と、綱つきの人力車が一臺待つて居つた。私は案内を乞ふて中へ入り、控室のストーブの前で待つて居ると、隣室の話聲が手に取るやうに聞える。何んでも主人公一人議論をして、酷く人を叱つて居るやうである。『定めて屬官か書記官かゞ叱られて居るのであらう。あんなにまで酷く叱らずに、いゝかげんにすればよいに』と、私は一人心配して居つた。やゝあつて話聲がやみ、間のドアーを開けて出て來た人を見ると、それは全く案外の人であつた。一人は時の或省の大臣、而かも子爵であつた。而しても一人の人は、矢張り其省の時めいて居る某局長であつた。私は一禮を換はしたが、眞に氣の毒の感に打たれた。此方が氣の毒に思ふ程であるから、向樣は如何にも耻げに立去つたのであつた。

つた。安政四年生れとあるから今から隠居する齢でもないのに、餘りに政界を思切り過ぎると云はれた。子の前身の花々しかりし丈けそれ丈け一入著しく目に立つたが、實際は既に血も涸ひ、腦味噌の働も止つてゐない。同じ薩伊藤系の末松や金子は樞密院を唯一の墓場としてゐるが、子は必ずしもさうでない。唯だ機會がないから表に顔を出さなかつたのである。子は政界に意なきを裝いつゝ常に政界の動靜に注意深い目を睜り、内外の形勢にも注目してゐる。子の意は死ぬまで安樂の場所として樞密院に隠居してゐるのでなく、樞密院を一つの政治的勢力として、力を養ふに努めたと見るべきである。子はいろ〳〵の問題に就て樞密院の懷刀とも顧問の顧問ともなつてゐる。

子の智惠は今でも目から鼻へ抜け、特に經驗と年を積んだ丈けに、人間が至極圓熟してゐる。子は別に組織的に學問こそせざれ、文章も一通り書き、書記官長時代の詔勅中には自ら筆を執つたものもあるさうである。長享の號で新聞論說を草したことも屢々ある。字も可なり達者に書く。特に憲法に明いと言はれ、伊藤が憲法取調の爲め西洋に行つた時も、憲法の起草を命ぜられた時も、共に調査起草に從事した一人である。それ故に前年支那の憲政考察大臣が日本に來た時、子を訪ふて憲法制定に關する意見を徵し、又た今度臨時外交調査會と内閣との關係が憲法に抵觸するかせぬかに就ても、專ら子が解釋の任に當り、差支ないといふ意見を定めたのだと言はれてゐる。成程憲法の專門家は他に多くゐるけれども、斯ういふ重大事に就ては浮つかり誰にも彼にも意見を徵されぬから、國家の秘密を保つ上から、此機關に關係ある伊東子の研究に俟つの必要があつたに相違ない。

子は既に書記官長時代から相場や機密費で少からぬ私財を貯へてゐたが、其後段々殖して今では官場有數の富豪といつて好い。金が溜つた結果、自然表面に活動して見ようといふ氣が幾分か鈍つたのかも知れぬ。農商務大臣時代に醜聞を唄はれた紫島事件は、果して何程の事實があつたか知らぬが、少くも性來金を愛し貨殖に長ずることは十人が十人認むる處である。從て子の身邊に如何はしい取沙汰も起つたのである。併し金のある割合に昔からシミツタレな方で、金に掛けては隨分冷酷だと言はれてゐる。

金の慾の深ひと共に女に掛けての慾望も深い方である。書記官時代は藝妓上りの妾を二三人官邸に蓄へ、互ひに燒餅喧嘩するのを見て樂んでゐたさうだが、命離れが汚いので長く辛棒したのが少いらしい。今日は年の加減で昔程でないにせよ、兎に角隨分盛んである。此點に於て子に對抗する豪のものは大石正己であらう。氏は人間も年百年中新道に堪能で毎日自動車を乘廻す丈けの精力がなければ大事を爲し得ないとし、衰へたといつても普通以上である。氏は其道に精出さないのを無精の一つに數へてゐるさうであるが、伊東も大石流の方である。大石が糟糠の妻を顧みずに妾道樂に憂身を窶してゐる如く、伊東も兵庫縣の屬官時代に迎へた正妻を置去り同樣にして了つた。

子が臨時外交調査委員の責任を拜したのは、政治上何等かの前兆である

當時伊藤と大隈は兩雄並び立たず、取別け伊東は大隈嫌ひであつたから、年百年中大隈と進歩黨の惡口を書かせた。伊藤派の策士は伊東、大隈黨の子分は犬養といふので、伊藤と大隈と橋を突合ひ、自由黨と進歩黨と相追逐するのを伊東と犬養の智惠くらべだとした位である。

自由黨と伊藤との連鎖になつたのは子で、特に自由黨と密接の關係があつた陸奥が病氣で退隱して以來、自由黨は子を黨師と仰いだ。子も政界の眞田幸村となつて一時得意となり、三十一年子が農商務大臣になつた時、政府と自由黨との楔子となつて、自由黨の利益を計ることに務めたが、第二伊藤內閣の大臣中には自由黨嫌ひもあつて、書記官長時代の如く子の自由にもならなかつた。子が纔に三四箇月にして閣外に去るを餘儀なくされたのは、堂島株式取引所に關する臭い風聞以外に、政府と自由黨とのイキサツもあつたからである。隨て子が辭職すると自由黨も政府と緣を切るに至つた。斯ういふ歷史的關係があるから、今でも政友會とは萬更赤の他人でない。嘗て西園寺に逃げられて總裁問題に困つた時、政友會の一部には伊東に心を寄せるものも無いではなかつた。少くも岡崎などは今尙子と結付がある。原總裁との間も惡い方でない。山本伯と政友會の聯立內閣の時、文官任用令改正を通過せしめるに就ては、樞密院で骨を折つた一人である。それ故に子が內閣を組織するとの噂が萬が一にも事實になるような場合がありとすれば、少くも政友會とは無關係となるを得ぬであらう。

農商務大臣を罷めて樞密院に入るまで、帝室制度調査局副總裁として總裁の伊藤を補佐し、兩者の間は依然變りなかつたように見えたが、內實は以前程でなかつた。憲政黨內閣が倒れて後繼者の問題が起つた時、丁度伊藤は西洋から長崎に着いて、四五日もすれば東京に歸る筈になつてゐたのに、山縣はそれを俟たずに急遽元老會議を開いて、自ら內閣を造つたので、伊藤は山縣の仕打に腹を立てた。是れは伊東の獻策に出づと稱せられ、少くも獻策者の一人であつたらしい。從來の關係よりいふも將た自由黨とのユカリよりいふも、伊藤が政友會を組織する時、之れに加はるべきであるが、子は岡崎と腹を合して自由黨を中堅とすべきことを伊藤に勸めこそしたれ、立入つて關係しなかつた。子は政友會創立について初めから外樣扱ひされたので氣を惡くした。第三次伊藤內閣の後に桂內閣が出來た時、桂は恰も寺內內閣組織の際に於ける平田子の如き位置に在つて、いろ〳〵相談に與つたが、結局自分は入閣を避けて乾兒格の奥田義人を連鎖の意味で法制局長官にしたのである。斯くの如く子と山縣系の間は餘所目に見るよりも親善になつてゐた。子が樞密顧問官に任ぜられたのも山縣の推薦だと言はれてゐる。宮中とは元と帝室制度調査局副總裁であつた時から、一層深く關係が結はれ、乾兒などで宮內官になつたものもあり、特に女官の方面に案外結付がある。前宮相渡邊千秋との間にもいろ〳〵關係があつたと傳へられる。

樞密顧問官に任ぜられてから、殆んど政治の中樞から懸離れて、盆栽自動車、寫眞、刀劍道樂に現を拔し、特に多年手塩に掛けた日々新聞を人手に讓渡し、一代の策士も無爲の閑人となつて世間の噂に上らなくな

子は明治二十五年伊藤が松方内閣失敗の後を承けて内閣を組織した時から、二十九年松隈内閣に城を明け渡すまで書記官長の職にあつた。特に仕事の分量からいつても、油が乘つた點からいつても、日清戰爭前後が最も得意であつた。三十一年第二次伊藤内閣の農商務大臣に任ぜられたけれども、僅に二月か三月で罷めたから、極めて露り榮えのせぬアッケない大臣であつた。それよりも書記官長としての方が遙かに華やかでもあり腕も冴へてゐた。名は書記官長でも、實際は伊藤の謀士で、政府の機密は大小となく與り知り、常に政黨の掛引に任じて間々内閣の政略を左右した。平大臣などは子の前に頭が上らず、次官、局長、知事を頤の先きで使ひ、政黨員、相場師、新聞記者等の官邸に出入せざる日はなかつた。自由黨の星亨でも林有造でも岡崎邦輔でも屢々官邸に通ひ、政黨操縱の相談をしたものである。陸奥が病氣で外相を辭し、渡邊國武が戰後財政難で藏相を罷めんとした時、伊藤は大隈と松方を入れて内閣を改造しようとすると、子は裏面から茶々を入れて終にオヂャンにした。議政黨内閣の時も、お人好しの板垣伯をそゝのかして大隈と衝突させた傀儡師の一人である。子の後に書記官長になつたものゝ中には、神鞭知常、武富時敏、高橋健三の如き名士もゐたけれども、多くは總理大臣秘書官に毛の生へたようなもので、迚も伊東の半分程も仕事が出來なかつた。子は歴代翰長中の異彩にして、同時に手にをへぬ我儘者であつた。

何故子が一書記官長を以てアレ丈けの事をしたかといふに、勿論それ丈けの力量があつたのであるが、一は伊藤が自由手腕を發揮させたからである。子は伊藤の子飼であるから、他の何人よりも其思想感情を解し、特に有りと有ゆる弱點を握つてゐる。そこで子は伊藤の勢力を利用すると共に、弱點を利用するのが子の奥の手であつた。今日元老に於けるも矢張り其奥の手を用ゐてゐるのである。最初伊藤の言ふことを聞いた一箇巧慧佞敏の腰巾著も、勢力が出來てくると、駄々を捏ねたり拗ねたりして、意の如く使ひ切れぬようになつた。伊藤も時として遣り過ぎに困つたけれども、或る程度まで容認するの外なかつた。當時子は親爺(伊藤のこと)も已れが居なければ位置が保てるものかと豪語し、伊藤の面前に於ても其氣ぶらひを見せた。次に子の爲めに一つの勢力になつたのは新聞である。子は東京日日新聞を手に入れて機關とし、朝比奈碌堂を走狗に備ふて、或は反對黨を攻撃し、或は在野政治家を離間中傷し、而も全國の官吏に日々新聞を購讀せしめた。子が如何に我儘を働いたかといふ一例は、官邸の隣りの總理大臣秘書官室を日々新聞の内閣出張所とし、自分の乾兒を内閣の屬官にして、其實新聞社の手傳をさせた。滿韓にゐる龍居頼三以下數人の屬官は其頃こゝで雜報を書いたり外國新聞を飜譯したりしてゐたのである。其時分伊東が筆を執るの朝比奈が書くのと言はれた『近事片々』は其實或る屬官が此處から書いた位つたので、殆んど公私混淆であつたが、何人も子を憚つて苦情を言ふものがなかつた。維新館の代議士越山太刀三郎は子の玄關番をして居たさうである。有賀長雄でも頭本元貞でも子の前に出ると頭が上らず、龍居や越山は頭から呼棄てで、一室隔てゝ命令を聽いたものである。

如きさうであつた。直江兼續は其點で一層才智があつたと云はねばならぬ。伊東は初め伊藤公に從ひ、後山縣公に從ひ、時として元老は老先短く、已れの代るべき日ありと思ふであらう。已れ自ら大將となつて打つて出るのに、自分思ひの念を能ふ限り抑へて然るべしである。然らざれば、今日の富を抱き、盆栽に水をかけて世を終るが利口と見えよう。

▽表面に乘出した伊東子

鵜崎鷺城

二十年間鳴かず蜚ばず、殆んど世間から忘れられたように韜晦してゐた伊東巳代治子は、今度臨時外交調査會が設置せらるると、之れが委員に任命されて俄に表立つた人になつた。而も調査會設置の畫策に與つたとさへ言はれ、是れと同時に政界の一部には次の內閣組織の野心があるとか、或は全權使節として講和會議に臨むべしとか、いろ〳〵に取沙汰されて居るが、兎に角今まで半ば『過去の人』と視られた子が、殆んど二十年振りに頭を出して『時局の人』になつたに就ては、世間は興味を以て子の返咲を注視してゐる。

子の政治系統は故伊藤系で、隨分久しい間伊藤の腰巾着であつた。藩閥と最も緣遠い長崎の出身でありながら、一時は殆んど藩閥の腹から生れた人のようになつて居た。由來長崎には通詞の家が多いが、子も通詞の家筋で、歸化した支那人の後裔だと言はれてゐる。伊藤と關係の附き初めは明治十年頃からで、內務省の屬官を振出しとして、それから大政官書記官、參事院議官補、總理大臣秘書官、樞密院書記官と順々にハシ上げ、或は伊藤に隨行して歐羅巴や支那に行き、更に內閣書記官長を經て農商務大臣に進むまで、二十餘年間伊藤の側にゐて形影相離れざる形であつた。かくの如く伊藤に引立てられて一人前になり、舊伊藤系中恩顧を蒙ること最も多かつたけれども、公が政友會を組織する前頃から漸次双方の心理狀態に多少の變化を來した。子と伊藤との關係は表面的で寧ろ山縣に接近し、特に伊藤が哈爾賓で倒れてからは、山縣との間は非常に好くなつた。子が今日元老の間に信用があり、宮中に案外勢力があると言はれるのも、山縣に好いからである。故陸奥宗光が閥族の勢力を利用しなければ何事も出來ないとして、自ら彼等の間に飛込んだ如く、伊東子も元老といふ大星座を向ふに廻しては、幾ら自分に力があつても駄目だといふことを十も二十も飲込んでゐる。特に樞密院や宮中に一つの勢力を占めるには、最も此必要があるとしてゐる。併し子は或る一派の人々の如く政黨を呪ふようなことをしない。政黨が議會の勢力であるとすれば、閥族官僚も政黨以外の一種の政治團體と見て、双方の力を巧みに綾なすに越したことは無いとしてゐる。それ故に若し子が世間に噂する如く、政界に何等かの野心を抱くに至つたとすれば、少くも元老の信用を打算の外に置いてゐないと思ふ。

從來表面の人として最も注目されたのは、內閣書記官長時代であつた。

大部變つて來た事に氣付かずに居れん。伊東も彼れ加藤何にするものぞと思ふ方である。彼が首相となれば、他にはいくらでもあらうと思ふ。そこで自分もと思はぬではなからう。世間から見れば、一つ新たなる首相候補者が現はれ出たとしても差支へない。首相候補として何うであるかと言へば、首相にも色々ある。立派な首相もあれば、下らぬ首相もある。伊東子とて首相となつて務まらぬことはない。然し如何なる順序に於てするか。從來の關係からすれば、政友會を基礎とする事になるが、原氏と如何に相談を濟けるか。假りに伊東が首相になるとし、政友會總裁なるものが其下に內相になるのは、いかゞはしいものでないか。原は加藤のやうに、自分は首相の候補者で御座るといふやうなことを口走らず、又他と折合ひが濟き易いにしても、何時までも人の下について許り廻らうとも思はぬであらう。西園寺侯とか何んとか、特別の關係あるものならば兎に角、伊東となつては寺內內閣と變りがない。其中へ入り込むことが出來るか何うか。伊東內閣の次に原內閣といふことは、ちとよすぎるやうに考へられる。そこで何らか妥協が着くか、愈に定まるべき事でない。

元來伊東は智慧者である。智慧に於て相應の事をして居る。然し、自分の事を思ひ過ぎ、餘りに大事を取るが爲めに機會を逸する。自分でもさういふ機會を捉へたくないと言ふであらう。けれども他人が掴むべきところを掴まぬ丈けのことはある。人並より才智を具へながら、動もすれば落伍者となる恐れがある。彼れは自ら計るに巧み過ぎて居る。曾て書記官長として首相の矢表に立つたが、謂はゞ虎の威をかつたのであつて、何か他を利用せねば氣が濟まぬ。今日の富を得たのも餘り賞すべき事でない。井上侯の世話で日報社を手に入れ、いよ／＼手に入れた後に鋒先を井上に向けるなど、巳代治一流の狡猾と觀られて居る所である。而して萬事其の調子で、自分が危險を侵さずに、利益を得ようといふ生付の癖がある。其爲めに利益を得て居るが、いよ／＼政界に乘出さうとなつては、損失になるところがある。其才智、調法がられるけれど、餘り自分の事を考へる者は、首相に不向きである。伊藤公は自分の事を考へてもかなり危險を侵す勇氣がある。成功か失敗か解からぬところに飛び込んだりする。伊東は成功と定まらねば進まん。失敗は誰か責任を引受けなければ、百方避けようとする。自分の事許りを考へる者は、世間から面白く思はれん。寺內伯の首相は如何はしいものであるにしても、自分が一つ國家を治めようといふ自惚れがある。成功か失敗か解らぬ處に乘出す勇氣があるといへば言へる。伊東は其邊が怪しい。新たに企てるにしても、外交調査會といふやうな形に於てし、其處で地盤を固めて乘出さうとする。若し伊東に今一段の勇氣があれば、これまでのやうなものでなからう。今後果して勇氣を出し得るであらうか。大丈夫の處で勇氣を出すが、兎角危い處で逃げようとする。戰時戰後は、政界に取つて飛躍の好機會であるが、自分の事を思ひ過ぎる者に、何程の機會を與へるであらうか。老後の思出に一奮發するがよけれど、自分思ひの癖を抑へ得る丈け抑へねばならぬ。

人の下でよく働き、自ら大將となつて失敗する者がある。石田三成の

りするが、何分呼吸を心得て居るのは彼れに若くはない。他の顧問官はかれこれ議論をしたり、不平を列べたりしても、詰り伊東の邊に落付くのである。伊東は顧問官の中で重んぜられて居らんが、事實に於て纏め役になつて居り、樞密院が内閣に對して力があれば、伊東も從つて力ある譯になる。樞密院の事は世間に知られぬ丈けで、内閣の鬼門たること貴族院と何れといふところである。貴族院で誰が牛耳を執るか、貴族院にさういふ者がないと言ふたりするが、何を言ふても山縣公から平田子若しくは清浦子を通うして、事の行はれるのが少くない。其邊は伊東子が餘り關係ない。等しく山縣關係でありながら、伊東は樞密院に限るのである。樞密院に限つても、樞密院が重要機關であるを證明すると共に、伊東の侮るべからざるを證明する勘定になる。山縣が樞相として奥の院に鎭座して居ると言はれる丈け、此伊東は今の政界から販除者にし置く事が出來ぬ。彼れは斯くして樞密院で相應に力を延ばして居るので、或は自ら内閣に列するよりも有力であると考へたらうが、何時までもさうして居らうといふのでなく、其中面白い幾會もあらうと思ふて居つたらしい。割合に機會が來らず、來つても之を捉へず、そのまゝ今日まで立ち至つた。

彼れが世間に認められたのは、伊藤内閣の書記官長時代であつて、三十歲前後である。何かにつけて巳代治と言はれ、伊藤首相に對する攻擊を巳れ一身に集めるといふを以て得意がつたのである。當時才幹及び權力に於て、よく之に拮抗する者がなく、實に人一倍働らきもした。ところが、後其割に發展せず、次第に忘れられるやうになつた。大臣になり、男爵になり、子爵になり、世間の所謂榮達をして居るが、此類の者は他に澤山ある。明治にも大正にも榮達逕が多くて記憶することが出來ん。都合のよい履歴を帶びれば、無造作に男爵になり子爵になる。或は伯爵になる。侯爵になるのもある。詮んじ詰むれば、公爵も實は何程の者でもない。何んの勳功で其處まで至つたかを尋ねれば、みな程の知れたものである。其中で子爵になつたとて何んであるか。

三十前後で幅を利かした者が、其後樞密院に閉籠つて居るので、隱居同樣に見られるのも無理がない。自分でも滿足して居らんだらう。其内々々と思ふて居る間に歲が立ち、還暦するやうになつたのであらう。外交調査會に加はつたのは、新たに機會を捉へようとする許りでなく、啻ゝ何か試みをすると同じやうなところがあらう。戰時戰後の所謂の最も重大なる事を考へ、何んとかせねばならぬと思ふところもあらう。場合によつては、大使とならうといふ考もあらう。或は一轉して、内閣を組織するやうな廻り合せになるも知れぬと思ひもしよう。之等の事は彼に於て餘り無理な事でない。

大隈内閣は樞密院の多數が同情を表せず、中にも加藤外相の外交に快くなかつた。世間で加藤を外交界の第一流とするやうに官僚の方で思ふて居らん。世間で加藤を一廉の智識ある者と思ふが、官僚は頗る輕束ない者とする。加藤に三菱の後援がなければ、何が出來るかと言ふ。其加藤が首相候補者となり、表面から位置を爭ふ程であつて見れば、時勢の

人物評論（八十六）

政界の表面に乘り出して來た
伊東巳代治子



▽伊東巳代治論

文學博士　三宅雪嶺

伊東巳代治子が外交調査會に加はつたので、復活とか新飛躍とか言はれるが、これまで決して隱居して居るのでなかつた。樞密院で色々と計畫し、樞密院で何かと內閣に面倒を申込んだりするのには、彼れの與かつて居るのが多い。樞密院に樣々の人物が集つて居り、伊東より經驗あるのがあり、智識あるのがあるが、時の呼吸を捉へるのは彼れが主である。都築男が健康であれば議論で之を　がらうとし、伊東が受太刀になつた

は棧敷を構へて酒宴を催す、夜に入り還御、船と陸との挑燈數萬の燈篝火の光雲に映じ、星光地に降るかと疑ふ、要津第一の神事、諸國にも亦類なし」（攝陽群談）とあるものが卽ちこれである。攝陽落穗集にも、「都鄙の老若、炎天の暑さを厭はず、大川の川面に群集して祭禮を拜し、夜は數千の挑灯の光、諸人の目を驚し、遊山船ごとに花火をあげて、吉野龍田の春秋に劣らぬ夏の夜の景色」と見え、筆拍子には「六月祭禮の砌り、神輿御迎ひの船に花麗を盡し、船毎には人形のまじるし、思ひ〳〵の風流をなせり、凡卅餘艘の迎船あれども、近來皆々打揃出すこと稀なれば、見ぬ人の話柄にもや」と記して、鍾馗・鯛・奴妻平・濡髪長五郎・樊噲・坂田金時・關羽・蝶の舞・海士・天神花・雀踊・西王母・石橋・布袋・神功皇后・猿田彦・豆藏・此下東吉・張良・鎌足・葛の葉・戎三郎・白樂天・源九郎狐・三番叟・安部保名・奴興勘平・こんくわい、猩々・菊慈童・木津勘助等、船上の作物の名を擧げてゐる。

此等は夏祭中に於て異彩を放つてゐるものであるが、此他に於けるものは計ふるに勝ふべくもあらぬ。いづれも夏の陽氣と相應じて、陽氣に騷ぎ立て、小若連は勿論、大若連までをも喜ばせる。暑さの時節に汗埃となつて陽氣に騷いでゐるのは、事實暑いに相違ないが、夏祭と聞くと、どこともなく、夏の情調が動いて、一掬の凉味を覺える。青葉隱れにちらり〳〵とする石燈籠の灯のやうな寂しい光ではなくて、往き來るさの賑ふ緣日の夜、アセチリンの火の光が露を帶びた夏菊に反映して淡く流れるやうな氣分がする。雜閙境裡に趣味があり、俗中に味がある。夏祭は夏に於ける國民趣味である。

練り行く、一二番の手古舞は佃島の獵師之をつとめ、雲龍の半天に黒股引を穿く。順路は本社を出で、永田馬場より堀端にかゝり、麹町一丁目の門より將軍家上覧の所を過ぎ、竹橋より神田橋、鎌倉河岸を經、本町一丁目筋に出で、本石町三丁目、小傳馬町、大傳馬町より茅場町藥師堂にて神供を獻じ、八町堀、日本橋通筋を中橋を渡りて、本社へ歸るを例とする。江戸年中行事にも「江戸第一の大祭禮なり、だし、ねり物、町により四十三番出る、御大名方より供奉長柄或は引馬警固等成る、法師武者十騎あり、御祭り通り筋往來人止、二階より見物を禁ず」とある。兩側には幕打ち廻して、衣香釵影が群を成すのも亦壯觀であつたに相違がない。

水上の祭禮としては尾張津島の御葦流がある。即ち祓である。六月十四日に行はれて、此日は船上にだんじりをしつくらひ、夥しく燈火をかけ連ね、火光水波と相映發して、今も亦尾州の奇觀として稱せられる。藝州宮島の神事は六月十七日に行はれ、三艘の舟に神輿を載せる。其神輿と云へるは、巨大なる金燈籠であるさうな。表に本地十一面觀世音の像を彫りて、內には赫灼と燈明を挑げる。舟の四面に柱四本を立て、白布にて卷き、白布の水引をかけ、四方に燈籠を吊り、內に灯を入る。供僧神人等此處に打乘り、本社を去ること一里許、仕立岩と云ふ所に舟を引入れ、夜に入りて、管絃を奏しながらにして、本社に歸座し、廻廊百八の燈籠に火を點じて百番の神樂を奏す。拍々の潮には點々たる燈火星の如く映じて、樂の音は波に響いと、ゆかしいこと限りもない。竹生島の神事、鞆の祭禮もいづれも水邊の地とて、水を利用するのである。夏祭に水はふさはしい。

水國の大阪は又天滿天神の祭禮に水上の美觀を極める。「每年六月二十五日、祭禮、陸の練物、川面には數艘の船を浮べ、諸藝を盡し、貴賤群をなす、祭事終て後、神輿を船に遷し、御旅所に渡御、數艘の飾船、神輿の船に纜をかけて、櫓拍子を取り、謠競ふを、號て引船と云、其外慰輿の遊船川の流をふさぎて、兩岸に

日の祭に瓜用ひぬ處は稀れなるべし、されば瓜きざむ音の、比叡の山へ聞ゆといふも業々し」とあるが、此處は流石に京都の京都らしい處である。けれども。家重代の金屏風に土佐・四條・南宗の名家が、潑墨渲染したやつを店一杯に飾り立て、盛粧して、きちんと座つて見物する處は、これまた京都の京都たる處で、之は今も古と異らぬ。おとしばなし年中行事に、京都三條通りの祭の夜を叙して、「これ〳〵吉兵あこのうちの金屏風なんじややら唐人が、瀧の水で耳を洗うてけつかるを、牛飼が笑うてゐるが、あれはなんじやい」と許由巣父の故事を用ひてゐるが、祇園會の壯觀は又此金屏風の陳列にもあつた。

江戸に於て神田と相並び稱せられたる山王の祭禮はまことに江戸第一のものである。丑・卯・巳・未・酉・亥の年と隔年に執行す。六月十五日を以つて其日とする。鷄の山車を第一番としたるは、元和元年六月十五日、二代將軍秀忠之を上覽ありて、諫鼓苔深鳥不驚といふ太平の世を祝ひたるもの、此山車を以つて末代に至るまで第一番とせよとの上意があつたからだと云ふことだ。これより以下四十餘番、神輿は三基、其外附祭として、踊屋臺・曳き物等に趣向を凝らして、各町々は華美を競ふ。此附祭については、蜘蛛の絲卷追加に、「享保以前、山王・神田明神の祭に、屋臺と唱へ、破風作り、四本柱總黑塗になし、此内に草花人形などさま〴〵の飾物をなして擔ひありく、其費、屋臺一ッ三十五匁を限りしとぞ、物の價今より安かりし故なるべし、此事享保六年國禁ありて絕えしに、三十年ばかり後寶暦に至り、始めにかへり、附祭りと云ふ事も起り、昔飾り物屋臺と唱へ、正面に腰掛を置き、毛氈を掛け、女子三人、三味線を彈き歌を謳ひ、其姿は髷の正面に花かんざしの長きをさし、(略)ありきながら業をなす、是れ寶曆・明和安永中三十年ばかりの間の風俗なり、天明中の末に至りて、今のそこぬけ屋臺とて、はやし方是に入りてわざをなすこと起りしなり、天明二三年の頃の事かと覺ゆ」とある。十四日に渡り初めと稱して、ねり物は山王の社に至り、此にて夜を明し、翌曉より市中を

いには及ぶべくもなさゝうである。西の國のカーニバル祭に於ける歡樂のさまは、物の本にも見えてゐるが、岩戸神樂以來、陽氣に騷ぎ樂しむは我が祭禮の特色で、國民氣質を窺ふに足りる。

京の誇りとする祇園の祭禮は六月七日十四日を以つて行ふ。鴨河の水も溫んで、雲の峯が東山の上に悠然と動かざる時である。此六月七日を式日としたのは、後堀河天皇の寛喜三年の時からだと云ふ。七日は、長刀鉾・函谷鉾・月鉾・菊水鉾・鷄鉾・放下鉾・船鉾の諸鉾・及傘鉾二本、占出山・太子山・天神山二本・山臥山・木賊苅山・蘆刈山・保昌山・郭巨山・孟宗山・琴破山・蟷螂山・白樂天山の舁山、岩戸山の引山を出し、十四日は山ばかりで鉾なく、橋辨慶山・役行者山・鈴鹿山・黒主山・惡候山・鯉山・鷹山・八幡山・觀音山の諸山、別に見送として、船鉾を出す。山城四季物語に云ふ、「二條の南側より五條松原通の北側までの祭なり、七日十四日兩日、名にあふ山・鉾のかず〱、目なれてもまだ驚くばかりなり、鉾のさまは屋臺を車にしかけ、鉾は屋臺の棟をつらぬき通し、四方をあけうちに花笠を着たる兒羯鼓を打つ、兩脇より禿少年の形淸げなるが、團扇を以てあふぐ、鳧鐘・太鼓の拍子、きはめて一調子あり、鉾の間に山を交へて渡すなり、十四日は山ばかりなり、鉾山のつくりざま、古事を學びたり、四條通を京極に至り、五條松原通を西に渡りて、おのが家々に歸れば、鉾山の上なるも、見物の童も聲を揚げて、明年の〱あら名殘惜しやなんどいふなり、又五月晦日の初夜に、御輿洗ひといふ事あり、少將井の神輿を四條川に出して、水に御秡するなり、七日より十四日に至りて、神輿を京極四條の御旅所に移し奉る、諸人此所に群集し、漸くれかゝるより、四條川の瀨々に牀を構て凉み明し、西東のはとりにともす火に、夜を忘れて遊興するなり」とあるが如く、曳くものも、舁ぐものも、乘るものも、囃すものも、觀るものも、今日を晴れと、京の榮華を集める。「けふに逢ふや瓜もつるめそ祇園の會」「瓜の舟も盥にもまるゝや祇園の會」とよまれて、胡瓜揉みが此日の御馳走であるやうな。案內者(晉名)に「凡そ今

と、京都には祇園會、江戸には山王祭、いづれも兩都に於ける祭禮の尤なるもの。江州竹生島の祭、尾張熱田の祭、備後鞆の天王祭、尾張津島の祭、安藝嚴島明神の祭、大阪天滿天神の御祓、丹後橋立祭を始めとして、諸國に祭禮の行はるゝことは、指を屈するに遑あらぬ。「鉾處々に夕風そよぐ囃子哉」の都の祭禮より、「碓の幕に隱るゝ祭かな」の鄙の祭に至るまで、多くは夏の景物である。

支那では天を祭り、地を祭り、時を祭り、寒暑を祭り、日を祭り、月を祭り、星を祭り、水旱を祭り、四方を祭り、宗廟を祭り、山川を祭り、百物の神を祭ると云ふことが、禮に規定されてゐるが、我邦の神が、畏れらるゝよりは、寧ろ親みを以つて之に對せられるとは徑庭がある。宗廟の祭は、春を祠と曰ひ、夏を禘と曰ひ、秋を嘗と曰ひ、冬を蒸と曰ふ。又總ての祭に四時あり、春祭を祠と曰ひ、夏祭を禘と曰ひ、秋祭を嘗と曰ひ、冬祭を蒸と曰ふ。祠禘は陽の義にして嘗蒸は陰の義なり、禘は陽の盛にして、嘗は陰の盛なり、故に禘嘗より重きはなしとある。しかし之等を取つて我が祭禮と比すべきではない。我が祭禮は民俗の娛樂であつて、神の心を慰むるとゝもに、民衆が自ら娛むのである。上海繁昌記を見ると、神誕日と題し、「三月二十三日を天后の誕となし、粤閩客商及海船皆劇を演じ敬を伸ぶ、三月二十八日を城隍夫人の誕となし、鄉鎭の婦女、香を進むる甚だ衆し、六月二十三日を火神の誕となし、大東門内、街市店舖、皆燈を懸け綵を結ぶ、二十四日を雷祖の誕となす、廟は新北門内にあり、丹鳳樓に毘連して小穹窿をなす、七月底を地藏王誕となす、庵は大東門内城脚にあり、二六九月は大士の成道及誕辰、新北門内、沈香閣、大馬路紅廟、香火最も盛なり」と記し、城隍會の條下には、「邑神の年例は春秋冬三節に逢ひ、出會祀一つにして他の儀從なく、惟々皁隷相隨ふもの百數十人に下らず、夜間に至りては跑馬、青年婦女、披髮して紅衫褌を著け其間を雜行す、最も陋俗となす、旋た邑侯の禁止を經て、此風稍々息む」とあり、此等が我が祭禮に相當するが、邦俗の威勢の善

峇たる者、幸に加餐自玉せよ。至囑〳〵。

夏祭

笹川臨風

祭は夢の國へと吾等を誘ふ。祭の印象はどうしても髫齔時代の記憶である。黄な麻に繋いだ犬張子に、鈴、揃ひの浴衣、わッしよ〳〵と擔いだ樽天王、振り廻はした萬燈。夢から夢へと朧氣ながら、ありし幼い日の思ひ出が浮ぶ。殊には祭の日にいたいけの童が浮れ騒ぐのを見ると、何となくなつかしいもので、過ぎ去つた吾等の姿を目前に見るやうに、思はれる。時の潮の力は容赦なく舊から新へ移り易はる世の中に、祭ばかりは依然として昔の面影を存する。但し其觀は今の古に及ばざること遠いものがあるであらう。しかし十戶の邑必ず鎭守がある以上は、祭禮がある。よし都會に於て祭が振はなくなつても、地方では猶に依りて、缺くべからざる民間時令の一つである。

祭は陽氣なものである。綿入や羽織やどんつく布子を被て騒いだところが何にならう。衣物は揃ひの浴衣に限る。靑嵐がさつと、山鉾を吹く。烈々たる炎日が熾いばかりに花笠を射る。わッしよ〳〵は團扇を蝴蝶の舞ふが如くに煽ぎ立てる、よつて景氣附く。であるから、祭りと云ふと、どうしても夏祭。屈指の祭禮は多く此時期に於て擧行せられる。

五月に於ける加茂の葵祭は姑く措くとするも、同じ月には京都に新熊野、貴船、藤の森の祭禮がある。宇治離宮八幡、播州室明神、山城今宮大神、泉州堺天神、近江坂本兩社、なんどの祭がある。しかし六月に入る

(四) 疑問の人馮國璋

■南京督軍馮國璋が、一炬にして漢口の全市を焦土に化したる爲め、革命黨志士の深怨を買ひ、不倶戴天の仇を以て目されたるは、今猶ほ人の耳目に新たなる事實なり。袁世凱の殂落後、漸く民權派の歡心を買ふに努力して其効を奏し、民權派の居城たる國會の大多數の贊同に由りて、副總統の職を贏ち得たり。

■此の如く一面南方派に好意を通じ、一面に於ては北洋武斷派の勢力より、王士珍、曹錕、王占元、李準等の直隷派を割いて、已れ之が盟主となり、以て段祺瑞を牛耳とせる安徽派並に張勳一派の復辟派の勢力減殺に腐心するは、適ま以て彼れの意圖の小ならざるを見るに足る。直隷武斷派と南方民權派とを聯結して、飽くまで共和政體を支持し、已れ起つて元首の椅子を占領せんとする彼れの心事は、今回の動に對する彼れの擧措に依つて歴然たり。彼れも亦た多智の人なる哉。

■然れども安徽武斷派の勢力は、遙かに直隷武斷派の勢力の上に在るのみならず、張勳一派の復辟派も亦た馮都督近來の態度に慊焉たらざる者あれば、馮の前途は最も疑問に屬す。

(五) 南方の重鎭岑春煊

■袁世凱が、西太后の隆寵を恃んで威權を肆まにし、其勢飛鳥を落すの觀ありし時に當り、猛然として義憤を奮ひ、起つて袁の十大罪を數へて彈劾の奏を上りたる西林の大丈夫岑春煊老いて益々意氣の壯なるを見る。彼れは眞個に南方義人の代表者たるに恥ぢず、富貴に處して淫せず、艱危に處して愕かず、心志の强堅なる、壯者も及ぶこと能はず、南方事ある毎に推されて盟主となる、良に所以あるなり。

■今や南方の快男兒李烈鈞は病を推して廣東に入り、極力同志の結束を促して、機大に熟し、兩廣巡閲使陸榮廷の去就亦た決し、北伐軍統率の重任は重ねて岑春煊の老軀に托せられんとしつゝ有り。南方人多しと雖も、其閲歴に於て、其人物に於て、其實功に於て、其輿望に於て、能く北方の辯子將軍若くは支那の寺内將軍と拮抗し得る者、岑を措いて他に其人あるを見ず。

■北洋武斷派の人士の中に就いて、天下を爭ふの實力を有する者、張勳の外に、猶ほ一人を數ふ。前の國務總理段祺瑞是れなり。

■段は張勳と同じく袁門の出身にして、閱歷に於て張の先輩なり。袁の在世時は、趙秉鈞、梁士詒、唐紹儀と併せて、袁門の四天王と稱せらる。されば多年袁の勢力下に在りて贏ち得たる事權の强大なるは、固より其所のみ。北洋軍閥裡に於ける信望は、決して張の下に在らず。彼れにして一たび起つて快刀亂麻を斷つの擧に出でんか、天下の事、未だ容易に判知すべからず。

■國會包圍の暴動後、黎の爲めに總理の職を奪はれて而かも爭はず、去つて野に下り、倪嗣冲の獨立宣言後、四圍の形勢は、彼れの進んで三軍を叱咤するに宜しくして、而かも隱忍して出でず、張勳の大兵を率ゐて入京して以來、南北主張の爭議、漸く辣手に形して猶ほ動かず、安然として時勢と相關せざる者の如きは、果して彼れの眞意に出づるか。

■彼れは支那人には稀れに見る謹直の人なり、剛毅の人なり、信念に忠實なる人なり、權術を以て政權を爭奪するを好まざる人なり、其性格略ぼ我寺内伯に似たる人なり。事變に處して妄動せざるは其天性に出づるのみ。天下を爭ふの實力を有し、天下を爭ふの機會に遭ふて、而かも猶ほ自重して動かず、幕中碁を圍んで、局上の山河を爭ひ、石子の音に、胸中の龍虎を躍らす所、正に段其人の眞面目を見る。

■段も亦た野心を有す。況んや彼れの左右には奇策縱橫の才徐樹錚、曲同豐等の在る有り。段の早晩袂を拂つて起つの時有らんこと必せり。而して段は、張勳と同じく南方民權派の勁敵なりと雖も、淸朝の恢復を計圖する者にあらず、能ひ得べくんば、君主政治を樹立するの希望を有する者なれども、今日は漢人にして君主たるの適材なきを以て、止むを得ず君主的大總統を元主とする武斷的共和政治を實行するを以て時勢の急に適應するの途なりと信じて、已れ進んで之が元主たらんことを希望する者なり。知らず、事局は果して彼れの希望を成就するが如くに展開すべきや、否や。

仇等を驅逐し、江南の天地を擧げて辮髮軍の馬蹄に蹂躪したるの功に依り、終に勳一位、定武上將軍、定武軍統、長江巡閱使、安徽督軍の榮叙と顯任とを贏ち得たり。ノンキの賜物も亦た偉大なりと謂ふべし。

■張勳の行動は、武斷一天張りにて飽くまで無遠慮なり。氣兼ね、氣苦勞、彌縫、小刀細工、此等は彼れ曾て知らざる所にして、さなきだに横紙破りの彼れは、南國の富鄕たる徐州に割據して以來、その兵力漸く强大を加へ、居然として一方の雄となるに至つて、愈々其本性を發揮し、帝制問題の紛議起るや、敢然起つて袁の盛威に楯突くの壯擧に出でたり。我儘もコヽに至つて痛快を極む。

■今や辮髮將軍張勳は、大謀を北京に晋めて、盛んに横紙を破りつゝ有り。其北京に在るは、猶ほ徐州に在るが如く、思ふ事として爲さゞるはなく、其名は調停者なりと雖も、其實我意の遂行者たり。彼れの意圖と合はざれば、黎の意見も行はれず、督軍團の要求も容れられず。而して彼れの一擧一動は、直ちに天下の大勢と相關す。彼れも亦た一世の雄なり。唯だ惜むらくは好漢到底行はれ難き事業を行はんとしつゝ有り。

■張勳は清朝恢復論者なり。清朝恢復の到底行はれ難き事業たるは、之を清朝滅亡の爾かく容易なりしの事由に見て、徵證するに難からず。張勳の實力强大なるのみならず、山東督軍張懷芝、奉天督軍張作霖、河南督軍趙倜、安武軍統倪嗣仲、舊官僚政治家の巨頭徐世昌の同志ありて、事を共にすべしと雖も、四百餘州の民心を擧げて、夙に淸朝に背けるを奈何せんや。

■張勳其他の復辟派が、全く利害の念を離れて、舊主に忠誠を捧ぐる者なるや、頗る疑問に屬すと雖も、兎に角、其信ずる所を行ふに勇なるは愛すべし。彼れは淸朝時代に忠順の臣たり、而して民國となりて、横紙破りの豪傑たり。彼れの心事を忖るに、一片掬すべきものなきにあらず。世或は張勳を以て獰猛にして人情を解せざる虎狼の類なりと爲す者あり。僕頗る張勳の爲めに其誣を悲む。

(三) 寺內伯に似たる段祺瑞

たるに非ずや。第三次革命に於ける兩派の苟合は、やがて兩派紛爭の勢を促し、以て今回の動亂を招致したるに非ずや。兩派勢力の抗爭は、實に支那の亂源なり、禍根なり。

■然れども、兩派現在の勢力を比看するに、何れも一方を撃滅するには足らず。北方武斷派强盛なりと雖も、長驅して民權派の根據地たる、雲、貴、兩廣を陥るゝは難く、民權派に至つては、兵力の以て北方武斷派を殲滅すべき無し。是故に今回の動亂も、南北確然として分立せざる限り、其の早晩妥協を以て局を結ばんこと必然の勢なり。かくて兩派の爭執又た復た生じ、遂に動亂の不幸事を再演せんこと必せり。

■此の如くにして支那は終に兩派抗爭の厄に免るゝ能はず。而して君主政治の主張と云ひ、共和政治の擁護と云ふも、眞個に匡救の至誠より打算して、之に從事する者は少く、概ね皆身家の便圖より打算して其屬する所を異にするのみ。其中の傑出せる人々は、起つて天下を爭ふと雖も、大勢は終に其志を成すを許さゞるを以て、群雄紛爭、殆んど事局の收拾を期し難きに至る。

（二） 横紙破りの張勳

■現在支那の天下を爭ふ人々の中に就いて、最も人の視聽を引く者を張勳と爲す。

■語に曰く、敗軍の將兵を語らずと。張勳は第一次革命の際、南京の防戰利あらず、愛馬と愛妾を日本人某に托して、倉皇身を以て徐州に逃れたる人なり。敗軍の將なり。然れども軍敗れて兵を語らざるが如き氣の小さき男にあらず。逃れて徐州に到りたるころは、既に南京籠城の酸味を忘れゐたるやも知れず。彼れは飽くまでノンキに出來た男なり。

■其後彼れは盛んに兵を練り、糧を蓄へて實力を養ひたるが、其效遂に空からず、南方民權派の鬪將にして當時江西都督たりし李烈鈞の擧兵に出つて火蓋を切られたる第二次革命の際は、麾下の猛將勇卒を提げて革命軍の討伐に向ひ、嘗て敗軍の屈辱を取りたる南京の攻擊に當つて之を破り、少壯氣鋭の防將何海鳴、戴天

■武漢の一擧、能く滿洲朝廷の勢力を根底より撃滅したるもの、固より孫、黃以下、當年志士の獻身的努力の功多きに居ると雖も、抑も亦た民心を擧げて滿人の淫威を嫌惡するの甚しき、大勢こゝに窮極したるに因らずんばあらず。

■共和民主國の建設に至つては、大勢未だ之に適順せざる者有り。革命の志士の多くは、共和民主國建設の事業が、滅滿興漢の事業の成就と共に成就したるが如くに斷定したりと雖も、是れ早計の甚しき者なり。蓋し、當時一般民人を通じて、單だ滅滿興漢のみを以て革命の目的とし、政體の如何に至つては、利害相關せず、殊に共和民主國の建設に對しては、極力之を妨害して、中心より君主政治の樹立を期望する者頗る多く、其勢力誠に侮るべからざる者有りたるを以て、第一次革命は、僅かに共和民主國の名を贏ち得たるも、共和民主國の實を贏ち得るに至らざりしは、袁世凱を皇帝に擬したる帝制派が、一時殆んど、其目的を達成せんとしたるに見て、首肯せらるべし。

■君主政治主張者の勢力は、北方に多く、南方に少し。軍人に多く、非軍人に少し、北洋武斷派を以て呼ばるゝ所以なり。共和政治主張者の勢力は、南方に多く、北方に少し、非軍人に多く、軍人に少し、南方民權派を以て呼ばるゝ所以なり。而して兩派勢力の抗爭、爾來益々甚しく、紛料に紛料を重ねて、遂に今日の形勢を釀成せり。

■第二次、第三次の革命は、民權派が、共和政治擁護の目的を以て、武斷派の勢力を絕滅せんが爲めに行はれたるが、第二次革命は、民權派の失敗を以て終り、第三次革命は袁世凱の暴殂に由り、兩派の妥協に終れり。

■願ふに。兩派の勢力何れかゞ、根底より撃滅せらるゝに非ずんば、支那は永に動亂の國たらざるを得ず。

■見よ、第一次革命に於ける兩派の妥協は、やがて兩派料葛の因となり、延いて第二次革命を釀成せるに非ずや。第二次革命に於ける兩派勝敗の不徹底は、やがて民權派の捲土重來となり、遂に第三次革命を激成し

のもすそをぬぎかへて薄き衣のめづらしきかな」、趣味更に洗練せられ、品格一段の向上を經て此の流行に一轉機を與へることを望むものである。道德の問題として、趣味の問題として、經濟の問題として、さて又衞生の問題として。

支那の天下を爭ふ人々

小山田劍南

（一）武斷派と民權派の抗爭

■參戰問題の糾葛は、延いて北洋武斷派の、南方民權派迫害となり、支那は重ねて、兩派の爭雄に由つて、全國の動亂を惹起するに至れり。知らず、活劇の終結果して如何。

■今日の所謂南方民權派の前身たる革命志士の宣傳に由つて行はれたる第一次革命の目的が、國家の統治權を滿洲人の手より奪ふて之を漢人の手に移すこと、及び君主專制政治を廢して共和民主國を建設することに在りたるは、吾人の言說に待たずとも、夙に世人の周知する所に屬す。而して目的の中、前者に於ては容易に成功を告げたるが、後者に於ては、今に至つて猶ほ其成功を見ざるのみならず、動もすれば、其の終に成功することなきやを疑はしむるの情形に在り。其故何ぞや。

■抑も、滅滿興漢の氣運が、支那の全土に彌りて鬱積すること、決して一日一夕の故に非ず。かの長髮賊の巨魁洪秀全が、匹夫より起つて天國大平王と爲り、其勢殆んど愛親覺羅氏の社稷を覆さんとしたるも、畢竟、此氣運に順應したるの致す所のみ。

なものは安心で、何遍でも洗濯がきく、きかなくなつて又買ふことが出來る。夏季の服裝はこれが肝要だ。此肝要點を逸却して何にも出る汗を止めてまで汗染が出來はしないかと心配しながら金目のものを着るには及ばぬ。此の如きは錦繡に糞土を塗るやうなもので、錦繡貴ぶべしと雖も、糞土之れを汚せば何人も鼻を掩はざるはない。此點からいふと吾等は男子の夏羽織も成るべくは之れを脫せしむる習慣を作りたい。羽織袴は今日普通の禮服となつて居るから之れを廢することはむつかしからうが、既に袴をつけて居れば、何にも洗濯のきかぬ此の羽織を着て汗を背負つて居らねばならぬ理由はなからう。

輕は即ち美なり

夏の天地は濃厚である。之に調和するものは淡泊でなければならぬ。夏の氣候は酷烈である。之に對するものは淸爽でなければならぬ。輕快は淡泊を表示し、瀟洒は淸爽を感ぜしむる、身に着くるもの多ければ輕快の情を減じ、體に纏ふもの重ければ淸爽の感を失ふ、夏の衣は輕く淸く、其の色は淡く爽かなるべし。輕ければ輕きほど自ら凉しく、淸ければ淸きほど自ら快く、淡ければ淡きほど人意を快にし、爽かなれば爽かなるほど人目を美にす。理は極めて平凡、しかも此の平凡の理を忘れて、何が故に重きが上に重く、濃きが上に濃くして、さなきだに燬くが如き三伏の炎天に虛榮を背負い、胡魔化しを纏ふて自ら苦み、他を厭はしむるの愚を演せんとはする。

世には馬方（まご）にも衣裳といふことがある。衣服は確かに人を美にするものであるが、たゞ着さへすれば、それでよいといふのではない。其の人、其の衣と合はざれば如何に美服し盛裝しても所謂沐猴にして冠するの譏は免れず、所詮衣服は其の人の趣味の表現、品格の發露にして、時代の流行は時代の趣味を表現し、品格を發露して居るに外ならぬから、現代の如き金錢萬能の世に高價卽高雅の謬想に陷り、慾望これ趣味とする世に胡魔化しの盛行するは已むなき事情であるが、衣改まれば心改り、服新たなれば氣も亦新に、「いつしかと花

の發露か。之に模せんとする胡魔化しの顯現である。衣服をして禮容の一つとすれば世にこれほど無禮なことはあるまい。禮の本義は謙讓にある。自ら他に誇らんとす、謙讓の美徳いづれにある。禮の要諦は誠實にある。人を胡魔化さんとする誠實何の所にかある。衣服の問題は單なる外容の問題にあらずして精神の問題であり、道徳の問題である。彼等或は云はむ、敢へて誇らんとするにあらず、人目を快にせむとするのみ、敢て胡魔化さんとするにあらず、外容を美にせんとするのみと。外容を美にし、人目を快にす、須らく美の制約に遵せざるべからず、美の制約は調和にあり、徒らに拙畫工が濃彩を施すが如く粉飾して得らるべきものではない。粉飾いよ〳〵多くして醜いよ〳〵甚し。毫も時と場合とを考量せず妄りに濃彩を施すして得々たるは拙の拙、陋の陋、自己の趣味の低劣を示し、他をして不快の念を懷かしむるの外、何の美かあるべき。若し其れ衷心に自負の伴ひ、胡魔化しの混ずるに至つては奸譎、寧ろ唾棄すべきである。しかも、之れ見るものの僻み根性のみ、著る者豈に此の如き深き企あらんやと云はゞ、吾等は濃彩も、不調和も、自負も、胡魔化しも暫く忍ぶべきも、夏季の服裝に於ては忍ぶべからざる他の理由がある。

夏季服裝の第一義

夏季服裝の第一義は清潔である。如何に立派な衣服を纒ふとも汗臭く垢染みて居つては誰れも美感を懷かぬ。垢染みず、汗臭からざるは幾回も洗濯し得るものでなければならぬ。金目の衣服は殆んど洗濯が出來ない。よし出來ても頗る億劫である。億劫であるからツイ其儘にして僅に垢染抜き位で我慢するから少しく置けば又付いて臭氣はなか〳〵に去らず、如何に香水を振り掛けて胡魔化さうとしても、却つて異様の臭氣を生じて到底抜けるものではない。若し其れ、模造品、僞造物に至つては一度の洗濯に色は剝けて、二度と着られない醜態を演ずる、これが知れて居るから洗濯を見合す、見合すから汗は背に斑紋をなして臭氣は終に近づくべからざるに至る。其の段になると安くても堅實

行の源泉となるのであるが、我が日本の上流に果して服裝を理解する力のものがあらうか、三百年間洗練せられたる江戸趣味には多少繊弱の弊はあつたであらうが、其處には清爽にして輕快なる或る物があつた。これを破壞して新時代を形造つたものは、少くとも服裝には無趣味、無理解なる田舍武士か、古式慣例以外何事をも知らざる堂上人であつた。彼等は金さへ使へば立派なものと心得、飾り立てさへすれば上品なるものと考へ、高雅なる服裝は獨り高價なる支拂によつてのみ得らるべきものとした世間見ず、成り上り者、之れが流行の源泉となつて溢れ出たのであるから、慾望即趣味、趣味即慾望と解して羽毛を染めて孔雀を學ぶ呆鴉の如く、塗り立て、飾り立て、成るべく金目のものを身につけて、高慢顔するのを以て當世と心得、あゝでもない、かうでもないの結果、流行の源泉は却つて呉服屋の手に移り、何か新らしいものを案出すれば、一つでも多く身に纒ふことになつて上へ上へと重ねることになつたのではあるまいか。此の流行を釀成するには更に他の有力なる原因がある。それは階級制度の打破せられて、貧富が直に貴賤差別の標準となり、生活の競爭激甚となつて隆替興亡の頻繁な社會は、金を以て人を判斷するの外なく、借着でも立派でさへあれば紳士と見られ令孃と立てらるゝ世の中は、我れ勝ちに飾り立てねば損と心得るに至つたのも看過することが出來ない。此原因はやがて又模造品(まがひもの)、贋造物(にせもの)の旺盛となり、成るべく金のかゝつたやうに見せさへすれば當世に重寶がられて、堅實な本場物や、地味な眞物は影を潜むるに至つたのではあるまいか。これには文化の變轉の甚しきにつれ、流行の推移も頻繁で、昔のやうな十年二十年、甚しきは一代二代も同じ模樣で濟して行くことの出來なくなつたから、勢ひ其の時限りの見得一點張のものゝ流行となつた原因も手傳つて、胡魔化し間に合せが國民の外貌を飾る衣服にまで現はるゝに至つたのではあるまいか。

禮でもなく、美でもない

現代の服裝は黄金を飾りて他に誇らんとする自負心

く、楚々として涼風にそよぐ所に云ひ知れぬ美があるとの辨護が出るかも知れないが、夏の女の形體美は決して此のサンマー、コートで増さるべきものではない。一體、日本の女の服裝の美は其帶にあるので、帶が服裝中最も高價なものである如く、帶が背部の全體を支配して帶の恰好によつて背の低きものも高く、肥えたものも細く、全體の調節をよくして行くので、羽織を着て居る女よりも、羽織を脫いだ方が恰好よく、冬の女よりも夏の女の清楚に見ゆるのは全く此の帶の力である。古來我が國で女の禮服に羽織を用ひなかつたのも決して偶然でない。それを防寒なら已むを得んが眞夏の暑さに、しかも清楚の感じを滅却し、其の美を醜化するサンマー、コートを着して折角の帶を隱くさんとするは、其の何の心得たるを解するに苦む。

夏の要求は清楚であり、輕快である。服裝の美は其の人、其の時と其の場合に相應せねばならぬ、腰より下の不恰好にして、しかも背の低い日本婦人が、清楚を要求し、輕快を望む炎天に、街頭や車上にサンマー、コートをピラつかすは人と時と場合とを心得ざる大失態である。併し此の不利なるサンマー、コートが今日に流行するには一つの理由がある。これを着て居ると綿入繻袢も本繻袢に、摸造博多も本場博多に見えるといふ利益で、金のかゝらぬもので、かゝつたやうに見せやうとする現代心理は此サンマー、コートの流行の中に髣髴として現はれて居る。卑むべき哉、現代人。虛僞の生活の爲めに此の醜を演ぜんとする。吾等は現代流行の心理に向つて一瞥せざるを得ない。

無趣味なる流行

個人は理解し、群衆は雷同す。しかも群衆の力大なるに當ては個人の理解力を消耗してたゞ摸倣、雷同を事とするに至る。流行の心理も亦此の如く、當初は何人かの理解によつて創始せられたものであらうが、＝インバネス＝は蘇格蘭の貴族によつて初まつたといふが、終には無理解に模倣せられて滔々として一般の風を爲すに至るので、上の好む所、下これより甚しきはなく、こゝにも引力の理法は應用せられて、上流はいつも流

寒暑を防衞するのみを以て律することは出來ない。併しながら形體を覆蓋し、寒暑を防衞するは本であり、主である。此の本を忘れて末に走り、主を逸して從に就くが如きは本末顚倒、愚も亦甚しきものである。

暑苦しいインバネス

いつの頃よりか流行し出した夏のインバネス、炎天に汗を流して之れを着て歩くは何の爲めであらう。家居には浴衣一枚の身が外出には羽織の上に此の暑苦しいものまで着して何の功があるのであらう。塵除けだといふ、併し塵は遠慮なく汗ばむだ顏や手足にくつ付く、インバネスの覆ふて居る部分は着物の覆ふて居る部分、着物の塵は除けるかも知れぬが顏や手足には何の功もない。サッパリとした浴衣や帷子は塵を吸收せぬが、毛織のインバネスは多く塵埃を吸收するから、ツマリは塵除けでなく、塵受け、夏の暑い日に塵受けを背負ふて歩くは何の必要であらう。それも形體の美を成すといふなら別問題であるが、不恰好なるインバネス、鐘の化物のやうな姿は、誰れの目にも美觀を與へぬ。自ら苦むで醜態を演ずるインバネスは、さなきだに悃き夏の活動には自からの敏活を妨げ、他に對しては夏の要求たる輕快の感を害する以外、何の特色をも有せない無用の長物である。强て其の長所を見むれば所謂ボロ隱しである。ボ〃隱も決して不必要ではない。人に不快を與へないといふ社交の原則からボロを隱くして美しく見せるもよいが、インバネスは始終着て居るのではなく、訪問には脫がねばならぬからボロ隱しといふは往來の時だけだ。往來の時だけボロを隱さんとするは幼稚なる虛榮だ、此の幼稚なる虛榮の爲めに衣服本來の目的を失脚して無益の計費と不用の辛抱とに活力を減殺し、社交の敏活と行動の輕快とを欠き、因循の風を馴致し、姑息の俗を醸成するは確かに亡國の兆なりと評せられて何の答辭がある。

不恰好なるサンマー、コート

女のサンマー、コートも亦た殆んど同一の理由の下は排斥することが出來る。併し蟬の羽のやうなサンマー、コートは男のインバネスのやうな不恰好なものでな

し大切に可仕所、無故口論を仕出し害都訓導及旅宿騒動剰出奔仕條言語同斷猥藉不屆ニ依而……」と申渡書を讀んだ。傳藏は死罪を云ひ渡されたのであつた。

所刑の日は五月二日であつた。場所は大阪三軒家、外矢來七十間、内矢來三十間の刑場には、夜の明け方から見物の人が集つてゐた。

兩奉行をはじめ係の役人、宗家と岡部家の家士、朝鮮の官人など數百人の人々に取圍まれた傳藏の籠は、朝日を浴びて、三軒家の渡頭にあらはれた。

夏季服裝輕美論

加藤咄堂

何の爲めの衣服ぞ

何の爲めの衣服ぞ。問題は此の平凡なる點より出發する。

「衣は以て形體を蓋ふべし、何を苦しんでか文飾を競はむ」とは道學者の見解であり、「服は以て寒を防ぐべし、防ぐに物なくんば莚一枚をも纏ふにあらずや」とは簡易主義者の提言であるが、吾等の慾望は唯だ寒暑を凌ぐだけを以て滿足するものでもなく、吾等の趣味・は唯だ形體を蓋ふのみを以て足れりとするものでもない。吾等は自ら以て快からんことを望み、他の見て以て快からんことを希ふ。他の見て以て快からんことを希ふは社交の禮儀なり。自ら以て快からんことを望むは趣味の發露なり。衣服の選擇は此の標準の下に成され、服裝の美は此の制約の下に進む。文化いよ〳〵進みて服裝いよ〳〵美に、社交益複雜を極めて衣服の選擇益思慮を要するは自然の數で、單に形體を覆蓋し、

其所で人家はづれの木賃宿に一泊して、翌日早く出發したが、地理不案内な上に、目差す所もないので、足にまかせて歩くより他に仕方がなかつた。そしてその夜遅く、三人は尼ヶ崎に著いて、宿を取る家を探して歩いた。傳藏は草鞋に足を喰はれて、跛を引いてゐた。

小さな家から火の光が漏れて、竹の戸の少し開きかけた所があつた。喜介が這入つて行くと、老人が圍爐裏に火を焼いて、何か煮てゐた。

『三人連の旅人でございますが、お庭の先でも宜しう御座います。何うか一夜のお宿を願ひたう御座います。』と喜介が云つた。

老人は不意に人が這入つて來たので、驚いたやうにしてゐたが、『ホウ、旅の衆か、それはお安い御用だが、見らるゝ通り著る物もかける物もない。それで宜しければお泊りなされ、』と云つた。

三人は喜んで藁莚を敷いた座敷の上に疲れた身體を横へたが、不幸にして傳藏の人相書が其邊にも廻つてゐた。宿の老人は傳藏の著物から容貌が人相書の男に酷似(ちつくり)であつたから、密に裏口から抜け出して番所に密告した。捕卒頭蜂田九郎兵衛は、その夜の内に老人の家を圍んで、傳藏主從を捕へた。

九

本願寺の椿事には、幕府の方でも驚いて、目附を上坂さした。

奉行所では、傳藏の吟味が初まつて、揚屋(あがりや)に送られてゐた傳藏は、奉行所の白洲に引出された。

奉行所の堂上には、兩奉行とその係の役人が控へ、北の方には、三使以下朝鮮の上々官をはじめ、宗家と岡部家の家士が列を正して控へてゐた。朝鮮の下官と日本の下役人とは庭の上にゐた。

傳藏は奉行の問ひに答へて、『私は父桂彦の仇を討つたものであります。』と云つた。『左樣ではあるまい、身分を辨へず、喧嘩口論を仕出かし、それが爲にあやめたものであらう、』と奉行は云つた。

係の役人は、『其方儀此度聘使に隨ひ通詞の役目を致

ましたが、多分高野山を志して行つたらうと思ひます。」と云つた。

罪人は大半傳藏に定つたので、捕卒は八方に飛んだ。傳藏の人相書も廻つた。捕卒頭の蜂田九郎兵衛は、有馬方面に向つて出發した。

八

誓福寺の住職の白狀は、甥を逃がす爲めの方便であつた。推天宗を殺した傳藏は、その足で誓福寺に行つて、身の振方を相談するや、伊丹に縁故のある寺があるから、其所へ行けと云つて、寺男の半介と、新に雇入れた喜介と云ふ者とを付けてくれた。

三人は笠に面をかくして伊丹に行つた。目差す寺は小高い丘の上にあつた。山門を這入ると庭の左隅に大きな梅の木があつて、青々と茂つた葉がくれに澤山の實が見えてゐた。その下に二三羽の鷄がカサカサと餌をあさつてゐた。庭の右隅には鐘樓があつた。

傳藏は二人の從者を山門の口に立たして置いて、一人這入つて行つて案内を請うた。腰衣をつけた若い僧が出て來た。

「私は大阪の誓福寺から參つたものだが、住職は御出でなさいませうか、」と笠の紐を解きながら云つた。

「大阪の方へ用達に行つて留守でございます。」

「住職が留守では氣の毒だが、住職宛の書狀も持つて居るし、住職が歸れば分る事だから、それまで休まして貰ふ譯には行かないだらうか、」

「私は留守を頼まれて居る者でありますから、一存では計ひかねます。お氣の毒でも出直して來て貰ひませう、」

「出直してくると云つても土地が不案内であるし、本堂の隅でも大事ないから休まして貰ひたい。」

「どんな事があつても、お留守には人をあげる事は出來ません。」と云つて若い僧は引込んで行つた。

傳藏は仕方なく、二人をつれて寺を下りたが、薄の穗にも驚かさるゝ落人の身は、四邊に心が置けて靜としてゐられないので、寺の方は諦めて、足の向くまゝに歩いてゐると、夜になつて池田に著いた。

曲者は、その刄物を取り直して、崔天宗の胸の邊を目がけて一突きに突き通した。崔天宗は一聲呻聲を立てながら、刄物の柄に兩手をかけて死んだ。曲者はその儘刄物を放して逃げ出した。

本堂に宿直してゐた者は、怪しい呻聲を聞いて騒ぎ出した。本堂の東口に宿直してゐた一人は、黒い怪しい影が縁側から庭に下りた所をチラと見た。

夜の内に町奉行所から檢視が二度來た。最初に來た檢視は、崔天宗が兩手に刄物の柄を握つて死んでゐるから、覺悟の自殺らしいと云つた。二度目に來た星田數右衛門と云ふ老人は、覺悟の自殺なら仰向に倒れるが普通である、これは他殺であると云つた。

翌日になつて、聘使に關係のある宗家の家士と岡部家の家士とが町奉行所に呼ばれた。奉行は一同の者に向つて、「客館に出入する者は、對州の家士と岡部の家士との他にないから、兩家の家士の中を吟味しあふが好い。」と云つた。

奉行は重ねて、「關係人一同、一人も殘らず出頭して居るか。」と聞いた。

對州の通詞鈴木傳藏が一人缺けてゐると云ふ者があつた。奉行は傳藏の室に人を遣つた。

室には下男の三助と幸太がゐて、傳藏は昨夜出て行つた切りで歸らないと言つた。奉行所では、傳藏に疑ひをかけて、三助と幸太を捕へて來た。

奉行は、二人に向つて、「お前達は大阪へ來た時に、傳藏の供をして行つた事はないか。」と聞いた。

すると幸太は、「古舟の多くある所の屛風屋と、寺の多い所の藪垣のある寺とへ行つた事が御座います。」と答へた。

其所で幸太を先に立てゝ、先づ屛風屋を尋ねて行くと、果して阿波座に同國の者だと云ふ屛風屋があつたが、何の手掛にもならなかつた。

今度は藪垣のある寺を尋ねて行くと、長谷に誓福寺と云ふ寺があつた。その住職は傳藏の伯父であつた。

住職は奉行所に牽かれて、「夜の明け方に寺へ來て、發心したから出家になると云つて、髪を剪つて出かけ

いやうになると云ふのが、彼の恐れる所であつた。その根本問題へ持つて來て、恥かしめられた怒が加はつた爲に、母から聞かされてゐた父の仇と云ふ淡い憎惡は、不思議に生々とした力ある者となつた、彼はそれに頭を惱まされて、人參から得る利益の事も忘れてゐた。

その內に三月十一日になつた。聘使の任務も終つたので、一行は東海道を引返して、四月四日に大阪に著いた。

傳藏は三使に從いて東海道を下りながら、途々崔天宗に眼をつけたが、心に迷のある彼は思ひ切つて手を下す事が出來なかつた。彼の考は、崔天宗を倒すにしても、初めから父の仇と掛合へば、名も好い上に、一番安全であるが、人の噂を聞いただけで、何の證據もない事であるから、崔天宗がそんな事はないと云へば、幕府でも聘使付の上々官に向つて、危害を加へさせるやうな事はさせない、それかと云つて暗殺すれば、現はれて刑死する恐れがある、何とかして安全に崔天宗を倒す事は出來ないだらうかと云ふ事であつた。彼は夢のやうな心地で、大阪に歸り著いたのであつた。

七

四月五日は、朝から暖な雨が降つてゐた。聘使の一行は、客館となつてゐる東本願寺の內で、長旅に疲れた足を延ばしてゐた。

夜も早くから寢た。亥の刻には、寺の中はもう寂寥として、淋しい雨の音の中に、時折柏子木の音がするばかりであつた。

本堂の緣に黑い怪しい影があらはれた。その影は、本堂の北西の隅になつた方に步いて行つた。其所には戶板を以て支切りをした六疊敷位の室があつて、中には金屛風を引廻らし、その中に床を敷いて崔天宗が仰向に睡つてゐた。枕頭にある有明の行燈の光は、淋しさうにその顏を照らしてゐた。

黑い怪しい影は、その枕頭に立つた。黑い頭巾で面を包んで、八寸ばかりの鎗の穗先に短い桐の木の柄をすげた物を片手に持つてゐた。

て來て貰る事は、公然の秘密になつて居るから、それは大目に見ても好いが、何うしても大目に見て居られないのは、人參の賣方を頼まれた通詞の中には、その人參と廣東人參を取換へて賣つて居る者があるらしいが……、いや、らしいではない、私は大阪で朝鮮の役人から頼まれた品だと云つて、廣東人參を賣つてゐる者を見た事がある、これなどは朝鮮人參の名を汚す上に、日本の者々欺す事になつて、どつちから云つても怪しからん事だと思ふが、貴君は何う思はれる。」

何人も知らないと思つてゐた惡事は、都訓導に知れてゐた。傳藏は顔を眞赤にして、膝に置いた手をモジ〳〵さしてゐた。

『私は一度、對馬家の留守居にまで訴へて、後々の見せしめにして貰ふかとも思つたが、將來さへ謹む事なら、そんな可哀さうな事をせずともと思つて、何人にも云はずに默つてゐたが、又、江戸でも怪しい風説があるから、貴君と云ふ譯ではないが、貴君も通詞で人參を頼まれる地位にある人だから、以後好く注意して貰ひたい。」

『何うも相濟まん事を致しました。これから屹と注意致します。』傳藏は二つ三つ續けさまに頭をさげたが、さげてゐる中に、桂彦の事が頭に浮んだ。彼は頭をさげた事を後悔しながら、物語の中から拔け出て來たやうな親の仇の顔をジロ〳〵と見た。

六

傳藏の頭には、崔天宗の事が秩序もなくゴタ〳〵と一杯に詰つてゐた。彼はその處置に就いて苦しんだ。庭下駄を履いて、紅梅の咲いてゐる本願寺の内庭をグル〳〵と歩きながら、捉へやうとしても、何うしても捉へられない或る者を追ふやうな眼付をしてゐる事があつた。

傳藏が崔天宗の事に屈托してゐる根本の問題は、己れの惡事を知られてゐると云ふ事である。宗家の方へは云はないにしても、朝鮮へ歸れば屹と云ひ振らすから、次の聘使の來る時には、自分を通詞にしないのは分つてゐる。さうなれば人參の利益を得る事が出來な

つたり、自分のつれてゐる下男の三助と幸太の二人を連れて、ぶら〳〵と市中を歩いたりした。市中には丁子茶の色の著物を著た女が多かつた。若い女は花簪をさして、旭の櫛と云ふ朱塗の櫛を差してゐた。操芝居の看板が其所此所にあつた。『旦那のねつた膏藥』と賣り歩いてゐる行商もあつた。寺の門や路次に遊んでゐる子供は、『大文字屋の大かぼちや』と囃すその頃流行のはやり唄を歌つてゐた。

傳藏は又窃に吉原に行つたりした。淺草二十軒茶屋の傍を通つてみると、軒の行燈に書いた扇屋とか梅屋とか云ふ屋號の扇や梅を畫にして、畫の下に屋の字を書いてあるのが珍らしかつた。吉原五十軒編笠茶屋には、編笠を釣してあつた。傳藏はそれを見い見いして通つた。

三使饗應の爲めに、吹上御苑で馬術を見せると云ふ日であつた。三使が出て行つた後で、傳藏は下男の幸太を連れて、又市中見物に出かけやうとしてゐると、都訓導が話しがあるから來てくれと云つて、仲間の通詞が知らして來た。

都訓導とは諸事の奉行役で、一行の中には三人の都訓導があつたが、上官は彼の崔天宗であつた。傳藏は何事だらうと思つて、廊下傳ひに崔天宗の室に行つた。

五十格恰の背の高い都訓導は、むつちりした顏をして、傳藏の前に坐るのを見てゐた。

『貴君に云つて置きたい事があつて來て貰つた譯だが、それより先づ聞きたいのは、貴君は私の國から來てゐる者から、人參を頼まれた事はないだらうか、』と崔天宗は靜に重々しく云ひ出した。

うしろ暗い事ばかりしてゐる傳藏は心が震へた。

『は、はい、』と云つて、その後を何う云つたものであらうかと考へてゐた。

『有るかな、』と崔天宗は追及した。

『有ります。』

『有るだらう、有る事は藍島に渡つた時から私は知つてゐた。私の國の者が日本に來る時に、人參を持つ

きを變へて、口に溜つた痰を窓の外に吐いてゐたが、

「…あれは何だらう、」と云つて乾となつた。

見た。傳藏はその傍に行つて、仲間と頭を並べて海の方を見た。海は暗く物凄かつた。ふと見ると、船から二三町離れた海の上に、提燈の火ぐらゐある青い火がトロ〳〵と燃えてゐた。傳藏は「ムー」と呻るやうに云つた。

五

正月の二十日になつて聘使の船は、大阪の川口に著いた。朝鮮の船は其所に繋いで、聘使の一行は、御迎として差廻はした日本船に乗り移つた。御迎の船の中には、孔雀丸、鳳凰丸、紀伊國丸、新土佐丸など云ふ四艘の御座船があつた。御座船は皆朱塗の綺麗な船でそれには葵の紋を染め拔いた紫の幕を引いてあつた。阿波、安藝、伊豫、土佐、備後、豐前、長門の各大名から出した船は、その後から聘使を護衛して行つた。

船は大川を溯つて、その夜の戌の下刻に難波橋に著いた。大阪の接待役岡部内膳正は、聘使の一行を迎へて、東本願寺に送り込んだ。

二十六日になつて、聘使の一行は、大阪を後にして、船で山城の淀まで行き、それから徒歩になつて京都に出で、京都から近江に入り、近江から美濃尾張と云ふ風に、東海道を登つて行つて、二月の十六日に江戸に入り、客館に指定されてゐる淺草の本願寺に這入つた。

三使に從つてゐた傳藏は、相かはらず途々心付けの金を貪つたり、人參を取扱つて、上前を放ねたり、廣東人參を混ぜて賣つたりした。殊に大阪には、數人の同類がゐて、朝鮮人の賣物だと云つて、廣東人參を賣り歩いた。

傳藏がこの惡くむべき行は、迂濶な韓人の眼にも見えた。傳藏の身邊には、その惡事を見落すまいとする二つの眼があつたが、彼はそれを知らなかつた。

三使は一兩日旅の疲れを休めた後に、大半の從者を本願寺に殘して置いて、日々將軍家を訪うた。

傳藏も多く本願寺に殘されてゐたので、人參を取扱

盛之丞はその意味が分らないので、『何處からでもお揚げ下され、』と云つた。

『聘使の船が着けば、それぞれ揚り場を構へて、客館に入れる事は分つた事であるに、それが調はないのは、當家役人の手落ちで御座らう、』と傳藏は叱り付けるやうに云つた。

盛之丞は、心付けをしなかつた意趣返しであると思つた。怒は一層込み上げて來た。『當國は先格によつて聘使を迎へて居る、役人の手落ちとは、何を見て云ふか、今一度云つてみよッ』と刀の柄に手をかけて、今にも梯子を驅け上らうとする氣勢を示した。

傳藏は驚いて後に退つた。接待係の人々は、左右から盛之丞を宥めた。盛之丞も役目の手前を思ひ返して、怒を押へて平生の態度に復した。

船室の口に立往生してゐた三使は、漸く梯子を下りはじめた。三使が下りると上官が下り、上官が下りと次官が下り、次官が下りると中官が下り、中官が下りると下官が下りた。傳藏は梯子の口に立つて、之に注意を加へてゐた。

盛之丞は下からその容を見て、齒嚙をしてゐた。

藍島の經驗のある傳藏は、心の内に盛之丞を恐れて、その夜は度々恐ろしい夢を見たが、何うした事か、その翌日から濱奉行が代つて、盛之丞は姿を見せなかつた。彼は濱奉行の代つたのは、場所柄も顧みずに、愚にも己れに反抗した爲に、謹身を命ぜられた爲めであらうと思つた。彼は非常に愉快を感じた。

室津の滯在は五日ばかりで、それから大阪に向つて出發した。その室津を出發した夜の事であつた。三使の前を退いた傳藏が、通詞室に歸つて行くと、仲間の通詞の一人が、船窓の敷居に背後向に寄り懸り、少し開けた窓に頭を出して酒の醉を醒してゐた。

仲間は傳藏の這入つて來るのを見ると、『お前は聞いたらうな、お前と喧嘩した濱奉行は、腹を切つて死んだと云ふぜ、』と云つた。

己れの關係で二人の武士が非命に死んだ。傳藏は迷信的に戰慄を覺えた。仲間はゴッと咳をして、頭の向

聘使の船は、二十日過ぎに藍島を出帆して赤間關に渡り、其所で歳を越して、波靜な瀬戸内海に船を入れた。そして周防の上關、安藝の蒲前、備後の鞆、備前の牛窓を經て、播磨の室津に著いた時は正月の十四日の未の中刻で圓い冷たい月が樓船の檣の上にあつた。

不思議に鄕右衞門の刃を免かれた傳藏は、その當座は謹んでゐたが、直ぐ忘れて、泊り泊りの接待役や濱奉行から心付けを貰つたり、賴まれた人參の上前を放ねたりしてゐた。

室津は酒井雅樂頭の領地であつた。聘使の船が夜になつて這入つて、一行の上陸は朝と云ふ事になつたので、接待係の諸役人は、その夜、打ち連れて船の中へ挨拶に來た。

四十前後の眉の濃い、唇の赤い濱奉行の深江盛之丞は、通詞の室となつてゐる船室の片隅へ傳藏を呼んで、三使が上陸する時の作法を聞いてゐた。

『その事なら私が一切心得て居りますから、御安心なさるが宜しう御座います。……それに牛窓にしても、鞆にしても、濱奉行さんの格別のお賴みが御座いましたから、私も特別に御注意申したやうな次第で、……なに、それは一切私が心得て居りますから……』と傳藏は媚びるやうな眼付をして云つた。

傳藏の言葉の意味は、盛之丞にも分らない事はないが、武士氣質の彼には、羹汁を頭から浴びせられたやうに思はれた。彼は傳藏の言葉が終るや否や、『兎に角、何分宜しく。』と云つてフイと行つて了つた。

傳藏は呆氣に取られてゐたが、我に歸つて來ると共に、盛之丞に對する怒が湧いた。『よし、明日は仇を討つてやるぞ。』と心の内に叫んだ。

やがてその夜が明けた。空には白い凍つた雲が朝日に染められて飛んでゐた。三使は船室から出て、揚り場にかけた梯子から下りやうとした。

三使の先供をして出て來た傳藏は、梯子の下に濱奉行の姿を見出すと、『三使上官の揚り場は出來て居らるゝが、他の方々は何處からお揚げする積りです。』と云つて冷に見下ろした。

傳藏と崔尙は、連立つて歸つて來た。その日崔尙は、旅館に歸つて、己れの恐であつた事は思はないで、注意してくれた鄕右衞門を怨んで居ると、傳藏が來たので、二人で鄕右衞門を苦しめる事を相談して、濟森行の詰所へ行つたものであつた。

傳藏と崔尙とは、兎ても注文の大木はなからうから、鄕右衞門の方から金でも包んで折れて來るだらうと思つてゐた。そして傳藏は、鄕右衞門の行動に注意してゐた。鄕右衞門は、人を八方に出して、注文の材木を尋ねさしてゐた。『夜も睡らずにやつて居るさうですが、とても有る筈はありませんよ、』と傳藏は崔尙に話して笑つた。

そして約束の五日目の朝が來た。傳藏は崔尙の旅館に來て、鄕右衞門からの返事を待つてゐた。

其所へ鄕右衞門からの使が來た。『お約束の木が調ひましたから、御用に立つか立たないか、使の者と一所に當方にお越しになつて、御一覽下さるやうにとの主人の言葉で御座います。』

傳藏は取次いで張合拔けがした。崔尙と顏を見合はして苦笑し合つた。それでも行かない譯には行かない。二人は仕度をして、使の者に從いて出やうとすると、傳藏の仲間の通詞の一人が來て、『三使の所で面倒な話があるから、お前が代つて遣つてくれ、』と云つた。

氣の進まなかつた傳藏は、それを云ひしほにして、崔尙には仲間の通詞をつけて鄕右衞門の許に遣り、己れは三使の旅館に行つて、正使の鄭尙淳と接待役との間の通詞を勤めてゐた。

一時刻（とき）ばかりすると、三使の旅館に恐ろしい知らせがあつた。鄕右衞門が卜船將と通詞とを殺して、己れも自殺したと云ふの椿事であつた。約束の大木が手に入らなかつた鄕右衞門は、崔尙と傳藏の二人を切つた上で、己れも自殺しようとして、二人を誘き寄せた所であつた。崔尙は門口まで逃げ出して死んでゐた。

傳藏は之を聞くと震ひ上つて、口が利けなかつた。

四

を照らした。

「かく夜分に推參致しましたのは、卜船將殿から、今日破損した荷物舟の修繕に就いて、御相談申したい事が御座いまして、」と云つた傳藏は、右隣にゐる崔伺に向つて、何か朝鮮語で話しはじめた。

郷右衛門は心に冷笑を堪へて、二人が何を云ひ出すであらうかと待つてゐた。

「それで、修繕と申しましても、只の修繕なら官船附の大工が御座いますから、別に御心配を掛けなくても宜しう御座いますが、一つ困つた事は、舵にする材木で御座います。」

「ホー、その舵にする材木を當家で心配せよと云ふ事であらるゝか、」

「左様で御座います。」

「木の寸法は……」

「長さ五間、元口二間半で、木は檜か槇ならいづれにても苦しう御座いません。」

「長さ五間に元口二間半、……當國には、材木が拂底して居るから、兎てもそんな大木は手に入れる事は覺束ないと思ひます。」と郷右衛門は迷惑さうに云つた。

傳藏は之を聞きながして、崔伺と話しはじめたが、二人の口の端には、嘲りの色があつた。郷右衛門は直ぐ、これは傳藏が先刻の事を根に持つて、卜船將を唆かして自分を苦しめに來てゐるのだなと覺つた。

話しがすむと、傳藏は又郷右衛門の方に向いた。「卜船將殿の云はるゝには、その木が當國にない時には、隣國からでも取寄せて貰ひたい。一國の領主として、それ位の事の出來ない筈はない。それとも日本國中に、右様の木がないと云ふ事なら、朝鮮へ使を遣つて取寄せるとの事で御座いますが、若し朝鮮へでも使を遣るやうな事でもありますと、我が日本の恥かと思ひますが、何とか工風がないもので御座いませうか、」

「よし、今日から五日の内に調へませう、」

「五日の内に、」と傳藏は念を押した。

「左様五日の内に、」と郷右衛門は壓し伏せるやうに云つた。

傳藏は三使の船から、遙に催促の舟が淺瀨に乘上げて、波を被つたのを見たので、晝飯のあとで、見舞に行つてやらうと思つてその用意してゐると、騎船將の一人から人參を買つてくれと頼まれた。騎船將とは副官の荷物舟の頭である。

傳藏は人參を頼まれたものゝ、藍島には仲間の者がないので、筑前の家士に話すより外に途がない。あれか、これかと考へた末に、濟奉行の鄕右衞門は、殆んど毎日のやうに顏を合はして心安くなつてゐるし、それに三使の接待に就ては便利を與へてあるから、一言賴めば喜んで世話をしてくれるだらうと思つて、鄕右衞門に賴む積りで濟奉行の詰所に出かけて行つた。

冷たい夕日が詰所の玄關口に震へてゐた。傳藏は取次に導かれて鄕右衞門の居る室へ上つて行つた。「今日はチト私の用事に就きまして‥‥」

「ホー」額の赤く拔け上つた老人は、眼を据ゑるやうにして、傳藏の方を見た。

「今日朝鮮の役人から、人參を買拂つてくれと賴まれましたが、當地は不案內で、私の手では何とも致しかねますから、貴殿のお力添へに與からうと思ひまして、」

鄕右衞門は、傳藏が役目を鼻にかけて、傲慢な態度を見せたり、左樣かと思ふと腰を低くして、心付けに有り付かうとするやうな行動を苦々しく思つてゐる所であつた。「貴君が當地の不案內は察しるが、貴君は私を何と心得へて居らるゝ、」

傳藏は言葉が詰つた。

「私は武士ぢや、」と鄕右衞門は屹となつて云つた。

傳藏は顏を赤くした。鄕右衞門は默つてその顏を見詰めた。

傳藏の心は怒りに燃えた。彼は鄕右衞門に顏を見られないやうにして、その儘歸つて行つたが、何うした事か、夜になるとト船將の催促と連立つて、再ひその座にあらはれた。

鄕右衞門は不審しながら、二人に面會した。赤く靜に燃える蠟燭の光は、傲慢な顏をして取り澄した傳藏

て、「倅が少し弱いものぢやから、人參でも服ましたらと思ひまして……」

傳藏は二人の話を耳にしながら、『この人なら、兎ても人參の區別が出來はしないぞ、』と思つた。左樣思ふと心の何處やらに非常に氣强い所が出來てゐた。

三

十一月十三日になつて、聘使の船は和珥浦を出帆した。宗家の留守居、徒士、鐵砲係の一團は、一艘の船に乘込んで、導をした。岸を離れる時、三使の乘つてゐる樓船では、奏樂がはじまつた。樂人の纏す青や赤の衣は、對馬守に從つて、聘使を見送つてゐた陸の人々にも見えた。

天氣を見定めての出帆であるから、海は穩であつたが、その代り船足は遲かつた。船が壹岐の勝本に著いたのは、その夜の明け方であつた。

壹岐には十四五日滯在して、二十八日になつて筑前の藍島に渡つたが、其所の滯在は僅に五日位で、それから長門の赤間關に渡る積りで、船を出しはじめた。

副使の荷物舟には、卜船將の崔向が乘つて、水夫(かこ)を指揮してゐた。陸には聘使の接待係を務めてゐた松平筑前守の家士が澤山立つて見送つてゐた。濱奉行の關本鄕右衞門は、磯の案内に暗い卜船將が、舟を直ぐ冲に向けずに、淺い波打際を漕いで行かうとするので、『磯は水が淺いから、直ぐ冲へ、冲へ、』と云つて注意した。

海の事に就いて自信のある崔向は、鄕右衞門の言葉を耳にも入れず、矢張り波打際を漕いでゐると、果して淺瀨に乘りあげた。驚いて舟を後に戻さうと焦慮つて居ると、白い大きな波が來て、舟の胴にぶつ衝かつた。舟は橫に傾くと共に、一段と淺い所に打ち寄せられた。その拍子に舵がべり〳〵と折れた。

僚船に不時の災厄があつたので、出帆は見合す事になつて、三使は再び上陸した。

崔向は頭から潮水を浴びて陸に上つたが、面目ないので、舟の始末は同僚の卜船將に賴んで置いて、その數日己れの旅館となつてゐた民家に歸つて行つた。

てゐた鈴木傳右衞門に落籍せられて、親子ともども引取られた上に、傳藏は其所の養子と云ふ事になつてゐた。この恩義に對して、傳藏の心に憤怒の種を蒔いて、鈴木家を忘れさすやうな事は出來なかつた。

そんな事で、傳藏は桂彥の死を痛み悲しむやうな感情も起さずに濟んだ。そして十八歲になつて、養父の傳右衞門が四十五歲で病死したのに續いて、千歲も間もなく病死したので、それ以來傳藏は、桂彥の事も催天宗の事も忘れてゐた。

傳藏は二十六歲になつてゐた。母に別れてから殆んど十年、度々聞かされた名さへ忘れてゐた催天宗が、忽ち現實の人となつて眼の前に現はれて來たのには、すくなからず好奇心を動かされた。それは丁度、昔から名を聞いてゐた繪畫を期せずして見る事の出來た人が、なるほど此樣な繪であつたかと眼を瞬ると同じ事であつた。

「桂彥の亡くなつたのは、本妻と催天宗とが手を下したと云ふではは御座いませんか、」傳藏は好奇心の動くまゝに聞いてみた。

催尙はそんな話には氣乘りがしないやうであつた。

「さア、そんな事も聞いたやうだが……」

傳藏はその跡で、又人參の話を持ち出したが、催尙は都訓導を憚つて、對馬では賣らうと云はないので、その儘にして母屋の方に出て來た。

母屋の座敷では、警固に來てゐる宗家の身分の輕い侍が二三人、火鉢を中にして何か話してゐた。その侍の一人は、數日前に傳藏に金を渡して人參を賴んだ男であつた。

傳藏はその男の顏を見ると、仲間の持つてゐる廣東人參でもやつて、その場を繕らて置かうと思つたって、この傍へ行くなり、『好え人參が手に入りましたから、明後日頃お渡し致します。』とさも本當らしく云つた。

『左樣か、それは御苦勞であつたの、』もう初老になつたらしい顏の色の澁紙色をした侍は、チラと傳藏の方を見た後に、その顏を右隣にゐる同役の方に向け

爲に朝鮮から來て滯在してゐる桂彦と云ふ商人。

「…來年の春まで待つておくれ、その時にはお前を落籍して朝鮮へ連れて行くなり、長崎へ住はすなり、お前の身の立つやうにしてやる…」桂彦は又かう云つた。「お前の心配は當らぬ事ぢや、私が日本へ來はじめてから、もう七年になる、私はお前を知らない時でも、春になると屹と長崎に來てゐた者ぢや…」

それでも千歳は只だ泣くのみであつた。その歳の春から秋口にかけて、殆んど毎日のやうに桂彦に逢うてゐた千歳は、普通の體軀でなくなつてゐた。

傳藏はこの千歳の腹にゐた子供であつた。千歳に堅く後日を約して歸つて行つた桂彦は、どうした事か春になつても長崎へ遣つて來なかつた。男の子を生み落して里親につけた千歳は、朝鮮の客を見かけては、桂彦の事を尋ねて見たが、何年も知つてゐると云ふ者がなかつた。その翌年の夏になつて、同じ京城の者で、桂彦を一寸知つてゐると云ふ者が、妹女郎の許に來て、桂彦が人に殺されたので、跡は甥の萬壽と云ふ者が養子になつてゐると云ふ事を話した。

桂彦一家の事情は次第に明かになつて來た。桂彦を殺したのは、他人でなくて本妻の燕糸と甥の萬壽との仕業であると云ふ事も知れた。跡で燕糸は萬壽と夫婦になつてゐたが、間もなく病氣で亡くなり、萬壽は崔天宗と名をかへて、朝鮮王に仕へて上々官(じやうじやうくわん)になつてゐると云ふ事なども知れて來た。

傳藏は折に觸れて、母からこの事を聞かされた。「惡運と云ふものは有るらしい、」と母は此樣な事も云つた。そんな事を口にする場合の母の顏には、或る炎の閃きがあつたが、傳藏にはそれが分らなかつた。「お前の本當のお父さんは、甥の爲に硯石山と云ふ所で殺された、」と云つても、傳藏は草双紙の中にある物語を聞いてゐるやうな風で、面白さうな顏をして聞いてゐた。

傳藏の此樣な容を見ると、母は例も悲しさうな顏をして、何か云ひたさうにしたが、それでも別に何も云はなかつた。云はなかつたには深い事情もあつた。千歳は傳藏が五歳の時、宗家の通詞として長崎に往來し

する所であつた。――小柄な色の白い、宗家から拝領した黒羽二重の袷の下に郡内大島の襦袢の袖口を見せて、茶色の袴を穿き腰に短い刀を差した通詞もその一人であつた。『何故で御座いませう、』

『朝鮮の官人が商人のやうな真似をするのは、國の恥辱であると云ふ所から云ひ出したものだが、それはまア本當さ、』と稚尙は己れを嘲けるやうに云つて、口のふちに淋しい笑ひを見せた。

『都訓導と云ふと、彼の背の高い、五十格恰の方で御座いますか、』

『左様だ。』

『何と云ふ方です。』

『あれは稚天宗と云ふんだ。』

『……稚天宗……』傳藏の頭に不圖ある事が浮んだ。

『その方は、もと高麗と云ふ名ではなかつたでせうか、』

『左様だ、高麗と云つてゐた、……お前は好く知つてゐるな、』

『それでは、その方には、桂彦と云ふ伯父さんがありましたが、貴官は御存じないでせうか、』

『精しくは知らないが、交易をやつてゐた伯父さんがあつて、その伯父さんが亡くなると、其所の養子になつた者だと聞いた事がある、……お前は好く知つてゐるな、』と稚尙は不審さうに傳藏の顔を見た。

『なに、その伯父さんと云ふのを私の父が知つてゐて、好く話して居りましたから、』と傳藏は澄して云つたが、それは出鱈目に過ぎなかつた。

女は客の膝に顔を埋めるやうにして泣いた。客は朝鮮服を著た若い男であつた。彼は青い天鵞絨の地に金絲の繡模様ある褂(しかけ)を著た細そらした女の肩を撫でながら、小兒を賺すやうにして慰めやうとしたが、女は返辭もせずに泣入つた。竪兵庫に結うて大形な二枚櫛をはじめ前後左右に十二本の簪をさした頭を微に振るのが、銀燭の火影に艶かしく見えた。

其所は長崎丸山の千歳屋と云ふ遊女屋の一室で、女は同家の千歳と云ふ太夫であつた。相手の客は交易の

の室には、宗家からつけてある通詞の一人が來て密々と話してゐた。卜船將とは荷物舟の頭をしてゐる者で、その同僚と思はれる者は、他にも二人ばかりあつた。

「少しは持つてゐるには持つてゐるが……」と崔倘は何か躊躇するやうに云つた。

「お持ちならお下げになつたら如何でございます。」

通詞は不審さうな顏をして、相手の官人の圓い赤黑い顏の鼻先から兩頰にかけて微に痘痕のあるのを行燈の光に透すやうにして云つた。頭には笄をさし、肥つた體軀に青い繡のある官服をつけてゐるが、如何にも粗野で官人とは思はれない。

「貰つて貰つても好いが、も少し後日にしたい。」

「この土地では、何か障はりになる事でも御座いますすか、」

「障はると云ふ程でもないが……」崔倘の返辭は兎もすると澁りかける。

通詞にはそれが焦躁しかつた。彼は鈴木傳藏と云ふ者で、小柄な色の白い、黑い張のある眼と、心持ち力になつた引締つた唇とを持つた壯校であつた。「……障はりになる事がなければ、お下げになつたら如何で御座います。此所な家中の方で欲しいと申して居る者がありますから……」

「いや、私は貰つて貰ひたいが……」崔倘は本能的に左右を見廻はしてから、一段と聲を細くして、「今度の都訓導が八釜しく云ふから困つて居る……」と云つて復た左右に眼をやつた。

當時朝鮮の聘使に從扈して來る官人の中には、行裏の底に人參を忍ばして來て、それを通詞に賴んで金に換へて行く者があつた。隨つて之に關係した通詞は、好い手數料になつた上に、買手と賣手との間に隔たりがあつて、露現する恐れがないので、代金の上前を放ねたり、又廣東人參など云ふ瞞し物を用意してゐて、賴まれた品物と摺代へたり、時とすると朝鮮人を口實にして、その瞞し物を賣り歩くなど不當な利益を得る事が出來たので、朝鮮からの來聘は、通詞仲間の驩迎

り、陣羽織を著た背の高い濱奉行は、揚り場の口に立つて、赤く日の丸を染め拔いた軍扇を夕陽にかざして、磯に漕ぎ寄せて來る朝鮮船の方を眉毛の白い眼で數瞬もせずに眺めてゐた。

船には朝鮮の聘使が乘つてゐた。寶曆十年、多病にして無能な將軍家重が薨ずると、その子の家治が將軍職を繼いだので、朝鮮では先例に依つて、御代がはりの祝儀に來た所であつた。幕府では之に對して、常に朝鮮との交涉に携つてその國の事情に明るい宗家に嚮導の役を命じたのであつた。

船はやがて磯に横たはつた。聘使の一行は、出迎に行つた宗家の家士に案內せられて、靜な入江の波に浮んだ船橋を渡つて、客館のある方へと上つて行つた。

聘使の一行は、四百八十人と云ふ大勢であつた。その內で正使の鄭尙淳、副使の李仁培、從事の洪樂仁と云ふこの三人が公の使人で、その下には、書記、學士、醫官、寫字官、畫官、堂上譯官、上通事、押物通事、軍官、別破陳、馬上方、典樂、禮單直、理馬、盤纏直、廳直、騎船將、卜船將、都訓導、小童、小通事、刀尺、羅將、吹手、節手、鈸手、刑名手、纛手、砲手、屠牛手、三房騎、練手、掟手、舞上など云ふ者があつて、それ〴〵事務を執つてゐた。

宗家では、その夜から肴を構へ酒を置いて、聘使の一行を饗應した。宗對馬守も客館に就いて三使に逢つた。聘使の方では、本國から携へて來た國書に添へて、人參や織物などの土產を贈つた。

かうした應酬の間でも、言葉が通じないので、雙方とも通詞を用ひた。宗家の方で用ひた通詞は、平生は町家に住んで朝鮮人などと交易をやつてゐる者であつた。對馬の中には、かうした人々が六十人ばかりもあつて、それが皆朝鮮の言語に明るいと云ふ所から、その中から選拔して、その時ばかり帶刀を許して通詞にする事となつてゐた。

二

夜が更けて戶外には冷たい雨の音がしてゐた。三使と離れて、或る商家の離屋に滯在してゐる卜船將崔尙

寶曆奇聞「唐人殺し」

田中貢太郎



一

寶曆の年號は十四年六月十三日まで行つて、明和と改元したので、勢ひ寶曆は十三年を以て最終の年としてゐる。その寶曆の十三年は、享保年間に日光に種ゑた朝鮮人参が五萬株採れたと云ふので、幕府では製藥署を設けて、田村玄雄と云ふ醫師に命じて炮製さしたり、諸侯に人參種を分けてやつたりした年であつた。

その同じ年の十月二十七日の事、十餘艘の朝鮮船が對馬の和珥浦に這入つて來た。その内の二三艘は繪にあるやうな朱塗の綺麗な樓船で、船の上には幔幕を張り、旛を立てゝゐた。太鼓の音や金屬の樂器を打ち合はす奏樂の音も船の中から遙に聞えてゐた。磯に近くなると、どの船も夕陽に赤々と色どられてゐた白帆をおろして、船の兩脇に備へた百足の足のやうな澤山の櫓を入れて、藍色の波の上を搔き廻はしはじめた。帆をおろす時、ある船の帆は、風の煽りを喫つて裏を返してバタ〱と鳴つた。

陸の松原には宗家の定紋打つた幔幕を張つて、宗對馬守義暢の家士がその前に列を正して控へてゐた。磯には船橋をかけて揚り場を設けてあつた。陣笠を冠

か。樞密院といふ、斯ういふ場合に最も其效用を發揮すべき立派な機關があるに拘らず、其上に今度のやうな特別機關を設くるのは、何う考へても所謂屋上屋を架するものたるの譏を免れない。

⊙尤も或る意味から言ふと、今度の臨時外交調査會の設置は、從來樞密院といふやうな機關の運用を誤つたといふ事を證明する材料にもなる。一體樞密院といふものは、官制上國家の元勳が茲に網羅されて畏くも陛下の御諮詢に答ふるの最高顧問府である。若し此趣意を決定して平素から顧問官の人選に注意して居れば、此樞密院に諮詢して成績をあげ得ない仕事といふものがありやう筈はない。然るに我國では折角さういふ機關を作りながら、實際は老朽官吏の養老院の如きものになり、顧問官の人選の如きも色々情實が行はれて居る結果として、眞に顧問官たるの資格を備ふる者のみが顧問官となつて居るのではない。平時にあつてはそれでも差支はないが、イザといふ必要が起つた場合に樞密院が何の役にも立たないといふ事になる。そこで今度のやうな必要が起ると、樞密院の外に特別の最高機關を作るといふ必要が起る。先輩の政治家がもう少し眞面目に口で許り忠君愛國を言はずに、眞に國家の爲めに計るところあつたならば、在來の國家機關で事足るのみならず、今度の如き臨時研究の必要にも十分應じ得たであらうと思ふ。否、我々は在來の諸機關ですら多過ぎる位に思ふ。此上又いろ／＼の機關を設けるのは、實に過去に於ける先輩政治家の情實と不眞面目とを告白するものであると思ふ。

⊙然し過去の事は今之を言ふも奈何とも仕方がない。只目下重大なる必要があつて、更に人才を多方面に求むるといふ必要があるならば、前にも述べた通り無任所大臣で澤山である。又現に任命された人の顔觸を見るに、あの邊の人ならば役に現内閣の埒内に網羅し得ざる事もあるまい。而かも此方法に出でずして、現内閣は依然として其儘保存し其外に各方面の勢力の代表者を集め、而かも半數は現内閣の閣員を以て之を占むるといふのは、我々國民は起案者の誠意を疑ふにあらずんば其研究の疎漏を責めざるを得ない。

⊙そこで我々は露骨に此會設置に關する諸々の表面的報道を綜合して、何か裏面に魂膽があると邪推せざるを得ざるを遺憾とする。どう云ふ風に邪推したかと言へば、遠からざる將來に起るべき戰後の始末につき國民の間に或は起り得べき不平を此機關によつて緩和しようといふ目的ではあるまいかと思ふ。戰後の始末如何について、國民の期待は相當に大なるものがある。さうして現内閣の代表する官僚系の軍國主義者は、此等の點に於て國民の希望を大ならしむべく煽動したと見る事も出來る。けれども果して戰後の始末を國民の期待するが如き點に持つて行けるか何うかについて、恐らく政府に確信があるまい。然らば、其結局の決定に對して國民の間に多大の不平あるべきは、恐らく日露戰爭後の狀況と同一であらう。之を未然に妨ぐといふ事は容易な事ではない。而して今の中外交調査會の如き特別の機關を設け、各方面の勢力の代表者を此中に網羅して、戰後の後始末の結果について形式上道德的責任を分たしめんとするのは、頗る悧巧なる遣り方と言はなくてはならぬ。斯ういふ魂膽で此會を作つたものか何うかは、因より推測の範圍に屬するけれども、斯うでも見なければ此會を作つた理由を合理的に說明する事は出來ない。而して斯くの如き理由で斯くの如き會を作ることの國家の爲めに一不祥事たる事は因より言ふを俟たないのである。

なら憲政會を代表する加藤子の除斥其事が統一の基礎を破るのである。けれども、我々の此際に必要とする所謂國論統一なるものは、各種の意見を出來る丈け沿く集める事によつて統一の基礎となるべき最も健全なる國論を作出する事である。之を作出する上に、從來存在する議論を沿く集むる事が形式上必要であるけれども、皆集めなければ健全なる統一的國論が作り出せないといふ譯ではない。加藤子の如き經驗學識兼備はるの士を網羅し得ざるは誠に遺憾なりとしても、子が加はらないからと言つて國論統一の基礎となるべき立派な意見が外交調査會から生れないとは限らない。只斯の如き立派な意見の果して生るゝや否やは一に其委員に擧げられたる人々の顔觸れ如何による。然るに、六日新任式を行つて之に任ぜられた人々の顔觸を見るに、之が果して我國に於ける外交上最高の智識經驗を有するものと見らるゝ事が出來るであらうか。予輩の觀るところ、而して世間多くの人の等しく疑はざるところによれば、外交調査會委員の席は、一半を現內閣大臣が之を占め、他の一半は樞密院とか貴族院とか或は衆議院の政黨とか、それ〳〵政界に於ける一部の勢力の代表者に割いて居る。中には長州派とか薩派とかいふ關係を顧慮したる點も見える。果して斯の如くんば、之は他の目的には適當であらうけれども、外交上國論を統一するといふ目的には決して適當なものではない。玆に所謂他の目的とは、此等の勢力を利用する事によつて政府が今後決定し實行する事項に對し外界の批評を抑へ、戰後始末の任に當れる從來の內閣が絕えず困まらされたる煩累を未然に防がんとするの目的が即ち之れである。

◎右のやうにヒネクつて考へずに、正直に政府の宣言するやうな臨時研究の必要があつたとしても、其必要に應ずるが爲めに今度のやうな特別機關を作るの必要ありや否やは自ら別問題である。尤も此等の點は、外交調査會の仕事の實質の如何にもよる問題であるが、假令之が外交方針の根本的決定を爲すものとしても、又之が決定を爲すに必要なる準備的材料の調査研究を爲すものとしても、何れにしても此等は通例內閣其物の職分であつて、內閣以外に此等の仕事に與ふものを作るのは普通の場合に於て好ましからざるのみならず、又憲法の精神でもない。內閣で之れ丈けの仕事を背負ひきれぬと言ふのなら、二三の新聞に書いてあつた通りに內閣自ら其無能力を告白するものである。臨時研究の必要の爲めに是非共內閣以外の人々の助力を必要とするならば、之は加藤子爵も云つた通り無任所大臣として立派に責任を分擔せしむるのが常則である。若し責任を分つの地位に立つことを欲しない者があるならば、之は公けの機關とせず、首相其人の希望を以て各方面の人材を蒐め、一種の私の相談會としても差支ない。英吉利では今度の戰爭になつてから所謂軍時內閣を作る前は、多くの無任所大臣を作つて責任の衝に當らしめた。平時に於て臨時重大の問題の起つた時には、例へば彼の議會法案の問題の時でも、愛蘭土自治問題の紛亂の時でも、朝野兩黨の領袖が懇談を重ねて妥協の路を求めんと欲し、或時は御前會議をさへ開いたのであるが、之は實質上國家最高の政治會議と見るべきものたるに拘らず、全然公けの性質を有するものではなかつた。我國に於ても公けの性質を持たしめんとならば、無任所大臣にすべく、然らすんば全然公けの性質を有するものたらざらしむべきである。予輩は斯かる物を好むのではないけれども、止むを得ずんば彼の元老會議のやうな物にしてもよかつたと思ふ。責任を曖昧にして而かも公けの機關として斯くの如き最高制度を設くるのは、甚だ憲法上の責任の歸屬を紛更せしむるものである。又も一歩進めて考へると、若し政府以外に天皇直屬の最高機關をして外交問題の審議に當らしめんとするならば、現に樞密院といふものがあるではない

合に於ける寺内總裁の演說中の所謂内則の如きは勿論、又每會合の討議の大要などは、事に妨げなき範圍に於て發表した方がよからうと思ふ。丸で秘密にするものなら、外交調査會といふ大袈裟な機關を設けたことも、亦此會合で外交上の最高政策を討議決定するといふやうな事も大袈裟に吹聽することをも避けた方がよい。吹聽が大袈裟であれば、鈍い傍觀者も好奇心を刺戟せられて何事のあつたかを聞きたがる。今度の外交調査會に對する我々國民の感じを卒直に言へば、淺草邊の見世物小屋の前で大聲を擧げて客を呼んで居るやうだから、入つて見ようとすると此先は見せないと言はれたやうな氣がする。然し、之は餘談に弄つたが、要するに各種の意見を銘々勝手に發表させても、其間に自然に統一の着く路はあると思ふが、只政治界に於て最も愼むべきは感情の乖離によりて正々堂々の論を曲げらるゝことである。政治界程純粹の主義政見に動くべくして、其實感情に動かさるる所はない。予輩の先輩で多少政界に盡くして居る或人は、何が憎いと言つて政敵程憎いものはないと言つた事がある。故に政界に於て所謂國論の統一をせんと欲せば、先づ各種政團の感情の融和を計るか、少くとも感情を抑へる丈けの大題目を掲げて、各派の政客に臨む事にならなければならない。斯ういふ着眼點から見ると、今度の外交調査會の如きも、若し其本來の趣意を貫かんとすれば最も注意を此點に注ぐべきであつたと思ふ。而して此點に於て外交調査會は、其第一歩に於て滿足なる効果を收めて居ないのを遺憾とする。

◎第一歩を滿足に踏み出さなかつたといふ事は、言ふまでもなく加藤子爵の不參加である。斯かる結果を來たしたのは、寺内首相の狹量に出づるか、加藤子爵の狹量に出づるか、双方の言ふところに一致せざるものあるが故に、責任を何處に歸してよいか解らない。けれども疑ひのない點は當初外交調査會の設置の議を元老並びに官僚政治家の頭目間に說いて賛成を求むるに際し、獨り大隈侯を除外した事である。本會設置の議が當初官僚元老の間に說き廻はられた事は、首相が三黨首に對して其内意を求むるの形式を採つて、而かも他の後に委員に任命された樞密院方面の人に何等公然の相談を持ちかけなかつた事によつて解る。して見れば、樞密院邊の人には初めからちやんと相談が出來て居つたのであらう。元老にも固より相談があつたに違ひない。獨り大隈侯の歸京を俟たなかつたといふ事實は、事件が一日を猶豫すべからざる程危急切迫の事件でない丈け、如何にも殊更らに大隈侯を除外したやうに見える。更にも一つ疑のない點は首相の加藤子爵を俟つ事斯の如き場合に相應しき丈けの懇切なる態度に出でなかつたといふ事である。尤も之を理由として委員たるの内諾を與へなかつたのは、加藤子爵としては已むを得ずとしても、兎に角之を子の狹量に歸せざるを得ない。尤も加藤子をして承諾を拒ましめたについては、三日の憲政會幹部會の決議の結果でもあらう。要するに、加藤子と寺内首相との間には一點も感情の融和がなかつた。何れが之に對して責任を負ふべきかは今之を問ふ必要はないが、只双方共に進んで感情を融和し、此大切なる國事の爲めに力を盡くさうと努力しなかつた事丈けは疑ない。如何に憲政會と現内閣とが犬猿も啻ならざる政敵の關係にありとは言へ、今日の如き重大なる時局に際しては互に俟つに相當の禮を以てせば、提携を踏る位の關係が成立し得ない譯はない。

◎加藤子の除外は、各種の政治的勢力をして國家的重大問題の共同研究に集中せしめるといふ點から見て誠に遺憾に堪へないが、然し予輩は又或論者の如く、憲政會側を除外したからと云つて國論統一の企が全く破れたとは見ない。何故なれば、所謂國論統一といふ事は之を實質的に見れば、實は已に存在する各種の論を持集めて之を統一するといふ事ではないからである。若しあらゆる議論を集めて其短を捨て長を採ると云ふ

議陸海軍諸大臣竝に參謀總長海軍軍令部長を以て之を組織し、總理大臣を議長とし內閣書記官長を幹事長と定めてある。今回臨時外交調査會官制は去月五日附を以て勅令第五十七號として發布せられ、第一條に宮中臨時外交調査委員會を設け天皇に直隷して時局に關する重要の案件を考に査審議せしむとあつて第三條に內閣總理大臣を總裁となすこと、竝に委員の資格に關する規定がある。この規定に從て委員に任命されたのは本野外相、後藤內相、加藤海相、大島陸相、伊東平田兩氏牧野男、原犬養兩氏で本野子が幹事長を兼ぬることになり、其第一會は去月十八日を以て開會せられた。かく比較して見ると防務會議と臨時外交調査委員會は大に性質を異にして居るが、臨時外交調査委員會が憲法上何等不都合の點なきは加藤子も上記の茶話會席上の演說で言明して居る通である。して見れば純粹の政治問題として考究す可きで、而して政治上から見て防務會議にレーゾンデートルがあつたとしたならば臨時外交調査委員會には更により以上な必要があると云はねばならぬ。何となれば防務會議は憲政會の前身たる同志會の爲に必要であつたに過ぎぬのに、今回の臨時外交調査委員會は國家全體の爲に必要なりと認められて出來たのである。加藤子がその組織に就て兎角の批評を試みつつ而も未練の言辭を洩して居るのは擧國一致を破りたりとの攻擊を憚る爲であらう。さり乍ら憲政會竝に同會の同情者には政治上に於ける民衆の勢力を過重視して居る人物が多いやうであるから、思ふに加藤子が臨時外交調査委員會に參加せなんだことを大に誇りとして居ることであらう。(六月十九日)

▽設立趣意の求め難き外交調査會

法學博士　吉野作造

◎臨時外交調査會設置の趣意は、六月二日寺內首相が官邸に於て三黨首を會同したる席上に於て述べたるところによれば、外交の爲め國論の統一を要する時機に當り、隔意なく意見を吐露して相共に放善の國策を樹てんことを欲するにあるといふ事である。今日の時勢が、正に外交上國論の統一を必要とするは言ふを俟たない。只此目的を達する爲めに斯の如き臨時調査會が必要であるか。又此會の如き組織が、此目的を達するのに適するや否が問題である。

◎予輩は政治上、殊に外交上に關する各種の意見を器械的に統一する事の不可能なるを認める。然しながら、又所謂國論は絕對に統一が出來ないと考へて居るものでもない。政治上各種各樣の議論の紛々として唱へらるゝは已むを得ない事でもあり、又必ずしも避くべき事でもない。否な各種の意見をして十分に之を發表するの機會を與ふる事が、却つて健全なる統一的意見の發生を促す所以になる。此點に於て予輩は、折角國論統一を標榜して起つた外交調査會が、初めから徹頭徹尾秘密主義で堅く門戶を閉鎖して居る態度を遺憾とする。無論外交上の問題には發表してよいものと發表して惡いものとある。然しながら、十八日第一回の會

寺内内閣の攻撃さるるに當て之を行路病者視する譯には往かぬのである。山本内閣の瓦解當時に於ける政友會の態度に就ては種々の評論もあるであらうが、余輩は政友會が義俠の精神に生きて山本伯と情死したのを以て我が武士道の見地から賞讃に値する擧措であると信ずるものである。重んずべきは士人の名譽である、徒に功利一偏に流れて識者に指彈せらるゝことは我が政友會の爲めに取らぬ所である。

下

憲政會の總裁加藤子は寺内首相から臨時外交調査委員會設置の前に方て委員として選擇されたしとの交渉を受けたので、黨の幹部と協議を遂げたる後去月四日遂に之を辭退する事にした。當時の顛末は同じ七日に同會茶話會の席上で加藤子から詳細に發表され、且寺内首相に回答せる際來訪の兒玉書記官長に手交した覺書をも發表されたので參考の爲茲に全文を掲げて置く。

外交に關し國論の一致を期するは固より希望すべき所なるも、内閣以外別に天皇直隸の機關を設けて、事實上國務大臣に掣肘を加ふるの虞ある如きは、輔弼の責任を嚴明にする所以に非ざるのみならず、斯の如き方法に依り所期の目的を達せんとするは極めて困難なりと信ず。然れども外交事項に關し各方面の意見を徴するを便とせらるる場合に於て卑見を求めらるることあらば、所信を開陳し當局の參考に供するは固より辭する所に非ず。若夫れ此際國內の有力者を網羅し國論の統一を圖らんと欲せば、寧ろ擧國一致內閣の樹立を計畫するを適當なりと信ず。

流石は當代第一流の外交家を以て自任して居る加藤子丈けありて茶話會の席上に於ても演說の終に於て『予は此計畫に賛同せざるも元外交に就て朝野一致協力すべしとは予平生の素論なるを以て、若し今後と雖も予が外交に就て有する多少の經驗に基ける意見を徴さるるが如きあらば、元より喜んで之を開陳することを辭せざる可し』と云ふて居る。して見ると加藤子は臨時外交調査委員會の精神には賛成であるが形式に賛成出來ぬと云ふのである。併し眞に擧國一致の實を擧ぐるならば內閣を改造せよと云ふのは得意の純理論の上から所謂出來無い相談を持出したものと外評せられぬ。若し調査委員會設置の精神に賛成であるが上に、更に閣僚としてではなく一の前外相として外交上の意見を徴さるゝならば喜んで之を開陳す可しとの誠意だもあるならば、何故に小理窟を楯にして委員を辭退したのであるか。余輩は加藤子の態度が理窟の上からも頗る徹底して居らぬことを惜むものである。

曩に加藤子等が大隈伯を戴いて內閣を組織して居つた時防務會議を設けたことがある。今日の臨時外交調査委員會に關聯して防務會議のことも議論に上るので、玆に大正三年六月二十三日に發布せられた勅令第百二十五號防務會議規則を拔萃して見るに、第一條には防務會議は內閣總理大臣の監督に屬し重要なる事項を審議すとあり、第二條には陸海軍備の施設の重要なる事項は主務大臣より內閣總理大臣に具申し內閣總理大臣は先づ之を防務會議の議に附すとあり、以下の條項に於て總理外務大

して居る國民黨を以て眞の政黨であるかの如く解して居るものが殊に有識階級に多いと云ふ狀態であつた。日本の學校では何處でも眞に政治教育を學生に授ける場處が無いのでかゝる偏見の横行するも固より怪むには足らぬがさりとは餘りに情無いことである。かゝる專制政治の下に行はるるが如き政黨甄別の標準を以て律したならば犬養氏が今回臨時外交調査委員會を仰付けられて辭退し無かつたのは如何にも不都合であらうし、犬養氏自身も『東京朝日』の記者に對して犬養一個の立場よりすれば之に參加せることは危險此上も無いことであると云はれたさうであるが、余輩はさうは思はぬ。成程民主思想の段々勢力を得るに伴れて純民黨の勢力も早晩は政界に壓倒的地位を占め得るかも知れぬから、その際この勢力に乘じて政局に立つも亦人生の快事であつて、從來の經驗上犬養氏こそその唯一無二の候補者であつたかも知らぬが、苟くも無垢の民主論者で無い限り、換言すれば政界の情僞にも通ぜぬ理窟屋か、或はダントン、マラーの如き煽民家で無い限り、衆愚に媚びたり迚眞の國利民福を圖ることの出來ぬのは充分承知して居らねばならぬ筈である。して見ればこの曠古の世界の變局に際し、而も總選擧の結果寺內內閣の勝利に歸した今日犬養氏が戰後の國策確立に一臂の勞を假すに至つたのは、氏としては實に國士の本領を發揮した見上げた進退と云はねばならぬ。隨て一身としても危險どころか御目出度いことであると祝辭を申し上げ度い。三十五名の國民黨代議士諸君も世間の嫉妬や中傷に頓着なく從來よりも一層の熱心を以て新總理を擁護して往かねばならぬのである。

政友會は臨時外交調査會の設置に對しては擧黨一致して賛成を表することと信じて居つたのに相應に異論があるさうである。是れは百十名の少數黨が僅かに黨勢を恢復して百六十名の下院一の多數黨になつたので、殊に氣候が手傳つて多少逆上した結果であらうが、要するに政友會のみで寺內內閣を相續するので無く取つて代るには總裁の原敬氏が臨時外交調査委員となつて寺內內閣の外交に對する今後の失策に對する責任を分擔しては不便であると云ふ利己的自覺から起つた議論である。黨人氣質としては左もさうずと冷評し去て善いことであるが、余輩は元來政友會に同情を有つて居るので無駄なこととは知るものの敢て苦言を呈し度い。かゝる功利的議論は決して局外者の同情を得る所以では無い。勿論何時迄も無駄奉公をする譯には參らぬが、政友會としては假令表面の看板は何であらうとも事實は大に寺內內閣の與黨として、進んで其責任をも分擔するの覺悟が無くてはならぬ。否更に一歩を進めて我黨の總裁にして臨時外交調査委員たる以上講和期の外交に就ては成算歷々たりとの自信を抱て居て欲しいのである。日本の選擧界の實際を見れば假りに普通選擧にして見たところで、政府黨の常に多數を制し得可きは最近二回の總選擧の結果で十分に立證せらるるのであるから、何れの政黨も政府黨として少くも與黨として總選擧に望まねばならぬことは、自負心の馬鹿に强い煽民家の外は何人も之を是認せねばならぬであらう。云ひ換えて見れば今回の總選擧に政友會の議會內第一の大政黨の地位を回復したのは事實政府の與黨たるの便宜に浴した爲で、この一事を以てしても

公表し、より多く世間の信頼を博することを努めなければならぬ。抑々憲政會なるものは我邦の目下の狀勢では憲法政治の發展の爲めに重要なる地位を占むることとなつた。今は既成の他の政黨は凡べて閥族者流の走狗となつた。玆に於てか憲政會たるもの大に自重して憲法政治を維持し發展せしむるが爲めに力を致さなければならぬ。幾年にても隱忍して世の信頼を博する處まで漕ぎ附けなければならぬ。其の斯かることになるのには、是非共に夫の調査事業に於て首肯せしむるに足るものを成し遂げなければならぬ。之が爲めに金を費ふといふたとて、其は實は大したことではない。彼等が選擧に費す所ゐものに比すれば殆どいふに足らない。何時まで淺薄なる政綱で其日暮をやつて居ても仕方がない。速かに此邊に注意して黨の發展を計らなければなるまい。憲政會の自覺、而して獨立なる外交調査の開始、是れが彼れ自身の爲めに必要であるのみならず、日本の國家の爲めにも幸である。又今度彼が政府の新設委員會に參加せざりし壯擧を有意義たらしむる唯一の方法でもある。

▽外交調査委員會と各政黨

慶大教授　田中萃一郎

今回臨時外交調査委員會を設置したことに關しては憲法問題として特に政治問題として種々攻擊もあるやうであるが、余輩は元來寺內內閣にして總選擧の結果勝利を博し得たならば更に進んで將來政界の中樞となり得可き一大政黨成立の機運を造らんことを望むものであつて、この意味からして臨時外交調査委員會の新設に贊成するものである。隨て外交調査その物よりも今後の政界に及ぼす可き調査委員會の影響如何に就て多大の期待を置くものである。さり乍ら政界には情實もあり歷史もあり、感情も勢力も失はず、自負も相應に看取せらるるので、或は余輩の注文通りに政界の進展を見ることが出來ぬかも知れぬ。依て玆には政友會國民黨憲政會三政黨と外交調査委員會との關係に就て評論して見度い。而して政友會と國民黨とは之を一括して論じ、次に憲政會に及ぼすこととしやうと思ふ。

上

古來四千年東洋の政治は專制の域を脫することが出來なんだので、隨て政論とし云へば消極的反抗的であつたが上に、日本の政黨成立時代に天下を風靡した泰西直輸入の政論は、國家を以て已むを得ざるの弊害と認めた極端な個人主義的の英國マンチエスター派の學說であつたが爲、議會政治の行はれて居る今日でも未だに政治とは批評であり、算政とは苛税であると信じて居るものも少からず、政界の大立物と尊敬さるる人物には責任ある當局者たらしむるよりも寧ろ議會に於ける攻擊演說に手腕を示し得るものが多いと云ふ始末である。隨て內閣破壞を以て天職として居つた佛國のクレマンソー氏の如く、議會生活三十年殆んど政府攻擊をのみ事として居つた犬養氏を以て政治家中の白眉となし、氏の統率

略ぼ統一する必要がある。併し此大方針には目下の日本に於て然う異論はないやうに思はるる。多少の異論が出た場合には、其機に臨んで政府も反對黨の代表者と胸襟を披いて相談すれば話は纏るであらうと思ふ。其れで纏らぬやうならば、外交調査會を作つたとて其れでも纏らない。孰れにしても話が纏らない場合には當局者としては責任を以て自分の考通りに行つて、反對黨なり天下の輿論の厳肅な批評を待つより外はない。當局者が経綸を出したと天下に認められ又自らも之を認めなければならぬやうになつた暁は、其地位を去つて反對黨に代はつて貰ふべきものである。大方針を定める位のことの爲めに態々調査會など起す必要はない。そして夫の大方針の下に於て之を運用する方法に就ては是れむしろ當局者のみにて決定すべきもので、敢て之が爲めに反對黨を加へたる調査會を起すべきものではない。此戰時は特別であるといふが、日本の過去の例からいふても、日清日露の二大戰役の時にもそんなものはなかつた。なくても當時の當局者は相當に責任を以て活動し、反對黨も相當に政府を助けもし、又監督もした。此度の戰爭にしてのみ斯かる機關を設けなければならぬ理由はない。英國には此度の戰爭に際し戰時内閣が出來た。日本が其の眞似をするのだといふかも知れぬが、英國の此度の戰爭には其に屬する各殖民地の參加したといふ特殊の事情があり、此戰時及戰後に亘つての各部の聯絡の必要があり、之が爲めに普通の内閣の外に特殊の内閣を必要とするといふ事情もある。又彼國の普通の内閣が餘りに多人數に過ぎるから、戰爭の爲め之を極有力者のみに限定するの趣意もある。直ちに之を日本に移すといふは當らぬ。吾々は此戰時及戰後の國策の研究についてはもつと／＼現内閣自身の勉強努力を希望しなければならぬ。其について反對黨を直接に參加せしめぬ方が良い。加藤子及憲政會が參加を拒絶したのには裏面に何ういふ事情の伏在するかは知らぬが、正面からして拒絶したのが當然であり、何にも之が爲めに彼等が國家に對して罪惡を犯したことにはならぬ。むしろ政府が反對黨に參加を求めたのが惡い。少くとも爲す必要なきことを敢てしたものである。反對黨が拒絶した以上は、政府は之を全く政府自身の責任に屬するものとして進めて行くべきである。

（六）

反對黨が之が參加を拒絶したのは正しいが、併し彼等にして此後唯徒らに政府の爲す所に反對するのみで終つては其任務を完ふするものでない。此際彼自らも外交調査機關を設け相當に多くの人を容れ金を費つて調査し、政府の方針の正しきや、政府の運用の謬りなきやを吟味して、厳正に之を批判し、天下をして反對黨存在の理由を認めしめなければならぬ。憲政會は今度の總選擧では大に失敗したが、此先きも從來の如き態度でのみ遣つて居ると、愈々天下の同情を失ひ、遂に浮ぶ瀬がなくなり、其間には離散する者も出來、結局解體せざるを得ざる破目に陷ることもあり得る。彼にして今後輿論の同情を集め再び政權に有り附かうと思ふならば、從來の政黨者流の通弊たる調査研究に力を用ゐざりし所を改めて、此方面に於て一新機軸を出し、政府と競爭してより良き結果を

政黨の黨議にてもなることがあつては其れこそ大變で、若も斯かる事にでもならうとするに於ては、輿論及識者は之に向つて猛烈に抗議して彼の大なる反省を促さなければならぬ。

(四)

併し其あるが故に外交の方針については凡べて國論を統一しなければならぬといふことはない。外交の大きな方針位はさう反對のあるべきことではないが、細目になると意見に非常なる相違があり得る。大方針の運用になると意見に大なる間隔があり得る。例之先づ日英同盟、聯合與國關係は慎重するといふても、英國其の他の與國が日本に不利なる施設を爲したるに對して抗議を爲すや否や、如何なる程度の抗議を爲すやに就ては意見が岐る所であり、何れにも相當の根據と得失とがある。必ずしも一方を良としてのみはいへない。支那問題についても全然不干渉主義で行くか、多少或種の干渉を行ふか、南方派に同情するか北方派を援助するか、與國又は列國と共同にてのみ支那問題を處理するか或は日本の特殊の地位に顧みて特段なる活動を敢てするかに就いては意見に相違があり、何れにも若干の理屈がある。一方を良しと斷言することの出來難きものである。特に一方が他方よりも比較的良しと定められたるにしても、相手仕事を爲して居る事であるから、其の良いと思ふ方の事の行へないことも起り得る。又初め良かつたと思つたのが段々惡くなることもあり得る。初めには自國の力に疑を懐いて遠慮した政策を採て居ても、他國の力に缺陷の生じたことの明になつた場合には臨機迅速に遠慮なき方策を採つても良い。であるから外交の極の大方針の外は、むしろ時の責任者たる内閣が慎重に定めて樞密院の賛成を得てドシ／＼行つたら良い。議會に於て反對黨から質問を受けたとしても、當局者にして誠意を以て自分の力のありたけを盡した以上は、之に對して堂々と答辯することが出來る。反對黨と協議し妥協などして居つては、臨機應變に思切つた仕事が出來ず、外交としては機を逸することになつて國家の爲めにもならぬ。反對黨をして自己の良心に反する所の政策に贊成して、嚴正なる批評の出來ざることに立至らしむるのも惜しい。特に政府の外交の行詰つた場合に、反對黨も既に其に贊成して居つたとあつては、日本の全體が對外的に行詰ることになる。其は良くない。其場合には其政府が責任ある地位を退いて反對黨をして代り當らしめ、局面を展開することとする方が良い。特に常に反對黨があつて政府の施設を監視して居ると、政府も浮かりしたことの出來ぬこととなるが、反對黨と妥協しつつ仕事をすることになると、責任が輕くなるから、つい輕卒なる事を行つて失敗を招くことにもなる。であるから外交につきては多くは外交調査會などを作つて國論を統一することの出來ないものであるのみならず、又斯かる統一を行はぬ方が良いと思ふ。

(五)

或は夫の外交の大方針を定める爲めには、政府及び政府黨の者並に反對黨の者の一堂に會することが必要ではないか。其が爲めに此外交調査會を作つて國論を統一するのであるといふかも知れぬ。成程此が國論を

の種々なる方策を述て、中に就き事情許せば最多く之を選ぶといふこととし、更には臨機應變の餘地をも認むるといふ位の事にして置かなければならぬ。此等の事は責任者たる政府が十分責任ある調査研究を遂げたる上にて之實行すべきものである。而して實際にも既に我政府には經濟調査會があり又各種の臨時調査局もあり、相當に調査研究が行はれて、萬遺算のなかるべきことと思ふ。然るに今別に外交調査委員會が出來て、調査研究するといふたとて、其委員は孰れも元老株のことであるから、自から手を下して調査などの出來る筈はなく、事經濟に關するものは所謂在既設の諸官局の調査を土臺として審議することとなるであらうし、其他の案件は矢張外務陸海軍よりして持出さるることであらう。斯くて其が單純に政府部內の事業なれば、從來の內閣で澤山で、其れと樞密院とあれば凡べて處理の出來る筈である。玆に別に此の會の出來たといふについては其特段なる意味は貴衆兩院の代表的人物、特に大政黨の首領の加はつたことに在るので、此に依つて政府が其外交方針を政府一存で定めないで、反對黨とも協議して之を定め、外交につき擧國一致の實を擧げやうといふに在る。實際此計畫は加藤子の拒絕によつて敗れた。之によつて外交調査會は政府及政府黨の調査會といふことになり、其れならば別に新に之を設くるの必要なしといふことに歸する。但し他方には之れに依つて加藤子乂は憲政會が此大切なる外交に關する擧國一致を破つたといふ罪を負はさるることになつた。

（三）

玆に於てか此戰時戰役の對外經濟の問題或は廣く外交問題は擧國一致となり得るか、又擧國一致としなければならぬかを研究するの値がある。一體外交の問題を政爭の具に供するのはいけない。過去に於ては日本にても多少此嫌があつたが、其は良くない。速かに改めなければならぬ。之を此儘にして置くと甲黨は何國と親しみ、乙黨は某國に近づくといふことになつて、國を賣ることさへも起り得る。今日の日本の選擧の實際及政黨の內幕を聽くと、斯かる危險は最大い。對內關係に於ても政黨が買收せられて一部人士の私益を計るの弊が起りつつあるが、此方はまだ〱國內限りのこと故忍ぶことが出來るとしても、對外關係から政治家が其國を賣ることになつては大變である。であるから日本が目下又近き將來に甲國との關係を何うするとか、乙國との關係を何うするとかといふことの根本の大方針だけは成るべく擧國一致で定めるやうにしたい。例之日本が日英同盟を尊重するとか、聯合與國との關係を維持するとか、支那の獨立保全を標榜し日支親善又は日支の接近を進めるとかいふことは國內に異論の餘りないことが希望せらるる。國內の凡ての人に異論なしといふことは望めないにもせよ、政府及政府黨も反對黨も即ち少くとも政黨者は凡べて贊成して居ることになるのが希望せらるる。目下の場合に日本が日英同盟を破らざるべからずとか、聯合與國との關係を斷つて獨逸に味方せよとか、支那を併呑せよとかいふことが一

▽外交に關する國論統一說を排す

法學博士　神戸正雄

（一）

政府は今や外交調査委員會なるものを作つた。其に對して世間からは今種々なる批評が行はれて居る。或は憲法上よりして又は政治道德上からして當の責任たるべき政府が其の責任を曖昧にすることとなるのが不都合だといひ、或は宮中府中の混同を爲すのが不都合也といひ、或は政府が外交につき無能であり、特に其標榜した對支外交につき行詰ることになつたから、之れが跡始末をする爲めに、そして攻擊の的を外ずして內閣の壽命を延ばすが爲めに計畫したる所の得手勝手なる施設であるといひ、特に此の內閣が前內閣から取つて代はるときに對支政策の失態を猛烈に攻擊した行懸もあるから、此の點からも特に反對黨より及び局外者よりも其態度の公明を缺き、其の極めて陋劣なることを非難せらるることとなつたのは無理もないことである。其の上にも此會に關して犬養毅氏及其の一味の者が其の內閣に對する不信任案を再提出せざる口實を作る爲め、卽ち自分共の困つた立場を救濟する爲めに仕組んだものとしての非難もあり、犬養氏が一時憲政の神とまで敬はれたる反動として、今は內閣の犬とまで罵らるるに至つた。洵に我々局外者から見て居ると非常に興味ある出來事で、近頃にない大問題である。我々は政界の內情に通せず、隨つて右の內情について多く批評するを好まない。又予は憲法及政治學の研究者でもないから、其等の方面からの批評も暫らく差控えて置かう。唯だ予は常に對外經濟問題に興味を有ちて、其の方の研究に從事して居るものであるから、左に專ら此の對外經濟問題の解決といふ立場からして少しく本件を批評して見ようやと思ふ。

（二）

今や歐洲大戰亂も末期に近いて來た。其が今直きに終を告げないにしても、此の先き其の大活躍は望まれないやうに思はるる。日本として戰後に於ける國の地步を確立して益々其の經濟上の發展を遂ぐるが爲めには、對外的に採るべき大方針を今からして定めて置かなければならぬ。啻に戰後の爲めばかりではない。寧ろ此戰時中の施設をも定めて置かなければならぬ。其には自國の必要利益に他國の事情をも斟酌して、他國の地位を相當に尊重しつゝ、自國の重大なる利益、其は一時的よりも永遠に亘つての重大利益を失はないやうに取り定めなければならぬ。勿論其は相手仕事であり、且つ豫想外の出來事の突發といふこともあり得ること故、唯一本調子で行けるものではない。先づ想像し得べき色色の場合を假定して、先方が斯ら出て來れば我は之を以て應ずるとか、斯ういふ事が起つたら斯ふ云ふ處置に出づるといふ風に、夫々の場合に應じて

は、(一)内閣以外別に天皇直屬の機關を設くるは、事實上國務大臣に制肘を加ふる虞れがあつて、輔弼の責任を微明にする所以に非ざること。(但し加藤子は、該委員會設置は、事實上憲法の精神を蹂躪して居るものではあるが、法理上憲法の條項に牴觸することにはなるまい、との疑を存して居る。)(二)外交の敏活を妨ぐること。(三)外交の機密の漏洩の虞れあること。(四)若し該委員會が國務に關する意見を定めて、之が遂行を政府に求むることになれば(條件的)、政府は殊に困難なる立場に陷るべきことである。

我等は加藤子の所見に對して一々賛成を表する義務を持たないが、併し乍ら子が飽くまで理論に徹底せんと務むる意氣を示すに至つては、我等は大に之を多とせねばならぬ。犬養氏が此度便宜主義を遺憾なく發揮したことを以て之に對比すれば、兩君の今後の政治界に於ける生命の長短は容易に之を測定することが出來る。殊に今日の科學教育を受けた青年が、段々政界の實勢力となる樣になれば、合理主義的傾向が一應は次第に高まるに違ひない。其時の兩君の政治的地位の相違は、瞑目して之を想見すれば、今の内から歴々として如實に浮び出でる樣である。尤もその時まで犬養氏が精神的並に肉體的生存を維持し得べきや否やは、甚だ疑はしい一點ではあるが‥‥

只加藤子が今回寺内首相の面皮を剝いたのは、丁度前年大浦事件の時に他の多くの閣僚が有名なる居据りを演じたにも拘らず、斷乎として辭職を決行したことゝ同じく、合理主義に活きんと欲する切なる念願より出で來つたものであつて、民衆に對する熱愛及び民衆の精神との共鳴より出で來つたのではあるまい。少くとも國民は、子の前身が官僚であつたことゝ、又子が現在に於ても富豪と姻戚關係に立てることとの二點より打算して、苟くも子が政治の Metamorphosis の更に大なる、而して更に確實なる徴證を示すに非ざる限りは、未だ以て民衆の言ひ得ざる聲を聞き、舉げ得ざる願望を知り、而して之を實現し貫徹することを以て生涯の使命なりと確信して、以て行動を終始する民衆の友たり、將又立憲的政治家たることを以て、子に許してはならぬ。今方面を變へて加藤子の側より之を見れば、子にして若し今後一意專心に此點に關する修養を積み其傲岸に代ふるに包容を以てし、其合理性を補ふに民衆愛を以てすることに成功する樣になれば、從來に於て子に向つて浴びせられたる反感を除き、情理兼ね具へた政界の巨人を以て目せられ、更に子の率ふる憲政會を現在の非運より拯ひ出すことは、企て及ばざる程の困難なる事業ではないと思ふのである。我等の目より見れば、可なり多望なる未來が手を擴げて子を待ち迎へて居る樣に思へないではない。併し乍ら果して子が彼女の招きに應ずる決心を有して居るや否やは、子自身の方寸の中に在ることで、局外者より覗ひ得られる所ではない。

加藤子に就いて言ひ得べきことは、まだ中々澤山あるが、丁度この邊が筆を擱くに最も適當な所だと思ふから、沈默することゝする。(六—六—二一)

態度評は、極めて簡單に片附ける積りである。是に就いては矢張今自分の座右にある六月八日の東京朝日新聞第三頁所載の同月七日憲政會茶話會に於ける加藤總裁の演說を典據とする。此演說に關係を有して居るか否かを審かにしないが、本（六）月十九日臨時外交調査會第一回開會の劈頭に於ける寺內首相の挨拶（六月十九日時事新報第三頁所載）に、「（本員が）加藤子爵を招迎したる徑路、並に三黨首領と會同したる席上の言行に關し、世上訛傳なしとせざるも、今日は是等の瑣事に就き呶々辯難すべき場合に非ず」と見えて居るが、縱し首相の此言が加藤子の演說中の一部に觸れて居るとするも、首相は之をば此際（即ち辯明することがあるならば、之を開陳するのが最も適當なる際）に於て、之を否定するに足らざる瑣事と見做して居るから、縱しそれは、枝葉の點に於て誤謬があるにしても、根本に於ては正確なる材料と見做す價値があるものと認めて差支ないと思ふ。

加藤子は此演說の初頭に於て、寺內首相の會見申込、委員會加入勸誘より、加藤子自身の加入拒絕に至るまでの經過を述べ、其間に於ける寺內首相の態度に對する不滿と見るべき語句を可なり多く漏らして居る。此點は大隈內閣以來、元老閥族對加藤の葛藤の歷史を追憶せしめ、且つ寺內首相の加藤子及び他の二黨首に對する關係の對比を暗示するものがあつて、非常に興味に充ちて居る。併し乍ら加藤子が寺內首相の申込を斥けたのは、單に感情問題のみに依るのでないことは、後に外交上の特別機關設置の不必要なる理由を巨細に、且つ非常に力を入れて說述して居ることに據つて、十分に推斷することが出來る。

興味といふ語を用ひた序に、もう一つ面白いことを注意すれば、此交渉を通じて、寺內首相の態度が如何にもいら〳〵して居るに反して、加藤子の遣り口が、これは又極めて落ち附いたもので、一言一句を苟くもせざる愼密の風が仄見える點である。これには舊劇などで見る御家騷動の幕に現はれて來る家老などの、何事によらず用意周到なる言動を聯想させる或物が潛んで居る。一體加藤子の人物は、新聞紙で受ける印象に據れば、萬事此式で通つて居るもの〻やうに見受けられる。併しこんな事は我等より見れば、單に劇的興味があるといふに止まり、憲政關係の上より見れば、犬養氏が與ふる如き皮肉の閃きと共に、要するに下だらないことたるに過ぎぬ。

□

加藤子がその參加拒絕の理由として諄々と說明した所は、約言して之を二大項目に歸することが出來る。其一は臨時外交調査委員會設置不必要論であつて、其二は同じく有害論である。その不必要論の根據は、（一）該委員會を以て所期の目的を達することは極めて困難であること、（二）外交の重大問題（例へば、講和會議に於て我國が主張すべき講和條件、又は日英、日露、日佛間の關係の如き）に關しては、既に國民間に一定の方針があつて、今更國論統一など〻騷ぐ必要がないこと、（三）若し該委員會が萬事政府の指金に從ひ、悉く政府の提案に贊成するものとせば（條件的）、無用の長物に外ならざることである。又その有害論の根據

なくて、温良(?)なる議會の多數が現內閣をその上に立脚させるに至つた譯である。自ら進んで態々現內閣を多數の上に立脚させて置いて、而して後に現內閣は多數の上に立脚して居るから之を助けるのだ！と揚言するのは、中々蟲の好い申し分であるが、眞正の「憲政の神樣」ならば、之を口にするを潔しとする所では斷じてない。

再び一歩も十歩も讓つて、現內閣は議會に於ける多數の上に立脚して居ることが確實であると假定する。さうしたらなぜ現內閣を助けねばならないのであるか。曩に政界の各方面の代表者を該委員會に送る必要を論ずるに當り、極端に數を無視する雅量(?)を示すことを躊躇しなかつた犬養氏は、玆に至つて「數は力である。多數に立脚する內閣は最早『貧弱』なる內閣ではない」と言ふかも知れない。が、斯うなればもう氏は憲政的に自殺したものであることを覺悟せねばならぬことになる。世人の多くは犬養氏は「力」よりも「道理」を重んずる人であると考へたればこそ、氏を「憲政の神樣」として尊信したのである。我國には力の崇拜者は、官僚政治家を始め、世間其例に乏しくないが、道理の主張者は極めて稀れである。而かも多くの人は愚かにも、誠實なる道理の主張者を氏に於て發見したと思つて居たのである。「三十餘年の苦節」は何のためぞ、それは道理――若くは道理と信ずる所のものを貫徹せんがためであると考へて居たのである。彼等はそのために、憲政擁護運動に際しては、うつゝ心になつて君を讃頌し、又彼等はそのために、山本內閣當時の君の芳ばしからぬ態度をも、多少の失望を怺らへて寬容したのである。然るに君は今は是等の多くの友人の信望を裏切つて、少くとも外觀上は立派に(?)閥族の門に趨つたのである。君は意氣揚々として、「我輩は今日一切世の毀譽褒貶を顧みず、誠心誠意一切の情實繫累を一掃して只管國策樹立の方針に突進する」と豪語し居るが、斯の如き辭にでも言へる手前味噌は、從來多年間君の信者であつた多くの友人の紅夢の幻滅の悲哀を償ふことが、到底出來ないであらう。

□

凡そ政治的運動に身を捧げて居る者が、或る原因のために意氣沮喪するか、若くは幾年間に涉つて一たびも政權の匂ひだも嗅がぬ情況に陷る時は、大要四樣の結果に了るを常とする。即ち斯の如き破目に陷つた者は、或は自暴自棄に果てゝ仕舞ふか、或は無爲恬淡の境涯に入つて仕舞ふか、或は何かの機會を捉へて暗中飛躍を試みるか、或は又どこまでも同じ理想を標榜し、終始一貫、全幅の耐忍力を出だして之が實現を見るまで奮鬪をつゞけるか、大抵は四者その一を出づるものではない。政治家ではないが先年の某事件の張本人の一團は、第一の例を示した。大石正巳氏の如きは第二の例を示した。犬養毅氏は多くの人の期待を裏切つて、第三の例を示した。第四の例を示すものは今後あるかないか。若しありとすればそれは果して誰であらうか。此問題は我等の理解に向つて固く封ぜられたる謎である。

□

犬養氏のことで大分手間を取つたから、少し釣合を失ふが、加藤子の

定以上の問題でないと言ひ脱けやうとするかも知れないが、そんならば政黨の代表者を出だすと言ふことも亦事實上の問題であつて、該委員會官制の條文のどこを捜しても、そんな文字は一向見當らないではないか。今無理に一歩も十歩も譲つて、多數の閥族の代表者の外に各政黨から一名宛の代表者をさへ出すことにすれば、「政界の各方面に於ける團體勢力を一所に集中して……」と云ふ氏の注文に充て嵌まることゝ假定しても、三政黨の代表者中の一人たる加藤憲政會總裁が加入を拒絶した後には、此豫期が破綻したことになるではないか。然らば氏が初めは加藤子の加入を見越して加入を承諾したものとするも、この豫想が外づれたことを知つた瞬時に、脱退の決意をすべき筈ではなかつたか。然るに氏は一方に於ては、「三黨首の一人が參加せざる事は、舉國一致の上よりすれば失敗に終つた譯で、遺憾至極である」と有理なことを述べ立て乍ら、倘ほ依然として「今更此重大問題を中止する譯にも行くまい」と辯明して、どこまでも委員の椅子に噛り附いて居る態度は、不徹底であると評する外は、どうして見やうもない。加之、閥族官僚も一種の秘密結社であつて、事實上政界に優勝なる地位を占めて居るのであるから、是からも代表者を出さねばならぬと言ふに至つては、氏の平素の主張から見ても、將又「憲政の常道」の上から見ても、不道理極まる妄言である。尤も「氏が憲政の常道」も或る場合には之を棄てゝも一向差し構ひはないと云ふ立場に居るのならば論外である(また氏は實際此立場の上に居るらしい)けれども、さうなれば氏は氏を以て「憲政の神様」として仰望して居た世上幾萬の人に對して、何とも申開きのしやうがあるまい。

□

犬養氏は又、臨時外交調査委員會に參加した當然の結果として、不信任案を打切りにしたが、其理由として氏が語つて居ることにも亦、迂濶迂濶閑捨てにならぬ個處がある。氏は「不信任案の再提議は見合はせる」是は理由が消滅したからである」と言つて居るが、理由が消滅したとは何の事であらう。犬養氏の不信任案提出の理由として述べた所は、現内閣が聖明を輔翼して大政を燮理するを得る見込なしといふことであつて、其中には内治外交上の無策無能といふことや、現内閣が議會に於ける多數に立脚して居ないといふことも含まれて居つた。

本年の一月には内治外交上に無策無能であつた現内閣が、僅か半年經つか經たぬ間に、奇績か何かのために、忽ち有爲有能になつたといふ事は、我等の樣な鈍感者には一寸受取り惜いことであるが、これは各人の認識上の問題であるから、深く追究せぬことゝして、さて現内閣が果して議會に於ける多數に立脚して居ると謂へるか否かの問題に移らう。成る程現内閣と政友會(及び國民黨?)とは、情意投合の形跡がないでもないが、形跡は畢竟形跡であつて、表面上政友會は、それが現内閣に對する關係は飽くまで厳正中立であつて、各問題に就いて是を是とし非を非とするのだと主張して居るではないか。假りに政友會と國民黨とが御昧方をしたから、現内閣は政黨の基礎の上に立つて居ると謂ふことが出來るにしても、それは現内閣が議會の多數の上に立脚するに至つたのでは

といふ危險の伴ふことは同じであると云ふことである。故に裏面の消息より該事件を論述するは、別に其人があることゝ信ずるから、今は關係各本人の陳述として新聞紙に公表せられ、而して相當の期間内に本人より取消しがなかつた所のものを基礎として、兩者の態度の當否に關し、手短かに所見を披瀝して見やう。

□

犬養氏が寺内首相の召しに應じ、直に委員の一人たることを承諾した事に就いては、「憲政の神様」が官僚閥族に返り忠をしたと云ふので、國民中には平素の信任を裏切られたかの様に思ひ做し、始めは激昂憤慨し、中ごろには落膽失望し、終りにはどうも仕方がないと諦らめた者も澤山あることは事實である。同氏が閥族打破、憲政擁護のために多年の清節を嚴守したものと確信し、終始一貫同氏を渇仰崇拜したる者が、一朝その快よき幻想（イルーヂョン）が破れた刹那に忽ち「失はれた首領（ロストリーダー）」を咒ふに至つた心的過程を察すれば、其間同情の至りに堪へぬものがあるけれども、斯の如きは要するに感情論である。されば我等はもつと冷靜に同氏の申分を聞き、公平なる見地より之を批判したい。

□

犬養氏の臨時外交調査委員會に對する態度を表明したものとして、差し詰め自分の手許にある六月六日の「時事新報」の第三頁に載せてある、「變局對應策」と題する氏の談話を取つて、その中の二三の要項と思ふ點を檢索して見やう。

問題になつて居る委員會が二つの重大な點に於て不當のものであることは、氏も良く認識して居る。それは氏が「該制度は憲法上の純理から判斷せば決して善いものとは認め難く、形（組織、權限等か）の上から見れば全く變態のものであるが……」と言つて居るので分明である。然るに斯の如く善からざるものなるが上に、變態のものである制度を承認する理由を述べるためには、氏は「大戰結局に對する帝國の地位を思へば、此國論統一の機關設置は最も機宜に適したる措置で、此他に良策はないのである」と言つて居るが、何故に此不良變態の機關が、國論統一などゝいふ重大なる使命を遂行するに最も適當なるものであるかに就いては、只の一言も之に及んで居ない。無論氏は「國論を統一する方法としては、政黨各派からは勿論、彼の閥族官僚も一種の秘密結社として、事實政界に優越なる地位を保有して居る以上は、當面の實際問題を議する場合には之を度外する譯には行かない。是等の方面からも代表者を出だし、即ち政界の各方面に於ける團體勢力を一所に集中して、是を以て事に當るといふ事にせねばならぬ」（圏點は余が施したもの）と述べて居るが、是だけでは此委員會が國論統一の事に最も適して居るものであることを示す理由にはならぬ。之に對して十分なる理由を與へんとならば、氏は少くとも何故に該委員會に於て閥族の代表者が政黨の代表者に比して不當に多數を占めねばならぬかを明にし、且つ何故に常に閥族政黨以外より一切代表者を出だす必要がないかを詳說せねばならなかつた。或は氏は代表者數率以下のことは事實上の問題であつて、官制の規

黨の政府に對する迎合の有様が更に明瞭に映ずるのである。降服と讓步とは誰が違ふ。況んや、政黨の迎合の程度が、政府の讓步の程度に遙に勝れるに於てをや。政府が政黨に對する降服は、此際に在つては、閣員全體若くは其大部分が或る政黨に入るか、但しは內閣を何れかの有力なる政黨（若くは政黨の聯合體）に明け渡すかに依つて表現せられねばならぬ。然るに今回に於ては全然その樣な事が現はれないのみでなく、その讓步の理由を忖度すれば、來るべき臨時議會に於て外交問題に關し關係政黨の口を箝せんがためであると想像が出來ないでもない。斯かる讓步を降服と見るは、過度の樂觀より出づる認識上の大錯誤である。

無論今回の政府の讓步は、竟に來るべき政黨內閣確立の前提であるといふ史觀的推測は、或は當を得て居るものであるかも知れぬ。併し乍ら我國の政黨內閣主義は、斯くも屈辱的なる誕生を經なければ、決して世の光を見ることが出來ないものであらうか。（六―六―一九）

（二）加藤氏及び犬養氏の態度

寺內々閣が國論統一のためと云ふ表面上の理由で、臨時外交調査委員會の設置を思ひ立ち、現任國務大臣やら、曾て國務大臣たりし者などゝいふ名義で、永い間樞密院に納まつて居た古色蒼然たる官僚政治家連やらを取出し、そこへ擧國一致の金看板の手前に三黨首を配合して之を組織する目的を以て、先づ原、犬養二氏及び加藤子に對し、會見の申込から加入勸誘に至るまで、用意萬端滯りなく取運んだ。多くの新聞紙の記事に據れば、原、犬養二氏には二つ返事で承諾が來る樣に仕向け、加藤子には一寸承諾が出來兼ねる樣に仕向けたやうになつて居るが、斯かる記事には記者若くは新聞社の色眼鏡もあることであるから、必ずしも其儘に受容れるべき必要もなく、又此事が本文の問題に關係があることでもないから、強ひて事實の詮議立てをするにも當らない。兎に角原、犬養二氏は早速御承諾申上げ、加藤子だけは、不愛憎に拒絕したことだけは、的確なる事實である。此結果は世人の豫期の通りであつたことも亦、今度改めて述べる事でもない。

「是々非々」と云ふ名文句のパトロンたる原氏の今回の態度は好いにせよ、惡いにせよ、今春以來の同氏の態度の論理的歸結であるから、之に就いては何も言はぬことにする。只第三十八議會に於ける不信任案提出者の頭目の一人に數へられた犬養氏並に共時の共同提出者たる憲政會の首領たる加藤子の遣り口に就いて、一應考察を加へて見ることは我國の憲政に興味を有するものに取つては、全然徒勞の業とすべきではない。

本問題を討究するに際し、一つ注意すべきことがある。それは三黨首と首相と會見の一場の前後に於ける犬養氏及び加藤子（殊に犬養氏）の、例の委員會設置に關聯する裏面の消息が新聞紙に頻出したけれども、我等の樣に政界の實際に緣のない者は、是等の相互間に矛盾し合つて居る報道の何れが正しいかを精査確認する方便がない結果として、何れを基礎にして可いかゞ分らないから、その中の何れに據るも、材料の不正確

間を回避せんとすが如き要求では斷じてないのである。外交問題に關して國民間に種々の意見の存在することは、國民が外交に關して緊切なる興味を有して居ることを證明するものであつて、國家の慶事でこそあれ、決してその弊事ではない。只憂ふる所は斯の如き樣々の意見が、公然發表の途を失ふことである。是等の意見の間の眞正の統一は、その公然の發表を經て而して後始めて爲さるべきものである。然るに頭から國論の統一の名の下に於て國論の均一化を行ひ、代議士及び一般國民の外交上の意見の自由發表を妨げんとするが如きは、單に大政治家の襟度に相應はしからぬことであるばかりでなく、抑も亦憲政の常道を蹂躙する專制的手段である。此立場よりして、我等は議會を擱いて、縱しや臨時的であるにせよ、別に公定の國論統一（實は均一化）機關を設くることに反對するものである。

□

臨時外交調査委員會の任務たる「時局に關する重要の案件を考査審議」することを以て外交上の國策方針を決定することであると解するならば、それは國務大臣の職責を侵犯するものであるが故に憲法上不當であるといふ議論は、我等の賛成を吝まざる所である。之に反して此任務を以て單に時局に關する大小の案件を調査研究して國策決定の參考資料を作るものとするならば、それは外務省に於て從來と雖も當然なし來つて居るべき筈であつて、今更大袈裟な特別機關を設置するまでもないことである。若し從來の遣り方が不充分であるが故に、此際是非特別機關を設くる必要があるといふならば、之を外務省に直屬せしむるが、自然でもあり至當でもある。然るに事玆に出でずして、徒らに高位顯官を集め、之に嘗て國務大臣であつたと云ふ表面上の理由を以て政黨の首領を配し、少くとも形式的には威儀堂々たる合議體を作つて之を宮中に置き、天皇に直隷せしめて國民の視聽より遠ざけたるは、抑も何の理由に出づるのであるか。國民が此點に疑惑を起して、所謂裏面の消息と稱して、種種の浮説を流布して居るのは、素より當然のことであると謂はねばならぬ。

寺内首相は該委員會第一回開會の劈頭に於ける挨拶に於て、「本會の特設に關して憲法上の關係又は形式の如何に涉りて荐りに論難攻擊する者ありと雖も、是れ政府に反對せんが爲めに、故らに堅白の辯舌を弄するものにして云々」と述べて居るが、首相のこの言こそ故らに設けた堅白の辯ではないか。彼は遠く政爭渦中以外に在つて故らに政府に反對すべき何等の理由を持たない多くの憂國の識者の中にも、該委員會設置の趣旨に對して異議を述べて居る者の少くないことを無視してはならぬ筈である。

□

新聞紙上で見ると、政黨者流の間には、該委員會中に二黨首を入れて居る事實は、超然主義の政黨主義に對する降服を示して居るものであると思つて居る者もある樣である。けれども我等の目より見れば、此點に關しては成る程政府の政黨に對する讓步の跡も現はれるが、其反面に政

委け合の表面上の目的以外の裏面の動機を揣摩憶測乃至明言確說する者の頻用するのは、素より當然のことゝ謂はねばならぬ。斯の如き流言の根據を作つて。無辜に國民を疑惑の淵に陷れた事だけに對しても、現內閣は政治道德上の責任を負擔せねばならぬ。併し乍ら政治家の行爲は全然臨機的合目的性で律すべきものであつて、その道德性の如きは顧慮する所に非ずと云ふ樣な一種のマキアヴエリズムを信條として居るらしく見ゆる官僚政治家に對して、斯の如きことを望むのは。望む方が間違つて居るのかも知れない。

尤も高位顯官者流は誰しも國務に對して專門的智識を有して居るものであるとの前提が成立てば、右の條章に對する批難も自然消滅に歸する筈であるが、斯の如き馬鹿げた前提を立てることは、嚴肅なる事實が承知しない。けれども官僚雛は、動もすれば學識經驗は官僚側に在つて、無學無識無經驗は民間側に在るといふ僻見を持つものであるといふ事を信ずべき理由がある。經驗閱歷の點は兎も角、學識を必然的に或る特殊階級の上にのみ偏在せしせる樣な配劑は、公平なる天の爲して居らない所であり、又教育の機會の比較的普遍に開放せられて居る今日に在つては、實際に於ても斯かる狀態に存在して居ない。而かも此種の官僚的僻見は、儼として我國の社會の一隅に蟠屈して居るものであつて、爲めに國民の有識者間に甚大なる反感の種子を撒布して居る。眞正の國論統一を謀るためには、此點に關しても、根本的に官僚雛の蒙を啓かねばならぬ。□

我等が「國論統一」なる語の解釋を斯くも永々と試みたのは、現內閣が此語を曲解若くは惡用して居るとの疑念を懷いて居るからである。言ふまでもなく、統一は均一でないのである。統一はどこまでも分子の複雜を前提として居る。分子が單一であれば、統一を行ふ必要は無論あるべき筈でない。而して國論統一といへば、公共問題に關して國民間に現存する多種多樣の見解を融合調節して之を單一の國家意思に變成する作用であつて、之を或る特定の個人若くは合議體の決定した鑄型に流し込んで均一化する作用ではない。されば政治的効果を有すべき國論統一は立憲國に於ては必ず議會を通じてなすべきものである。これ以外の方法に依り——即ち例へば國家權力を以て支持せらるゝ特別機關を設くが如き手段に依り——國論を一に定めやうとするが如きは、國論の均一化であつて斷じて國論の統一ではない。國論の均一化の試みは專制々度には必然的に附隨するものであるが、立憲制度の下に於ては、決して存立せしむべからざるものである。此理由のみに依つても、臨時外交調査委員會を以て國論統一——實は國論均一化——の機關をなす事には、絕對に反對すべきである。

「外交を政爭の外に置く」必要は程度の問題であつて、外交問題を中心にして政權爭奪を演じたり、又は內閣の更迭每に外交の根本方針を無用に變更して國家存立の基礎を危くするが如きことを制止せんとする要求であると解釋するを以て正當とすべく、之に依つて國民間の政府の外交上の施設方針に關する自由批評を抑壓し、又は議會に於ける外交上の質

我等は其滑稽を笑ふよりも、先づ國家のために痛歎せざるを得ないのである。

□

不自然なる國論統一とは、當路者又は或る特定の機關に於て豫め全般若くは特殊の方策を決めて置いて、國民全般をして之を絶對の權威を有するものと思惟せしめ、之を指議し批評することを得ざらしむるものである。而して若し此禁を敢て犯すものある時は、法律上若くは事實上の强壓を加ふることも辭さぬことも考へ得られる。もつと具體的に例示せば、或は議會に於て當該問題に關する問責的質問の出づることを防遏し、或は民間に於て異を樹て非を鳴らすことを抑制するが如きことも考へ得られる。

若し現内閣が國論統一といふことを斯の如く解釋する時は、それは憲政道德上許すべからざる罪惡であるのみならず、斯の如き形式に依つて正當なる言論自由の途を塞ぎ、且つ議會及び國民の政府監督の能力を減殺することは、「萬機公論に決すべし」と宣はせたる五箇條の御誓文に對する叛逆である。寺内々閣が如何に逆上しても、眞逆斯の如き非道を行ふことはあるまいと思ふが、併し乍ら此内閣は既に言論取締に就いては極めて峻辣なる方針を取つた名譽(?)を有し、且つ又我國の現行新聞紙法や治安警察法は、隨分油斷のならぬ規定を含んで居るものであるから、代議士及び一般國民は今の内から十分警醒戒嚴する必要がある。けれども縱しや萬一のことがあつても、我に天地と大を競ひ日月と光を爭ふ明治大帝の皇謨の結晶たる五箇條の御誓文と言ふ神聖なる武器あり、且つ正義の前には何物をも恐れざる大和民族の眞精神の宿る限りは、如何なる憲政の敵にも後れを取る事は斷じてなかるべき筈である。

□

臨時外交調査委員會が「側近」――「宮中」に置かれ、「天皇に直隷」せしめられることに依つて、少くとも形式上に於ては絶大の威容的効果を賦與せられ、又その總裁(現任内閣總理大臣)がその議事に就いて「啟奏の任に膺る」ことに規定せられてあるのは抑も何の理由に出づるものなるかの問題は、代議士幷に一般國民の細心に考察せざるべからざる要點である。

□

臨時外交調査委員會官制に據れば、該委員會は「時局に關する重要の案件を考査審議」する任務を帶びて居るものである(第一條)。故に此點より云へば該委員會には何よりも先づ外交上の一般事項幷に時局の形勢に關する專門家的智識を要する筈である。然るにその組織如何を檢すれば、原則としては「總裁は内閣總理大臣を以て之に充て、委員は國務大臣内閣總理大臣、若くは國務大臣たる前官の禮遇を賜はりたる者、國務大臣たりし者、又は親任官の中より簡拔して」任命せられることになつて居つて(第三條)。只「特別の須要ある場合に於て」のみ右の「規定に拘らず學識經驗ある者を以て臨時委員」とすることになつて居る(第六條)。斯の如く高位顯官を先にし、學識經驗を後にして居るのは、此委員會の表面上の目的より見れば、奇怪千萬なる順序轉倒である。されば此

外の歷史的若くは偶發的の事情に依り、國民の意向が期せずして同一の目標を指して進む樣になるものであつて、例之へば日清日露の兩戰役に際して我國民が平素の黨爭を一擲して、齊しく政府の開戰の方針を贊助した事の如きである。同樣の現象は今次の歐洲戰亂に關し、各交戰國に於て各別に生起したのを見るのである。又現在に於ても我國民が、來るべき講話會議に際して我國の當然主張すべしとする要求に關し、若くは我國の對支及び對米の外交の根本方針に關して抱懷する意見は、其最終の目標に於て一致共通點を有して居るのであつて、之がためには特別の統一機關を要しないのである。只是等の要求の貫徹、若くは方針の遂行に關する手段方法に關しては、各人の間にそれ〲異つた考へがあらうが、此種の差異は特別の公共機關を以てしても、之を如何ともすることが出來ないものである。故に當路者たるものは議會又は新聞紙雜誌及び其他の輿論の機關に表はれたる大體の一致點を參酌し、自己の單獨責任を以て斷々乎として之が貫徹遂行の方策を講じなければならぬ。此責任は極めて重大なるものであるから、當路者たるものにして之を負擔する能力なしと自覺したる時は、自ら其地位を退いて更らに有能なる者をして之に代らしむるのが當然である。然るに彼等にして自ら其責任を負擔することを回避し、さればと言つて其地位より勇退することをも爲し得ず、單に已むを得ずしてか、若くは尚ほ其他に不公明なる動機が加はつてか、兎も角裝飾らしい外觀を有する——鬼面嚇人的の特別機關を設置し、事實上之に其責任の一部若くは全部を轉嫁せんとするが如きことを試むるならば、そは怯懦と狡猾とを遺憾なく兼ね備ふ醜陋憎むべく忌むべき行爲であると謂はねばならぬ。

輿論が自然に歸一した時は、偉人が事功を樹つべき絕好の機會である。英雄が時勢を作るか、時勢が英雄を作るかは終世解決すべからざる歷史の謎である。併し乍ら只一つ確實なることは、偉人は現存の民衆運動を善用して其指導者としの手腕を縱橫に揮ふことである。民衆運動を完全に指導し得るか否かは、機關の整備して居るか否かの問題よりも、寧ろ指導者たる者が偉人格を有するか否かの問題である。而も偉人格なるものは自然の天分と多年の修養との結合より生ずるものであつて、必要に應じて早急に製造の出來るものでない。而かも偉人に非ずして偉人らしく見せたがることは、官僚政治家に有り勝ちのことである。けれどもサーベルは識見手腕の代理をしない。いくら奈翁を氣取つてもカイザーはカイザー！であり、いくらビスマークの口眞似をしてもペートマン・ホルヴエツヒはペートマン・ホルヴエツヒであると同じ道理で、和製のローズヴエルトは、到底本物にはなれない。果して流石日頃偉人氣取りで納まつて居る官僚政治家も、對支對米外交政策失敗の過去と、講和會議上の任務重大の將來とを控ふる瞬間に於て遂に馬脚を露出し、生死の一戰を賭する覺悟を以て國家的大責任を自家肩上に負擔することを避け、同時に自己の無能力を自覺して其地位を退き、以て功を他人に讓る雅量を示すことを躊躇し、茲に小刀細工的技工を弄して、例の大金ピカの鬼面嚇人的特別機關たる臨時外交調査委員會を押出したかと思へば、

又もや賣告上手の首相始め關係閣僚は其上に國論統一機關と云ふ燒印を押した。彼等の說明する所を聞けば、現下の狀勢は外交上殊に國論の一致を要する際であるから、國家の智能を集め此委員會を編成し、以て此大目的を實現しやうとするのであると云ふ。

公けの權力を後楯にする國家機關を以て國論を統一しやうと云ふ企擧それ自身に、既に不自然の分子を包含して居る上に、これを提唱するものは、憲政的良心を有する國民の承知しない超然主義を持ち出して一たび國論の一致を破り、第三十八議會に於て前內閣の外交上の秘密事項を摘發することに依つて議場を沸騰させて二たび國論の一致を破り、續いて來つた總選擧に際し御味方黨を援助し反對黨を切崩して三たび國論の一致を破つた現內閣のことであるから、今更國論統一などゝ騷ぎ出した所で、國民はそんな得手勝手の言ひ分に耳を假さゞるべき道理である。

ところが事實は之に反して、現內閣が高唱した國論統一の呼び聲は、敵味方の間より相應に反響を齎らし來つた。即ち臨時外交調査委員會の設置に贊成するものは、此際外交に關して國論を統一することは極めて機宜を得たものであると言ひ、之に反對するものは我國の現狀は、必ずしも國論を統一せねばならぬ程に切迫して居ないと言ふ。兎に角贊否兩側とも、國論統一の標語を可なり眞面目に取扱つて居る。寺內々閣の賣告術は斯くて再び目前の小成功を收めたのである。

廬山に入る者は廬山を見ずとか言ふ。我等は幸ひ政爭の渦中に捲き込まるゝ危險のない地帶に居るものであるから、比較的冷靜に——從つて公平に、右の調査委員會の政治的價値を批判し得ると思ふ。而して今此を試むるに當り、先づ「國論統一」の意義から穿鑿して掛らねばならぬ。

□

「國論統一」といふ言葉は、他の多くの政治上の標語と同じく、隨分曖昧なる表現樣式であつて、幾樣にも解釋が出來る。

先づ第一に國論統一といふことは、全般の國家政策若くは特殊の公共問題に關聯して國民間に存在する多種多樣の意見を糾合し、之を融和調節して其間より單一なる國家意思を構成する作用であると解釋することが出來る。此意味に於ける國論統一を行ふためには、特別機關を設置する迄もなく、國務大臣と議會との間の普通の交涉手續に依つてなし得られるものであつて、立憲政治の下に於ける議會は、本來此目的のために設かれたものである。而して若し議會より此使命を奪ひ去らば、餘す所幾ばくもなく、從つて議會は其存在の根據の大部分を失ふ譯になるものであることは、今更管々しく說明する迄もないことである。故に此立場よりする時は、國論統一を完成するために態々特別機關を設置するが如きことは、全然無意義なことに歸することである。

□

次に國論統一といふことは、全般若くは特殊の國家問題に關聯して國民の全體若くは大多數の意見を同一方向に歸趨せしめることであると解釋することも出來る。此意味に於ける國論統一には、自然的のものと不自然的のものとの二樣がある。玆に所謂自然の國論統一とは、國家の內

最高外交調査機關設置の是非

▽臨時外交調査委員會の政治的價値と之に對する加藤氏及び犬養氏の態度

早大教授 大 山 郁 夫

(一) 臨時外交調査委員會の政治的價値

寺内々閣は官僚政治家の集團であるにしては、割合に大道廣告屋式の文句を使用することが上手である。就任以來十箇月になるかならぬ間に、此の内閣がその表看板の上に書き足した標語は、既に五六の上に出て居る。曰く、擧國一致。曰く、秉公持平。曰く、善政主義。曰く、不自然なる多數黨の打破。曰く、大權干犯。斯の如く書き列べると、中々少い數ではない。而して今又墨痕鮮かに「國論統一」といふ文句を附け加へた。

寺内々閣の閣僚は群衆心理を理解しないとは、屢ば耳にする所であるが、我等の見る所を以てすれば、彼等は、民衆の精神と共鳴しないとは謂ひ得られるが、群衆心理を全然理解しないとは謂ひ得られないのである。少くとも彼等は標語的表現に依る暗示(サジェッション)が群衆の上に及ぼす効果を十分に辨へ、且つ頻繁に之を利用する。此點においては彼等は上手な廣告屋と其揆を一にして居る。平素威儀といふことを何よりも氣にする官僚政治家が、自家の存立問題となると、急に調子を卸して看板書きとなることを意としないのは、政治心理の上より見て、極めて趣味の多いことである。

□

標語に依る暗示を以て無批判なる群衆の意識を麻痺して、一時は之を瞞着することが出來やうけれども、冷靜なる傍觀者を欺罔することは出來ない。而かも斯の如き傍觀者の意見が、結極は群衆の上に反應して、其判斷の基礎の構成要素となるものであるから、群衆と雖も到底永く之を愚弄することが出來ないのであるが、幸か不幸か現内閣は玆まで考へを及ぼして居ない樣である。

臨時外交調査委員會が、淺果敢なる特殊目的を以て設置せらるゝや、

の談話を聽取することを得た。彼等の語る處には多少矛盾する所もあつた。それが却つて當然で、其境遇上見解を異にすればこそ、各自事實の一面の眞相を傳へて居るのである。そして是れらが集まつて、玆に略叙したやうな印象を造つたのである。

題して新領土の精神問題と云ふ。しかも我等遠く眼を放ちて新領土を望むに先ち、まづ脚下の事實に想到し、我國自身の精神問題を考察し、其の未だ混純たる有樣なるを思ふ時、憮然として歎ぜざるを得ない。更に自己心靈の裡を顧みる時懼然として云ふ所を知らぬ。一切の問題の解決は我に發せねばならぬ。（一九一七・五・三）。



そして半島の精神問題は制服帶劍者以外の人々の協力に俟つ所なければならぬ。早晩精神問題の關鍵を外人の手から受取つて、自ら進んで徹底せる敎化事業に盡さねばならぬ。それが成就した時に於てこそ、始めて我等が新領土に於ける責任を完成し得るのである。

一日京城に於て某氏の邸宅に招待を受けた。氏は熱心に鮮人敎化の問題に就き苦心されて居るので、話題は自づから予の興味を惹くもの。懇ろに敎育施設の現狀や困難や希望などに關して、打ち明け話をせられた。氏は云ふ「自分は敎育者に向つて宣敎師の精神を以て、敎育の職に盡さねばならぬことを告げて居る」と予はこれに對して「それは深く御同感である。併し單に宣敎師の精神を以てと云ふ丈けでは未だ徹底せざる憾みがある。宣敎師の精神が如何にして出來たかを究めずに、單に之れを借衣として着けるのは面白くない。宣敎師の精神は彼等の信念から來る、信念は信仰から來る、信仰は宗敎を信ずることによりて生ずる。しかも宗敎の成果を身に體することは決して一朝一夕の事ではない。日本の敎育者は信念の必要を云々するけれども、其上を云ふことを憚かる。そこに遺憾がある。勿論宗敎と敎育とは別にすべきものであるけれども、敎育者の精神は宗敎的信念を背景とする必要がある。足下にして既に此言あり、希くは自ら範を示めされんことを。邦家の慶事これに如くものはない」と云つた。氏も亦卑見を諒とされたことは、密かに感謝して止まぬ所である。希くは新領土の敎化のために大に加發せられんことを祈るものである。

六

以上は半島の一方面の現狀觀察の梗概である。短日月の見聞であるから、素より誤解なきを期せぬ。しかし多方面の人々に面接する機會を得、比較的公平な材料を供せられた積りである。先づ釜山、大邱、京城、平壤等に於ける鮮人紳士に宛てた紹介狀を携帶して、彼等と會談した。屢々鮮人の公會に出席し其都度種々なる人々とも接することを得た。宣敎師其他の外人にも遇つた。それから朝野の日本人、特に敎育者と宗敎家

さい」と云つた。暫らくにして一人の兒童は「先生、天皇陛下であります」と答へた。教師は始めて滿足した、「さうです、天皇陛下ですね、分りましたか」と云つた。そして此教師は京城高等普通學校師範科出身の鮮人で、兒童も鮮人であつた。予は新附の民に對して我國體の本義を斯くまで丁寧に教へて與れる教授者の熱心には感謝したが、どうも兒童の心理狀態を無視して一足飛びに經驗以外の原理を注ぎ込まねばならぬかと思つて、そゞろ一種の感じに打たれたのである。上級生は櫻の花のことを教はつて居つた。櫻は漸次移植されて居るから、此方は理解するに左程困難ではないと思つた。

或人は朝鮮人の講習會に於て、芳賀氏の『國民性十講』に依りて日本民族の德性を教へたと云つた。彼等に日本人の美德を教へて斯くあれよと導くことは結構なことに相違ないが、日清戰爭時代の國民心理の產物を以て、直ちに日本國民は天下の美德を集めて居ると誇張するのであつたなら、それは少し不穩當であるまいかと思つた。日本人の理想とする國民性は斯樣なものであるから、御互に相提携して之れを大成しやうではないかと云ふ方が、一層大國民の襟度を示めしたものと信ずる。特に日本人中には隨分如何がはしい行動をなして心ある鮮人に眉を顰めさして居るものもあるやうであるから、耳から教へられたことゝ眼から傳へられることゝ矛盾するのである。兎も角日本人の性癖として功を急ぎ、若し彼等が思ふ坪に篏らねば、直ちに之れを唾棄せんとするのは面白くない。もつと氣永くかゝつて遣らなければ到底萬全の策を講ずる譯けにはいかぬ。此點に於ては我等は大に宣教師に學ぶべきものがある。

外國宣教師中には頑迷固陋者もあれば、偏見者流もあらう。併し共熱烈な信念を以て一生を半島敎化のために献じ、死後は其遺志を子孫にまでも繼承させやうとする人々のあるを見ては、日本の教育者宗教家の人格學殖信念等が、これに比して未だ及ばざるものありと見るは、殘念ながら公平な見解と云はねばならぬ。

或時某氏が教育者の召集會に於て、これに向つて朝鮮人の教育に自信あるかと尋ねた。質問の多少漠然たる爲めにしどろもどろの答辯に滿足しなかつた發題者は改めて其意味を述べた「外國人經營の私立學校の生徒には概して覇氣滿々たるものあれど、官立學校の生徒は然らずと聞く。例へば官立學校の制服制帽の生徒が街頭私立學校の生徒に遇ふ時はこれを避けて道を遜り甚しきに至りては帽子を脫して之れを隱くす者さへあると云ふ。果して風聞の如しとせば、これ甚だ我が意を得ざる所、遺憾の次第なり」と。予も之れを聞きその意外なるに驚き、三四の友人に念を押して見たが、或人は決してさることなしと云ひ、或人はそれはあると肯定した。思ふにこれは學校所在地と四圍の境遇にも因ることであらうが、決して愉快な現象ではない。併し官學の生徒が嚴正なる校規の下に養成せられ、少しでも不穩の言動あれば睨めつけられるに反し、私學の生徒は米國流の自由思想を縱承し、大に個人の權利を重んずる所から、斯かる現象のあり得ることは怪むに足らないのかも知れぬ。內地で云はゞ師範生と中學生の差違位はあるかも知れぬ。畢竟するに日本の教育家が十分なる確信と抱負を以て、氣永くかゝつて教育を施して行きさへすれば、鮮人がどんな不平不滿を洩らすことがあつても、左程憂慮すべき要はない。斷々乎として所信を貫けばよい。五年や十年にしてさう容易に諒解抱擁して行くことは、望み得べきことではない。況んや朝鮮人は一般にこれまで惡政に惡政が續いた爲めに、餘程ひねくれて居ることを認めねばならぬ。これは忍耐と同情を以て臨まねばならぬ。

五

一日某地の普通學校の授業を參觀した。二年級の修身の時間であつたと思ふ、教師は一番ありがたい方はどなたであるかと云ふ問を發した。多數の兒童は我も我もと擧手して「お父さんとお母さんであります」と答へた。教師は「イヽエ、もつとありがたい方があるでせう」と念を押した。「それは先生です」と答へる者があつた。教師は「まだいけません、よく考へて御覽な

日本の組合教會の如き比較的自由な信仰を有する者を邪教視してこれと交はることを肯ぜないのである。斯う云ふ話を聞いた。永く長崎に在住して居つて今度朝鮮に轉じたメソヂスト派の某宣教師が先般在鮮宣教師を自宅に招待した。席上多くの宣教師は盛んに日本當局者の失政を罵り、日本人の爲すなきを告げた。當夜の女主人公の其夫人は始めは素直に之れを聞いて居つたが、漸やく漫罵惡口の激しきに嚇として起ち上り、勵聲一番、「私は永らく日本に居つて、日本人を友として居る。日本人を罵倒するやうな心なき方々はどうぞ御歸へり下さいと云つた。それ以來某氏は日本辯護のために努め、これがために多くの同人は在來の謬見を放棄したけれども、今尚二人の老宣教師丈けは說服されないとのことである。

從つて宣教師の指導の下にある鮮人中には未だ日本に對して慊らぬ者もありて、私立學校の卒業式前一週間、卒業生が訣別演說などに於て、大に悲憤慷慨の言辭を揮ふこともある。彼等は青年の血氣に逸りて、或は國權恢復を疾呼し、或は當局者の失策と痛罵する。或はよからぬ文章を草して其筋の忌憚に觸るゝこともある。斯かる反抗的言辭を弄するのは單に青年時代には、得てあり勝ちなことゝ寬恕すべき性質のものであるか、將また之等の不穩の言動は深き根底を有することゝして大に警戒すべきものであらうか。これは多少考究せねばならぬと思ふ。古來志士を產すと稱せられてる平安道の平壤の如きは特に總督府から注意されて居るやうである。例へば去年中央公論に揭げた吉野博士の朝鮮に關する論文の如きは、總督府側に批難がある丈け、此附近の鮮人學生間には多くの共鳴者を有して居ることを發見した。そして明識ある官吏の中にも其論難に對して首肯せらるゝ點多く、小松氏の反駁の方が却つて當を得ない所もあることを告げて居る。これを以て見れば、眞理は兩方にあると云はねばならぬ。或人は云つた、朝鮮人にして偶々不平を洩らす者のみが不滿を懷いて居ると見るのが誤謬であると、これがしかも當局官吏の一人の口から出た述懷である。

日本が朝鮮の開拓に從事する前に、早くも米國其他の歐洲諸國の宣教師が、鮮人教化のために二十年三十年の久しきに渉りて努力しつゝ今日に至つた。而して米國のメソヂスト派と長老派とが最も多く勢力を揮つて居る。先年木浦で破船の難に遇い、不幸海底の藻屑となつた人にアッペンッエラーと云ふメソヂスト派の宣教師があつた。彼は三十年前に渡來して新教の地盤を据えた。其遺兒は再び亡父の遺志を繼がんとして米國にありて教育を受けつゝある。其内長女は既に歸還して傳道に從事しつゝあるやに聞えて居る。最近米國に於て病死したアンダーウッド氏は長老派の宣教師で、其才幹學殖は今尚模範的紳士として衆の等しく推奬する所である。其遺子は父の遺骨を携へ歸りて、父の遺業を繼ぐことになつて居る。京城の南大門前に大きな煉瓦造の病院がある。これはセヴエルンス病院と稱するもので、附屬醫學校もありて今エビソンなる人が結營して居る。一日彼を訪づれた時、何年朝鮮に居るのかと尋ねた所が、「僅か（オンリー）に二十五年」と答へた。「それでは尚五十年も居る積りか」と念を押した所が、「然り」と答へたので共に失笑した。彼は既に六十以上の好々爺である。平壌にはモフエット博士を長とした大きな神學校があつて、多數の傳道者を養成して居る。日本の基督者の鮮人間の傳道は六年前に基礎を据え漸次盛ならんとして居るけれども、其牧師傳道師は日未だ淺さを以て十分鮮語に通ぜず、僅かに通譯によりて說教して居る。これを外國人が巧みに鮮語を操り、鮮人間に交りて種々なる事業に從事して居るに比すれば、如何にも幼稚な感じがする。

西洋人の中には半島の精神問題の鍵を容易に日本人に渡すまじとする者もある。彼等謂へらく日本人は政治的意味に於て朝鮮を併合せしも、これ單に形式上の支配權を保有したに過ぎぬ。それ故に精神的には何等深い意味のあるものではなく、眞の指導者は依然として自分等宣教師であると。特に斯かる思想は長老派の老宣教師に見る所である。彼等は日本當局者がやゝもすれば教育を以て宗教を壓迫するものなりとなし、又

携帶して支那人の生命と金とを兩つながら奪掠せる英國商人があつたと同時に、一方長髮賊を平定したゴルドン將軍のあつたことは英國民の大なる誇りである。斯くの如くにして現代を支配する政治家外交家の事蹟は泡沫の如く消え失せても、將來を統御する宗教家の精神的感化は容易に滅びなかつた。これは眼識ある文明史家の等しく認める所である。

日本の新領土の開拓者は政府當局者と其任命にかゝる官吏と、これに配するに未だ微力なる民間の事業家である。故に彼の歐米諸國に於て見るが如き外國傳道會社や青年會の活動に類するものは、未だ我國人に之れを期することが出來ない。これが我が新領土に於ける精神問題の容易に解決せられざる根本理由である。單に知的教育の施設のみを以て異民族の教化に當らんとするが如きは、決して策の得たるものではない。教育にはおのづから教育の本領があり、決して宗教の代理となつて精神問題に徹底的解決を與へることは出來ぬ。特に日本の教育なるものは國民的教育であつて、人間自體の開發よりも國民的修養に重きを措く傾があるから、在來の自國の教育方法其物を以て他に望まんとすれば、中々骨の折れることは云ふまでもない。

日本は佛教國であると云ふ人もある。然らば現代日本の精神問題は佛教によりて指導せられ解決せられつゝありやと問はゞ、其は問ふ人の皮肉である。成程統計上の數字に現はれた寺院や宗派や僧侶、信者の數は頗る優勢であるけれども、中には過去の遺物として無くもがなと思はるゝものもある。況んや新領土に於ける日本佛教家の活動を見ることなどは、當分又恐らく今後も容易に望み難きことである。朝鮮には東西兩本願寺の手で多少の教化事業が試みられ居るやに聞けども、大なる効果を擧げて居るとも覺えぬ。偶々法主が多數の隨行員を連れて巡錫しても、之れは寧ろ風流のすさびと見えぬでもない。宗教家が斯かる貴族的觀光客となりたりとて、宗教的活動としては何の稱すべき理由を見ないのである。

四

が十分認められないやうに思はるゝことありとも、彼等は自家の權利を主張する前に、自ら大に努力すべき必要がある。

併し半島經營の事實は單に表面丈けが出來かゝつたのである。勿論一寸腰掛けの氣分で帳簿を整理するやうな御役人達の仕事としては、これで誠に上乘と見ねばならぬ。又貨殖の方面のみに慾目を張つて居る植民者には餘り多くのことを期待するとは云はぬ。日本人に有り勝ちな出稼根性を發揮して、好い程に懐が温まれば、錦を着て鄕黨に誇る人々とは、別に纏まつた相談をなす積りではない、わが相談對手は日本國の良心である。明察あり深慮ある識者を向うに廻わしてのことである。予が玆に語らんとする主題は半島の精神問題である。半島敎化に就いては、既にどれ丈けの功果を收め、又收めんとする抱負を有して居るか。併合以來僅かに七年、未だ左程大なることを望むまじきこと勿論なれども、此根本問題に對して我等國民は果して如何なる決心と理解と確信と希望とを有するか。これが緊要問題である。

予は此問題に對する參考として、一言西洋諸國に於ける精神的運動を一瞥せねばならぬ。抑々西洋諸國にありては、各國相競ひ隨分無理な理屈を捏造して、弱國を占領するに腐心したものである、其飽くなき豺狼の慾を滿さんために彼等は盛んに不善不義を働いた。政治家と軍人と商賣人とは種々なる罪惡を犯して、恬として恥づることを知らなかつた。彼等は同色の同族間には道德の行はるべきことを認めても、異人種にむかつては敢て之れを行はんとの顧慮を持たなかつた。併しこれと同時に犧牲献身の精神を以て起つた多數の宣敎師は、鐵石尚及ばざる堅き決心を以て、蠻人敎化のために如何なる困難迫害も辭する所でなかつた。彼等義人の子等は十字架の旗旛を翻して、身も心も國境を超越し、神の國を來らせんために甘んじて蠻地に骨を曝らしたのである。それ故に一方國家の權威の下になされたる幾多の罪過も、宗敎家の偉大なる功績によりて尠からず償はれたのである。一方印度から阿片を

鑛業の方面に行けば、平壌無煙炭の名は既に世人の知る所、徳山の練炭所の主なる材料である。近く三百萬圓の資本を以て平壌附近に練炭所が開始される筈である。金が朝鮮に於ける主要なる鑛産物なるは云ふまでもなく、其産額既に一千萬圓に達して居る。其他諸般の事業着々として歩武を進めつゝある間に、鮮人教育の機關としては普通(小)學校、四百五十校、高等普通(中)學校、女子高等普通(高等女)學校五校、其他農業、商業、工業、の諸學校を始めとして、近くは法律、醫學、工業の專門學校も設立されることゝなつた。

三

上述の概要を以て見れば、此新領土が併合以來日本人の力によりて、如何ばかり凡ての方面に亘り恩惠を受けつゝあるかは、何人も之れを否定することは出來ない。人或は朝鮮總督府は寺内伯の私有物で、兒玉伯が其支配人であつて、現に今でも其置土産の奏任官の前には勅任官の局長すら頭が上らないと云ふことであるけれども、寺内伯が所謂其私有物のために相當に骨折つたことは、之れを諒とせねばならぬ。今後數年を出でずして、豫定通り財政の獨立をなし得る見込みあることは、確かに邦家の慶事と云はねばならぬ。

勿論、弱い者いぢめの陋劣な根性の者が官吏の端くれとなつて、官僚式を發揮したり暴戾を振つたりするとや、内地に於て如何がはしき風聞を洩らした教育家が依然素行修まらずして人の眉をひそめて居ることや、官吏達の夫人連が上官同僚の家族の迎送に晴衣を着けて得意然たる低級趣味や、官權の濫用の結果として新聞紙及び雜誌が頻繁に發賣禁止を喰ふことや、朝鮮人の巡査補や憲兵補が盛んに下民を苦しめることや、所在の高利貸や成金連が朝鮮人を虐待することや、其他種々なる怨嗟不平の聲を聞くけれども、どうせ殖民地に行く人々に内地以上の士君子を期することは、現在無理な注文と見ねばならぬ。日本人の缺點短所が殖民地に於て、露骨に現はれつゝあるけれども、これが漸次改善されつゝことは、十分信ずべき理由がある。又法律の不備と不完全のために、朝鮮人の權利

までもない。

然らば日本は此名譽ある使命に對して、果してどれ丈けの自信あり手腕ありや、既にどれ丈けの成功を收めたのであるか、先づこれを物質的方面に徴すれば、交通及び通信に於いて、地方行政及び教育に於て、財政及び經濟に於て、農業林業及び鑛業に於て、貿易、商業、水産業等に於いて、併合以來實に長足の進歩發展をなしつゝあるとは、顯著なる事實である、併合當時內地人の人口が僅かに十七萬人であつたが、今や七八年にして三十萬以上に達し、京城のみにても六萬五千を算してゐる。交通機關として關釜連絡船五隻を以て晝夜二回往復し、常に滿員の盛況を呈してゐる。道路は從來の狹隘にして起伏甚しきを改修し、其延長六百八十五里に及び、其工費一千萬圓を支出して居る。港灣は釜山、仁川、鎭南浦、其他に工事を施し、二年の後には九百八十萬圓餘の費用によりて完成せられんとして居る。內地になき廣軌鐵道は釜山より新義洲まで五百九十二哩、湖南線百七十六哩、京元線百三十八哩、其他を合して今や全長千六十六哩に達する。水利事業は貯水池及び灌漑水路の改善、浚渫、修補等によりて、今まで不毛の土地であつたのをば、立派な田畑となすことを得た。特に全羅北道には、臨沃、臨益、大正、全益、古阜、沃溝の如き水利事業によりて平野を一變しつゝある。又現に鴨綠江の流域を汲み上げて水田を開かんとする大工事が著手せられて居る。

林野の面積は全土の七割以上を占めて居るけれども、古來濫伐暴採の結果として、何時しか禿山曠野滿目荒凉を極めて居つたのをば、數年以來森林保護と造林事業を督勵し、既に着々として功を奏し、若き松は山の綠を添へ、楓櫻乃至アカシヤ、ポプラは四季折々の眺めを美ならしむるやうになつた。特に四月三日神武天皇祭には各學校生徒をして所在に苗木を植ゑしめ、今年の如きは其數千七百萬本を算して居る。營林廠の經營に係る鴨綠江及び豆滿江の產出材は盛んに朝鮮支那の需要に供せられ、近くパルプ製造も開始されんとして居る。

午下一點平壤に下車すれば、早やくも自働車にて迎へ呉れる親しき友等に擁せられ、道廳に刺を通じ、それから小丘の處々に散居する數名の西洋人を歴訪した。これは兼ねて其筋の希望もありて、彼等と交歡の機會を得んがためであつた。彼等の中久しきは二十五年以上も鮮人敎化のために盡瘁しつゝあるもあれば、半島の民情に通ずるは勿論のことである。今後日本人との意志疏通し感情融和さへすれば、互に相提携して大に精神問題のために努むべき人々である。惜しい哉、平壤は今尙總督府の鬼門である。其夜は友の家人のいたはりに疲れた身を休めた。

翌朝灰色の空を眺めつゝ、自働車を駛らして牡丹臺に上りて、天下の景勝を飽かず眺めた。國亡びて山河あり、誠に嘆稱に値する壯觀は往時の興亡を知らず顔に、近く大同江の碧水を湛え、遠く雲煙飄渺の趣きを恣にしてゐる。中學校の講話につぐに、外國人經營の鮮人神學校の講演を以てし、やつと豫定のプログラムを終へて午後再び南下することを得た。大田を經、裡里を過ぎて全州に着いたのは翌六日午前。全州は湖南第一の都會、附近十三萬町の農場は半島の誇りである。其夜鮮人青年會の會合に列し、翌日は諸學校の授業を參觀して、好學の兒童の若々しい活動振りに邦家の前途を祝した。それより再び釜山に出で、惶しくも急ぎて九日には春霞棚引く花の都に歸へつた。

二

曩に滿洲に行き臺灣に行き、轉じて近くは南洋諸島を巡航して、親しく日本民族の發展を視察した身は、此度朝鮮に遊ぶ機會を得た。兼ねてわが胸裡に去來せる新領土の精神問題は玆に再び其姿を現はして、解決を求めつゝあることを見た。日本が朝鮮を併合したのは、斬り捨て御免の帝國主義を振り翳して、臆面もなく自國の福利を私しやうとの意志ではない。一方、國家自衛の必要上から弱國の擁護を期したと共に、一方義を以てこれが指導の大任を盡さんとの俠氣に出でたのである。領土擴張の帝國主義者の主張もあつたらうが、其間に人道主義の主張が働いて居つたことは云ふ

杳し、廣々とした平野には見渡す限り露店を開いて居る。それでも支那人の市場程に喧騒でないのが特徴である。それから市の西方にある達城公園の丘上に上れば、形勝の地を占めた赤煉瓦の外國人の居宅や學校、近くに躊躇する諸葺きの朝鮮家屋、さては内地化しつゝある正面市街の光景を一眸に收める。これは過渡期にある朝鮮の現在を語るものである。此處には外國宣教師と其家族が今尚七十餘人も居住し、盛んに教育と傳道に從事して居る。彼等は汽車なき所には馬に乘り行き、民家に宿泊し粗食を採り、時には一ヶ月も二ヶ月も巡回するさうである。日本人で果樹園をやつて相當に成績を擧げて居る者もある樣子。予も一籠の林檎を惠まれて其美味なのを喜んだ。

翌三十日夜、京城の南大門に着いて懇ろなる友の一家の客となつた。滯留三日、總督府訪問、諸學校參觀、諸種の會合、昌德宮其他の見物に急しくも樂しき時を過ごした。それから夜行の汽車で北行し、四月三日の朝には新義州に眼が覺めた。こゝは鴨綠江を界して支那の安東に接する關門、其間に三千九十八呎の長橋を架し、朝鮮側から第九節目は開閉式で、毎日定時に五百噸の重き梁が四人の手で安々と開かれ、舟楫の便に供せられて居る。咸鏡道方面の深林で伐採した材木が百五十哩を筏となして下つて來て、こゝに陸揚げになる。こゝに在る營林廠は專ら其仕事の樞機を司り、傍ら殖林事業の中堅となつて居る。豫期しなかつた人々の溫情と聰明とに導かれて、製材所を巡覽しつゝ種々有益にして興味ある事業を聞いてから、金剛山の葡萄汁に名だるゝ美肉に舌鼓を打つた。午後小閑を得安東に行きマホメット教の寺院を訪れてコーランの朗唱に耳を淸め、其處の豐頰肥滿なる僧侶の歡接を受け、メッカに通ずると云ふ中庭の井戸の水を汲み、三百を容るゝに足る禮拜堂を拜したる後、贓品を安價に賣る小盜街を一瞥し、妓樓の婦女を救出して希望者に妻妾として賣却する「濟良房」の樓門に佇みなどして歸へつた。鐵道ホテル樓上靜かに夢覺めて、惜しき名殘を懷きつゝ、再び車上南下の人となつた。

朝鮮視察より得たる印象と新領土の精神問題

第三高等學校教授　栗　原　基

一

「愚かなる人は旅行する」とは哲人エマーソンの警句である。成程賢者は常に自己の心裡に靈感を宿し、必らずしも外來の刺戟を求むる必要はない。けれども、愚者はこれに反し何時も空疎な生活をまぎらはさんためには、何かの刺戟に生きねばならぬ。併し斯く云うたエマーソンも愚者の數に洩れなかつたと見え、英國に渡りてカーライル其他の學徒文人を訪づれて、大に元氣づいて歸國したのである。予も亦愚者の一人として、兼ねて希望を果し、此春の休暇を利用して、朝鮮の新領土を經めぐることゝなつた。素より短日月のことゝて、十分に見聞を恣にすることは出來なかつたけれども、それでも相應に鮮やかなる第一印象を携へ歸ることを得たのである。

三月二十七日早朝京都を發し、直路十五時間にして下ノ關に着し、直ちに關釜連絡船の客となつた。靜かなる航海に一夜は明けて翌朝早やくも釜山埠頭に友の歡迎に接することゝなつた。流石は朝鮮第一の商港丈けあつて、市街繁榮の有様歴々として徴せられた。白衣の朝鮮人が居なかつたらば朝鮮とは思はれない程に日本化して居ると誰がゞ云つたが、成程白衣漆笠にして而して煙管を啣へてゐる連中が、悠々として往來し、或は所々に蹲踞んでゐるのが、多く見受けられた。

翌朝内地になき廣軌鐵道に身を托すること數時間にして大邱に着く、大邱は京釜間第一の都會で内地人丈けでも八千人を算する。市街を一周し、名物の一つなる西門の市場に行けば、白衣の男女は織るが如くに雜

如き感を起さしめたりしが、今年、詮考の結果は、多く少壯有爲の美術家を採りて、少しく老大家を加へたるにとゞまるのみならず、西洋彫刻家を任命したるが如き、蓋し、新レコードを作りたるものとして、詮考委員諸氏の、英斷を咲稱するに堪へたり。されど、如何にしてこれ等帝室技藝員諸氏をして、眞に活ける美術館たるの實蹟を擧げしむることを得べきか。

學界に帝國學士院あり、これまた、學者の姨捨山なりとの非難を聞くこと既に久し。されど、學士院會員に對する國家の待遇は、決して粗略なるものにあらず。會員また、從つて多少の事業を爲さゞるべからざる責任もあり、又、實際何事かを爲しつゝあるものも少からざるが如し。今これを、帝室技藝員に觀るに、帝室の名は尊貴なりと雖も、宮内省に於て、宮內大臣に依りて、命を傳へらるゝにはあらずして帝室博物館に於て、博物館長が辭令を交附し、且つ「命令書」と稱するものを發するものなりと傳聞す。學者には、學位の授與もあり、學士院會員に勅任せらるゝ道もこれあれども、美術家に對しては、たゞ僅に、この帝室技藝員といふ、名譽を與へらるゝの一途あるに過ぎざるが故に、この帝室技藝員の任命は、重大尊貴の榮譽にして、これによつて、一般美術家をして、感奮興起せしむるに足るものたらざるべからざるなり。否らずして、若し、單に、博物館の出入を許され、何年に一度か、宮内省の御用を勤むるといふに過ぎざるが如き程度のものならむには、年々幾十百人の帝室技藝員任命せられたりとも、そは美術の進步發達のために、何程の寄與を爲し得るか頗る疑問たらざる能はず。活ける美術館たる美術家をして、帝室の殊遇に感激せしめ、光榮に奮起せしめて、こゝに始めて美術の進步にも、發達にも力を添へしむることを得べし。美術の進步と發達とは、やがて謂はゆる死せる美術館の充實を促す。此くの如く、兩々相待ちて、我が大日本帝國は、眞に名實相應せる、世界の美術國たるを得べきを思はゞ、美術館の建設と美術家優遇とが、如何に急務なるかは、多言を要せずして理會せられむなり。（大正六年六月十五日）

割け、赤星家も寶立金の半ばを割け、而して夫の、不慮の戰爭に不慮に富みたる新成金諸君も、亦その所得の半ばを割け。此等の金を一纏めにして、更にこれに、國家も應分の資金を加へば、蓋し以て、一個の美術館を建設する位のことは出來なむ。理想的なる建物だに成らば、新古美術品の蒐集の如き、蓋し、比較的容易なるべし。

（八） 死せる美術館と生ける美術館

昔、黄檗の鐵眼禪師、一切藏經の上梓を發願し、全國に行脚して淨財を募るもの多年、時たまく飢饉、禪師、乃ち集め得たる淨財全部を散じて、窮民を賑はし、更に行脚募財すること數年、再び飢饉に逢ひ、淨財を散じて窮民を救恤すること前の如くす。三び行脚募財して、遂に素志を貫徹し、大願を成就したるもの、實に夫の黄檗版一切經と稱するもの即ち是れなり。近き佛門の大德、行誠上人、これを評して曰はく、『鐵眼は、二度活ける藏經を造り、一度死せる藏經を造りたり』と。謂はゆる死せる藏經の今日に傳はりしがために、學佛者の便益が、如何に多大なるものありしかは、今呶々を要せず。而して、その活ける藏經と稱せられたる二回の窮民救恤は、實に『佛心者大慈悲是也』の體現にして、宗敎の面目、躍如たるものあるにあらずや。

僕、今姑く、世界の美術國たる日本の名譽のために、美術館の建設を唱導す。しかも、建築せられたる美術館は、畢竟これ死せる美術館なり。これによつて、研究者と鑑賞家とは、便益を得ること多大なるものあるべしとせむも、別に活ける美術館の存するあるありて、こゝに始めて、美術の進歩と發達とを期して待つべきにあらずや。活ける美術館とは何ぞや、曰はく、美術家即ち是れなり。

久しき以前より、帝室技藝員と稱するものあり。近く、數名の新任ありて、美術界、ために多少の活氣を呈し來りたるが如し。惟ふに、從來の帝室技藝員は、多くこれ、斯界の老大家を選拔任命せられたるがため、人をして、美術家に對する、一種の姨捨山なるが

寄附することなくして、失敗し自殺せむか、世人は、その楮花一日の榮を氣の毒とは思ひたらむも、彼が名は、人の噂の七十五日を出でざるに、早くも已に、古新聞と共に、屑屋の手に葬り去られたりしならむ。然るに、その所得の内より、一百萬金を割いて、これを寄附し置きたるがために、彼や死すとも、會堂は死せず、彼が精神の一端は、巍然として、大阪市の一角に聳え立ち、永久不滅の光輝を放ちつゝあるなり。以て、一般成金者流の鑑となすに足らずや。

金を積んで、散ずることなくば、土塊と等しからむ。これを散じて、社會の進歩、人類の幸福に貢獻し得ずむば、またこれを散ぜざると擇ぶとなし。今、世界の美術國たる日本の文部省が、毎年開催する美術展覧會さへ、常設の會場これ無きがため、光線の工合惡しく、雨さへ漏るゝ間に合せ建築にて、不平不滿の聲を聞きながら、會期を了るを例とせり。その他の小展覧會、亦御多分に洩れず、皆このボロ建築の一部を使用するか、さもなくば、三越、白木屋などの一部を借り受けて、會を開かざるべからず。女優と稱する不良少女を踊らしむるにさへ、帝國劇場といふ常設館を建て、角力取りのためにさへ、國技館といふ常設館を建てたる坦懷宏量なる日本の人間が、懸け代へなき、尊貴なる古美術品の保存と展覧とのため、及び、新作美術の研究と紹介とのために、一個の美術館をも建て得ずとあつては、何のところに美術國民としての面目ありや。否、日本の華族富豪成金諸君が、今に及びて、財を散ずるの道を考へらるゝことの、甚だしき耻辱なることを思はずや。

新成金舊成金諸君たるもの、たゞ僅に、新古美術品を私有し、死藏せむがために、これを購入すといふのみにては、その道樂の規模餘りに小なり。よろしく、美術館の一ッ位は建設して、こゝに自他の美術品を蒐集し、自由に研究せしめ、自由に鑑賞せしむる底の襟度なかるべからず。但し、個人の力にては、大倉美術館位のものさへ、なか〳〵容易には出來ざるべし。伊達家も買立金の半ばを割け、秋元家も買立金の半ばを

が、外人研究の結果の、無斷借用なりしといふ珍談さへこれありし程なり。獨り、浮世繪のみならず、佛教の研究の如き、日本人は、有らゆる便宜を有するにも拘らず、今や、西人の研究の結果と、その材料とを借ることなくしては、纏まりたる結論の發表をなすべく、頗る不安を感ぜざる能はざるの狀あり。此くの如きは、實にこれ佛教の逆輸入にして、日本佛教徒の名譽にあらざること言ふまでもなし。若し、日本の美術品にして、今後ます〳〵外國に流出し、外人のこれを研究するものいよ〳〵多きを致さむか、遂には、その逆輸入に待つて、始めて發明するところあるに至らむも未だ知るべからず。僕の憂ふるところ、實にこの點に在り。

成金の徒の、美術品を購入するは、これを理會してこれを愛翫すと言はむよりは、寧ろ『高價を』誇らんとするにあり。『高價に』賣らむと欲するにあり。昨日五萬金にて購入したるもの、今日七萬金にて買はむとするものあらば、その米人たると獨人たるとを問はず、喜んでこれを賣るべく、又、一朝事業の失敗よりして、破產の已むを得ざるに至らむか、彼等は、まづその書畫骨董を賣却して、一時の遣繰りをつけむと欲するなるべし。かゝる場合、その買手の、外國人たると內國人たるとを論ずるの遑なきなり。此くの如くにして、尊貴なる日本の美術品は、年一年に、外國に增して、日本に減ずるなり。僕の悲しむところ、實にこの點に在り。

若し、官民力を協せて、一大美術館を建設し、美術品を賣らむと欲するものあらば、極力これを買ひ、以てその散佚と海外流出とを防ぎ、又、これが公開陳列によりて、研究者と鑑賞家との欲望を滿足せしめ得むか、聊か以て、美術國たるの面目を保ち得べしとせむ。

（七）帝劇と國技館

嘗て、大阪市公會堂建設の費用、一百萬圓を寄附したる成金者あり。會堂未だ成らざるに、その人は、事業に失敗して自殺して逝けり。彼若し、この公會堂を

とを得るなれ。然るを、甲は大阪の成金これを購ひ、乙は九州の成金これを買ひ入れ、丙は某道具屋の手を經て、外人の手に渡りたりといふが如く、一つ〳〵に切り離して、四方に散佚せしめむは、甚だ心無き業ならずや。殊に、華族が、皇室の藩屛として、陛下の優遇を被り、特殊の榮譽を恣にするに對しても、せめて、その家寶位は、これを保護し、國家に代つて、美術の保存に任ずるは、當然の義務なることを自覺せざるべからず。而して、多くの美術品を所有し、これを保存するといふことは、やがて又、名門たる資格の一として、誇るに足るべきものなることをも、知らざるべからざるなり。

　此等の家寶と雖も、これを整理し、甚だしく重要ならざるものは、これを賣拂ふを妨げず、たゞ賣つて得たる代金は、これを一大美術館建設の費用に充當し、依つて以て、國民の美術思想涵養に資することに依つて、始めてその價を認め得むなり。僕は、今の大名華族中、利殖のために傳家の寶を賣却すといふが如き、低劣なるものあるを慨嘆すると共に、巨萬の財產と、無數の美術品とを擁しながら、空しくこれを死藏して、國民にこれを公開するの手段を執ることを知らざるものあることを、遺憾とするものなり。而して、華族富豪をして、かゝる手段を執らしむること能はざるは、職として、確實にして安全なる、一大美術館の建設を見ざるがためならずむばあらざるなり。

（六）日本美術品の逆輸入

　燉煌、于闐、高昌等の各地より、發掘せられたる經巻書圖が、歐洲學者の手に歸したるは、誠に餘儀なきことなりと雖も、日本の古美術が、歐米人の有に歸すること多きは、眞に痛歎に堪へざるところ。今にして、これが防遏の途を講ぜらむか、日本美術の研究のために、特に學生を、歐米に留學せしめざるべからざるにも立至らむ。現に、浮世繪の如き、外國に流出したるもの實に無數、而して外人のこれに關する研究の發表も、亦甚だ多く、曾て某大學の卒業論文に、浮世繪の研究を爲したる學生ありしが、その論文の大部分

は、たゞ高價なるを尊貴となし、高く／＼と釣り上げたる結果が、赤星氏の藏品の如き、僅に百點內外の書畫骨董が、實に四百萬金を以て、賣買せらるゝといふ盛況を呈するに至りしなり。

趣味性の向上、研究慾の滿足のためとならば、もとよりこれを慶すべし。又、無價の至寶が、海外に流出せむことを憂へて、これを購入するものならば、亦大にこれを賞すべし。勿論、彼等成金連中、一二、さる殊勝なる考よりして、これを購入するものもあらむ。されど、彼等の大多數は、畢竟、自身が一時の虛榮心を滿足せしめむがためにあらずむば、會社の株券と同視して、他日の高値を豫想しての思惑買ひなり。その心事の陋、寧ろ唾棄すべしとせむ。

（五）傳家の寶物を賣却する動機

買ふものゝ心事、もとより下劣なるもの少からずとするも、賣るもの、公益を念とするあらば、彼に失ふところを、此に償ふを得べけむも、賣るものの打算的なる、買ふものの打算的なるよりも、更に一層甚だしきものありとせば如何。

由來、家寶を競賣するといふことは、家政紊亂、拾收すること能はざる場合、眞に餘儀なくして、涙を揮つてこれを決行するを例とす。然るに、近來の賣立と稱するもの、全くその目的を異にして、庫の中で金が夜泣きをする程の富有なる大名華族、若くは富豪と稱せらるゝ名家が、その藏する珍寶の保存と修繕とに要する、消極的費用と繁雜なる手數とを厭ひて、これを現金又は株券として所有することの、簡單にして有利なるを打算し、由緒ある傳家の寶までをも、賣却すといふに在るなり。勿論、その賣上げたる幾百萬金、せめてその半ばを割いて、これを育英の資に充つるか、若くは公共の事業に投ぜば、そこに多少の新意義を見出し得べしと雖も、否ずして、たゞ、利殖本位の家寶賣却は、飽くまでその不心得を責めざるべからず。

一管の竹筒も、一張の紙片も、その家に在りてこそ、歷史的背景の下に、他に見ることを得ざる時代の色と、傳說の匂とを傳へて、統一的にその美を誇るこ

彼等の富、彼等はこれを酒に捨て、女に捨て、自働車に捨て、邸宅に捨て、しかも尙捨て切れずして、これを書畫骨董に捨つることを發見し、今や、一管の竹筒、一張の紙片を得むがためにも、萬金を投じて人と爭ひ、一握りにも足らざる小陶器に幾萬の大金を擲つて、敢て悔ゐるを知らざるなど、變調と言へば變調なれども、この變態的美術購求熱の高まれる時代は、美術館建設といふが如き事業の、誠に相應しき時代ならずや。

縱令、敵本的打算主義より出立したるにもせよ、低俗なる攀柳折花的趣味以外、人間別に、文學美術の興隆を鬪るといふが如き、高尙なる事業の存するあることに、目覺め來るは、少くとも、彼等が趣味の向上にして、正に慶するに足るの現象たり。たゞ、如何にして、ます／＼これを善導し、眞に文學美術を理會し、愛好するに至らしむべきかゞ問題なり。

（四） 美術品購買者の心理

輓近、書畫骨董の流行は、單に古書畫古器物を愛翫するといふに止まらず、進んで、書法畫法を學ぶものさへ尠からざるを致せり。今までは、何處の馬の骨とも判明せざりしものが、一朝にして成金となり、交際の範圍も從つて擴大し、門地聲望ある人々とも、文通せざるべからざる機會も多く、さすがに、金釘流にても濟まされざれば、こゝに於て、六十の手習を始むるものをも出し、又中には、梅の花竹の葉の描き方位は、心得置かむとの念慮を起すものも、出で來たりしものならむと解すべきか。要は、衣食足つて禮節を知らむと欲するにあつて、物質一點張りの生活にも飽きたると共に、多少世間體をも繕つて、高尙げに見せかける必要もあり、且つ、知人を訪問し、名家に招かれたる場合、時候の挨拶の次には、卽ち直に藝者の噂といふも、餘りに沒趣味と蔑まれむも口惜しく、まづ、床の掛物の評隲位は試みざるべからず。而して、その豫備知識は、實物によりてこれを得るを捷徑と心得たる彼等は、惜し氣もなく黄白を散じて、新古眞贋、多きを敢て厭はざるなり。その甚だしきに至つて

益を與へ得ざりしは尙恕すべし、書として、代表的のものが蒐められたりしといふにもあらず、作家として、代表的の人物が網羅せられたりといふにもあらず、又、作家が一代の作中より、傑出せるものを選びて、陳列せられたりといふにもあらず、たゞ一意、出陳承諾者の御機嫌を、斜めならしめざらむとせる苦心の跡のみ明白にして、觀覽者に、不快の念を與へたるのみならず、中には、博物館員諸君の、鑑識を疑はしむるものさへこれありたるは、帝室の名を冠せる博物館の名譽のために、眞に遺憾とせざる能はざりしところ。

（三）美術の理會と愛好

眞の美術館を有せざる吾等は、せめて、唯一の代用美術館たる帝室博物館によりて、美術的慾望の滿足を得むとするの念熾盛なるがため、何とかして、その改善と進歩とを促さむとの誠意よりして、聊か苦言を呈したれども、吾等の慾望は、單にこれしきのことを實行せられたればとて、それにて直に、滿足するが如きものにあらず。帝室博物館の進歩改善は、帝室博物館それ自身として、もとより切要の事、世界の美術國としての面目の上よりこれを言ふも、東西新古の美術を研究鑑賞せむとする上より考ふるも、更に別に一大國立美術館を建設することは、實に焦眉の急務なりと信せざる能はず。

或は言はむ、有史以來、未だ曾て有らざる世界の大亂、尙その終熄の期を知るべからず。特に、名のみとは言へ、既に參戰國の一たる我國が、美術館の如き、不急の土木を起すは、實にその時を得ざるの甚だしきものなりと。この言、一應は聞えたるが如し、されど、我國は、今次の大亂に參して、曾て少しく兵を動かし、爾來今日に至るまで、尙多少の軍艦を活動せしめつゝありと雖も、事實は、參戰國としての災禍を蒙ること極めて少くして、却つて、中立國としての利益を獲つゝあること甚だ多し。これがために、舊成金が彌が上に富を增したるは言ふまでもなく、又更に、或は船成金と稱し、或は鐵成金と稱し、或は何、或は何、新成金の出現頗る多く、濡れ手で攫みし粟にも等しき

る外人の中には、帝室博物館と稱せらるゝがため、博物館員諸君の行屆かざるを責むるよりも、寧ろ直に、累を帝室に及ぼさむとするもの、これあらむも未だ知るべからず。これ、吾等國民の堪へ得ざる痛苦なりとす。

(二) 高等物置的博物館

某博士『日本に博物館なし』と題し、某雜誌上に於て、日本の博物館と歐洲の博物館とを比較對論し、彼が設備の完全にして、研究者にも見物人にも、便宜と實益とを與へずむば止まずとするが如き努力の跡の、如何にも心地よきことを發表せり。然るに、我が博物館が、一枚の案内記もなく、一冊の目録をも有せず、――今春、目録を編纂して發賣したれども、たゞこれ、藏品臺帳の中より、繪畫と彫刻の部分を拔き書きしたるものに止まり、何等分類せられたるにあらず、何等解説を施されたるにあらず、鑑賞家にも研究家にも、甚だ便益を與ふること尠少なるものにして、殊に一般見物人には、毫末も役立たざる印刷物なり。――陳列品の前に立ちても、多少心得のあるもの丶外は、何等の知識をも得ること能はず、何等の興味をも起すこと能はず、從つて、中學程度位の生徒などにして、自ら進んで博物館を見物せむとするが如き、殊勝なる考を起すもの全くあることなく、強ひてこれを追ひ入れても、然るべき指導者これなき場合、彼等は、時間と觀覽料との空費に、愚痴を並べずして歸るもの甚だ稀なり。此くの如くむば、日本の第一の博物館も、畢竟これ『高等物置』たるなからむや。

博物館は、時々特別展覽會と稱するものを開催することあり。これとても、大概は『無きには勝る』位の程度のものなり。否、時には、これありしがために、却つて、博物館の權威を失墜せしむるが如きこと無きにしもあらず。最近催したる『南畫展覽會』の如き、正にその一例なり。彼の會の如き、もとより、館員諸君の、努力の多とすべきものはこれなきにあらず、されど、帝室博物館の名に於て開催せられたる『南畫展覽會』が、南畫の研究者及び南畫の鑑賞家に、何等埤

（一）居候的美術館

英獨佛露、凡そ世界の一等國にして、美術館を有せざるもの、何處にありや。これを旅行者に聞く、佛のルーブル美術館の如き、獨の伯林博物館の如き、英の大英博物館の如き、伊のフロレンス美術館の如き、その規模の大と組織の備はれるとは、眞に驚嘆に價するものありと。飜つてこれを、自らも任じ他も許せる、世界の美術國たる我が大日本帝國に觀る、夫の貧弱なる上野の博物館と、京都及び奈良の准博物館とを有することを、誇りとせざるを得ざるが如きは、嗚呼、豈光榮の慘狀にあらずや。

もとより、帝室博物館は、謂はゆる美術館にあらず。從つて、純美術品の外、工藝美術品をも蒐めざるべからず、歷史參考品、考古學參考品、さては博物の標本に至るまで、これを集めざるを得ざる結果として、純美術品を蒐集せる美術部が、僅にその一隅を占有するに過ぎざること、誠に止むを得ざることとなるべし。されど、世界の美術國たる大日本帝國の國民は、いつまでも、此くの如く小規模なる、部屋借り的美術館、不統一なる食客的美術館を以て、その研究慾と鑑賞慾とを、滿足せしむるに止めざるべからざるか。

「無きには勝る」といふことあり。蓋しこれ、怠惰なるもの丶最後の逃げ口上なり。或人曰はく、小なりと雖も、東京には上野の博物館に美術部ありて、彫刻も繪畫も多少はこれあり、京都の博物館は、主として繪畫を陳べ、奈良の博物館は、主として彫刻を列ぬ。研究家も鑑賞家も、共にこ丶に於て、その慾望を滿たすを得べしと。僕と雖も、これあるがために蒙る便益に對して、謝意を表するに吝なるものにはあらざれども、此の言、畢竟、怠惰漢が最後の遁辭と、相距る甚だ遠からざるものあるを、悲しまざるを得ざるなり。

これを洋行歸りの人々、及び觀光外人の言に聞け。彼等のまづ異口同音に叫ぶところは、必ず帝室博物館の、規模の小にして設備の整はざること、及び附屬動物園の組織の不完全にして、往々動物虐待の事實を目擊せしめらる丶ことにあらずや。特に事情に通ぜざ

て、彼れ此れ論議するは、不狂人が狂人を追ふに比して、一段の愚といはねばなるまい。

次ぎに考へられることがある、それは、支那國家がある一國若しくは數國の共同勢力によりて統治さるゝ場合ありと假定して、この場合に於ける支那人の地位であるが、吾人は、如何なる外國が、主權を掌握するにせよ、支那人の幸福を除外することは、斷じて行はるゝものでないと思ふ。支那移民についても、同樣に觀取せられるのである。近い統計によると、支那の南方華僑は、臺灣の三百萬を始めとし、暹羅二百萬、海峽殖民地等百五十萬、菲島八萬、印度支那百萬、安南二十萬、緬甸十萬といふ小數であるが、此等の各地の主人は、決して支那人を惡まない、寧ろ彼等の移殖によりて、生活の利便を得て居るので、排斥などとは、固より思ひもよらぬのであるが、この事實は、如何なることを語るやといふに、支那人は、世界を構成すべき要素である。いはゞ家具であることに外ならない。支那人が、かゝる能力を具備するといふは、寧ろ吾人をして健羨せしむるにあらざるか、非か。

世界は、今や一大轉機の運を迎へつゝある、吾人は、日支兩國人が、各々この了解の上に立ちて、速かに隔意なき親善を實現せんことを切に囑望して已まぬのである。（大正六、六ノ一一）

附記、本文につきては、一昨秋本誌所載「支那革新の將來」及び昨秋の「支那民族性論」を參考せられんことを希ふ、吾人の所説は、これらを前提として本論に到達したのである。君山又た識す。

美術館を有せざる美術國

高島米峰

いふ反證もあるが、而かも本邦女性の、支那男性に對する執着心の旺盛にして、進みて結婚を求むるが如きを如何に解すべき。ともあれ、歴史の證明するところにては、從來、支那の種力は、頑細頑の異種族を同化することに於て、既に顯著なる成績を示したのである。

(第五) 商業に長じ且つ技藝に優秀なること。

この項の前半は、別に說明を要するまでもないが、後半の技藝に關する疑義は、尙本邦人間にないでもない、即ち支那人は、家庭的手工には、卓越して居るが、近世式工場用の能力に乏しいといふ見解である。然れども現に一部の事業家(内外綿會社)の如きは、之に對して、有力なる反證を示し、外人中には、思ひ切つて、藝術でも技術でも、支那人が、日本人に優るといふことは多くの評家に認識せらるゝといひ、忌憚なき批評を試むるものもある。外人は支那を買ひ被るの通弊があるからとも思はれるが、さればとて、吾人は、邦人の自負心に安心することを得ない、現に、關稅改正に反對した最近の行動は、恐く支那企業の發達による恐怖によるに非るなきか、藝術技術に對する支那人の本能を疑ふといふことは、最早や時世後れの判斷といふの外はないのである。

六、日支人の反省を求む

以上吾人は、支那か國家人として失敗し、而も民族として成功すべき所以を、略ぼ各節に亙りていつたのであるが、退いて考ふるに、右の二者は相互に相反して、又互に一致すべき者といはねばならぬのである。換言すれば、この民族の繁榮は、寧ろ國家の完成に望みを絕つことによりて得られるので、帝國などゝは、全然その立脚地を異にする者と謂ふべく、若し然らずして、近世國家の方式に捉はれて、徒らに、憲法論や、政體論に拘泥するといふことは、却りて、民族の使命を過つものとの外、解釋されぬのである。吾人は、この理由に鑑みて、支那人の政體論といふものは、何にも政體そのものゝ解決を目的とするものではない、所謂借題發揮の性質であるので、この借題に取り着い

とを得るものと信ぜられるのである。

（第四）繁殖力の旺盛なること。

この問題については、多少の異論がないでもないが、今日の如き不完全なる衛生狀態に於て、尙ほ三億以上四億に近かき人口を有し、その增加率が、本邦に伯仲し、或は凌駕せんとすといふことは、決して一部異論者に有利なるものとは思はれない。現に我が臺灣などの例で見ると、明治三十八年中の生產率は三七・七で、死亡率は三〇・四そして、增加率は僅かに七・三を示すに過ぎなかつたものが、大正元年の統計によるに、生產率は四一・九に進み、增加率實に一六・六といふ工合に著しく發達した。この理由は、種々なるにせよ、我が衛生設備の完成と、衛生思想の普及に與かるもので、この場合を支那の將來に適用せば、果して如何、支那種族の繁殖力といふことは、略ぼ想像せられるではないか。

支那人と異種族との雜婚問題も一顧の價値があると思ふ。支那人の性格が已にコスモポリタンであるから、彼れはその足跡の印するところに從つて、家庭をなすのである。名高い前漢の張騫が、武帝の命で、西域にいつた途中、久しい間匈奴に拘置され、やがて使節を全うして還つたが、彼れは拘置中に匈奴の女を娶りて家庭を成し、子まで出來かした。この傾向は、現に商人などにも認められる、卽ち江蘇人が山東に往つて商業をすれば、山東で一家庭を成し、さらに河南にゆけば、又たそこに一家庭を作す、これが、支那人の持前であるので、裕祿の妻は佛蘭人、陸徵祥の細君は白耳義人だといつて、何にも不思議でもなく、留東學生が、我が都下で在學中に家庭をなすことも、究竟この性格の適用したものとしか思はれぬ。吾人は、この傾向が、支那民族の大を成して來た所以の一と思ふ。さらに注意さるゝのは、種力の問題であるが、本邦人と支那人との結婚を見るに、日男支女の場合に於ては、産兒が稀れで、これに反對の場合に於ては、極めて多いのである、尤もこの見方には、絕對とはいへないこともある、卽ち兩國の通婚が、純白でないからと

を擴張するといふことは、文明の退歩であると考へて居るといつてあるが、これらの見解は、ハートの如く、半世紀ほども支那人を扱つて、徐ろにその趨向を窺つたものでなければ、言へぬことゝ思ふ。既に超國家的思想であるから、文明といふことと、又藝術といふこと、物の眞相を估價するといふことに對しては、最も公平で、鋭敏で、包容的でなくてはならぬ。かのボイコットによる排外熱の如きは、一時的現象で、何にも民族思想による者ではないのである。

（第三） 耐久性に富めること。

この見解については、かつても本誌に紹介したる如く、この民族は世界に比類ないほどの耐久性を有し、この特性が、民族發展の要素をなすのである。耐久力は、多くの場合に於て、堅忍持久と解せられるが、支那人のそれは、弱忍持久であるから面白い。支那人は堅、彊、剛といふやうなことは、失敗であると考へ、何事も大なる固執のためには、眼前の執念を放棄すべく心得で居る。ハートは之に對しても、吾人と同一の見解で、支那人は、獨逸や露國や列國の國土侵略は、眞の意味に於て幸福とする。幸福は、列國の幸福たるよりは、我等の幸福であらねばならぬのである。我等は今は、露國に歸化し、若しくは英佛に歸化するとも、それは一時のことで、我等は、此間に於て、これらの國人から良教訓を得るものとしか思はれず、幾世紀かの後を想像して、同族の合同は、やがて實現されるのであるとする。ハートは、この見解の基くところをいはぬが、歴史より推測して、この見解の妥當なるを證するのみならず、吾人は現に既に、その徴向の一端を知るのである。第一は北滿洲の露領に、顯はれ、露國極東局長ツルベツコイ氏の如きは、支那人の發達は、我が農業を絶滅するの恐れありといひ、東清鐵道なるものは、何人の便利を目的としたかに疑を挾みて居る。吾人の机案には、此の種の事實に就きて、尙ほ精確なるものが示されず、一々之を數字の上より立證されぬけれども、支那人を引き入れつゝあるところの外人の領土に於ては、到處に、この事實を摘發するこ

支那國家は早晩滅亡する、而も支那民族は、將來の繁榮を得るであらうといふ觀察は、如何にも矛盾に思はれぬではないが、矛盾の一致は、この民族に於て、始めて知ることを得るのである。吾人は左の條件の下に支那の繁榮を保障したい。

（第一）政治思想に冷淡なること。

支那人民が、政治思想に冷淡であるといふことは、政治に依賴するの愚を學ばぬといふ事に解釋せられるのである。政治は、必ずしも善政とのみは限らない。ことに、支那に於ては、政治といへば、裁判と徴税くらゐのもので、官吏は、恰も殖民地へでも臨みて、土人を支配するかのやうに心得る。かゝる政情にありて、支那人民は、何の依賴すべきものがある。これが、支那人の政治思想に冷淡なる根由であつて、今日とても、彼等少數階級を除くの外は、依然舊狀を維持し、共和とか帝政とかいふ問題には、全く無頓着にあるのである。政治に無頓着なることは、やがて、自治の發達を意味するので、その結果、彼等には、下の二大特色を成すに至つた。

（イ）同族自衞

（ロ）同類團結

而して、これらの特色は、左の方法によりて發揮せられるのである。第一、家族制の維持及び之が運用、第二、鄕黨の自治、第三、職業による各種團結の慣行、これである。

（第二）世界的なること。

この傾向は、前項に密接の關係があるのである。彼等は、已に政治的慾望が乏しい、從つて武力を尊重せないのであるが、之れは印度の如く支那の如く、自發文明を有する國土に於ては、通有的にも見られ、この特性はやがて超國家的思想となるのである。實に支那人は之れあるが爲めに、幾千年の久しき、その個有の文化を維持して來たのである。サー・ロバート・ハートは、義和團事變後に間もなく、一文を公にし、支那人の武力を尊重せない理由は、武力は、最後解決を意味するものでないといふ信念があり、今日の時代に於て軍備

官治の施行に就いて尚ほいふべきことがある、それは、「回避」といふ行政上の法規である。支那の歴代の政府は、右の官治を施行する場合に於て、本地人を本地の官吏たらしむれば、官衙は族黨の私嶋になるの弊が多いといふので、本地人をば、本地に採用せないといふことを法律に規定し、之を「廻避」といつて居る。

廻避が支那人の侮辱たるは、いふまでも無い、そこでもつて愈々共和政治の創立となり、第一に地方自治を開始して「廻避」は、撤回せられたわけであるが、その實際を視るに、自治機關の多くは、各本地の破靴黨といふ無頼子に落ちた。本邦の例でいふと、市町村に、地方の紳士は與からずに、ゴロといふ手合が、その任に當つたわけであるから、耐らない、かくて、共和の自治制は、帝政の官治と少しも異ならざるのみか、却りて、その弊を煽つたので、袁内閣の總理たりし熊希齡は「廻避」の撤回を再び取り消した、これが最近の經過である。

自治は、遂に支那に行はれ難い。その行はれ難いと云ふことは、政弊に由るが、實は、民族性によるといふの外はない、支那に自立の要素が乏しいといふ吾人の觀察はこの一大事由に基因するのである。

五、民族としての支那谷ゝ繁榮

支那政弊の堆積は、實に右の如く、かゝる堆積を排除するの力は、何物に依頼するを可とすべきか。當面の問題は、支那人自身の力であるが、それは全く見込がたゝぬのである。從來吾人は、世間並の見解には同情しかねるので、政體論や法理論では、如何やうに、手を易へ品を易へても、何等の結果をも得られない、卽ち支那といふ身體は、共和を施行すれば共和倒れとなり、立憲君主制を適用すれば、立憲仆となるので、罪は人に在りて法にはない。徒らに共和帝政の得失を論じて、支那救濟を求むるなどは愚にもつかぬことで、更に一歩を進めなくては何事も仕出來しかぬるといふのが、吾人の宿論であるが、それは別として、たゞこゝに、新たに注意さるゝ要件がある。それは卽ち支那民族の將來の繁榮といふことである。

而も之れが直接の被害を計較すれば、尙ほ輕微といはざるを得ない、これが支那人民の軍隊に對する眞相であると思ふ。

以上の見解を謬らずとすれば、支那軍隊の存續は、支那社會の缺陥による當然の負擔とはいはねばならぬが、ざつと見積つて、新舊兩式の軍人は、百萬近くあるであらう。この百萬なり、もしくはそれ以上の數は、將軍といふものを中心として生活しつゝあるので、何にも一二將軍の個人的勢力によつて發生したものではないのである。若し然らば、將軍連の將來といふことが豫測せられるではないか、軍權統一といふことが、益々艱難に陥るのは、寧ろ當然の徑路といはねばならぬのである。

（第三）地方自治の行はれざること。

今一とつの重視される政弊がある、政弊といふよりは、實は、この民族の政治道德に關する一大疑義といつてよい。他なし、支那に於ては、地方自治が施行されぬ、若し强いて施行すれば、地方行政は、根底的に破壞すること卽ち之れである。

この理由については、一二の說明を要するのであるが、第一、支那に於ては、何れの時代でも、二重行政の行はれないことはない、卽ちその一は官治行政で、他の一は人民の自治である。官治といふものは、地方州縣の官吏が、胥吏といふ多くの手先を使ふて、刑（裁判）と稅（徵稅）とを司るもので、ことに、徵稅は、その主なる目的と考へ得られるのであるから、素より地方の發達や、人民の幸福やを基礎としたものではない。自治は、之れに反し、國家とか、官治とかいふことには、始めより何等の交涉を有せずに、彼等の有するところの聚族なり、家族なりが、各自にその幸福を維持せんが爲めの必要によりて發生し、或る意味に於ては、官治の勢力を驅除するの傾向がないでもない、これが民治である。而して、この民治による自治と、官治とは、相互に存在し、相互に交涉を有せざること、ざつと見積りて千年近くにもなるのであらう、之が支那の沿襲である。

得べきものであるが、今日のところでは、殆んど實行の見込の立たぬのである。軍權不統一の根本原因は、第一、支那軍隊の素質が尙ほ「私兵時代」の色彩を脱却せざることに重大の關渉があるであらう。最近に於ての之れが適例を求むれば、第三革命の當時に於ける、廣東の督軍龍濟光である。龍は民軍との折衝の結果、その任を去つたのであるが、廣東の振武軍約六千は、龍に帶同されて、瓊州島に移動した。この事情は如何なることを示すやといふに、振武軍は、龍家の子弟によりて編制された、いはゞ、龍家軍である。卽ち支那軍隊に於ては、親分子分の關係を以て、組織の要素となすものであるといふことが分かる。第二の原因は、支那軍隊存在の理由に與かるので、第一に比して更らに重視せられる事項である。

支那軍隊は、國防的性質といふよりは、尙ほ內地的性質に屬する者であるといふことは、誰でも諒解するのであるが、その內地的が、地方彈壓卽ち叛亂鎭撫の目的であるとは、聊かも受取られない。然らば、土匪とか、盜賊とか、人民の生活に危害を加ふる者に對しての警備を目的とするかといふに、人民は、未だかつて、軍隊に信賴して、彼等の生活の安固を委托したことはないのである。果然支那軍隊なるものは、對外的でも、又た對內的でもないといふことになるが、然らば、軍隊の設置の必要は何故に在りや、之が抑も支那軍隊の地位を示すものであらねばならぬのである。吾人の見解では、支那軍隊の性質は、宋代の軍隊と大差はない、卽ち支那軍隊は、軍隊そのものゝ爲めの必要から起つたものである。尙ほ適切にいへば、支那には社會上の缺陷があり、この缺陷を救急せんがために、軍隊といふものが存續するに外ならない、尙露骨にいへば、支那の諺に、好錢不打釘、好錢不當兵といふことがあるが、之れや一半の說明にあらずやと思ふ。司馬溫公の軍隊に對する見解があるが、それによると軍隊は、國防の爲めでも何でもない、軍隊といふ一種の管束によりて、軍兵の掠奪なり迫害なりを免れたい、それが爲めには、軍需による負擔は辭すべきでない、

央には、終始尾大不振の憾みがあり、而も之を更改することの不可能に在ることである。行政區劃などは、如何やうにも變更し得さうには思はるゝが、最近に於て、袁世凱が道制を施いて、地方力を縮少せんと試みたるの外、前後何人もこの問題に觸手せんとする者がなかつた、支那は既に省制を變更し得ない、而かもその茲に至りたる原因を繹ぬるに、ざつと見積つて、五六百年以來の沿襲があるといふのであるから、支那人として手の着けやうの無いといふことも、實は當然と思はれる。

省制の現狀維持についても、相當の論據が認められる。支那に於ては、上古より郡縣制度を施行し、爾後幾多の變革を經て居るが、それらの場合を視るに、何れも全國を、十乃至十三程に區分し、その各部に、政府の親臣を派遣することになつて居つた、元代には、九個の行中書省といふ政府の分身が置かれ、明代には、それが十三布政使司となり、漸次變化して清代の總督巡撫といふ形になつたのである。支那の如き廣大なる領土に於て、斯る制度を採ることは、種々の利益のあることが疑はれない。第一には、支那の特産物なる流賊の如き内亂の起つた場合に於て、その被害を、一局部に抑止し得るの効力があり、その實證は、近く擧匪の際に於て、劉坤一、張之洞の二人が、各々南京武昌の二地を固めて、長江流域より匪徒を驅逐し、中部及南部支那の平和を保障し得たるのみならず、實力を以て西安の朝廷を援助して、兎も角も平和の局を了し得たのである。督撫の權力を削減せんなどゝいふことは、殆んと想像の限りでない、今日の督軍は、勿論昔の督撫では無いけれども、その根底は、遠く督撫制度の基礎より胚胎したものといつてよいのである。

（第二）軍權の統一不可能なること。

省制更改の艱難に比して、勝るとも劣ることの無いものは、支那軍權の統一である。本來からいふと支那國政の統一は、主に軍權統一に與かる者で、財政の整理でも、法律の制定でも、乃至は、幣制改革でも、凡べて軍權統一の結果に倚據して、始めて之が成績を擧げ

求したものであるが、さてその實際を窺へば、何にも法理上からして、憲政の効果を認めたといふの痕迹は認められず、一に、帝國の日露戰役による勝利に驚ろき、憲政さへ實施すれば、支那も一等國に列するを得る者との妄想に驅られたに外ならないのである。

右の所見に對しては、下の非難が起るであらう。それは將來の支那殊に青年支那の地位は、斷じて過去を以て推すべきものでないといふのであるが、これらの主張に對して、先づ問ひたいことは、共和政治は、世界の通則であるから、青年支那の思想も之には洩るゝを得ないといふのであるが、もし然りとすれば、それは、餘りに支那の社會組織を無視したものといふの外はない。支那の社會組織は、家族制度に基礎を置き、家族の生活は、家長によりて世襲的に統束せらるゝもので、この組織は、歐洲諸國に於て、既に滅亡し、帝國に於ても現に衰頽しつゝあるに關はらず、支那に於ては、尙その命脈を存續し、一家族は、恰も一小國家の觀を成すのみならず、その纖維は、蛛網の如くに社會のあらゆる階級に擴大されてあるのである。かゝる社會に在りて、青年支那の思想が遂に發達を遂げ得べしとするや。革命の不徹底に終はることの根由としては、吾人は必すや、支那民族が現に保有する家族制度及び之れに伴ふところの族內道德をば、その間接的原因として指摘せざるを得ないのである。

四、政弊の堆積

支那に於ける革命のすべて不徹底に終るは到底免るべからざる數として、さて、この僞似的革命は、いかなる結果を齎らすかといふに、それはいふまでもなく、政弊の堆積である、その堆積の程度は、甚だ大にして且つ深く、支那の國家としては、負擔しきれぬほどに在るといつてよいのである。支那國家は、爲めに晩かれ早かれ、滅亡に赴くより外はあるまい、試みに表面に現はれたところの政弊の二三を指摘すれば、左の如き者がある。

（第一）統一政治の實現されざること。

此の事實の顯著なる傾向は、行政區劃の過大にして中

由するのであつて、この根由に變化を與へざる限り、擾亂は、幾回繰り返へさるとも究竟同一物を産出するに過ぎずと判斷するの外はないのである。

民族性については、多種多様の見解もあるであらうが、妥協互讓といふことは、何れの場合にも附き纏ひつゝあることを見れば、南北上下を通じて、何等かそこに、通有の性格があり、それが、機に應して發露する者と視なければなるまい。そして、妥協互讓といふことは、善くいへば、明哲保身の意味合であるが、實は、責任回避の別名なりと思はるゝのである。彼等は既に責任回避を以て、唯一の保護色とする、犠牲的精神は愚か、難局を背負ひて立つの勇氣が無い。所謂徹底的革命は斯かる民族の手によりて行はるべしや否や、若し期待する者がありとすれば、それは期待者の不明であるといふの外は無いのである。

次ぎに考へられることは、支那人に、政治的革命の慾望の發生すべきや否やである。邦人中には、その接觸しつゝある支那人の言論や新聞紙の所論を鐵證とし、從來の政治熱を援いて、吾人の所見を反駁するもの少くもないが、吾人は之に對して下の如く答へたいのである。第一、支那に於ては開國三千年の久しき政治革命により鮮血を流した經驗は無いのである。從來の歴史の示す所によれば、彼等は、外種族の壓迫に對しては、不相應の流血を敢てしたこともあるが、それも、多くは意志の疏通せざるに原因し、少しでも相互の理會を得れば、安んじて、外族の統治に服し、その同種同類間の政爭に於ては、流血の慘事を視ずに、平和に政權の授受を了するを以て特色とするのである。第二に支那人は、世界に比類のないほどの現實的民族で、その實生活に直接の交渉の出來ない限り、法理論や、政治論では、一向感じがない。吾人は、この所見の下に於て、清末の革命は、利權回收熱に基因するものと解して、孫文君などの所謂輸入革命を無價値なりと宣したい。溯りて、政治改革の顯著なる者を指摘すれば、光緒末年の立憲政治で、この時代の形勢を一見すると、人民は、殆んと白熱化するほどに、憲政を要

視るに、遺憾ながら、「革命」といふことも、「共和」といふことも、支那では、依然支那法によりて解釋するより外はないのである。

(其二) 革命は、不徹底なること。

革命は既に支那式であるとして、その性質が徹底的であるや否やを吟味するの必要があるが、これ又たその實際を視れば、依然として支那式であるといふの外は無い。第一革命の際に就て視るに、袁世凱といふ人物は、如何に曲庇しても、新政の公敵とすべきであるに關はらず、革命の神たる孫黄二人は、先づ之れと苟合妥協した、之が不徹底の抑々であつた。次いでは、南京政府の北京への移動である。純理論からいへば、袁世凱は、南京の約法に遵ふといふことであるから、政府は、何處へ移動しても、頓着せぬ筈であるが、交附せられた約法は、實は、一片の反古たるに過ぎざるに終はつたのである。第三革命に於ても、吾人は、第一革命と同一經路を認めざるを得ない。雲南貴州の反抗運動に對する袁の兵力は、決して十分とも思はれない、ことには、財力に缺くるところもあり、帝政實現は、爲めに頓挫したので、袁の沒落が直に民黨の壓迫に原因したとも思はれない、現に袁の枕頭に侍して、支那國土の委托を受けた者は、彼れの姻家たる徐世昌で、政府の實權は、彼れの股肱たりし段祺瑞に委任せられ、民黨そのものは、いはゞ名義上の勝利を贏ち得たとしか受取られないのである。

革命の不徹底といふことは、一面より見れば、この民族の優秀なる性格に基因すとも解せられぬではない、即ち妥協互讓をその本能とし、徒らに流血の慘禍を見ぬといふことが、特色であるとも思はれるが、されはとて、堆積に堆積せる政弊を如何すべき、支那の革命は、この點より視て、何處までも支那式であつて、何にも歐洲文明の影響を感受したとは、受取られぬのである。

三、支那式革命の無價値

革命が支那式であるといふこと、及び不徹底であるといふことは、支那人の民族性及び社會組織に深く根

本的たりや否やが先決問題である。吾人はこの疑問に對して、次の如く答へたい、政體論は、全體でもなく又た根本でもない。禍根は、決して政體の適用により て除かれやうとは、聊かも想像されざるのみか、かゝる問題に膠着して、支那を理解せんとすることは、恰かも木に緣りて魚を求むるの類であるといはねばならぬのである。

二、支那式革命の根由

政體論が、時局問題の全體でも、又た根本でもないとすれば、何物が、之が眞因をなすであらうか。之を解釋するについては、先づ次の事由を諒解するの、必要がある。

（第一） 革命は、支那式なること。

支那革命は、千九百十二年の第一革命を始めとして三回の攪亂を經、若し之に今回の政爭を加ふれば、五六年間に、前後四回の爭亂を見たことになる、尤も第一革命を除きては、通常の内亂とも思はるゝに關はらず、その都度に政體論を標的とするより觀れば、一種の革命戰と解せられぬでもないが、然し支那人の、革命なる意義をば、如何に解するやを吟味すれば、思ひ半ばに過る者があるであらう。勿論支那人中には、政治組織の變動によるを革命と解するものもある。然れども、それは極めて少數で、多くの人々は、國家の主權が、他の王者に移動するといふことを革命と心得、革命の「命」は、「天の寵命」であると解釋することに於て、古も今も、大した差異はないのである。「共和」といふことも同樣である。淸朝が仆れて、民國が成立し、袁世凱が初次の大總統となつた時に、勞乃宣といふ學者は、共和正解を著いて、袁に與へたが、それによると、共和は、周代に於て、厲王といふ暴君が出奔し、國中一時、君主を失つた。そこで、周、召二公代りて政を行ひ、號して共和といつた、かくて十四年の後、宣王卽位し、共和はともに罷められた、「共和」といふ一語は、これから出た者で、何も民主政體といふことでは無いといつて居る。かゝる解釋は、勿論識者の一顧に値するところではないとして、さて、其の實際を

支那國家滅亡・支那民族繁榮

陸軍大學校教授　稻葉君山

一、支那の不理解

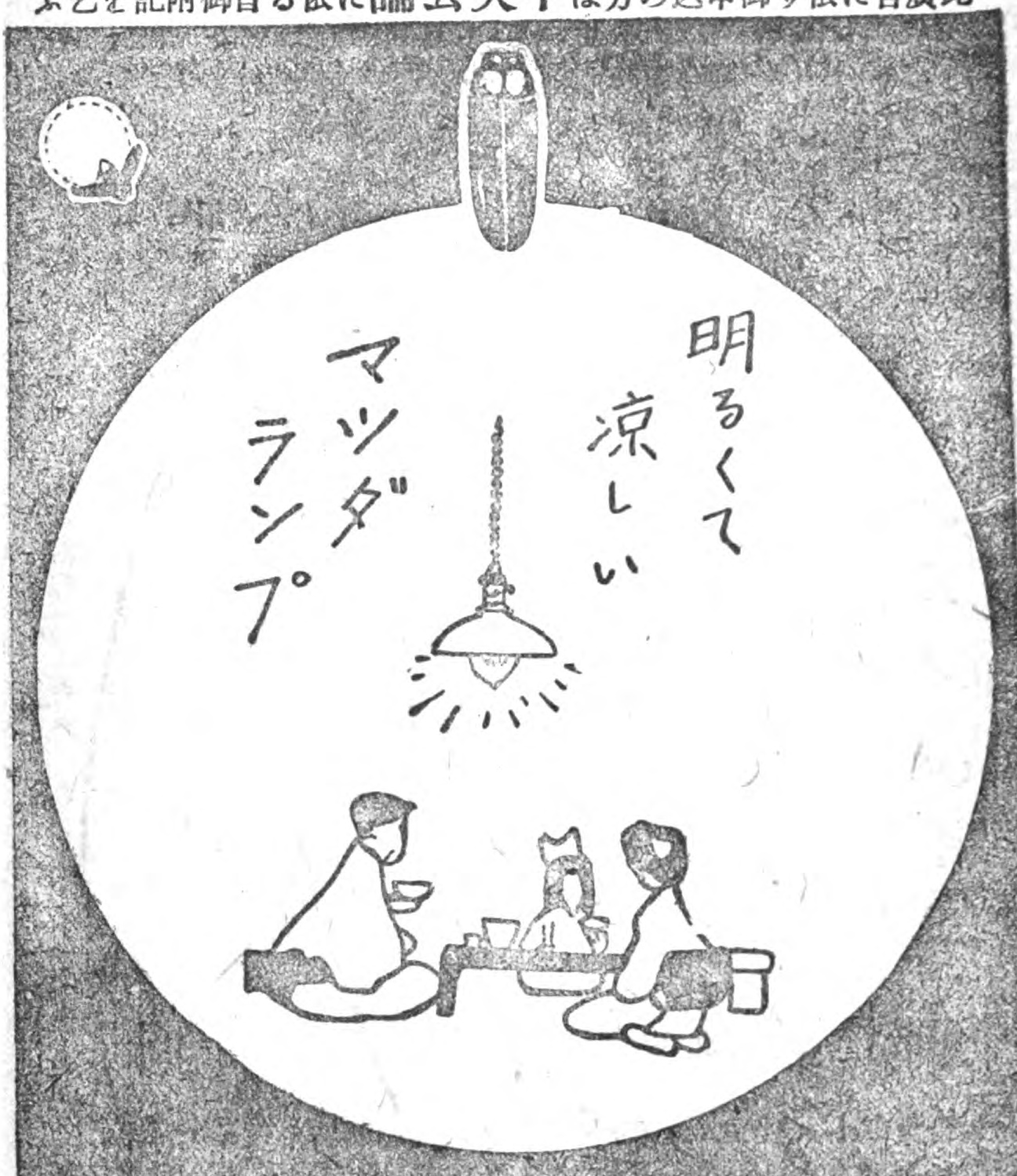
支那時局に鑑みて、吾人は、今や、或る種の必要を切實に感ずるのである。他なし、支那に對する眞の理解即ち是れである。從來とても、その必要が無かつた譯ではない。が、今日ほど、帝國にとりて、大切な時期はないのであつて、唯支那時局の推移を傍觀して、徒らに咲辭を洩らすことを容さない。近來の套語たる日支親善といふ文字は、何事にも、責任を回避し、無策を粉飾せんとするの巧辭令に外ならぬと解釋されぬでもないが、されぱとて、從來の如き不統一の政策や、放慢極まる國民の行動は、百害ありて一利なきこと明々白々である。之れ吾人が、今先づ、支那に對する眞の理解の第一緊要事なる所以を說かんとする所以である。

然らば、支那に對する眞の理解とは、如何なることを意味するやといふに、其先決問題として、吾人の觀察か、彼等の國家的方面を主とすべきか、將た社會的方面を主とすべきか、もし又た兩面の觀察を必要とせば、その實相は如何、これが理解の順序であらねばならぬのである。然るに從來の觀察は、この問題に關して、何等明確の決定を與へない、從つて、その或ものは樂觀し、或ものは悲觀し、まるで正反對を行くの慨みがあるのである。時局について視るも、又それと同様の趣がある。即ち或ものは、共和を可とし、或ものは帝政を可として、兩々對立する形にあるが、究竟支那時局の理解は、支那に於ける政體問題の理解を意味するや否や、即ち支那は、政體の適用を誤りたるによりて、今日の渦亂を馴致したる者なりや、尙ほ適切にいへば、政體論は、時局問題の全體にして、又た根


S.S.S.
模範的の萬年筆は
如何なる紙面をも滑らかに走り、
ムラなくインキの出ると謠ざる泉にも似て
而かも堅牢價は至廉なるを要す
以上の要件を具備したるもの其名は
サンエス萬年筆
東京馬喰町
本舖 細沼浅四郎

(新付二の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



神奈川縣川崎町 東京電氣株式會社

販賣部 出張所 東京 横濱 名古屋 大阪 門司 福岡 臺北 仙臺 札幌 大連 上海

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

の賃銀を支拂ふべきことを約束すべきことを請求した。然らざれば雇主は婦人を雇入るゝ場合には何間も時間拂の方法によるの恐あるが故である。此最後の提議は政府によつて納れられなかつたが、英國婦人が此様な點まで男子と同等の權利、利益の享有を主張してをる意氣は頗る感ずべきものである。

我國に於いては勞働者階級に於いて未だ充分の自覺もなく、殊に纖維工業に從事する多數の女子勞働者の如きは、英國婦人の主張する様なことは夢にも考へて居ないのであるから、我國に於ける勞働運動は政府の神經過敏と企業家の横暴と相待ちて容易に發展はせぬことであらう。勿論我國の企業家の内には隨分自ら資力の薄い者が多いのであるから、いかにも之を富有階級として之を歐米の企業家と同一視して論ずることは酷に失する場合もあるが、此場合にも彼等が少くとも勞働者の人格と健康を尊重する位の考を終始心に留めて居ることを希望するのである。

要するに現在の經濟組織と政治をして今少しく中產者以下の階級の利益に適應せしめ、同時に富者階級の反省と勞働者階級の自覺を促進せしむることを望んで止まぬのである（終）

の同盟罷工を餘儀なくせしめたのに過ぎないのである。故に政府の諮力によりてその理由に基く主張の納れらるゝや忽にして雇主と握手をして居るのである。むしろいかなる場合にも自分の仕事の價値と、境遇を批判し自己の當然主張し得べき權利を主張するといふ鼻柱の强い人間ばかりが英國の隅々に充ち亘つてをるが故に、總ての個人の境遇が改善され、向上し、英國民は此底力を以つて世界に於いて現在の様な確實な優勢なる地位を贏ちうるに至つたのであると思はれるのである。

現在我國の三菱造船所に於いて約七千人の職工が同盟罷工を起してをる様であるが、之は我國に於ける未曾有の大罷工であつて其結末は頗る注目すべき事件である。彼等の目的とし理由とする所は右の英國の罷工と大體同様であるが、彼等は英國の勞働者の如く勞働組合といふ大勢力を有して居ないから要求も態度も一致せず、目下長崎市長が調停者となり警察官吏等が其間に周旋して談判を進めて居る様であるが、或ひは龍頭蛇尾に終りはしないかと危ぶまれる。しかし小なる同盟罷工ならば罷工者は直に惡者扱ひをされて警察權位で忽に壓服されるのであるが、今度のはその様な簡單なことにも行くまい。

英國人の權利の主張に鋭いことは先天的であつて、婦人の間にも團體があつて其權利の伸張に關する運動の盛んなことは洽く人の知る所であるが、今度の戰爭の始頃に今の首相ロイドジョージ氏と女權論者の急先鋒である「パンクハースト」孃との間に、婦人の賃銀問題に關する文書による押問答があつた。其際「パンクハースト」孃は婦人に對する出來高拂の賃銀は男子と同一ならしむるのみならず、戰時の賃銀增加戰時賞與等につきても亦男子と同一の待遇を與へ、加之、時間拂に於いても婦人に對して男子と同一

外に對して別段に爭はなくとも企業界の不景氣や病氣のために困る場合が屢ある、此樣な場合にも企業者や政府や社會の袖に縋らずに立派にやり通せるためにはやはり自助の機關が要るのである。多數の相互保險の制度に類似の組織が必要となるのである。例へば今回の大戰爭の起つた折り獨逸の勞働者にして開戰當初職を失ひ或ひは出征したる者は頗る多數であつたが、獨逸の勞働組合の内の五十二個の組合は此激變に際して其組合員中の失職者及出征者の家族等に對して、開戰當初三ヶ月間に於いて約七百八十萬圓の金額を支出してをる。即ち一年約三千萬圓に當るのである。我國の勞働者が右の樣な境遇に逢つた場合にはどうして自ら此樣な巨額の金の支出をなし得るであらうか。社會の寄附といひ政府の支出といひ、國家多事の際には此樣な巨費が右樣の目的に使用されることは不可能のことであり、又急の間には合はぬのである。こゝに於いて勞働者の自助の組織の效果の頗る大なることを思はねばならぬ。

我國では、間々勞働組合の同盟能工能力を非常に恐れる傾向があり、從つて勞働組合自身が喜ばれぬ傾向があるがそれは誤つた考である。外國の勞働者とて正當の理由なしに無暗に同盟罷工をするものではない。此武器によつて初めて彼等は正當の權利を或程度まで主張することを得るのである。

今回の大戰爭中に英國に於いて「クライド」の造機職工が同盟罷工を行ひ、又「サウスウエールス」の炭坑夫が大同盟罷工を行つたことは、いかにも國家危急の際に於ける行動として不都合のようにも思はれるが、彼等の主たる理由とする所は戰爭による物價の騰貴と戰爭による雇主の利益の増大の二者であつた。彼等に勿論戰爭阻害の惡意のあるわけではなかつたのであつて、戰爭の生むだ特別の事情が戰時中

しかし之より更に重要なるものは工場勞働者の企業家に對抗するために組織せる勞働組合(トレードユニオン)及各種の勞働運動である。

抑社會政策を以つて勞働者に對する救恤政策、御情け主義と解するは大いなる誤である。社會政策は勞働者其他經濟的に不當に不利益不幸なる境遇にある個人の尊重と、其權利の伸張によつて彼等の幸福の增進を圖ることを目的とするものである、而して之が同時に其社會全體の永遠の利益となるべきものであることはいふまでもないことである。從つて救恤政策を用ふる場合或ひは之を加味する場合もあるが、其の主なる手段は根本的に他の有利なる地位にある階級の與へたる壓迫の除去、不愉快、不利益なる境遇の改善方法を講ずるにあるのである。而して斯の如き手段は第三者が主張して政府或ひは企業者が之を實行する場合があるが、又勞働者が自ら主張し運動して自ら其全部又は一部を實行する場合があるのである。後者は卽勞働者の覺醒であつて之なくしては社會政策の眞の目的とする效果を充分に擧ぐることは頗る困難である。勞働組合は此方面に於ける運動の著明なる一重要產物である。之がない間は勞働者の境遇の改善といふことは何時までも跛の姿となるのである。他の階級との爭を生じた場合にも之がなければ力の弱い彼等は何時も負けとなる。企業者、資本家階級は爭のあるときには何時でも單獨に行つて政府に助太刀を賴むことが容易であり又政府は多く好むで之を助くるが、油浸みた仕事着を着た者が御役所に飛込むで何を訴へたとて容易に聞屆けられるものでない。泣寢入りとなることが厭ならば、平素からちやんとした力を養つて置かねばならぬ。それは團體を作るより外に途がないのである。又彼等が

では學者が種々の說をなして經濟組織の改善を圖り、薄資なる消費者階級勞働者等は又自ら種々の組織を設け團體を作りて資本家企業家の勢力に對抗せむとしてをる。

例へば獨逸の或學者は如何なる場合如何なる事業に於いても其企業者の所得となるべき利潤は投下資本の一割を超ゆべからずとの說をなしてをる。之が實行さるれば勞働者の賃銀を增加し、或ひは生產品の價格を低廉ならしめ或ひは其企業の擔稅力を增加せしめ、勞働者、消費者、政府等皆其利益を享くることゝなるのである。生產企業なると分配企業なるとを問はず世間に間々勞働者には最少限度の賃銀のみを與へ、自らは繼續して四割、五割等の高率の利潤を收むるものがある。特別の場合の外是等は勞働者消費者等の他の階級に對して不實であるといふ譏を免れぬのである。もし生活の必需品の生產者又は商人が此樣なことを行ふなれば消費者の蒙むる不利益は又頗大である。されば米國、英國に於いて發生し佛國、獨逸、瑞西等に普及せる購買者團體の如きは所謂白表(ホワイトリスト)なるものを作りて、之に勞働者に對して正當なる賃銀、勞働時間及勞働條件を與へ社會的道德に從つて營業をなす善良なる商人の名のみを揭げ、此白表は其團體の地方支部の總ての會員に至るまで之を交付して、會員は此白表に揭載されたる商人のみより購買する義務を負擔するといふ制度を行ひて、社會政策的の意味に於いて不正なる商人を排斥する樣な方法を試みてをる。此種の團體はむしろ上流者が不正商人排斥の目的を以つて組織したものであるが、此外に一般の中流以下の消費者が其需要品の廉價購買の機會を得むがために、自ら消費者團體若くは消費組合を組織することは此所に新しく論ずるまでもないことである。

なほ我國の企業家、資本家に對して望み度きことは其事業及投資に對する態度である。彼等は企業を經營し投資をなすに當りて其事業の收益の外、事業其ものゝ性質、國民經濟上の重要程度等を眼中に置かぬ場合が多い。收益なき場合にはいかなる國家的事業、國民經濟的重要産業にも投資をしようとしないといふ傾向がある。これは富源の小さき資本力の少き我國の國民經濟の發展を圖る上に於いては國家的に餘程不利益であると思ふ。多少利益は薄くともかゝる際に奮發努力してこそ資本家、企業家の價値があるのである。充分の收益の見込あるか政府の補助金でもなければ、容易に事業に手を出さぬ様なことでは誠に意氣地のない話である。獨逸の「ラートゲン」教授は其一著書に「日本には企業家は絶無である」といつてをる。其いかなる意味で言つたかは判然しないが、日本の企業家の企業的冒險心の乏しいことを笑つたものとしか思へぬ。嘗て資本金一千萬圓の活動寫眞會社が其收益を見込むで忽にして成立したるに反し、東洋製鐵の様な國家的の重大事業には現今の様な資本豐富の時期にも投資の尻込みをする様な考ではいけぬ。昨今企業家の活躍は餘程盛んになつた様であるが、此上とも彼等が常に國民經濟といふことを絶えず頭の一隅に置いて各自の事業に當らむことを望むで已まないのである。

五、薄資階級の自覺と其權利の伸張

富者階級の道徳を說き企業者資本家の徳義を論じても、人の心を皆その様に錬え上げることは事實上不可能のことであり、且つ他人の心を當てにしてをるのでは固より安心のならぬことであるから、外國

社會の發達を望むことを得ないのである。少くも其社會の進歩の速力は遲緩となるのである。殊に日本の様な資本の少い國に於いてはあらゆる資本が出來るだけ活動して、絶えず「仕事」に用ゐられてをることが必要である。種々の學術の研究が足りない、調査が足りない、產業の發達が幼稚であると騷いでをる中に、肝心の之を助長する力を備えてをる階級の人々が一向そんなことに頓着なく、たゞ自己の利益と自己の欲望滿足のことのみを考へてをる様では他の者は誠に心細い次第である。されば現在我々が我國の富者階級に對してどの様なことを望むでをるかといふと、今少し社會生活の意義を熟慮し現在世界に於ける我國の重大な立場等を覺悟して、各階級擧つて手を携へて互に相助けて外國に劣らぬ様に大速力で向上する様に努力して貰いたいといふのである。例へば戰時利得税の徵收といふことが主張されても勿論それに反對する様なことのない様に願いたい。學術研究機關等に自己の發意でもつとどし／＼と寄附をして貰いたい。外國人が日本に侵入して日本の學術研究のために寄附金をするのを指を咬へて見て居るのは、自分の繩張を侵された恥辱を默して居る様なものである。碌でもない骨董品に平氣で數十萬圓を投じて、研究の機關と資力の不足をかこつ學者等をして羨ませる様なことはあまりしてもらい度くない。又その様な骨董品を床間に並べて眺める折には賃銀の値上げを請求する幾千の職工があり、一椀の大盛飯の分量の減少を憂ふる勞働者のある様なことをも頭に浮べて欲しい。固より富者階級のすべてに眞面目が足りない、努力が足りないといふのではないが、吾々が右の様なことをいはねばならぬ様な事實は吾々が常に見聞するのである。

四、富豪の社會に對する義務

現在の經濟組織では資本の集中は已むを得ないことであるが、此集中した資本を有效に利用することは其所有者の社會に對する義務であると思ふ。此集中した資本を何等かの方法に於いて其社會に於ける事業に利用してをればこそ資本の集中が是認されるのである。然らざれば法律が無限の所有權を認むることは、或場合には却つてそれが社會の不利益となる虞がある。一國內に於いて生產された富が大部分或階級にのみ歸屬して他の多數者に分配されず、しかも富者階級が其富の大部分を社會と沒交涉な自己の欲望、滿足にのみ利用し或は全く之を利用せずして、他の多數者が社會の利益となるべき事業、研究の資を得むとするも之を得ること難く、或ひはいかに努力しても生活の資料をさへ得ることを得ないといふ狀態となるも之を顧みないならば、其經濟組織の不都合なるは勿論であるが、富者の道德を攻擊せねばならぬことゝなるのである。富者が社會より尊重をうくる所以は、其富の力を利用して社會に有益なる事業を成就し、或ひは能力ありて資力薄き者の活動を助成せしむる等其資本を社會的に利用するが故である。もし其富を所有權が自己にありとて自己の利益以外には全然これを利用せずといふならば、彼等が無限に富を集積することは社會に對する罪惡となるのである。所有權の範圍限度を制限することは經濟主體の活動を鈍からしむるものであつて、適當なる方法の發見なき限は容易に行ひ難きことであるが富者が絕えず其資本の善用を念頭に置くことは又富者の義務ではあるまいか。それでなければ容易に其

利益に對する不平より生じたものである。即ち彼等の主張する所は戰時中石炭賣上金高中より賃銀として支拂はるゝ金額と、炭坑主の所得となる部分の割合は戰爭以前と同一ならしめざるべからずといふのである。其際「カーヂフ」に於いて「ロンダ」卿がなした演說の中には、「何人と雖戰爭のために特別の利益を享くることを許すべからず、政府は宜しく船主と炭坑主の超過利益の全部を徵收すべし」といふ主張があつて、社會の各方面に於いて贊同の意が表せられた。勿論英國は國運を堵して戰つて居る際であるから、負擔力のあるものが出來得る限りの財政上の負擔をなすことは當然であらうが、我國の船主、軍需品供給者其他莫大の戰時利得を得たものに對しても相應の課稅をなすことは當然であると思ふ。過日時事新報紙上に於いて余が激しく論じたる如く、一億圓の政府保護金を得たる郵船會社が七割の大配當をなす樣な暴狀を敢てしても、政府は別に何の干涉をもなさず是等に對して課稅せむとする模樣もないのは誠に了解し難いことである。今度の大戰に際して我國の支出すべき臨時軍事費は二億五千萬圓內外に上るのであるから。共せめて一部分なりとも戰爭のために平素は夢想さへすることを得なかつた巨利を獲得した者に負擔せしむることは正當であると信ずる。戰爭は古來常に貧富の懸隔を大ならしむる原因となつてをるのであつて、殊に我國に於ける經驗は明に之を示すものであるから、せめて租稅政策に於いてなりとも社會政策的の考慮を用ひて戰費に對する資力薄き階級の負擔を輕減するようにしたいものである。之は同時に富者階級に對する反感、羨望、不平等を減却せしむるの途ともなるのである。

階級の羨望、不平の念を緩和することが出來ると思ふ。政府は何故戰時利得税を課せないのであらうか。

三、戰時利得税課税論

戰爭といふ特別の事件によつて生じた國費は、先づ第一に此戰爭によつて利益を享けたるものをして負擔せしめよといふことは廣く行はれてをる考へであるが、なるほど戰爭のために一方に國家に生命を捧ぐるものあり、又平素以上の負擔をなす者あるに反して、他方に戰爭のために意外の利益を擧ぐる者のある如きはいかにも公平の觀念に反する。是等の者には相當の負擔をなさしめて戰爭に對して謝禮をなさしむることが正當である。戰爭によつて必ず莫大の利益を得べき者に對して其利益の今部を歸屬することを許すならば、或ひは彼等か戰爭の發生を好み或ひは之を促進する樣なことが無いとも限らぬ。獨逸のライン工業地方の猶太人や米國の軍器製造業者が、屢々戰爭挑發、外交關係阻害の陰謀の嫌疑を蒙むつたことはあながち無實ともいへぬのである。今回の大戰爭に於いては主要なる交戰國英、佛、露、伊、獨、墺、等皆種々の形に於いて戰時税を課し、中立國中に於いても丁抹、瑞典、諾威、和蘭、米國等皆之を課して居る。英國の如きは戰時超過利益に對して六割の重税を課してをる。此間獨り我國のみが何等の特別の課税をなしてゐないことはいかにも不思議である。

企業者の戰時利益の大なることは英國に於いては屢々同盟罷工の原因となつたことがある。サウスウエールスの炭鑛坑夫の同盟罷工も其原因は彼等の賃銀の割増に對する希望よりも、寧ろ炭坑主の異常の

が頗る緊要である。選擧權の擴張の如きは其一つである。議會が經濟的幸福階級のみを代表して從つて之に阿諛することを事とし、一向に國民一般の利益を圖らぬ樣なことでは憲法政治の甲斐もないのである。

我國の政府は固より國民一般の利益幸福の增進を圖ることに極力努力して居るのであらうが、實際は經濟的幸福階級のために奔走する有樣はよく見えるに反して、經濟的不幸階級の爲に盡力する模樣は一向に見えぬようである。多年の澁滯の後に最近に於いて工場法の實施を見た事の外、經濟組織の改善、調和といふことに心を懸けてをる樣が現はれて居ぬ。當局者が目下各方面に物價騰貴生活困難の聲を聞くが、それは已を得ぬことだと放言して濟して居る樣な冷淡な有樣では困る。新聞に現はれる政治記事は多く下らぬ政爭に關することで、此樣な事柄に對する各政黨の立策の如きは聞いたことがない。成る程目下は世界を擧げて大動亂の渦中に投ぜられ我國の外交界又頗る多事であり、他方には又國民經濟の積極的政策施設の攻究に沒頭してをる時期であらうが、是等の外面的の變動と共に又人心の内面的變動をも考察する必要がある。企業者階級の困るときには國費を以つて各種の救濟をするが、彼等の利益するときには一向之に對して國費の負擔を增すこともない。造船奬勵、航海奬勵等には惜氣もなく巨億の國費を注入するが、彼等が一年に幾千萬圓の利益を擧ぐるも一文半錢の特別の負擔を加へ樣ともせぬ。戰時海上保險補償として一千萬圓の巨費をたゞ呉れてやる。一方に俸給の受取れぬ小學教員があつたり、米價の騰貴に減食をする人民があつたりする社會狀態は一向目に入らぬのであらうか。直接に政府として之を救濟する手段は無くとも富者が相當な負擔をしてをれば、是によつて多少他の階級の負擔を輕くし且多少薄資

本的の大革命の起らなかつた所以である。しかし將來に於いて其樣な大革命が起らないと云ふことは容易に斷言することは出來ぬ。而して社會の總ての階級が一致して此大變革を行はむとする如きことは想像し難いことであるから、萬一此樣な大變革の起るべき場合には政治上の大革命が之に伴ふべきことは勿論と思はねばならぬ。たゞ經濟組織の大變革の吾人の社會生活に及す甚大なる影響は、單純なる政治上の革命の比でなく、又其結果の良否につきても疑念があるのであるから容易に行はれることはない。且つ何れの國に於いても右樣の社會の大變動の發生を虞るゝことは當然であるから、經濟組織の缺陷が其樣な極點に達しないように種々の手段が講ぜられてをるのである。此經濟組織の缺陷によつて各種の階級の經濟生活に重大なる幸不幸の懸隔の存在する場合に、其改善を圖ることは諸國に於いて其當事者階級の外、宗教家、學者、政治家等によつて試みられてをる所であつて、近來は一般に此運動を社會政策と稱してをるのである。此社會政策的運動は宗教家、學者等によつて最も早く唱へられ、政治家は何時も遲れて之に追從するようである。しかしながら社會政策の實行に直接の貢獻をなし得るものはやはり政治の衝に當る者であるから、政治の機關に社會政策的の思想の普及することは餘程大切なことであると思ふ。我國の政治機關が國民經濟の各種の政策につきて種々の考慮を廻らす樣に立法、行政の各方面に於ける計畫施設をなすに當つても、一面に社會政策的の思想の腦裡に藏せられてをつて經濟組織の改善の實現せらるゝことは誠に望ましいことである。もし政治機關の組織の關係上此樣な思想、主張に賛成するものなく或ひは自己の政治上の利害より之に左袒せぬ樣なことであれば、政治機關の組織に變更を加へること

利害關係の當事者を勝手に爭はせて置けば結局多くの場合に喧嘩となるものである。政治は一面に於いて是等の爭ひを喧嘩に至らしめない仲裁者の役目をするものである。故に政治機關が故意にせよ善意にせよ、一方をのみ助けて他方の利害關係、主張を顧みぬといふことがあれば、仲裁者の役目を果さぬのみならず益喧嘩を增長したり、又間違へば自分が喧嘩の相手方になる樣な結果を見ることがある。政治機關といふものは平素から諸方に限なく目を配つて居ることが大切であるが、殊に思想の動揺する時機や、利害關係の衝突の諸方面に激しい時期や、新しい主張や要求のいろ〳〵と起る時節には餘程愼重に眞面目に根本的に考へて、時機を失せず改善、調和の手段を取らぬと面白からぬ結局を見る樣な破目に陷る虞がある。政治は努めて人心の歸趨に應せねばならぬ。

二、經濟組織の改善と政治の改善

經濟生活は吾々の社會生活の最重要なる一面であるから、一定の社會、一定の時期に於ける經濟組織の善惡は其羈絆の下に生活する者にとりて幸不幸の最大の原因となるものである。現在の經濟組織は長い間の沿革を經て現在の形に落付いたのであつて、それまでには種々の政治的大變動にも遭遇してゐるが、經濟組織の根本に大變化を生ぜしむることは、單に理論上に唱へられたのみで何れの國にも實現されたことがない。しかし其枝葉に亘つては絕えず適宜の改善を施されてゐるために、未だ何れの國でも行き詰まりの狀態に達したことがない。之れ諸國に於いて屢々政治上の大革命のありしに拘らず經濟組織に根

はれて來るに相違ないのである。而して其主張が正當であり且つ多數者によつて支持せらるゝならば、遂に一つの强力なる勢力として社會に活動することゝなるであらう。

此樣な人の不平の聲或ひは新しい主張を無視し、よく吟味もせずに直にもみ消し或ひは壓服しようと試みらるゝことは屢あることであるが、この樣にしてもし誤つて正しい聲を押し潰したならば、却つて反動的に其聲の潜勢力が增加して、思ひもかけぬ折に思ひもかけぬ程度に出て來るものである。いかに考へても色々の階級又は團體の間の利害の衝突、新舊思想の扞格等の現象は避くることの出來ぬことであつて、社會進化の理法はむしろ自然に此間に行はれてゆくのである。或時に於いて新しかつた思想も忽にして固陋の譏を受け、或時に於いて一般に正當幸福と信ぜられし社會組織も次の時期には種々の批難を蒙むることがある。此樣な爭の生じた時に双方が感情に捉はれて我利を主張するならば、間々危險な破裂を來すことがある。故に此樣な折に爭の當事者が一寸振返つて、人類の幸福とか社會的共同生活の意義とかいふ問題を翫味して見て、冷靜に理性的の判斷と解決を求めたならば再び御互に手をとつて圓滑に安心して進みゆく道の見出せぬことはないのである。其必要なる解決手段は即ち改善と調和の二つである。然るに間々古き歷史をのみ尊重して、現在が又歷史の一部を作るものであることを忘れるものがある。又舊勢力に對して單に無謀なる反感的の破壞を企つるものがある。是等は何れも思慮の足らぬものであるが、或場合には舊勢力のあまりに頑固なるために、正當なる新主張に對して改善と調和の希望を絕えしめ、遂に不幸なる破壞を見るに至ることがある。これが革命となるのである。

ける色々の出來事となり、又種々の歴史的の事實となつて現はれてをる。宗教、教育の力がいかに偉大であつても不平と嫉妬のない世の中を造り出すことは出來ぬ。爲政者がいかに努力しても全く不平のない太平の世の中を作り出すことは出來ぬ。斯の様な不平、嫉妬は相互の利害關係の衝突する場合に起るものであるが、そうでない場合にも起る。しかし、何れにしても人心の不滿足、社會の不安となつて現はれることは同一である。そこで御互に一の社會を形作つて生存を續けてゆく以上は、出來るだけ是等の缺陷の生ずることの尠い様な狀態に各自の行動と社會の組織を進めてゆく様に努むることが肝要である。殊に政治の衝に當る者は社會の各階級の利害の衝突より起る不平、他の階級、他の個人に對する羨望、嫉妬等の成るべく起らぬ様に巧に導いてゆくことが大切である。もし是等の黒點が生じたときには正當な手段を以つて出來るだけ早く之を拭ひ去るように努めねばならぬ。正當な公平な政治をしてをつても間々諸所に不平の生じ易きものであるから、不公平の政治偏頗の政治の持來すべき弊害は寒心すべきものである。活きたる人の心はいろ〳〵に動きさま〴〵に考へるものである。此の心の動く所を促へて巧に之を誘ひ導きて共同の社會生存の幸福を健全なる基礎の上に作り出すことは眞面目なる政治の要諦である。

昔ならば天下に多少の不平分子があつても直に之を抑壓することが出來たであらうが、立憲政治を標榜し、言論の自由を認め且つ實際に於いて印刷物の思想傳播力が驚くべき力を以つてをる現今に於いては、社會の或部分に不平があり、しかも其不平が根據あるものであつて社會の諸方面に於いて共鳴を見るならば、是等は或時期の經過する間に期せずして一定の形を備へて或種の要求、主張、運動となつて現

中央公論



七月號
第卅二年第七號
第三百四十五號

富者迎合政治を排して戰時利得税の設定に及ぶ

東京帝國大學法科大學教授　渡邊鐵藏

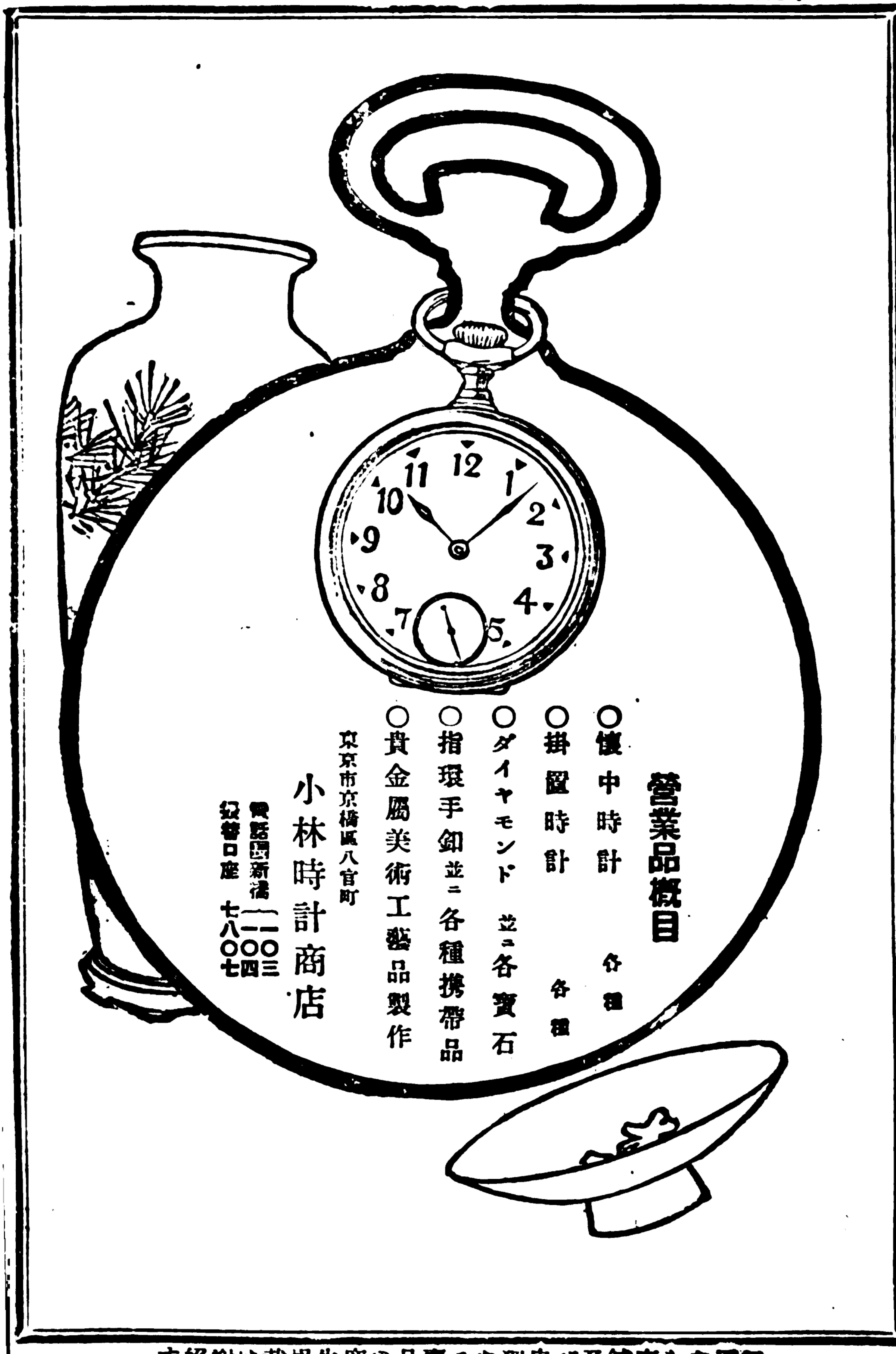
一、人心の歸向と政治

不平とか嫉妬とかいふものはいづれの世にもあることで之を絶對に人の心より除き去るといふことは出來ぬことである。個人と個人の間、或階級と他の階級との間に是より生ずる絶間なき爭ひは社會に於

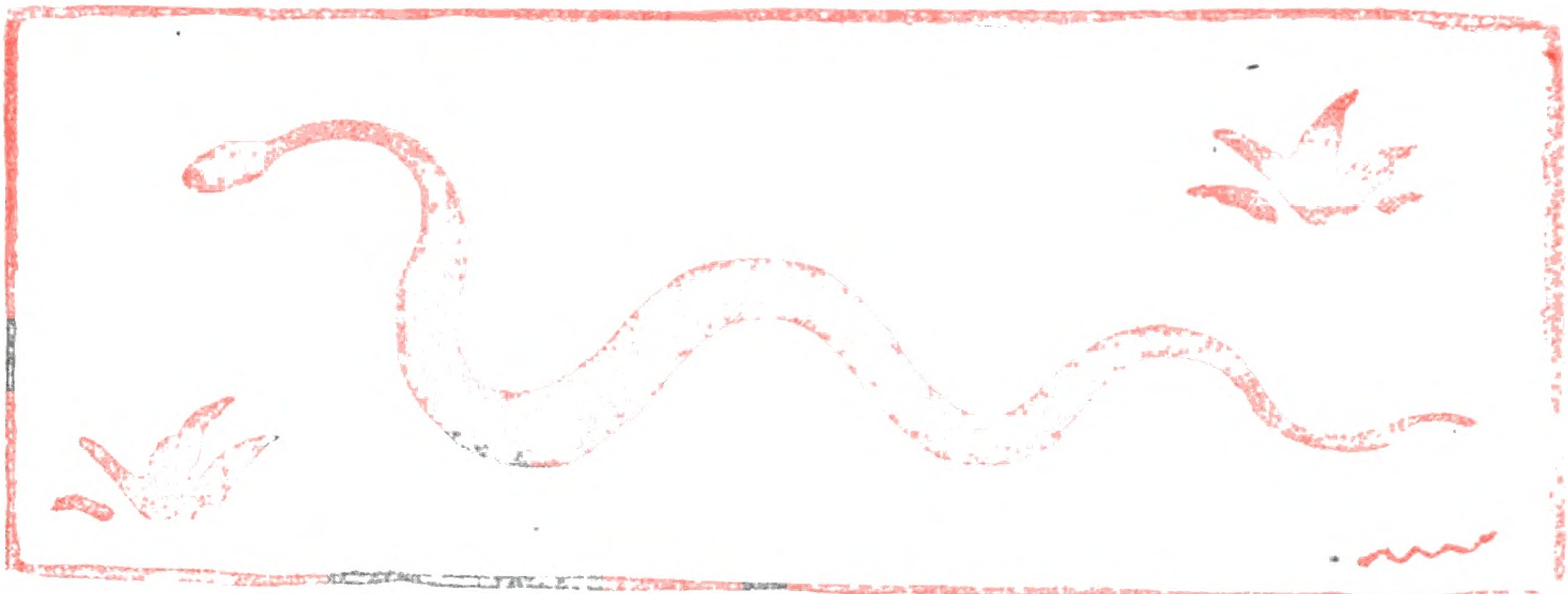


VINCENT VAN GOGH
MOTHER AND CHILD

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



[illegible]なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す





中央公論第卅二年七月號目次

幸田露伴氏序　千葉花明氏著　全二卷完成

日本仇討物語

古今の仇討を網羅せる正確なる全仇討史!!

正確なる史實によりて古今の仇討を研究し従來の講談小説の虚僞を喝破せる痛快無比の一大快著を見よ。

天下の奇書日本仇討物語は古來大正の今日に至つて始めて著者によりて大成せられたる我國唯一の眞實なる仇討全史也。斯の如く完全にして清新なる興味多く而も内容豐富なる仇討全史は古來未だ刊行せられたることなし。尨然たる上下千餘頁の此快著は悉く之を事實に探り我國古今實在の仇討を集めて其の一をも洩さず、例へば婦人の仇討のみにても二十項、明治大正のみにても十三項、全體を合して二百項、而も悉く在來の小説講談の虚僞を破れるもの也。初夏緑陰の下之を讀んで先づ其の清新流暢なる筆致に醉ひ、次に其の内容の充實と多趣新奇正確なる新事實の發見に驚嘆の聲を放たざる人あらんや。日本國民性の眞髄を知らんとする人は此の快著を讀め

日本戲曲小説の大部分をなす仇討の眞事實を探り國民性の眞髄を知らんとする人は此の快著を讀め

阿蘭陀カタログ（寫眞版入アートペーパーに印刷せる極めて美しき出版月報也御申込次第送呈す）

上卷　下卷

■四六判箱入總布製
■定價各冊 壹圓參拾錢 送料各八錢

目次

日本文學と復讐譚　緒
著者の見た仇討　件
婦人の仇討　二十項
明治時代の仇討　十三項
徳川時代の仇討　百十四項
戰國時代の仇討　八項
中古以後の仇討　九項
妻敵討　六項
仇討にあらざる仇討
討てざりし仇討　十一項
討たざりし仇討　仇討奇談　十八項

東京市麴町區有樂町一ノ三　阿蘭陀書房
電話本局【三〇九二】【一一二三】
振替東京【五二五六】一四四八九

新興藝術を代表せる二大小說

谷崎精二氏作

長篇小說

離合

華かなる都會生活を背景とし眞摯なる若き男女の愛の葛藤を描ける長篇小說

本書は新進作家の花形として嘖々たる名聲を恣にせる谷崎精二氏の第一長編小說にして華かなる都會生活を背景とし繪の如く美くしき戀の場面を點綴して眞摯なる男女三人の愛の葛藤を描けるもの也。全篇を包む博大なる理解と清新なる詩人的感情とは何人の追隨をも許さざる著者獨自の境地にして苟も新文藝の意義を解し新人生の未來を信ずるの人の必讀を要すべき傑作也。

■四六判箱入清新なる布製新裝幀■

——定價金壹圓　送料八錢——

芥川龍之介氏作

短篇集

羅生門

燦然たる文壇の新星。新興藝術の華。この天才的作家の第一小說集を見よ

羅生門は新進作家の雄にして、且つ先蹤の諸大家を壓倒するの概ある芥川氏の第一小說集也。その觀察の鋭倚にして、その文品の清洒なる殆んど現代の文壇その比儔を見ず。本書收むる處卷頭羅生門を始め鼻、父、猿、孤獨地獄等以下十數篇、總て文壇の耳目を聳動せしめたるもの、芳醇なる新藝術に接せんとする人は以て本書を讀め。

■四六判箱入裝幀斬新の贊を極む■

——定價金壹圓　送料八錢——

■阿蘭陀書房カタログ　美くしき扉畫を挿入しアート・ペーパーに印刷した出版月報です。御申込次第に無料進呈致します

東京市麹町區有樂町一ノ三　阿蘭陀書房　電話本局【三〇九二】【一一一三】【五二五六】　振替東京一四四八九

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ドストエーフスキイ作 米川正夫氏譯

カラマーゾフの兄弟

上巻

發賣中

■全三冊■上巻 紙數 中版 六百八十頁■總洋布 最上製 一冊一圓二十錢 送料 八錢

■露文の直接全譯■

ドストエーフスキイは、トルストイと並んで近代露西亞文學界の巨擘たると同時に、實に人間の歴史を通じて、上下東西にその儔を絶つ二大天才たり。批評家メレジユコフスキイに從へば、肉の天才トルストイと共に、來る可き世紀を支ゆる二大柱たるもの、實に靈の天才ドストエーフスキイ也。而してドストエーフスキイが畢生の心血を濺ぎて、その大思想大精神を描き出だせる代表的一大雄篇は「カラマーゾフの兄弟」也。淫蕩放恣その度なきフヨードル・カラマーゾフを父とせる三人兄弟を主人公として、神魔相鬪ふ人間靈魂の悲劇を描破するところ、規模ダンテを凌ぎ、結構ユーゴーにまさる。その思想の雄偉、その觀察の深刻、その愛の博大、その信の熱烈、時に或は、小說といはんよりは寧ろ聖典と稱するの可なるを思はしむるものあり。全篇これを邦語に移して三千枚、「戰爭と平和」と共に、量に於て亦世界最大の小說たり。小社、今、青年露西亞文學者として知られたる米川正夫氏に囑して、その全譯を得、これを三巻に分ち、逐次刊行す。日本の飜譯界、本書出でゝ、また大に振ふものあらむ。譯者の譯筆は、正確と巧妙とを以て既に定評あり、久しく此の作に親しみて、作者の精神に徹し、その眞髓を窮め盡して後始めて筆をとれるもの。本書を讀まば、直ちに原書に就いて之を讀むと同樣の感興あらむ。

東京牛込矢來町中の丸 振替東京一七四二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(前付一の二)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、電通社、信頼社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直るに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年六月廿九日印刷納本
大正六年七月一日發行
（第[illegible]號）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木百三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話[illegible]
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80'; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.